

国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第 2 集

西蒲池池淵遺跡 I

—福岡県柳川市大字西蒲池所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第 239 集



1 1号土坑出土土器



2 2号土坑出土土器



1 9・10号土坑出土土器



2 2号土坑土器出土状況

序

福岡県では、平成 16 年度から平成 23 年度にわたり、国道 385 号三橋大川バイパス道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成 21 年度から 22 年度にかけて行った、柳川市西蒲池に所在する西蒲池池淵遺跡 I 地点の調査の記録です。

遺跡は有明海沿岸に形成された粘土質地盤の低地に立地しており、近隣には弥生時代から近世までの遺跡が点在していますが、近年、この地域では道路や新幹線などに関わる発掘調査が多数行われ、更なる歴史の解明が進んでおります。

今回の調査では、弥生時代中期から中世にいたる生活の痕跡を確認することができました。弥生時代においては有明海沿岸に特徴的な集落の一部を確認し、古墳時代初頭においては完形品を含む多くの資料が出土し、中世においては方形区画の一部を確認することができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 25 年 3 月 31 日

九州歴史資料館長

館長 西谷 正

例 言

1. 本書は、国道 385 号三橋大川バイパス道路改良事業に伴って発掘調査を実施した、柳川市西蒲池に所在する西蒲池池淵遺跡の記録である。一般国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第 2 集にあたる。
2. 発掘調査・整理報告は福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受けて、平成 22 年度までは福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、平成 23 年度からは九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、齋部麻矢と佐々木隆彦が行い、遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影はそれぞれ有限会社空中写真企画・熊本航空株式会社に委託し、バルーンおよびラジコンヘリによる撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は齋部が行い、それぞれ発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において、濱田信也・新原正典・小池史哲の指導の下に実施した。石製品・木製品・土製品の実測は城門義廣が行った。顔料の分析は加藤和歳が行い、木製品等の処理は小林啓が行った。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 地形図「佐賀・大牟田」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
8. 平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
9. 本書の執筆については、石製品・木製品・土製品については城門が行い、その他の執筆と編集は齋部が行った。

目 次

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	2
3	調査・整理の関係者	4
II	位置と環境	6
1	地理的環境	6
2	歴史的環境	6
III	調査の内容	10
1	遺跡の概要	10
2	基本層序	10
3	検出遺構と遺物	16
(1)	掘立柱建物跡	16
(2)	土坑	34
(3)	溝	105
(4)	窪み状遺構	122
(5)	土器溜まり	127
(6)	落ち込み	132
(7)	その他の遺構	139
IV	まとめ	140

図版目次

巻頭図版 1	1	1号土坑出土土器	2	2号土坑出土土器
巻頭図版 2	1	9・10号土坑出土土器	2	2号土坑土器出土状況
図版 1	1	上層全景（航空写真 上が北）	2	下層全景（航空写真 上が北）
図版 2	1	上層遠景（航空写真 北から）	2	礎盤集中部（航空写真 上が北）

図版 3	1 2～4号掘立柱建物跡（左が北） 3 4号掘立柱建物跡（西から）	2 3号掘立柱建物跡（西から）
図版 4	1 3号掘立柱建物跡柱穴断面 3 4号掘立柱建物跡柱穴断面 2	2 4号掘立柱建物跡柱穴断面 1
図版 5	1 7号掘立柱建物跡（西から） 3 10号掘立柱建物跡（東から）	2 8号掘立柱建物跡（東から）
図版 6	1 5～7・11・12・14・17号掘立柱建物跡（左が北） 2 8・9・18号掘立柱建物跡（左が北）	3 10～12・16号掘立柱建物跡（左が北）
図版 7	1 礎盤検出状況 1 3 礎盤検出状況 3	2 礎盤検出状況 2
図版 8	1 礎盤 1 3 礎盤 3	2 礎盤 2
図版 9	1 礎盤土層断面 1 3 礎盤土層断面 3	2 礎盤土層断面 2
図版 10	1 1号土坑遺物出土状況（東から） 3 1号土坑木器出土状況（西から）	2 1号土坑土層断面（南西から）
図版 11	1 2号土坑遺物出土状況（北から） 3 2号土坑土層断面（南から）	2 2号土坑木質出土状況（北から）
図版 12	1 3号土坑土器出土状況（南から） 3 3号土坑土層断面（南から）	2 3号土坑完掘状況（南から）
図版 13	1 4号土坑土器出土状況（北から） 3 5号土坑土器出土状況（西から）	2 4号土坑土層断面（東から）
図版 14	1 5号土坑土層断面（南から） 3 6号土坑完掘状況（東から）	2 5号土坑木質出土状況（北から）
図版 15	1 6号土坑土層断面（南から） 3 9・10号土坑土器出土状況（西から）	2 7号土坑土器出土状況（東から）
図版 16	1 10号土坑完掘状況（北から） 3 11号土坑完掘状況（東から）	2 10号土坑臼出土状況（西から）
図版 17	1 12号土坑完掘状況（西から） 3 13号土坑完掘状況（北から）	2 12号土坑土層断面（南から）
図版 18	1 13号土坑土層断面（南から） 3 15号土坑完掘状況（南から）	2 14号土坑土器出土状況（北から）
図版 19	1 15号土坑木質出土状況（西から） 3 16号土坑木質出土状況（東から）	2 15号土坑土層断面（南から）
図版 20	1 16号土坑完掘状況（東から） 3 17号土坑木質出土状況（東から）	2 16号土坑土層断面（東から）
図版 21	1 17号土坑土層断面（南西から） 3 19号土坑木質出土状況（南から）	2 18号土坑土層断面（北から）
図版 22	1 19号土坑土層断面（南西から） 3 20号土坑土層断面（南から）	2 20号土坑完掘状況（南から）

図版 23	1 21号土坑白出土状況（西から）	2 21号土坑土器出土状況（南から）
	3 21号土坑縄付き土器出土状況	
図版 24	1 21号土坑完掘状況（南から）	2 22号土坑土層断面（北から）
	3 23号土坑土層断面（南から）	
図版 25	1 24号土坑完掘状況（北から）	2 24号土坑土層断面（南西から）
	3 25号土坑土層断面（東から）	
図版 26	1 26号土坑完掘状況（南から）	2 26号土坑土層断面（南から）
	3 27号土坑完掘状況（南から）	
図版 27	1 28号土坑完掘状況（南から）	2 28号土坑土層断面（南から）
	3 9・10・29号土坑完掘状況（南から）	
図版 28	1 30号土坑土器出土状況（東から）	2 31号土坑土層断面（西から）
	3 31号土坑完掘状況（北東から）	
図版 29	1 32号土坑土器出土状況（南から）	2 32号土坑完掘状況（南から）
	3 34号土坑土層断面（西から）	
図版 30	1 35号土坑土層断面（南から）	2 37号土坑土層断面（東から）
	3 36・38号土坑半掘状況（西から）	
図版 31	1 38号土坑土層断面（南から）	2 40号土坑土器出土状況（北から）
	3 41号土坑土層断面（南から）	
図版 32	1 43号土坑完掘状況（南から）	2 48号土坑完掘状況（南から）
	3 49号土坑土層断面（南西から）	
図版 33	1 50号土坑土層断面（東から）	2 59号土坑土器出土状況（南から）
	3 60号土坑完掘状況（南から）	
図版 34	1 60号土坑土層断面（南から）	2 61号土坑完掘状況（北から）
	3 63号土坑土層断面（北から）	
図版 35	1 64号土坑土層断面（北東から）	2 75号土坑完掘状況（南東から）
	3 75号土坑土層断面（南から）	
図版 36	1 1号溝全景（東から）	2 1号溝上層土器出土状況（東から）
	3 1号溝中層土器出土状況（東から）	
図版 37	1 1号溝土層断面（東から）	2 2号溝全景（東から）
	3 2号溝土層断面（西から）	
図版 38	1 1号窪み状遺構遺物出土状況（北から）	2 2号窪み状遺構遺物出土状況（北西から）
	3 土器溜まり2・3出土状況（北から）	
図版 39	1 土器溜まり1出土状況（北から）	2 落ち込み最下層土器出土状況（南西から）
図版 40	1号土坑出土土器（1）	
図版 41	1号土坑出土土器（2）	
図版 42	1・2号土坑出土土器	
図版 43	2～8号土坑出土土器	
図版 44	9・13号土坑出土土器	
図版 45	14～21号土坑出土土器	
図版 46	22～66号土坑出土土器	

図版 47	71・74 号土坑、1 号溝出土土器
図版 48	1 号溝出土土器 (1)
図版 49	1 号溝出土土器・陶磁器 (2)
図版 50	1 号溝出土土器・陶磁器 (3)
図版 51	1～3 号溝出土土器・陶磁器
図版 52	3～5 号溝、窪み状遺構、土器溜まり出土土器・陶磁器
図版 53	土器溜まり出土土器
図版 54	落ち込み出土土器、遺跡内出土土製品・石製品
図版 55	遺跡内出土石製品
図版 56	遺跡内出土石製品・木製品・煤焦げ

挿図目次

第 1 図	柳川市の位置	1
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	7
第 3 図	西蒲池池淵遺跡周辺地形および各調査区位置図 (1/2,500)	11
第 4 図	基本層序模式図	12
第 5 図	西蒲池池淵遺跡遺構配置図 (1/200)	13・14
第 6 図	調査区壁面・トレンチ壁面実測図 (1/40)	15
第 7 図	1・2 号掘立柱建物跡実測図 (1/30)	17
第 8 図	1・3 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)	18
第 9 図	3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	19
第 10 図	4 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	20
第 11 図	掘立柱建物跡礎盤式柱穴配置図 (1/100)	21
第 12 図	5・6 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	22
第 13 図	7 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	23
第 14 図	8 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	24
第 15 図	9・10 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	25
第 16 図	11 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	26
第 17 図	12・13 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	27
第 18 図	14・15 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	28
第 19 図	16～18 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	29
第 20 図	5～7・10～14・16～18 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1・24 は 1/4、他は 1/3)	31
第 21 図	その他礎盤式柱穴出土遺物実測図 (19 は 1/4、他は 1/3)	33
第 22 図	1～4 号土坑実測図 (4 は 1/40、他は 1/30)	35
第 23 図	1 号土坑出土遺物実測図 (1) (4・6 は 1/4、他は 1/3)	36
第 24 図	1 号土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)	37

第 25 図	1 号土坑出土遺物実測図 (3) (1/3)	39
第 26 図	1 号土坑出土遺物実測図 (4) (1/3)	40
第 27 図	2 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	41
第 28 図	2 ～ 4 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	43
第 29 図	5 ～ 9 号土坑実測図 (1/30)	45
第 30 図	5 号土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)	47
第 31 図	5 ・ 6 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	49
第 32 図	7 ・ 8 号土坑出土遺物実測図 (7 ・ 8 は 1/4、他は 1/3)	51
第 33 図	9 ・ 10 号土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)	52
第 34 図	9 ・ 10 号土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)	53
第 35 図	9 ～ 11 ・ 13 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	55
第 36 図	10 ～ 14 号土坑実測図 (1/30)	57
第 37 図	15 ～ 18 号土坑実測図 (1/30)	59
第 38 図	14 ～ 18 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	61
第 39 図	19 ～ 21 号土坑実測図 (1/30)	63
第 40 図	19 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	64
第 41 図	21 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	65
第 42 図	21 ・ 22 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	67
第 43 図	22 ～ 26 号土坑実測図 (1/30)	69
第 44 図	23 ～ 27 号土坑出土遺物実測図 (25 ～ 27 は 1/4、他は 1/3)	71
第 45 図	27 ～ 30 号土坑実測図 (29 は 1/40、他は 1/30)	73
第 46 図	28 ～ 31 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	75
第 47 図	31 ～ 35 号土坑実測図 (35 は 1/40、他は 1/30)	77
第 48 図	32 ・ 33 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	78
第 49 図	34 ・ 35 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	79
第 50 図	36 ～ 40 号土坑実測図 (1/40)	81
第 51 図	37 ～ 39 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	83
第 52 図	40 号土坑出土遺物実測図 (6 ・ 12 は 1/4、他は 1/3)	85
第 53 図	41 ～ 46 号土坑実測図 (1/30)	86
第 54 図	47 ～ 51 号土坑実測図 (1/30)	87
第 55 図	41 ～ 51 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	89
第 56 図	52 ～ 60 号土坑実測図 (1/30)	91
第 57 図	52 ・ 54 ～ 58 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	93
第 58 図	59 ・ 60 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	95
第 59 図	61 ～ 69 号土坑実測図 (1/30)	97
第 60 図	61 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	98
第 61 図	61 ・ 63 ・ 64 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	99
第 62 図	65 ・ 66 ・ 68 ・ 69 ・ 71 ・ 73 ～ 75 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	101
第 63 図	70 ～ 75 号土坑実測図 (1/30)	103
第 64 図	1 ・ 2 ・ 4 号溝平面 ・ 土層実測図 (1 号は 1/30、他は 1/40)	106

第 65 図	1 号溝上層出土遺物実測図 (1) (1/3) ……………	108
第 66 図	1 号溝上層出土遺物実測図 (2) (1/3) ……………	109
第 67 図	1 号溝上層出土遺物実測図 (3) (1/3) ……………	110
第 68 図	1 号溝上層出土遺物実測図 (4) (1/3) ……………	111
第 69 図	1 号溝上層出土遺物実測図 (5) (1/3) ……………	112
第 70 図	1 号溝中層出土遺物実測図 (1) (1/3) ……………	114
第 71 図	1 号溝中層出土遺物実測図 (2) (1/3) ……………	115
第 72 図	1 号溝下層出土遺物実測図 (1/3) ……………	116
第 73 図	2 号溝出土遺物実測図 (9・11・21 は 1/4、他は 1/3) ……………	119
第 74 図	3～5 号溝出土遺物実測図 (1/3) ……………	121
第 75 図	1・2 号窪み状遺構実測図 (1/30) ……………	123
第 76 図	1～4 号窪み状遺構出土土器実測図 (1/3) ……………	125
第 77 図	5 号窪み状遺構出土土器実測図 (1/3) ……………	127
第 78 図	土器溜まり遺物出土状況 (1/30) ……………	128
第 79 図	土器溜まり出土遺物実測図 (1) (1/3) ……………	129
第 80 図	土器溜まり出土遺物実測図 (2) (12・13 は 1/3、他は 1/4) ……………	130
第 81 図	落ち込み最下層遺物出土状況実測図 (1/30) ……………	131
第 82 図	落ち込み内出土遺物実測図 (1/3) ……………	133
第 83 図	落ち込み最下層出土遺物実測図 (1 は 1/4、他は 1/3) ……………	134
第 84 図	遺跡内出土特殊遺物実測図 (1) (1/2) ……………	135
第 85 図	遺跡内出土特殊遺物実測図 (2) (1 は 1/2、他は 1/3) ……………	136
第 86 図	遺跡内出土特殊遺物実測図 (3) (1/3) ……………	137
第 87 図	遺跡内出土特殊遺物実測図 (4) (1/3) ……………	138
第 88 図	西蒲池池淵遺跡 I 地点遺構配置略図 (1/300) ……………	141

表目次

第 1 表	国道 385 号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名相対表 ……………	1
第 2 表	遺構番号対照表 ……………	143
第 3 表	遺跡内出土特殊遺物計測表 ……………	144

I はじめに

1 調査に至る経緯

西蒲池池淵遺跡は、一般国道 385 号三橋大川バイパス建設に伴い発掘調査を実施した遺跡である。

一般国道 385 号は、福岡県柳川市を起点として佐賀県神埼郡吉野ヶ里町を通り福岡県福岡市を終点とする延長 67.7 km の幹線道路で、1975 年に路線指定された。地方生活圏相互を連結するとともに、地域住民の通勤・通学等の日常生活をはじめ、農林業や商工業及び観光業等の経済活動に貢献する重要路線と言える。三橋大川バイパスは、この路線のうち柳川市三橋町柳河から大川市大字下木佐木までの延長 3.86 km の区間について、交通混雑の解消及び歩行者の安全確保を目的とし計画された。この区間は、近隣の幹線道路である国道 442 号及び有明海沿岸道路を相互に連結する重要な位置にあたるが、元来道幅が狭く、近年の交通量増加・車両大型化による渋滞で幹線道路としての機能が損なわれていた。また歩道整備の遅れにより歩行者、自転車の安全な通行に支障があり、これらの理由が事業計画の背景にあった。

平成 13 年度より事業実施され、施工対象用地の解決とともに順次試掘・確認調査を経て、文化財の確認された地点では本調査を実施した。本調査地点に対応する試掘・確認調査は、平成 19 年 11 月 13・14 日の確認調査で土坑および遺物を確認したことで大枠の調査範囲を把



第 1 図 柳川市の位置

第 1 表 国道 385 号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名相対表

報告時遺跡名称	調査時遺跡名称	市町村名	試掘確認調査日	発掘調査期間	調査面積 (㎡)
下木佐木安堂遺跡	下木佐木安堂遺跡	大川市下木佐木	H20.11.26	H20.12.8 ~ H21.1.9	620
東蒲池蓮池遺跡	蓮池遺跡	柳川市東蒲池	H16.7.8	H16.8.6 ~ H16.8.31	160
西蒲池池田遺跡	西蒲池池田遺跡	柳川市西蒲池	H19.11.13・14	H21.6.8 ~ H21.7.17	800
東蒲池門前遺跡	A 区 門前遺跡	柳川市東蒲池	H19.11.13・14	H18.9.11 ~ H18.10.13	400
	B 区 西門前遺跡		H19.11.13・14	H21.1.9 ~ H21.3.27	1300
	C 区 池淵遺跡Ⅲ地点		H22.6.25	H22.7.23 ~ H22.9.28	760
	D 区 池淵遺跡Ⅳ地点		H22.6.25	H22.7.23 ~ H22.9.28	
西蒲池池淵遺跡	池淵遺跡Ⅰ地点	柳川市西蒲池	H19.11.13・14	H21.11.4 ~ H22.3.29 H22.10.12 ~ H23.3.15	970
	池淵遺跡Ⅱ地点		H19.11.13・14	H23.4.25 ~ H23.10.24	1200

握した。また、平成 23 年度に調査を行った西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点については、Ⅰ地点の調査結果から遺跡が広がることを確認したため、全面的に発掘調査を行うこととなった。

調査時点での遺跡・調査区の名称の設定にあたり、道路や水路等で区分された範囲について、年度内で連続して近隣箇所を調査した際に、同一遺跡名で異なる調査区として設定したことがある。その結果、小字との対応や遺跡の内容による遺跡名・調査区相互の関連性に齟齬があるなどし、既存の包蔵地の括りで捉えても解消されない点があった。そこで、報告にあたっては、柳川市教育委員会と協議の上、市が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲と名称を再検討することとなり、調査成果に則して調査地点名及び報告の括りを整理することとした。調査時と報告時の名称・区分けの対照は第 1 表に示しており、大川市所在の下木佐木安堂遺跡以外は近接しているため、ある程度の広がりをもって連続する蒲池遺跡群内での地区分けという形で示している。なお、報告以前における発見届等の各種文書や年報等、出土遺物の注記では旧名称での記載である。

事業区間のうち、本調査不要もしくは本調査終了の地点での施工の結果、起点から東蒲池交差点までの 780 m（蒲池遺跡群蓮池地区調査地点含む）が平成 20 年に供用され、大川市鬼古賀から終点の大川市下木佐木までの 1540 m（下木佐木安堂遺跡調査地点含む）が平成 22 年に供用されている。

2 調査の経過

西蒲池池淵遺跡の調査については、当初平成 21 年度内に発掘調査を終了を予定していたが、Ⅰ地点の調査中に遺構や遺物の量が大量に及ぶこと、また包含層を挟んで下層に礎盤式の掘立柱建物跡が多数存在することを確認したことから、期間を延長して調査することとなった。上層の調査を平成 21 年 11 月 4 日から平成 22 年 3 月 29 日に実施し、下層の調査を平成 22 年 10 月 12 日から平成 23 年 3 月 15 日に行った。

上層の調査については、平成 21 年 11 月 4 日にバックホーを搬入した。なお、調査地は現状 3 区画に分かれていたが、南北の 2 区画は調査できない状況であったため、中央区画から調査を行い、次いで南区、調査中盤から北側の調査を行った。このような調査の着手順序から、3 区画を北からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区として調査を進めた。最初に行ったⅡ区では、表土下約 10 cm で調査地全域に堆積する、土器を多量に包含する茶灰色土を確認した。この茶灰色土の合間に北西－南東に向かう直線的な溝が数条と、調査区西端に南北方向の落ち込みを確認したが、その他の遺構のプランが部分的にしか確認できなかったため、一部茶灰色土を除去したところ、下から土坑やピットが現れた。また検出していた溝のプランも茶灰色土除去後に範囲が広がったことから、茶灰色土を包含層と判断して遺物を取り上げながら掘削し、その下の遺構検出を行った。茶灰色土包含層は弥生時代中期から 12～13 世紀の時代の遺物を包含しており、ある時期の客土と考えられたが、一部遺構埋土になるものもあり、判断が難しかった。

調査地内は軟弱な粘土の基盤層のため、遺構面に起伏が激しく、その凹凸に茶灰色土が堆積している上、弥生時代中期の包含層上に弥生時代終末～中世までの遺構が激しく切り合っていたため、遺構検出が困難な状況であった。また茶灰色土を除去すると遺構埋土と基盤土及び弥生の包含層との区別が困難であり、さらには隣接する水田からの湧水が妨げになった

ことから調査は困難を極めた。このことから、まず最初に確認できた溝の掘削を行いながら遺構のプランを探し、その後はトレンチを数カ所設定して土層観察を行いながら調査を進めた。その中でも浅い窪みを遺構と誤認したことも多々あった。11月20日にはⅢ区も調査が可能となり、1～3号溝他円形や方形の土坑・ピットなどの調査に取りかかった。遺構掘削においても、基盤土と埋土が近似し、また弥生時代の包含層が土器を多量に包含するため、掘りすぎや掘り足りない状況が多々あった。1・2号溝は比較的掘削が容易ではあったが、特にⅢ区に集中する円形土坑はそのほとんどが深さ1.5mを越え、中位以下は湧水が激しく壁崩落の危険性もあったため、慎重に作業を進めた。土坑は中位まで掘削した段階で土層埋土の実測と写真撮影を行い、それ以下は危険のない範囲で掘削を行った。この中で数機の土坑の底に完形品を含む土器等が多数埋められたものを確認した。これらの一部は明らかに意識的な埋設を行ったと考えられたため、写真・図化を行いながら掘り進めた。Ⅱ区についても同様の土坑を検出したが、この区では弥生時代中期の包含層の上に、さらにもう一層包含層があることを確認した。この層は1号溝の北側のみに堆積し、完形品に近い遺物を含み、水分が少なく基盤土との違いは明確であった。一部トレンチを掘削したところ、約40cmの堆積があることがわかり、遺物が多量に包含されることから、本年度中の調査終了を断念し、上層の調査終了後に改めて下層を調査することとした。この包含層の上面では、円形土坑の他に4棟の掘立柱建物跡を確認し、その他にも柱掘方やピットを検出した。

平成22年1月14日からはⅠ区の調査を始めたが、2号溝北側からは茶灰色土の堆積が徐々に厚くなり、大きな落ち込みになることがわかった。同時期調査地から約30m離れた箇所でも柳川市教育委員会が調査を行っており、標高の低い箇所でも遺構を検出していたためⅠ区も茶灰色土を剥いで遺構検出を行ったが、遺構はほとんど確認できなかった。

完形品出土土坑の検出や溝掘削がほぼ終了した段階で、3月6日に地元住民向けの現地説明会を開催した。3月16日には空中写真撮影を終了し、その後はできるだけ土坑の完掘を行い、3月26日には重機を投入して一旦埋め戻しを行った。この折にⅢ区の一部で下層遺構を確認し、多量の土器や木質、礎盤の出土状況を把握した。

平成22年度は同事業内の門前遺跡C・D地点などの調査を行った後、10月12日から調査を再開した。包含層は遺物を多量に包含することから、掘削を人力で行い、当初は遺物の採集がメインであった。下層においても上層と同様に遺構面に凹凸が多く、遺構検出は困難であった。包含層の薄いⅢ区から調査を始め、軟質の灰色粘土が堆積する箇所を確認した。これらは遺物を包含することから当初住居跡等の遺構と考えたが、プランが明確にはならず、掘り込んだ状況ではなかったことから、ある程度深く灰色粘土が堆積し、出土遺物の顕著なもののみを窪み状遺構として取り上げ、その他は包含層として取り上げた。包含層を掘り進むと、礎盤が現れ、その後はⅡ区を中心に何層も切り合いになった礎盤が多量に検出された。これらの埋土は基盤土との境が明確なものもあったが、軟弱な基盤土が堀方内に流れ込んでいるものはそのほとんどが基盤土と区別が付かず、わずかな色や質の違いを見つけて掘削を行った。しかし、これらのうち1/5程度が誤認であったり、基盤土と全く変わらない土層下に礎盤を確認した段階で調査方法を変更し、プランを確認できた掘方を掘削してその壁に切られる礎盤を確認し、そこから徐々に広げてさらに礎盤を見つけることとした。また、一部基盤土と見えてもさらに下層まで掘削し、礎盤が確実にないと確認できるまで下げることにした。この結果、礎盤を検出、掘削、写真撮影、実測後その下層の礎盤を掘削するという慌

ただししい状態となった。同じ箇所にも何度も掘方を掘削していることから、切り合いにより礎盤がわずかしか検出できないものが多数あったが、すべて記録を行い、調査区内全面を掘削する勢いで礎盤を探した。

また包含層除去後に、Ⅱ区北側で3ヵ所の土器溜まりを確認し、これらの記録を行って遺物を取り上げた後、その下から北側に大きく下がる落ち込みを確認した。これらは礎盤式柱穴を切るもので、下層を中心に遺物を多量に包含していた。この下にある礎盤を調査するために、遺物のない北側の上層を重機で掘削し、落ち込みを掘削して遺物を取り上げながら、下の礎盤を検出した。この落ち込みの下層では弥生時代中期～古墳時代初頭の遺物や貝殻や動物骨などが溜まった状態で検出された。

全体の約2/3の礎盤を検出した段階で、3月9日に空中写真撮影を行い、3月12日には地元住民向けの現地説明会を行った。翌日、さらに下層の礎盤を調査し、最後は3月14日から重機を投入して礎盤集中地区を中心に掘削してさらに10基程度の礎盤を確認した。その後埋め戻しを行い、3月15日には調査を終了した。

今回の調査は多時期にわたる遺構の切り合いと足の踏み場もないほどの出土遺物、起伏の多い遺構面、基盤土に近似する判別困難な埋土の掘削、さらには日々の多量の湧水に悩まされ、調査は困難を極めた。また、地域担当を併任していたことから協議や事務処理で現場を中断することが多く、調査は遅々として進まなかった。このような悪条件の中で、調査に参加していただいた作業員の皆さんは、日々全身泥まみれになりながらも熱心に作業してくださった。また、東蒲池区・西蒲池区区長をはじめとする地域住民の方々から惜しみない御協力や励ましをいただいた。御協力いただいたすべての方々に、ここに改めて謝意を表します。

3 調査・整理の関係者

	平成 19 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
福岡県教育庁総務部文化財保護課					
総括					
教育長	森山 良一	森山 良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	檜崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻 俊彦	荒巻 俊彦	荒巻 俊彦
総務部長	大島 和寛	荒巻 俊彦	今田 義雄	今田 義雄	西牟田龍治
副理事兼文化財保護課長	磯村 幸男				
文化財保護課長		平川 昌弘	平川 昌弘	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋
副課長	佐々木隆彦	池邊 元明	伊崎 俊秋		
参事兼課長補佐	中菌 宏	前原 俊史	日高 公德		
参事兼課長技術補佐	池邊 元明	小池 史哲	小池 史哲		
	小池 史哲	伊崎 俊秋			
参事	新原 正典				
庶務					
管理係長	井手 優二	富永 育夫	富永 育夫		
庶務担当	渕上 大輔	近藤 一崇	近藤 一崇		

調査・整理報告

調査第一係長	小田 和利	吉村 靖徳	吉村 靖徳		
参事補佐	濱田 信也	佐々木隆彦	佐々木隆彦	新原 正典	新原 正典
調査・整理報告担当	岸本 圭	齋部 麻矢	齋部 麻矢		

九州歴史資料館

総括

館長				西谷 正	西谷 正
副館長				南里 正美	篠田 隆行
企画主幹 (総務室長)				圓城寺紀子	圓城寺紀子
企画主幹 (文化財調査室長)				飛野 博文	飛野 博文
企画主幹 (文化財調査室長補佐)					吉村 靖徳
技術主査 (文化財調査班長)				小川 泰樹	小川 泰樹

庶務

企画主査				塩塚 孝憲	長野 吉博
事務主査					青木 三保
主任主事				熊谷 泰容	
				近藤 一崇	近藤 一崇
主事				谷川 賢治	谷川 賢治

調査

参事補佐				佐々木隆彦	
技術主査				齋部 麻矢	齋部 麻矢

整理報告

技術主査 (保存管理班長)				加藤 和歳	加藤 和歳
参事補佐				小池 史哲	小池 史哲
技術主査				齋部 麻矢	齋部 麻矢
主任技術				城門 義廣	城門 義廣
技師					小林 啓



現地説明会の様子

Ⅱ 位置と環境

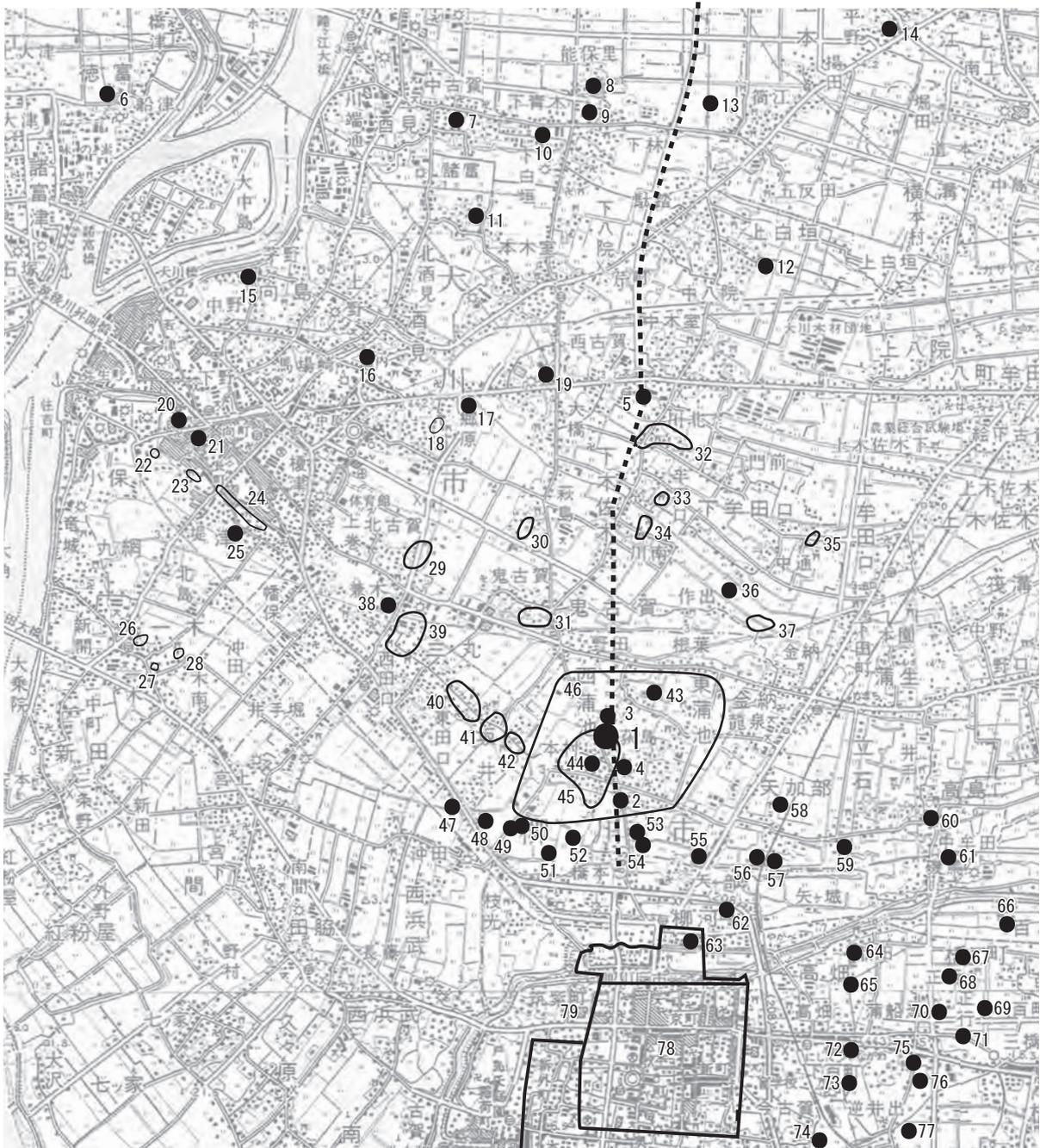
1 地理的環境

西蒲池池淵遺跡が所在する柳川市は福岡県の南西部に広がる南筑平野に位置し、県の行政区分では筑後地域に含まれる。現在の柳川市は平成 17 年に旧柳川市、旧三橋町、旧大和町が新設合併して誕生した。北は大川市、大木町、筑後市、東はみやま市に接し、南は有明海に面し、筑後川を挟んで隣県の佐賀県佐賀市とも接している。市域は一級河川である筑後川と矢部川の支流からなる塩塚・沖端両川の三角州平野と有明海沿岸の干拓地が大部分を占め、市全体が標高 0 ～ 3.5 m の平坦な低地となっており、緩やかな傾斜で有明海に向かって広がっている。

柳川市が所在する南筑平野は、九州北西部に広がる筑紫平野の一部である。筑紫平野は、九州最大の河川である筑後川及び矢部川、嘉瀬川、六角川などの河川により形成された九州最大の平野であり、有明海の湾奥に面し、南東を耳納山地・筑肥山地、北西部を背振山地、北東を古処山、馬見山などに囲まれている。この筑紫平野のうち筑後川左岸の福岡県側を筑後平野と呼び、中でも筑後川左岸の下流に広がる平野を南筑平野と呼ぶ。柳川市が位置する地域は沖積平野で、海成粘土層の有明粘土層と、非海成粘土層の蓮池層で構成されており、表層部に 5 - 10 m 堆積する蒲池層は、粘土やシルトを主体とする極めて軟弱な粘土層である。この沖積平野の形成については筑後川と矢部川やその支流による大量の土砂の堆積と加工に発達する干潟によるものとされているが、近年では、海成層と非海生層の分布から有明粘土層が、世界最大と言われる有明海の大きな潮位差により、海底から巻き上げられた浮泥が河口から遡って堆積して形成されたという研究結果も発表されている。柳川市は市域の約 2/3 がこの沖積平野上に立地しており、市内に網の目のように発達したクリークは湿地の土地開発の歴史を語り、独特の景観を作り出している。また有明海沿岸域では江戸時代を中心に干拓による湿地の開発が進められており、柳川市域の約 1/3 は堤防列に囲われたウロコ状に広がる干拓地上に立地している。柳川市の干拓の歴史は鎌倉時代の記録に遡るが、慶長年間に柳河藩主となった田中吉政が行った事業の成果が大きく、その後 50 年に一度と言われるほど繰り返し大規模な干拓事業が行われた。現在ではこれらクリークや掘割、干拓地の特徴的な景観と、のり養殖などの産業、名所・旧跡などをリンクさせ、「水郷柳川」として県内の観光地のひとつとなっている。

2 歴史的環境

柳川市周辺において、現段階では縄文時代以前の遺跡・遺物は確認されておらず、調査及び表採において確認されるのは弥生時代前期以降のものである。これまで柳川市域では開発による発掘調査が少なかったため、遺跡の分布や性格、その範囲について不明な点が多かった。しかし近年、有明海沿岸道路や九州新幹線建設に伴う大規模な発掘調査が実施され、また市街地の住宅地改変に伴う発掘調査なども行われ、市域の遺跡について各時代の様相が明らかになりつつある。



- | | | | | |
|------------|------------|------------|--------------|---------------|
| 1 西蒲池池淵遺跡 | 17 郷田北原遺跡 | 33 天神林遺跡 | 49 西蒲池将監坊遺跡 | 65 蒲船津水町遺跡 |
| 2 東蒲池蓮池遺跡 | 18 郷原遺跡 | 34 下木佐木遺跡Ⅱ | 50 西蒲池古溝遺跡 | 66 松の木三十六遺跡 |
| 3 西蒲池池田遺跡 | 19 内平原遺跡 | 35 馬場遺跡 | 51 扇ノ内遺跡 | 67 赤太郎遺跡 |
| 4 東蒲池門前遺跡 | 20 榎津城跡 | 36 西田口村城跡 | 52 西蒲池下里遺跡 | 68 一本松遺跡 |
| 5 下木佐木安堂遺跡 | 21 榎津遺跡 | 37 鬼古賀遺跡Ⅰ | 53 東蒲池大内曲り遺跡 | 69 日渡遺跡 |
| 6 徳富権現堂遺跡 | 22 栗木町遺跡 | 38 西田口村城跡 | 54 東蒲池榎町遺跡 | 70 へータカサン遺跡 |
| 7 中古賀遺跡 | 23 小保遺跡 | 39 三丸中小路遺跡 | 55 矢加部町屋敷遺跡 | 71 地藏堂遺跡 |
| 8 熊保里遺跡 | 24 津村貝塚 | 40 三丸東田口遺跡 | 56 矢加部五反田遺跡 | 72 蒲船津城跡 |
| 9 下林西田遺跡 | 25 津村城跡 | 41 宮ノ前遺跡 | 57 矢加部南屋敷遺跡 | 73 浮島天神遺跡 |
| 10 北境遺跡 | 26 浦田遺跡 | 42 園田遺跡 | 58 玉垂命神社遺跡 | 74 逆井出遺跡 |
| 11 諸富遺跡 | 27 北島ノ一遺跡 | 43 中村遺跡 | 59 阿弥陀屋舗遺跡 | 75 蒲船津西ノ内遺跡 |
| 12 中八院遺跡 | 28 宮ノ後貝塚 | 44 三島神社 | 60 東小路遺跡 | 76 徳益ハッ枝遺跡 |
| 13 下林遺跡 | 29 北古賀遺跡群 | 45 蒲池弥生遺跡 | 61 磯鳥フク遺跡 | 77 今古賀城跡 |
| 14 北ノ屋敷遺跡 | 30 前田遺跡 | 46 蒲池遺跡群 | 62 南矢ヶ部遺跡Ⅰ | 78 柳川城郭 |
| 15 西新開遺跡 | 31 鬼古賀遺跡Ⅱ | 47 坂井長永遺跡 | 63 南矢ヶ部遺跡Ⅱ | 79 柳川城郭関連遺跡 |
| 16 酒見貝塚 | 32 下木佐木遺跡Ⅰ | 48 西蒲池古塚遺跡 | 64 蒲船津江頭遺跡 | …… 385 バイパス路線 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

時期ごとに概観すると、まず弥生時代前期では、柳川市域では徳益八枝遺跡において弥生時代前期末～中期初頭の掘立柱建物跡や井戸、土坑などが検出されており、集落の一端の様相が明らかになっている。この遺跡では初現期の井戸から擬朝鮮系無文土器が出土しており、渡来系種族との関連性が指摘されている。同時代の擬朝鮮系無文土器や朝鮮系無文土器、牛角式の把手などの渡来系遺物は、隣接する大川市



蒲池城の碑

の下林西田遺跡や、更に北側の旧城島町（現久留米市）久保遺跡でも確認されており、柳川市を含めた周辺地域で渡来系種族に関連する集落が営まれていることが確認されている。また蒲船津地区・蒲池地区は弥生時代前期以降の土器の散布地として周知されており、蒲船津江頭遺跡や蒲池遺跡群内の発掘調査で確認されている前期の遺物包含層が遺跡の存在を示唆している。弥生時代中期になると遺跡の数は増加し、有明海沿岸の各地域で生活域が拡大する。磯鳥フケ遺跡では中期後半の集落を形成する遺構や遺物がまとまって検出されている。この遺跡では礎盤を使用した掘立柱建物跡や溝・井戸・土坑が確認され、一括資料となる多量の土器や木製品も出土しており、当時の集落形態を検討する上で良好な資料となっている。また前出の徳益八枝遺跡でも継続して遺構や遺物が確認され、扇ノ上遺跡では支石墓の上石と甕棺墓群が検出されており、蒲池所在の三島神社の石橋に使用されている巨石は支石墓の上石とされる。大川市下林西田遺跡は中期初頭から前半が集落の最盛期であり、同市酒見貝塚は中期初頭から形成された貝塚として著名な遺跡である。弥生時代後期になると集落分布域はさらに拡大し、一本松遺跡・正行西の頭遺跡・松の木遺跡・日渡遺跡など多数の遺跡が認められる。前出の蒲船津地区の蒲船津江頭遺跡では弥生時代～中世の遺構が検出されているが、後期から集落が出現し、礎盤を利用した掘立柱建物群や土坑の一部が当該時期のものにあたる。集落は弥生時代終末～古墳時代初頭に至って爆発的に増大して最盛期を迎え、土器が埋納または廃棄された土坑もしくは井戸、溝などが数多く検出されている。また一括資料となる出土遺物も多量で、完形品を多数含む土器や木製品、動植物遺体などが出土しており、柳川市の当該時期の集落形態を顕著に表す遺跡である。同様の遺跡は佐賀県の平野部の標高4 m以下の集落遺跡でも調査されており、有明海沿岸地域の低地に特徴的な集落の姿と捉えられている。本遺跡もこれらの遺跡と遺構や遺物の傾向が近似しており、同文化圏内の集落と捉えられる。

古墳時代で確認されている遺跡は多くないが、柳川市のヘータカサン遺跡や地藏堂遺跡で集落が確認され、大川市平原遺跡においては5世紀代の遺構も確認されている。また蒲船津地区や蒲池地区の遺跡においても、少ないながら6世紀代の遺構・遺物が確認されている。

古代において集落と考えられる明確な遺跡は確認されていないが、西蒲池下里遺跡・西蒲池将監坊遺跡・池淵遺跡など蒲池地区の各遺跡で奈良時代の遺物が出土している。また、市内には現在の地割の中にも条里の痕跡が数多く認められ、西蒲池古塚遺跡・西蒲池将監坊遺跡・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡では平安時代の条里に関連する溝が多数確認されており、表層条里の残る地域内での条里遺構の確認と、蒲池地域における条里地割の開始時期につい

て貴重な成果を得ている。

中世においては、市域及び周辺地域において多数の遺跡が確認されている。本遺跡が位置する蒲池地区は鎌倉時代より有力氏族である蒲池氏が拠点としているところであり、居城である蒲池城の所在が西蒲池に推定されている。戦国時代においては蒲池を拠点とする蒲池氏と大和町鷹ノ尾を拠点とする田尻氏により、柳川市の統治は二分されることになる。蒲池氏は戦国時代末期に滅亡するが、東蒲池大内曲り遺跡や矢加部南屋敷遺跡では中世後期の掘立柱建物や輸入陶磁器が多数出土しており、蒲池氏支配下の集落の姿を窺う事ができる。また蒲池氏の支城のひとつである蒲船津城が所在した蒲船津地域では、蒲船津西ノ内遺跡において中世の集落縁辺部の水路や井戸が検出されている。

近世初頭には筑後国主として田中吉政が柳河城に入城し、柳河城周辺の掘割整備や矢部川の治水、有明海の干拓堤防の築堤をはじめ、久留米城と柳河城をつなぐ久留米柳川往還の整備など大規模な事業を行い、城下町の基盤と財政的な基盤を固める。柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ慶長年間に整備された堤防は「慶長本土居」として当時の姿をとどめており、当時の大工事の様子を偲ばせる。その後立花宗茂が入城してからは筑後南部は立花氏の領地となり、さらに城内外の整備が進められる。市街地には現在も当時の旧町名に由来する地名が残り、発掘調査において当時の地割を示す遺構や遺物が出土している。また、国指定名勝立花氏庭園や収集品として受け継がれてきた美術工芸品など、立花氏由来の貴重な文化財が今に伝えられ、掘割の景観と合わせて現在に柳川の歴史を伝えている。

参考文献

- 下山正一 1996 「有明海北岸低平地の成員と海岸線尾変遷」 ミュージアム九州第 52 号
柳川市 1999 『地区のなかの柳川—柳川市史 地図編一』
柳川市教育委員会 2006 『磯島フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書 第 1 集
柳川市教育委員会 2008 『徳益八枝遺跡』柳川市文化財調査報告書 第 6 集
大川市教育委員会 1994 『酒見貝塚』大川市文化財調査報告書 第 2 集
久留米市教育委員会 2006 『久保遺跡』久留米市文化財調査報告書 第 225 集
福岡県教育委員会 1998 『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書 第 132 集
福岡県教育委員会 2007 『西蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第 2 集
福岡県教育委員会 2009 『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第 6 集
福岡県教育委員会 2010 『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第 8 集
福岡県教育委員会 2011 『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第 10 集
佐賀市教育委員会 1998 『牟田寄遺跡Ⅳ』佐賀市文化財調査報告書 第 89 集



三島神社

Ⅲ 調査の内容

1 遺跡の概要

調査区は、国道 385 号バイパスと有明海沿岸道路が交わる柳川西 IC 交差点から北側へ 500 m 程度の地点である。調査当時の名称は「池淵遺跡」であり、調査後に再検討され整理された遺跡名が「西蒲池池淵遺跡」である。調査地は筑後川の堆積作用と有明海の潮汐により形成された粘土質地盤の低平地上で、調査前の田畑の地表高は標高 2.7 m 程度、隣接する道路の標高は 3.2 m 程度である。標高のやや高い西側の住宅密集地と東及び北側の水田畑作地の境に位置し、周辺には大小のクレークが縦横無尽に走る。このため調査区内の堆積層は基本的に軟弱な粘質土が主体で、後述するように客土及び西側から流れ込んだと思われる包含層が堆積している。調査区北は道路に接し、南・東・西は水田及び民家に接する。

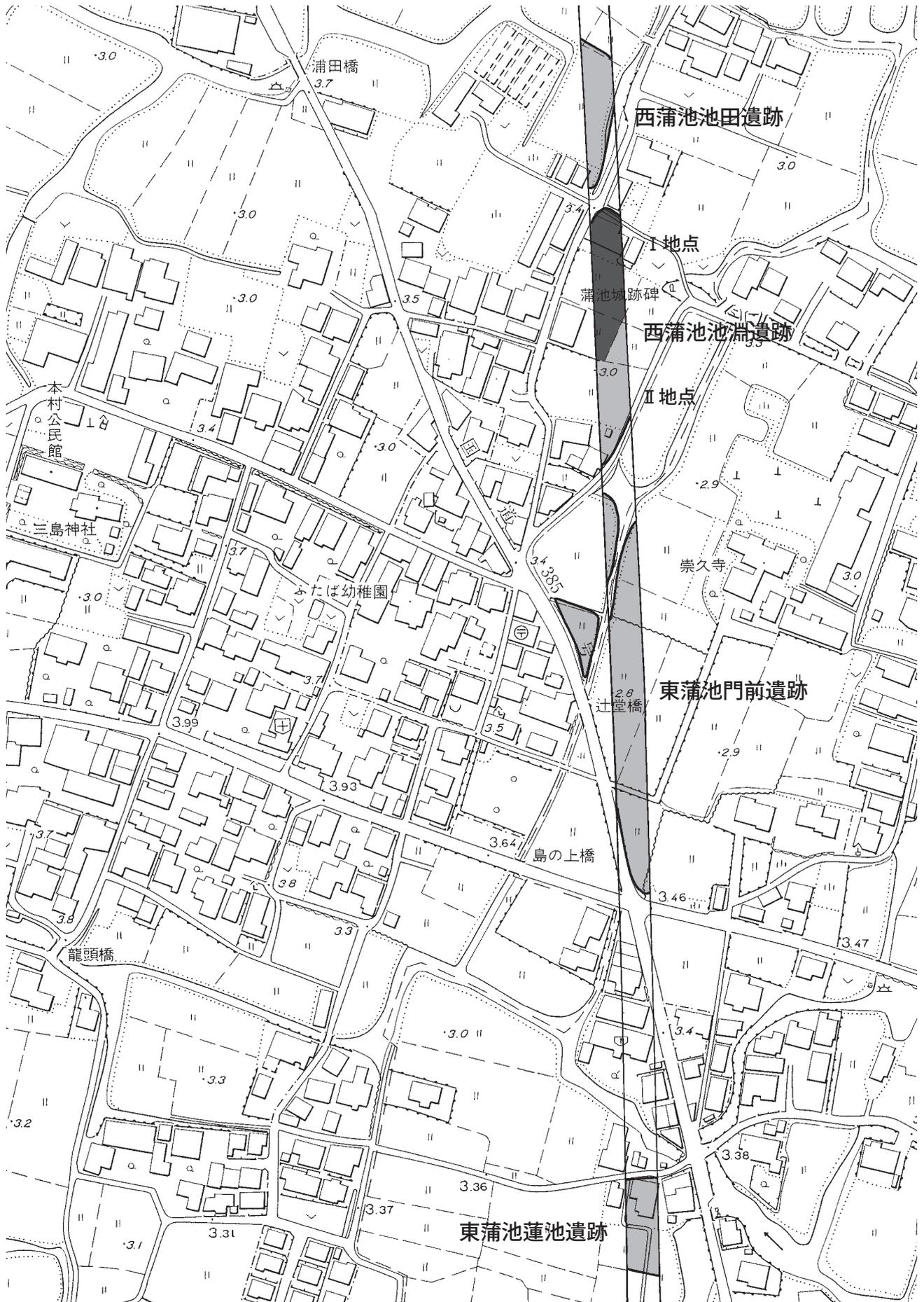
調査区は、調査前はその半分程度が水田として耕作され、一部は住宅地として使用されていた。昭和 50 年の米軍撮影航空写真を見る限り、その頃から土地利用はさほど変わっていないようである。柳川市域は前述したとおり、有明粘土層の基盤上に立地している。調査地は大字名に「蒲池」の名を持つことから、蒲が生育するような水辺の多い地勢であったことも考えられる。また、地域住民の方の話では、水田耕作以前はイグサ栽培が盛んであったらしく、遺構面にもイグサ栽培の杭の痕跡が多数残る。

調査区をⅠ～Ⅲ区に分けて調査を行ったが、Ⅰ区にはほとんど遺構がなかった。Ⅱ・Ⅲ区では、遺構面は大きく 2 面確認できた。上層は弥生時代終末～中世の遺構が混在し、下層は弥生時代中期から弥生時代後期の遺構を検出した。軟弱な粘土質地盤の特性から、調査区内の基盤土のレベルが各所で大きく異なり、包含層の堆積状況や基盤土の露出レベルに差がある。調査区内で上層・下層に分かれる箇所と全て同一面にある箇所があったことから、調査区の全体を時期別に調査できたわけではない。このため、遺構配置図の表記については切り合い関係を明確に表記することを目的として、大きくは礎盤式掘立柱建物跡とその他の遺構という分け方をしている。

検出した遺構のほとんどは弥生時代後期と弥生時代終末～古墳時代初頭、及び 12～13 世紀のもので、その間に古墳時代後期・奈良時代・平安時代・戦国時代の遺構が散見できる。遺構の種類は掘立柱建物跡・土坑・溝・窪み状遺構・土器溜まり・落ち込み・ピット等で、その他包含層に大量の遺物が包含される。弥生時代後期の遺構は礎盤を使用した掘立柱建物跡が主体で、竪穴式住居跡は皆無である。

2 基本層序

遺跡内の基本的な層序は、第 4 図に示すようにⅡ区とⅢ区で大きく異なり、またⅡ区の中でも東西で若干異なる。総体的には西南部の基盤土が最も高く、北及び東に向かって緩やかに落ちていく。包含層は箇所によって 2～4 層認められるが、最上層の茶灰色土包含層、Ⅱ区にある黄色包含層以外は、基盤土に近似する軟弱な粘土質で土器や自然木を包含し、調査区途中で消失するものや、東や北に向かって厚くなるものなど、堆積状況は様々である。そ



第3図 西蒲池池淵遺跡周辺地形および各調査区位置図 (1/2,500)

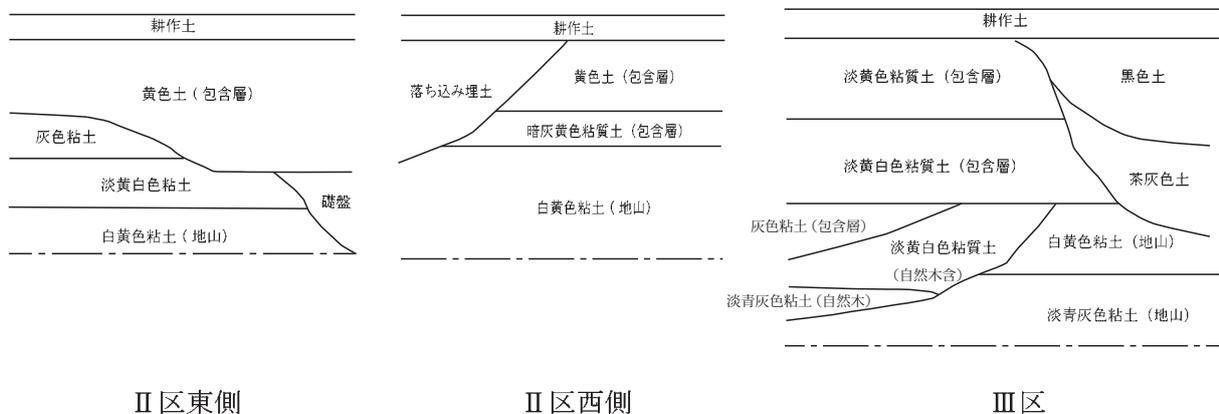
これらのほとんどは西側の高地からの流れ込みと考えられ、調査区の西に当該時期の遺跡が存在した事が想定される。

この中で、最上層の黒色土・黒茶色土・茶灰色土包含層と、灰色粘土包含層が調査区のほぼ全域を覆う。前者は上面を削平されている可能性はあるが、調査区全体に厚く堆積していたと考えられる。特にⅠ区で確認した落ち込みには大量に茶灰色土が堆積しており、客土による整地が行われたような状態である。この包含層には弥生時代中期～中世の遺物が含まれる。後者は軟弱な粘土質で、弥生時代中期の遺物が含まれ、下層の凹凸に合わせて流動的に堆積する。また、Ⅱ区より南で検出されたその他の包含層は、主に弥生時代中期～古墳時代前期の遺物を多量に包含する。これらの包含層については、次年度報告予定の「西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点」においても確認されており、出土遺物も多岐大量にわたることから、Ⅰ・Ⅱ地点の遺物をあわせて整理し、次年度合わせて報告することとする。

Ⅱ区の基本層序は、前述のとおり東西でやや様相が異なる。Ⅱ区全体に共通するのは耕作土の下にある水分含有の低い黄色土である。この黄色土はⅠ号溝より南のⅢ区にはほとんど存在せず、弥生時代中期～弥生時代終末の遺物を含有する。特に東側ではこの層が40cmほど厚く堆積し、その下に下層弥生時代後期の遺構面がある。西側は黄色土包含層がやや薄くなり、その代わり暗灰黄色粘質土の包含層が堆積する。土器溜まりの遺物はこの包含層の最下層にあたる。Ⅱ区東側ではこの下に弥生時代中期の灰色粘質土包含層があり、この層に礎盤式掘立柱建物跡が切り込む。西側では灰色粘土層が薄く、若干堆積する程度である。

Ⅲ区は茶灰色土包含層の下に、淡黄色粘質土包含層、淡黄白色粘質土包含層がある。これらの包含する遺物は弥生時代中期が大半で、北に向かって消失する。灰色粘土包含層はこの下に入り、その下に自然木を多く含む淡黄白色粘質土や淡青灰色粘質土が堆積する。Ⅲ区は基盤土の標高が高く、北端や西端では包含層がほとんど削平されて表土直下に基盤土が露出していた。このため、Ⅲ区西及び南側は全時代の遺構を同時に検出している。

基盤土は全地区共通で、上層が軟質の白黄色粘土、標高約1.2m以下はグライ土化した青灰色粘土が堆積する。青灰色粘土には自然木や繊維が包含されている層もあり、自然堆積と考えられる。これ以下に人工物の包含は認められなかった。

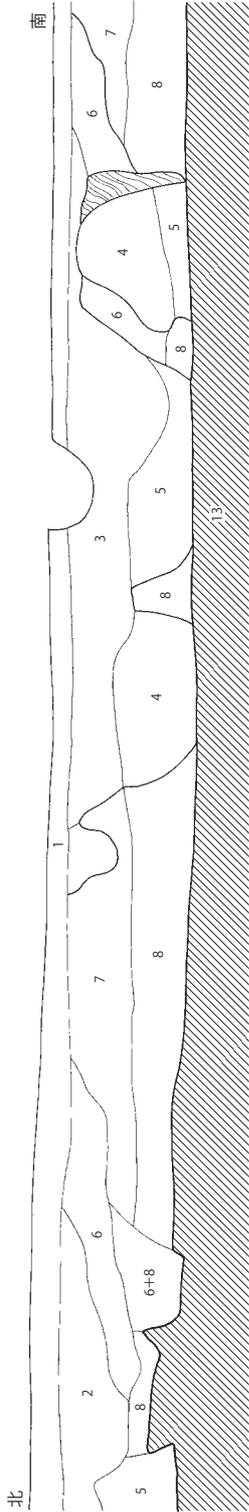


第4図 基本層序模式図



第5図 西蒲池池淵遺跡遺構配置図 (1/200)

3.2m

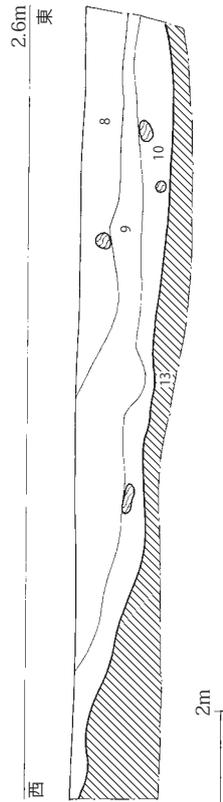


Ⅲ区 東壁



Ⅲ区 中央下層

- Ⅲ区土層図
- 1 耕作土
 - 2 表土
 - 3 黒色土
 - 4 茶灰色・灰色・黒色土塊の斑土 (遺構埋土)
 - 5 黄色・灰色・黒色土混 (遺構埋土)
 - 6 7に灰色粘土混 (包含層)
 - 7 淡黄色粘土 (包含層)
 - 8 淡黄白色粘土 (包含層)
 - 9 淡黄白色粘土 (鉄分多)
 - 10 灰色粘土 (包含層)
 - 11 8に淡灰色粘土混 (自然木多い)
 - 12 淡灰色粘土 (自然木含)
 - 13 白黄色粘土 (地山)
 - 14 淡青灰色粘土 (地山)



Ⅲ区 西側



Ⅱ区 中央

- Ⅱ区土層図
- 1 茶灰色土
 - 2 灰色粘土
 - 3 淡灰色粘土に黒色粘土塊痕 (17に近似)
 - 4 白黄色粘土 (精良)
 - 5 灰青色粘土 (精良)
 - 6 黒色・17・黄色粘土の斑 (汚)
 - 7 13よりやや暗い
 - 8 6より混じり少
 - 9 5+黒色土・砂 (木質・土器)
 - 10 7に14混
- 落ち込み
- 11 淡灰黄色粘土
 - 12 灰色粘土 (包含層)
 - 13 黄色土 (包含層)
 - 14 暗灰黄色粘土 (包含層)
 - 15 灰色粘土
 - 16 13に黒色粘土塊混
 - 17 白黄色粘土 (地山)
 - 18 淡灰青色粘土 (地山)

第6図 調査区壁面・トレンチ壁面実測図 (1/40)

3 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

今回の調査では柱穴約 200 基を検出した。これらの工法には大きく 2 種類あり、掘削した柱掘方の底に柱を直接据えた通常見られる工法のもの、柱掘方の底に柱の沈み込みを防止するために繊維質もしくは葦様の植物繊維を敷き、その上に加工した横木を置いて柱と組み合わせる工法のものである。前者は小ピットが大多数であり、建物跡として報告できるものは 4 棟のみである。後者は柱穴約 160 基を検出したが、切り合いが激しいため、建物跡として報告できるものは 14 棟である。なお、後者の工法による柱穴については、過去の福岡県の発掘調査報告において「礎盤」と呼称しており、本報告でもこの名称を使用する。

1～4号掘立柱建物跡は、通常の柱穴を用いて建てられたものである。

1号掘立柱建物跡（第7図）

Ⅱ区中央部西寄りに位置する掘立柱建物跡で、1間×2間と考えられるが、北西隅の柱穴は試掘調査時のトレンチに削平され、南西隅の柱穴は検出できなかった。残存する柱穴から推測できる建物規模は、桁行約 3 m、梁行約 1.4 mで、床面積は約 4.2 m²である。建物方位は真北から東へ約 32 度振れる。柱間寸法は心々で桁行約 1.5 m、梁行約 1.4 mである。柱穴の規模は直径 30cm 前後の円形、柱痕跡の直径は 10cm 前後の小規模な建物である。埋土はすべて掘方内が茶灰色土、柱痕跡が黒茶色土である。

出土遺物（第8図1～3）

出土遺物は少なく、また包含層を切り込むため遺物の時期が混在するが、意図的な選別を避けてできる限り掲載する。

1は口縁が強く屈曲する甕で、口縁端部をわずかに外反させる。外面はタテハケ、内面は口縁部から頸部をヨコハケ調整し、体部はタテハケ後ヨコケズリする。頸部は粘土接合痕が明瞭である。

2は高坏の口縁部小片で、外面をヨコミガキ、内面を斜位のミガキで調整する。

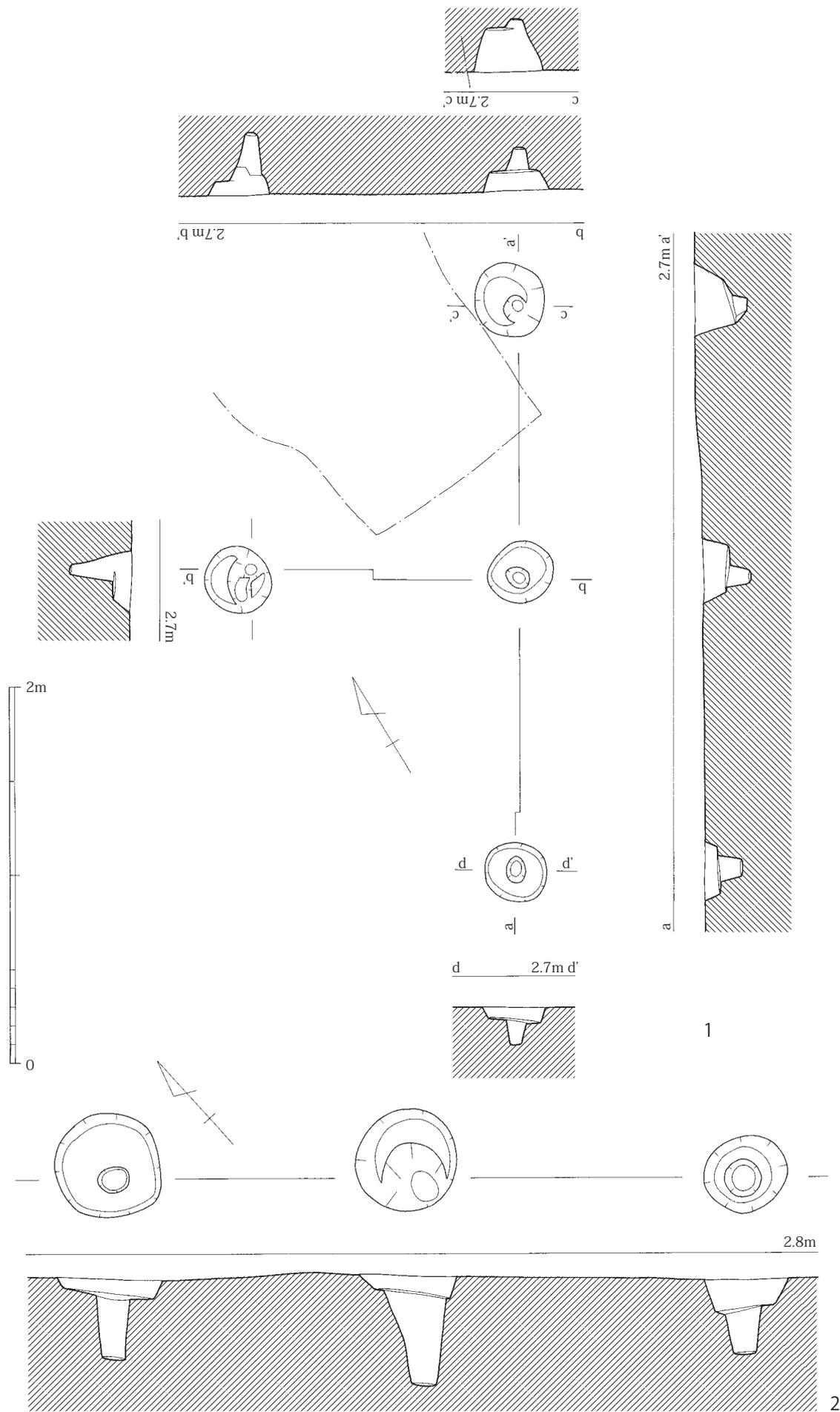
3は鉢の口縁部小片で、内外面ともヨコミガキで、外面のミガキは粗い。

2号掘立柱建物跡（図版3、第7図）

Ⅱ区東寄りに位置する掘立柱建物跡で、柱列1列のみの検出のため柵列の可能性もある。検出した柱穴は3基で、方位は真北から東へ約 40 度振れ、柱間寸法は心々で約 155cm、柱穴の規模は2基が直径約 55cm、東端1基のみが約 40cm、柱痕跡の規模は直径 7.5～8.5cm の小規模な建物である。埋土はすべて掘方内が茶灰色土、柱痕跡が黒茶色土である。周辺にも柱穴が存在するが、対になると考えられるものはなかった。出土遺物は少なく、図化できるものがない。

3号掘立柱建物跡（図版3・4、第9図）

Ⅱ区東寄り、2号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡の間に位置する掘立柱建物跡で、2間×2間の総柱建物である。桁行約 3.7 m、梁行約 3.5 mで、床面積は約 13 m²、建物方位は真北から東へ約 44 度振れ、柱間寸法は桁行、梁行ともに 1.6～1.8 mとばらつきがあり、柱筋が



第7图 1·2号掘立柱建物跡実測図 (1/30)

通らないものもある。柱穴の形状も円形、楕円形、隅丸方形と相違あるが、埋土の似通った他遺構との切り合いがあったことから、正確な形状が検出できていないためであり、総体的には直径 50～70cm の不整円形もしくは楕円形の掘方になると思われる。柱痕跡の直径は 5～15cm で、埋土は掘方上層部に茶灰色土が入り、これを除去後に黒色土の柱痕跡が検出できた。掘方の下層は基盤土に若干茶灰色土が混入した粘土が入る。南側に位置する 4 号掘立柱建物跡と同様の規格であるが、床面積及び方位が異なる事から、掘削時期については若干の時間差が考えられる。

出土遺物 (図版 55、第 8 図 4～9、第 86 図 7)

出土遺物は少なく、また時期が混在するが、意図的な選別を避け、可能な限り掲載する。

4 は口縁が長く直線的に開く在地系の広口壺。外面はタテ及び斜位のハケで調整するが、一部縦位のミガキ状条痕が認められる。ミガキ状条痕は幅 1～1.5mm の浅いへら状工具痕で、ミガキと痕跡が近似する条痕であることから本報告書ではこのように呼称する。内面は口縁部をヨコハケ、体部を工具によるタテナデで調整する。

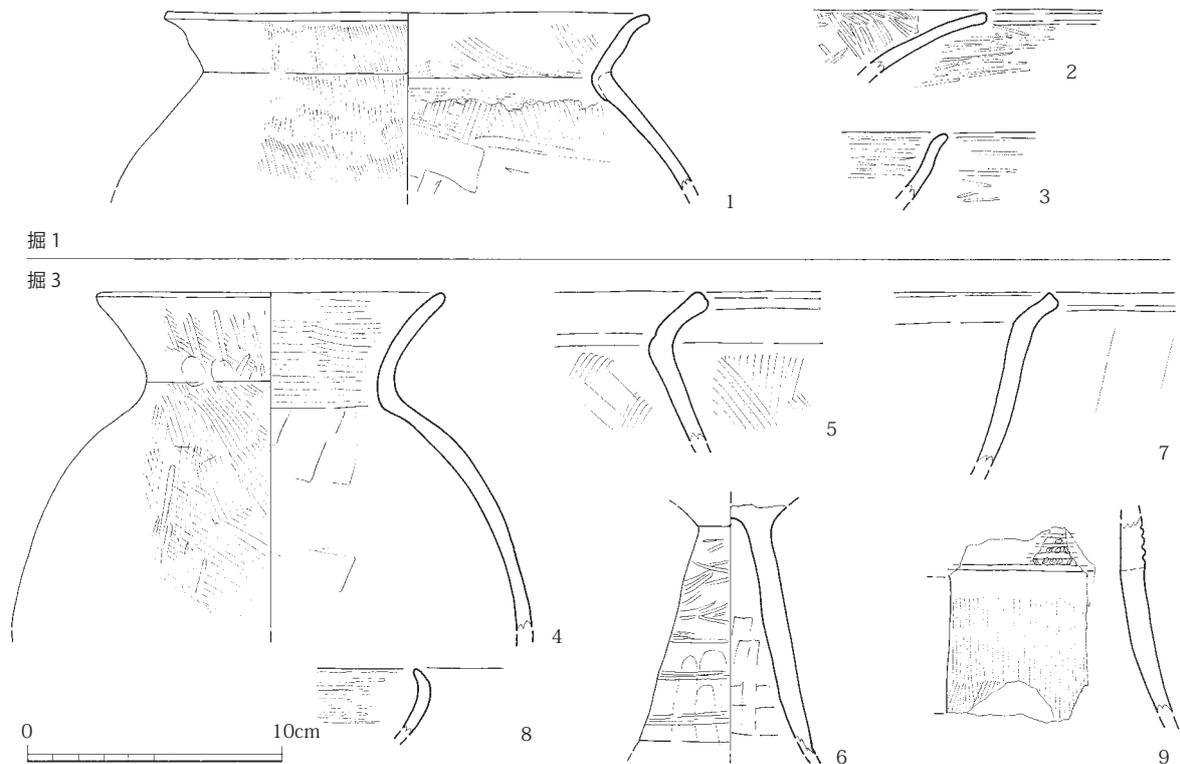
5 は甕の口縁部小片で、緩やかな「く」の字を呈する。外面はタテ及び斜位のハケ調整、内面は斜位のハケ後に工具で粗いナデで調整する。

6 は高坏脚部で、裾を欠損するが大きく屈曲するものか。外面はヨコケズリ後タテナデし、ケズリによる稜を中心に粗いヨコミガキを施す。内面はヨコケズリ後タテナデ調整。

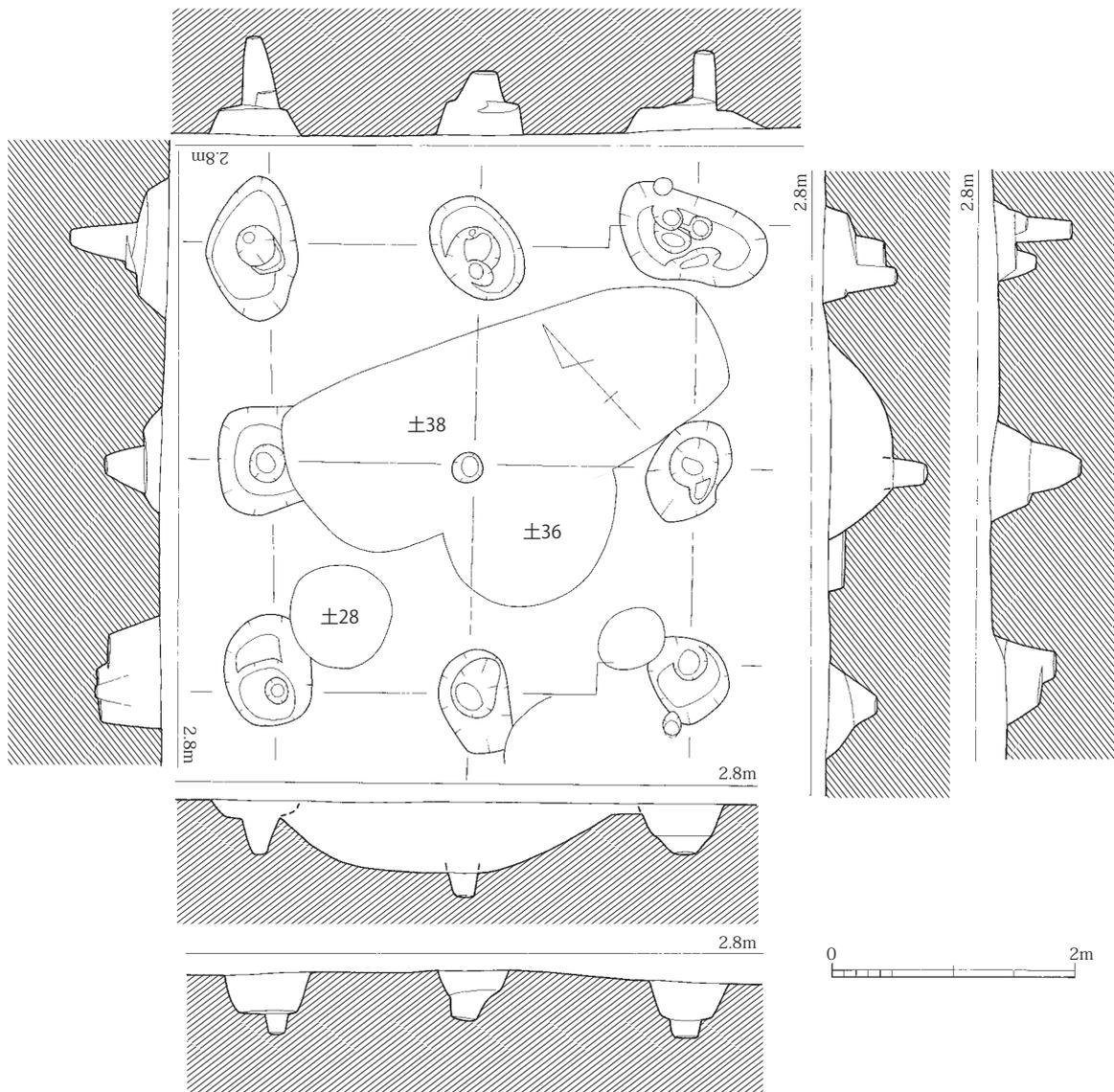
7 は屈曲口縁の鉢で、外面は工具によるタテナデ内面はヨコナデ調整する。

8 は坏口縁部小片。内面はヨコミガキで、外面は摩滅するがヨコナデ調整か。

9 は筑後地方に見られる在地系の器台で、平面図左側が透かしになる。外面はタテハケで、



第 8 図 1・3 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)



第9図 3号掘立柱建物跡実測図(1/60)

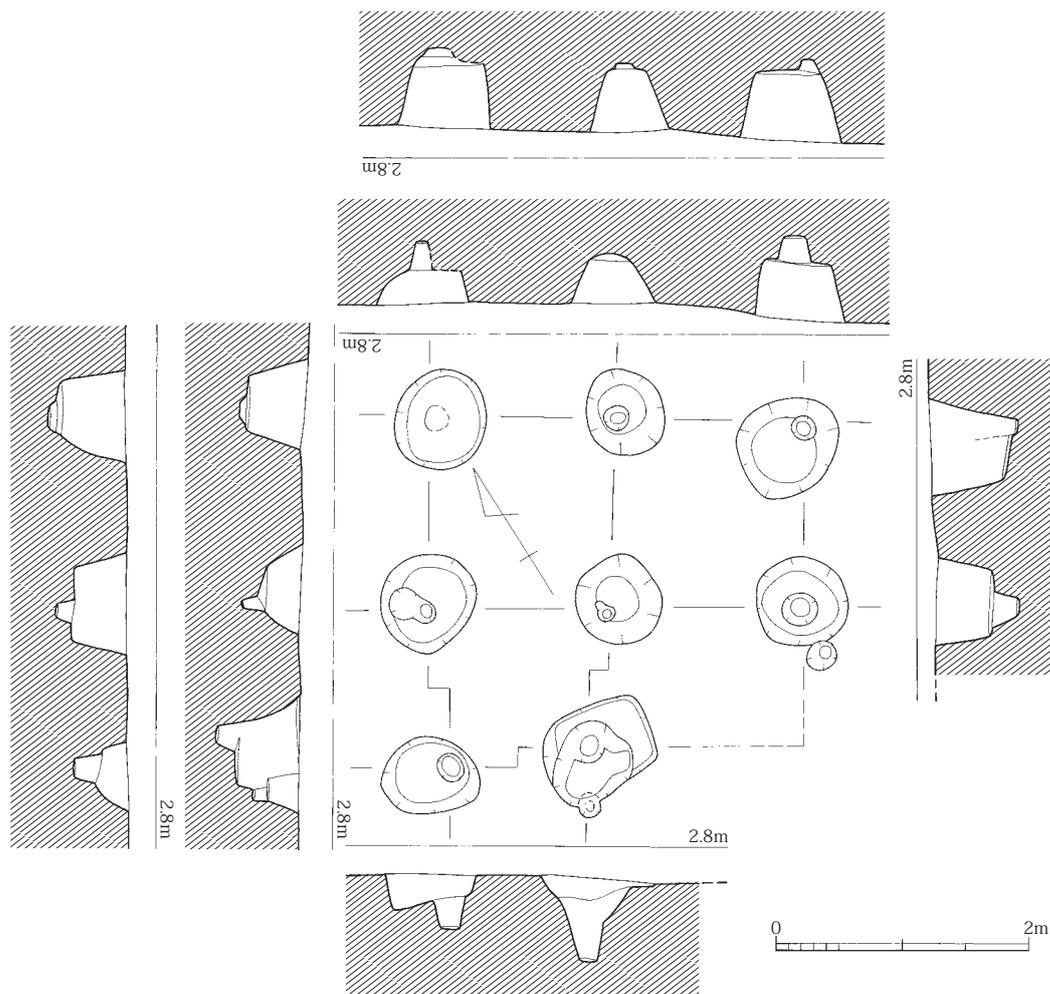
その上に細かいキザミを有する凸帯が3条廻る。内面はヨコナデで、一部指圧痕が残る。

第86図7は敲石か。右側面にW字状に2ヵ所の凹みが認められる。凝灰岩製である。

4号掘立柱建物跡(図版3・4、第10図)

Ⅱ区東寄り、3号掘立柱建物跡の南に位置する掘立柱建物跡で、2間×2間の総柱建物であるが、東南隅の柱穴は検出できなかった。桁行約2.9m、梁行約2.6mで、床面積は約7.5㎡、建物方位は真北から東へ約33度振れる。柱間寸法は1.1～1.5mとばらつきがあり、柱筋が通らないものもある。柱穴の形状は直径約60～80cmの円形または不整円形を呈し、柱痕跡は直径10～15cmである。柱穴は壁が急な傾斜になって深くなるものと、壁が緩やかで浅くなるものがあり、後者は柱穴が掘方低にめり込んでいた。埋土は掘方上層部に茶灰色土が入り、これを除去後に黒色土の柱痕跡が検出できたものと、黒色粘土が充填しており底部分で柱痕跡が検出できるものもあった。掘方の下層は黒色粘土のものと黒色土と基盤土のブロックが混在する斑土のものがあった。出土遺物は少量で、特に土器は図示できるものがない。

出土遺物(図版54・56、第84図8、第85図5)



第10図 4号掘立柱建物跡実測図(1/60)

第84図8は土製投弾である。指ナデにより成形し、球形を呈する。焼成は良好で、灰白色を呈するが、一部黒褐色を呈しており、黒斑もしくは黒塗りの可能性がある。

第85図5は砥石で、両面を砥面とする。頁岩製で、石質から仕上げ砥と考えられる。

5～18号掘立柱建物跡は礎盤を使用した掘立柱建物である。

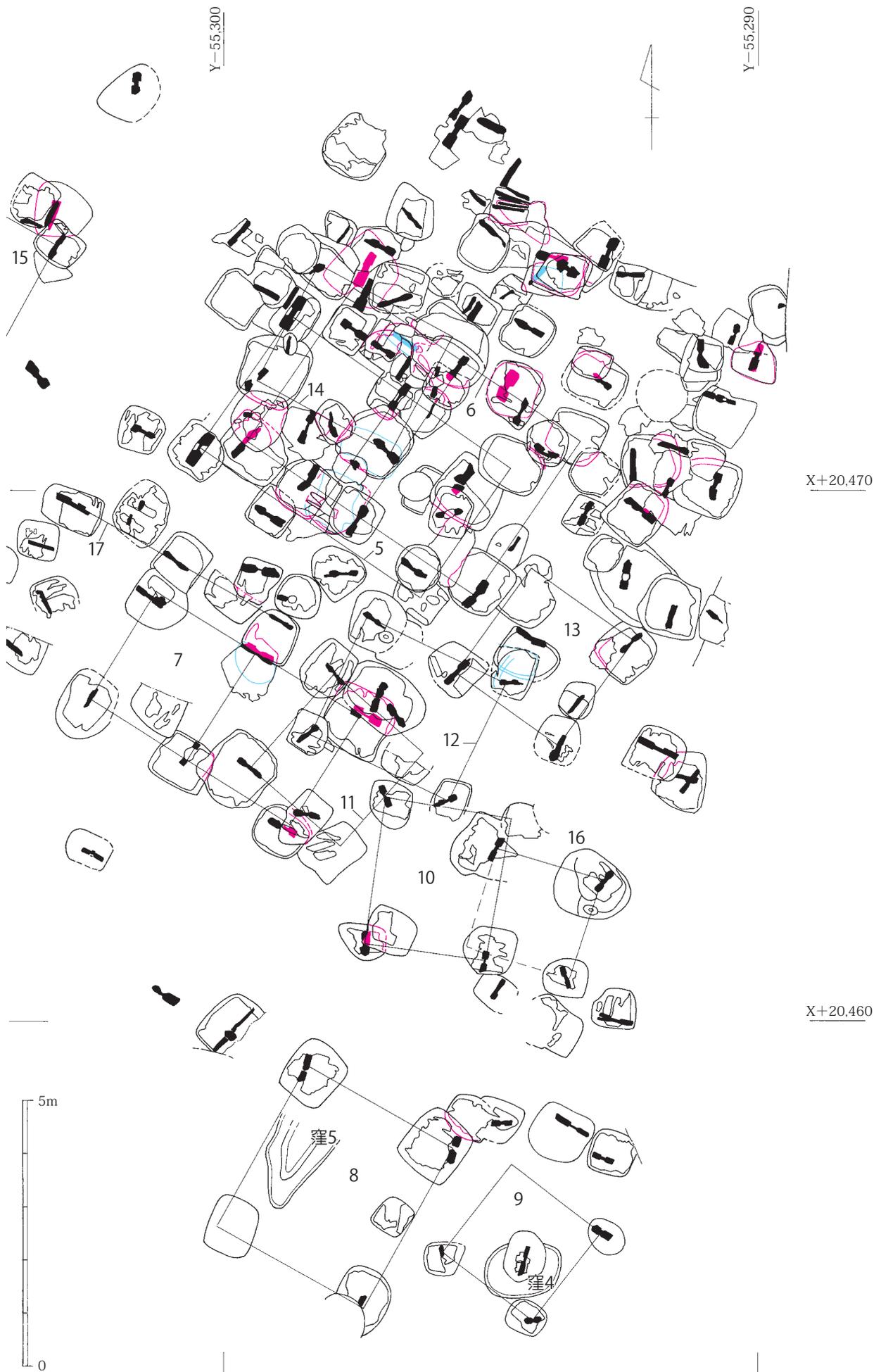
柱穴は切り合いが激しく、特にⅡ区北東部では集中して検出されたため、礎盤底の繊維質の僅かな痕跡しか確認できないものも多数あった。また、柱掘方の埋土が基盤土に近似していることからプランの確認が困難であり、掘削中に突発的に礎盤が見つかることもままあった。このような状況から遺構検出は困難を極め、またトレンチ掘削による断面観察を行うには柱穴の数が多すぎた事から、調査途中で調査方法を変更した。

① 礎盤の痕跡が確認できたものは、礎盤の範囲を確認してから掘方の壁を追いかけて立ち上げる。

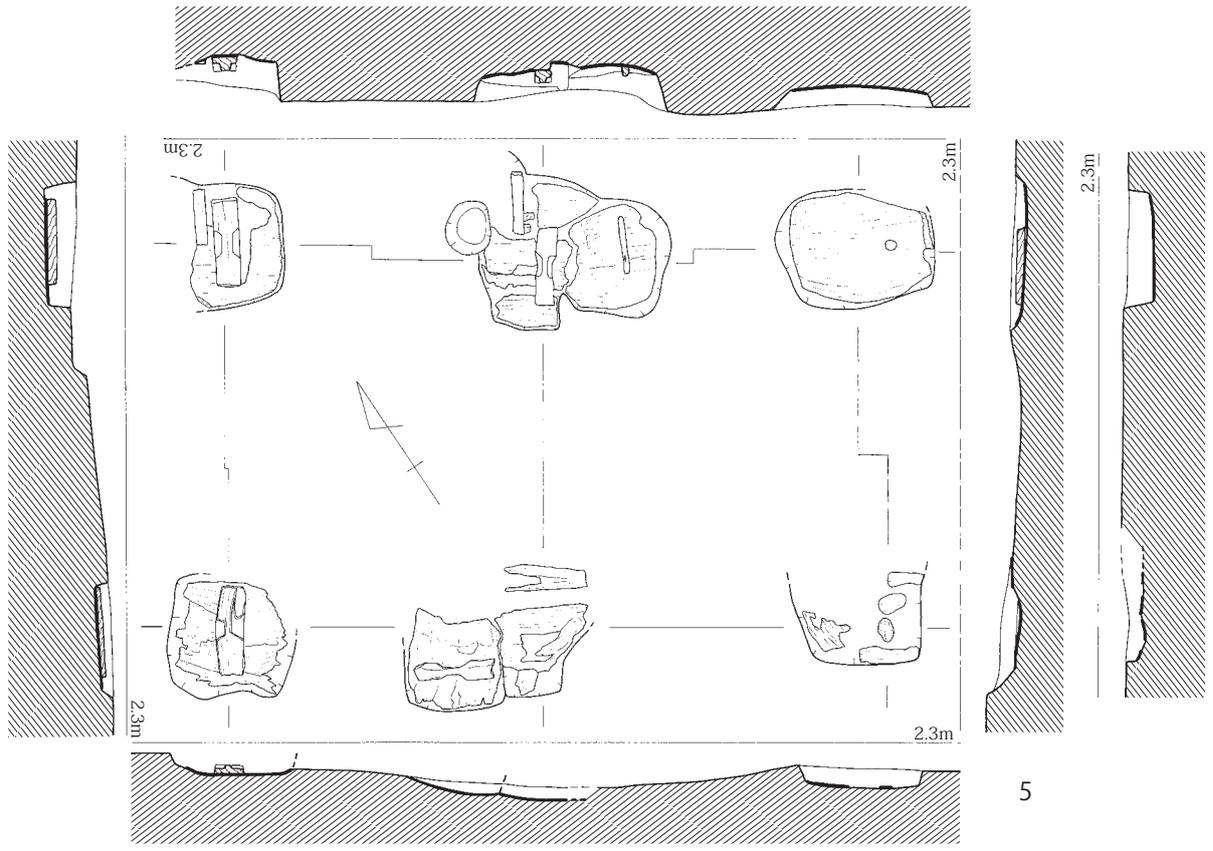
② 掘削した柱穴や土坑の壁に、切られた状態の柱穴の礎盤を確認し、①を行う。

③ 平面的には何も見えない箇所も掘削し、礎盤を検出して①を行う。

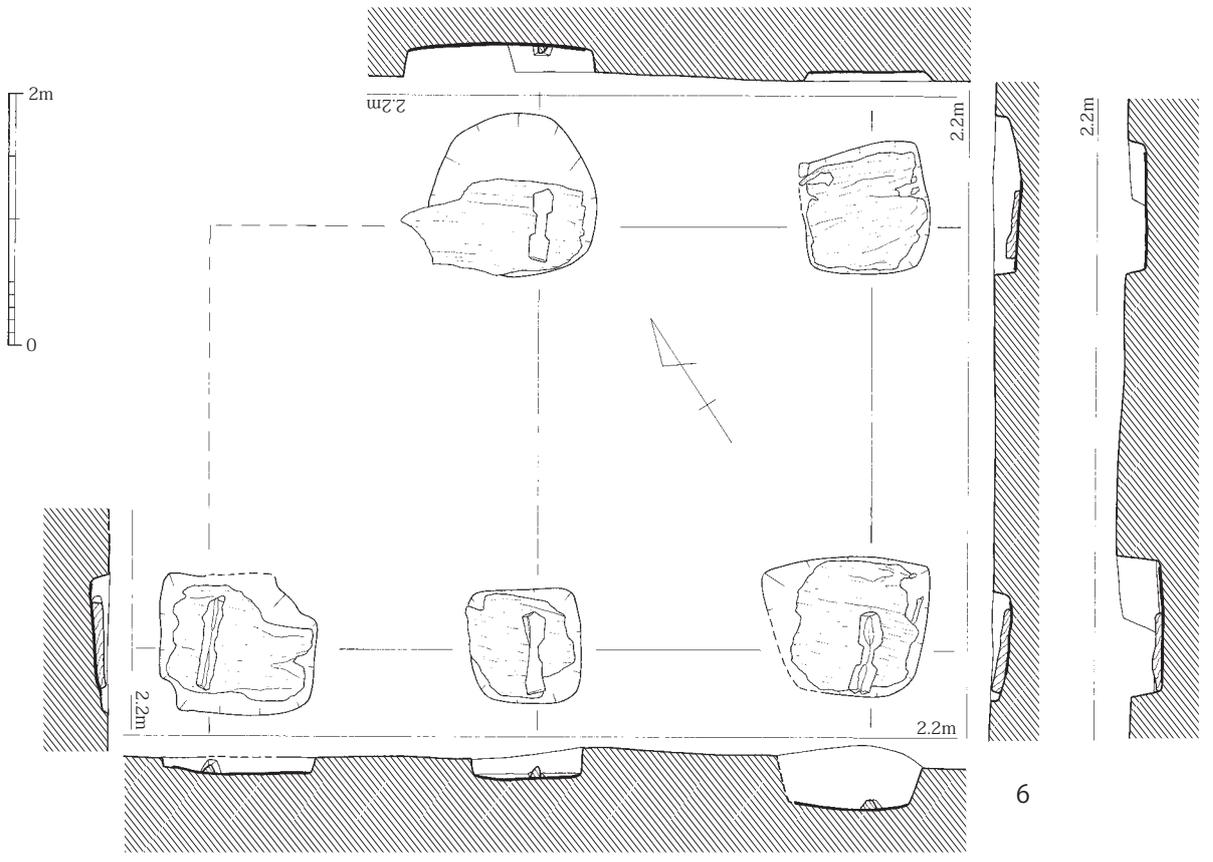
という作業である。③の方法は無謀の感があったが、ほとんどの掘削で礎盤を検出した。さらに切り合いが激しい箇所では、検出した柱掘方は掘削後即図面作成、写真撮影を行い、



第11図 掘立柱建物跡礎盤式柱穴配置図 (1/100)

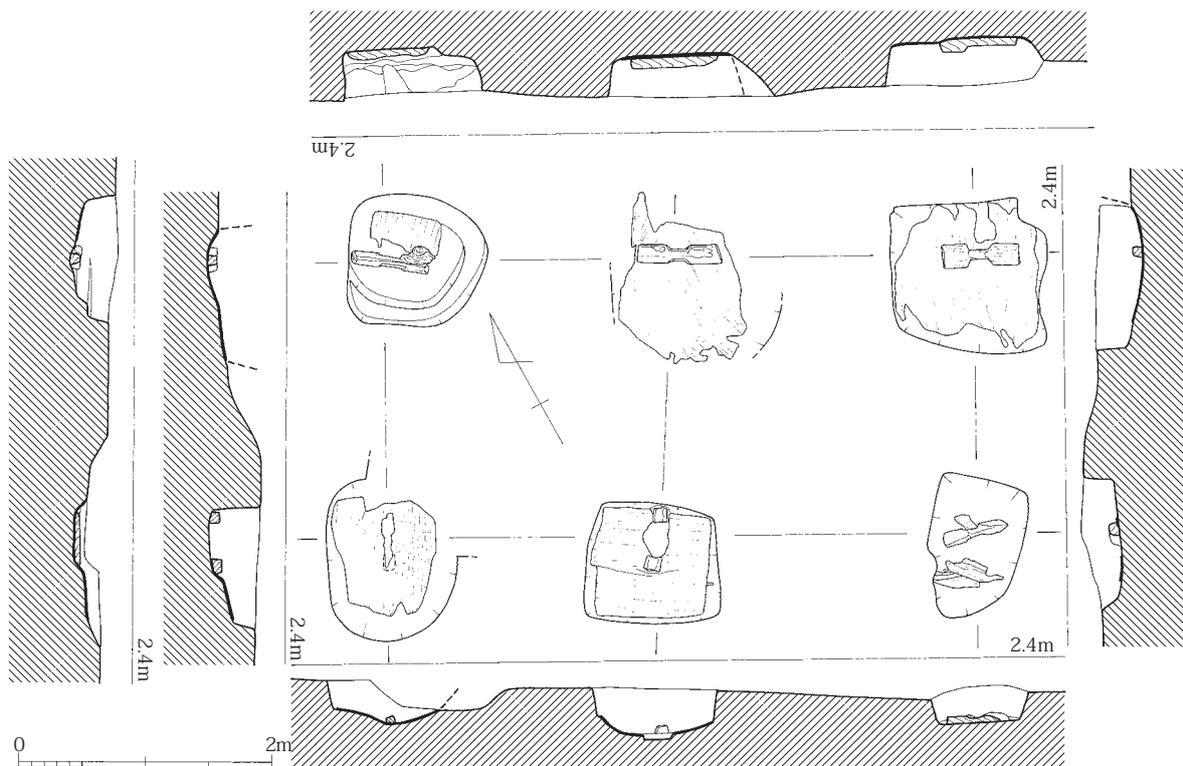


5



6

第12图 5·6号掘立柱建物跡実測图 (1/60)



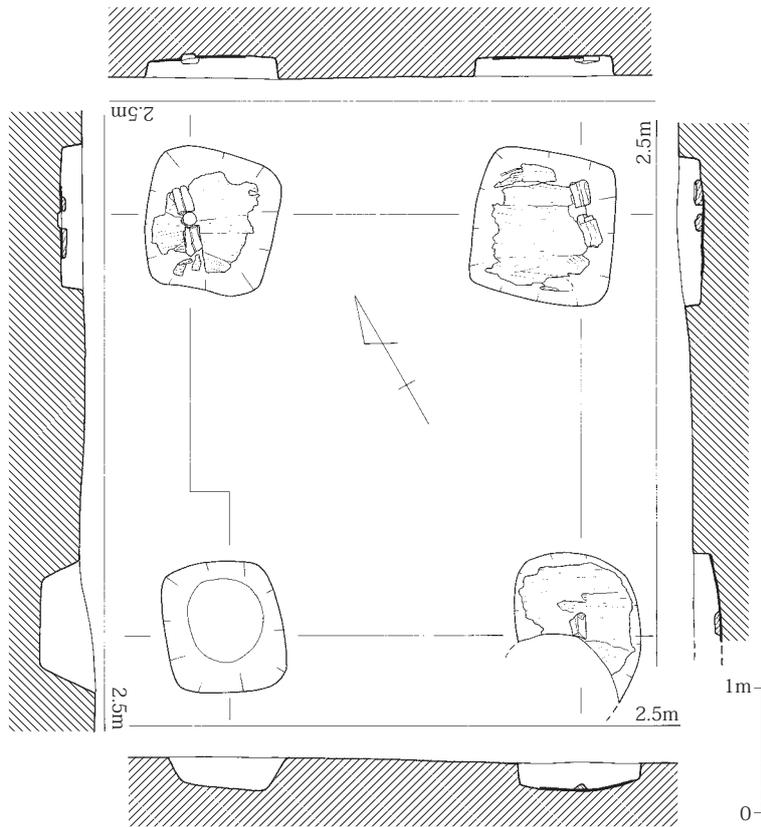
第13図 7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

その後は即破壊して切り合い下層の礎盤を検出するという状態であった。このため、個々の柱穴については切り合いによって先後関係を確認できたものの、建物としての組み合わせについては調査時にはほとんど解明できなかった。ここでは調査当時に確認できた僅かな建物跡と、調査後に相対的な位置関係や礎盤の形状から把握できた建物跡について報告する。なお、1棟の掘立柱建物跡の中でも柱穴の底レベルや横木の加工方法が様々である例もあり、これら要素によって組み合わせを確認する事は困難である。また、隣接地の調査結果によっても組み合わせが変化するため、調査区東際の礎盤については、隣接地の調査報告で再度検討することとし、今回報告しないものもある。

出土遺物については冒頭で陳述したとおり、弥生時代中期の包含層を切り込む遺構の埋土には大量の中期の遺物が混入する。また、柱穴内上部に上層遺構や包含層の埋土が入ることもあり、出土遺物は1遺構内でも多岐にわたる。これらの建物の時期についてはまとめにおいて述べるが、ここでは出土遺物をできる限り掲載する。

5号掘立柱建物跡 (図版6、第12図)

Ⅱ区中央に位置する2間×1間の建物で、6・14号掘立柱建物跡と重なり、6号より先行する先後関係にある。西側梁行の横木形状が他に類を見ないものであり、これらの組み合わせは確実と考えられた。さらに北側梁中央柱穴の横木も近似した形状を持つ事から、これらをセットと考え、その他の柱穴は、柱掘方規模と軸が近似するものを組み合わせた。桁行約4.9m、梁行約3.0mを測り、床面積は14.7㎡程度である。柱間寸法は桁行2.4～2.7m、梁行2.8



第 14 図 8 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

や上位から外反し、端部は内面に突出する。

6 号掘立柱建物跡 (図版 6、第 12 図)

Ⅱ区中央に位置する 2 間×1 間の建物で、5・14 号掘立柱建物跡と重なり、14 号より先行し、5 号より後出する先後関係にある。横木の形状は若干異なるものがあるが、埋地軸や規模、繊維質敷設規模に近似性が見られることから、この組み合わせの確実性は高いと思われる。桁行約 5.1 m、梁行約 3.4 m を測り、床面積は 17.3 m² ほどになる。柱間寸法は桁行約 2.6 m、梁行約 3.4 m と梁行が狭い。検出された柱穴の形状は一辺 1.0～1.1 m の隅丸方形を呈し、底レベルは北西隅が深くなる。いずれも底形状はほぼ水平を保つ。

出土遺物 (第 20 図 4～6)

4・5 は甕である。4 は逆 L 字の口縁で、外面に僅かにタテハケが認められるのみで、他は摩滅が激しい。5 は丸みを持つ三角口縁のもので、体部は直に垂下する。外面はタテハケ後にミガキ状条痕が認められる。内面はナデ調整で、工具痕が認められる。

6 は何かの把手になると思われるが、本体は不明である。土師質で 3cm 前後、厚さ 7mm、扁平で本体取り付け部が屈曲する。全体にケズリで調整し、その後取り付け部分はハケ調整、その後に全体をナデ調整する。

7 号掘立柱建物跡 (図版 5・6、第 13 図)

Ⅱ区とⅢ区の境、1 号溝の下層で検出した 2 間×1 間の建物である。柱穴集中地区のやや

～3.0 m と梁間がやや狭い建物となる。検出された柱穴の平面は 1～1.2 m 四方の隅丸方形を呈し、底レベルはほぼ均一で、北東側が低くなる傾向にある。南東隅の掘方中層底は建物の重圧によりやや沈下している。

出土遺物 (第 20 図 1～3)

1・2 は甕である。1 は大型で逆 L 字口縁を有する甕で、端部は肥厚し、外面はタテハケ調整し、内面は摩滅のため調整不明である。2 は「く」の字に屈曲する口縁を有し、口縁はやや短い。外面は斜位のハケ調整、内面は口縁部から頸部を斜位のハケ調整後、内面全体をナデ調整する。

3 は器台の裾部。端部のや

はずれに位置するため切り合いもさほど激しくなく、横木の大きさや形状には差があるものの埋置軸も90度回転する事でほぼ共通し、繊維質敷設範囲も近似する事から、これらの組み合わせの確実性は高いと考えられる。特に北側の桁行は検出段階で埋土や深さ、繊維質敷設規模の近似性が認められていたため、確実に組み合わせると考えられる。桁行4.6m、梁行約2.2mを測り、床面積は10.1㎡程度となる。検出された柱穴の平面は約1m四方の隅丸方形を呈し、底レベルは北が10cmほど低い。いずれも掘方底の横木部分は重圧によって若干沈下するが、特に南西に向かって沈下が激しい。

出土遺物 (第20図7・8)

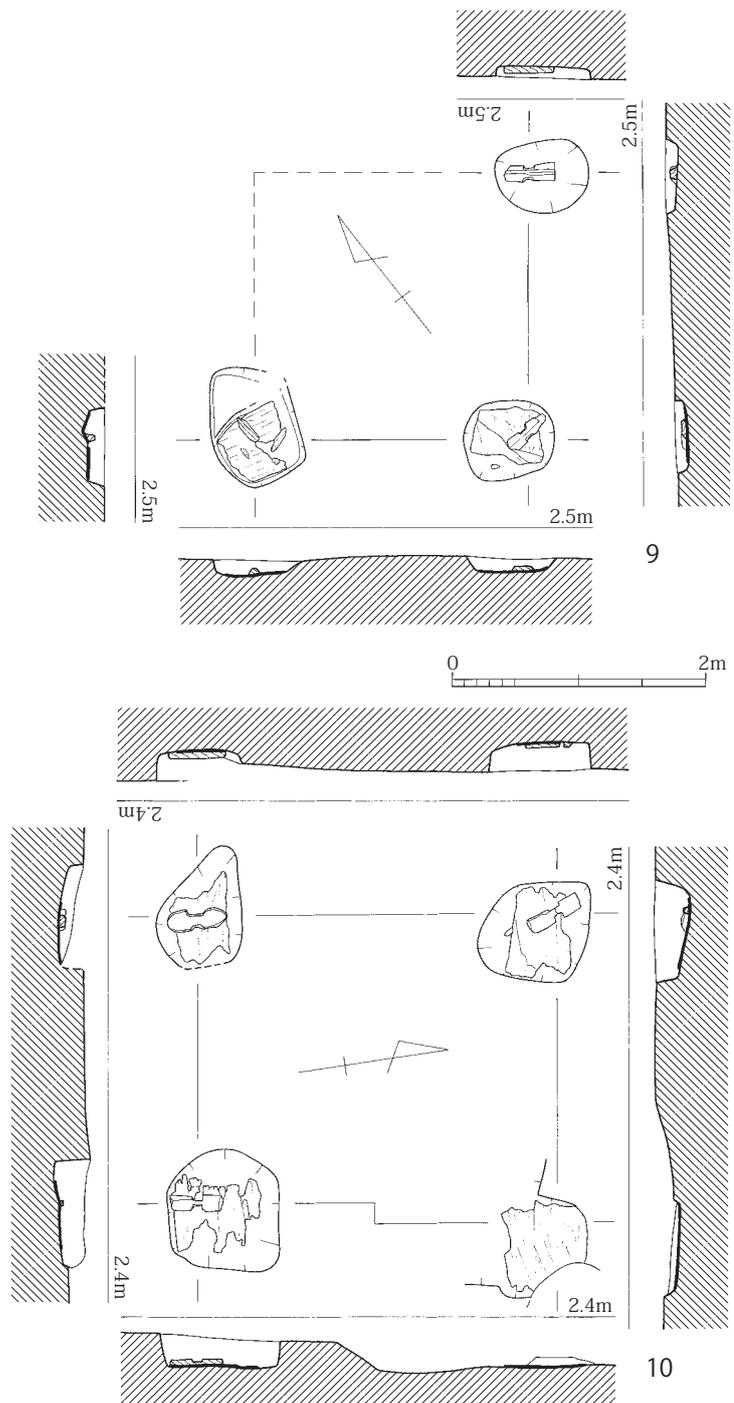
7は無頸壺で、胴部中位が大きく張る。外面はタテや斜位のハケで調整し、底部付近にミガキが認められる。

8は屈曲口縁の鉢で、口縁上面が水平になり、端部がわずかに屈曲する。外面はヨコナデでの工具痕が残り、内面は指ナデで指圧痕が残る。

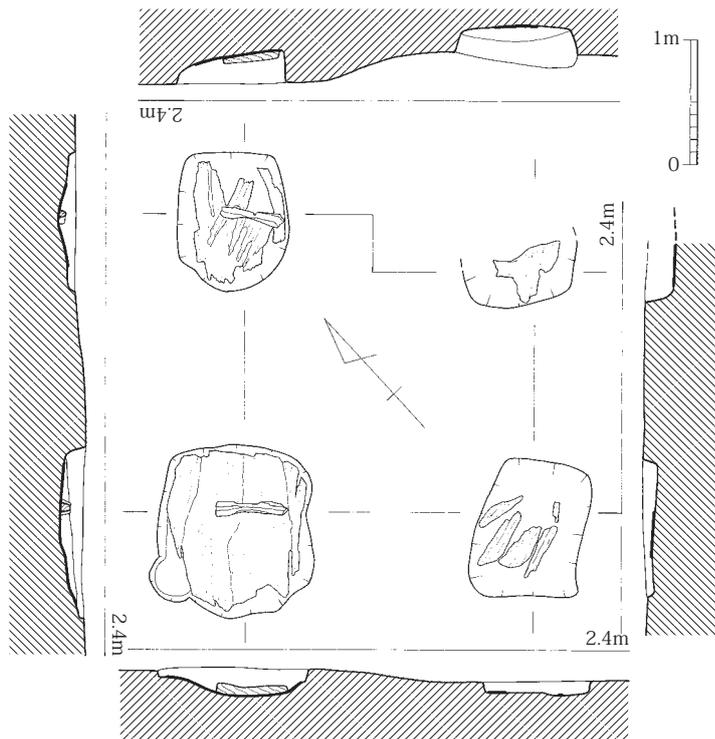
8号掘立柱建物跡 (図版5・6、第14図)

Ⅱ区のほぼ中央に位置する1

間×1間の建物である。南西の掘方は横木がなく、繊維質は掘削段階で除去されたため土坑のように見えるが、当初敷設はあった。南東隅の掘方は土坑に切られて横木の一部のみが残り、北西隅の掘方は誤って掘削したが柱痕跡があった。柱穴の切り合いが少ない場所であり、横木の大きさや形状は類似し、埋置軸もほぼ共通し、繊維質敷設規模も近似する事から、これらの組み合わせの確実性は高いと考えられる。柱間寸法は桁行3.5m、梁行推定2.8～3.1mを測り、床面積は10.3㎡程度である。検出された柱穴の平面は約1m四方の隅丸方形または円形を呈し、底レベルはほぼ均一で、南側中央がやや低い。残りの良い横木はほぼ全体



第15図 9・10号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第16図 11号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

mを測り、床面積は5.8㎡程度となる。検出された柱穴の平面は約70cm四方の隅丸方形または円形を呈し、底レベルはほぼ一定である。掘方床はほぼ水平を保つ。出土遺物は小片で図示できるものがない。

10号掘立柱建物跡 (図版5・6、第15図)

I区北東部、8号掘立柱建物の北側に位置する1間×1間の建物で、16号掘立柱建物を切る先後関係にある。北東の柱穴は横木がないが、その他の横木は他の柱穴と異なりすべて針葉樹を使用している。また、柱穴の切り合いが少ない場所であり、横木の大きさや形状は共通し、埋置軸もほぼ共通し、繊維質敷設範囲も近似する事から、これらの組み合わせの確実性はかなり高いと考えられる。柱間寸法は桁行約2.2～2.4m、梁行約2.8mを測り、床面積は6.4㎡程度となる。検出された柱穴の平面は、西南の柱穴のプランが不明であったが、一辺80cm前後の隅丸方形を呈し、底レベルは北側がやや低くなる傾向にある。掘方床はほぼ水平を保つ。なお針葉樹を使用した横木は、他の横木より残存状況が良好であった。

出土遺物 (第20図9)

9は甕小片で、口縁は小さい逆L字を呈する。外面はタテハケ、内面はナデで調整し、頸部外面は粘土屈曲によるシワが顕著である。

11号掘立柱建物跡 (図版6、第16図)

II区とIII区の境、1号溝の下層で検出した1間×1間の建物で、7号掘立柱建物跡を切る先後関係にある。北西の柱穴が土坑によって半分以上削平され、南東部の柱穴は横木が残存せず、繊維質も僅かに認められるのみであった。横木は2カ所しか残存しないが、形状や規模は近似している。柱掘方の形状は不明点が多く、繊維質の残存状況も異なるため、これら

を加工しているが、北西部の横木は一部未加工で枝の付け根が残る。南側中央の柱穴は柱痕跡が顕著であった。掘方床はほぼ水平を保つ。出土遺物は小片で図示できるものがない。

9号掘立柱建物跡 (図版6、第15図)

III区中央東寄り、8号掘立柱建物跡の東に位置する1間×1間の建物である。北西の柱穴は欠損し、南西の柱穴は横木を一部欠損する。柱穴の切り合いが少ない場所であり、横木の大きさや形状は近似し、柱穴及び繊維質敷設規模も近似することから、これらの組み合わせの確実性は高いと考えられる。柱間寸法は桁行2.5m、梁行推定2.3

の組み合わせの確実性はやや低い
が、柱穴切り合いも若干少ない
ことからこの組み合わせと考
えた。柱間寸法は桁行約 2.3 m、
梁行推定約 2.2 m を測り、床面
積は 5 m² 程度となる。検出され
た柱穴の平面は 70 ~ 100cm 前
後の隅丸方形または円形を呈し、
底レベルは一定ではない。西側
梁行の柱穴は横木部分が柱の重
圧によって沈下している。

出土遺物 (第 20 図 10)

10 は畿内系の小型精製器台と
思われる。体部はやや内湾し、
口縁端部を肥厚させる。内外面
ともナデ調整するが、内面は不
定方向の粗いナデである。外面
底部付近に黒斑が認められる。

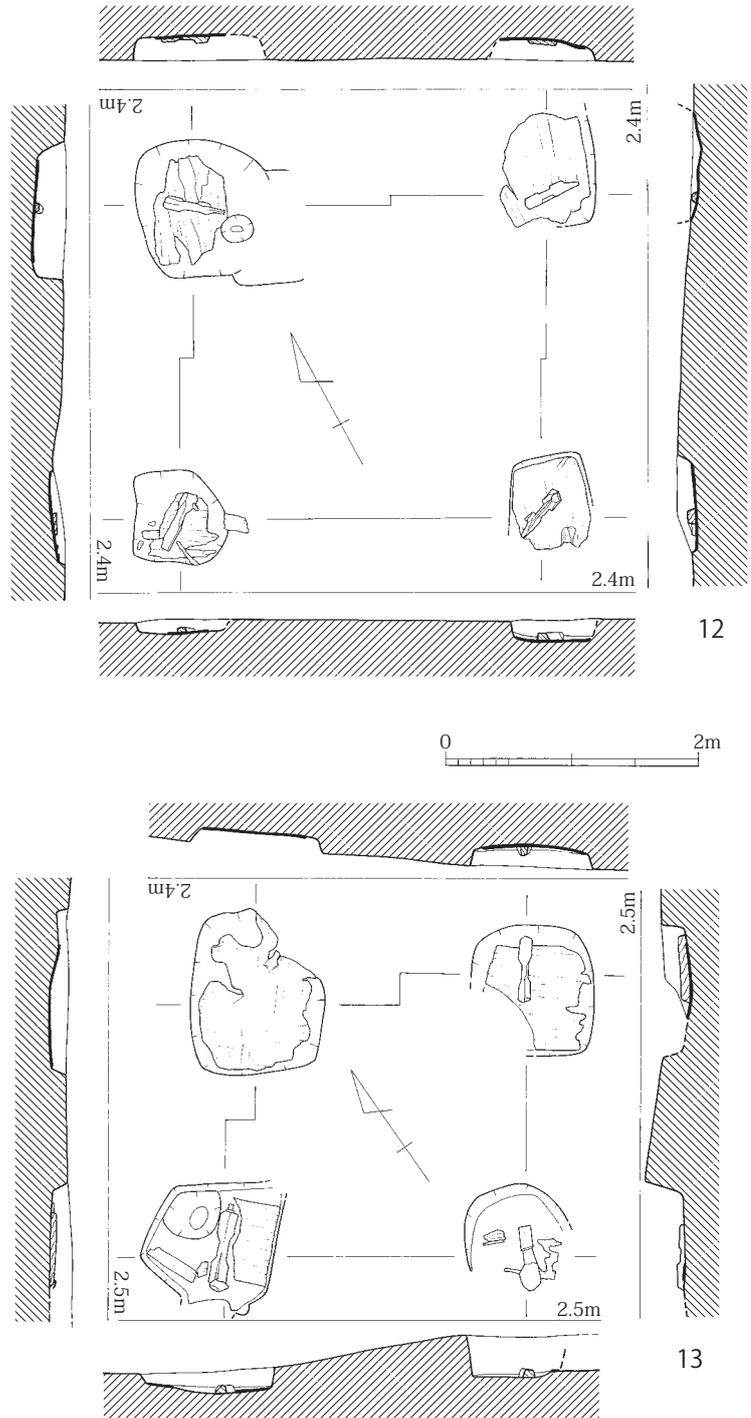
**12 号掘立柱建物跡 (図版 6、第
17 図)**

II 区南側の東寄り、7・11・13
号掘立柱建物跡と重なって検出
した 1 間×1 間の建物で、7 号を
切る先後関係にある。柱穴の切
り合いがやや少ない場所であり、
横木の大きさや形状は共通し、
埋置軸も近似し、繊維質敷設規
模や形状も近似する事から、こ
れらの組み合わせの確実性は高
いと考えられる。柱間寸法は桁
行 2.8 ~ 2.9 m、梁行約 2.55 m
を測り、床面積は 7.3 m² 程度と
なる。検出された柱穴の平面は 80cm 前後の方形に近い隅丸方形を呈し、底レベルは北西部がやや低くなる。掘方床はほぼ水平を保つ。出土遺物は小片で図示できるものがない。

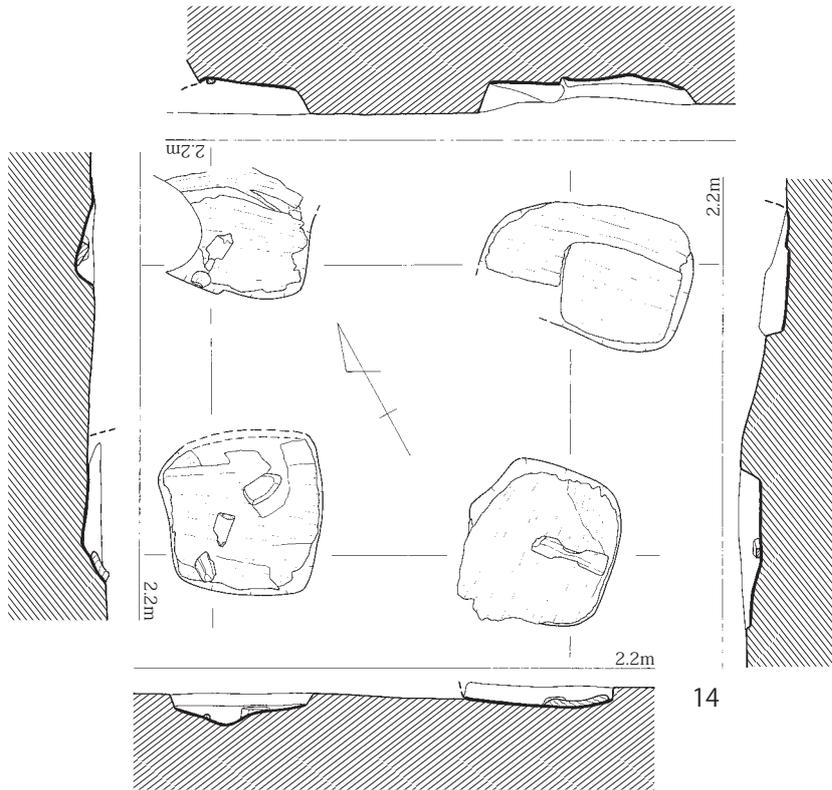
出土遺物 (第 20 図 11 ~ 13)

出土遺物 (第 20 図 11 ~ 13)

11・12 は壺口縁部小片。11 は口縁端部にキザミを廻らせ、内外面ともハケ調整。12 は緩やかに外湾し、端部が肥厚する。内外面ともミガキを施す。13 は壺底部片で、体部が大きく張り、やや上げ底になる。内外面ともナデ調整。



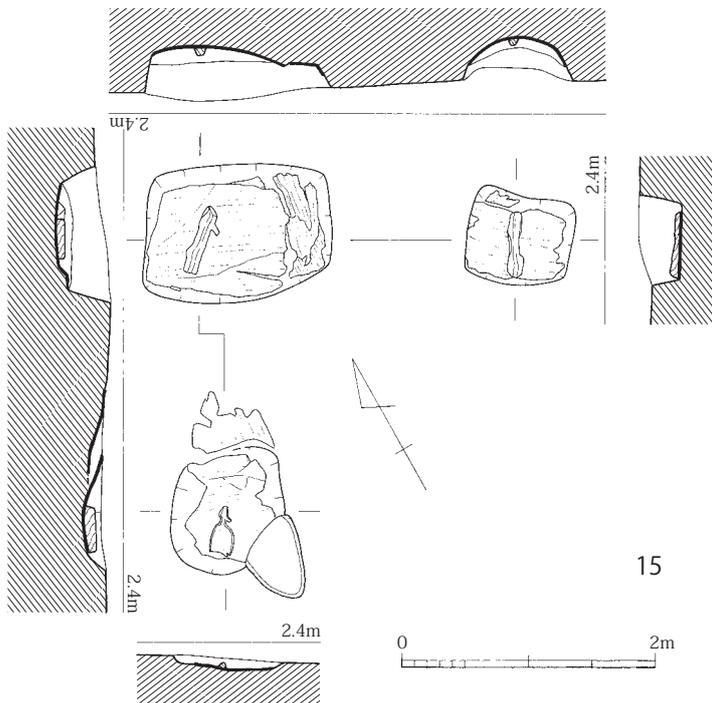
第 17 図 12・13 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



13号掘立柱建物跡（第17図）

Ⅱ区中央東寄り、12号掘立柱建物跡と重なって検出した1間×1間の建物である。北西部の柱穴は横木がないが、その他の横木は埋置軸がほぼ共通し、横木の形状や繊維質敷設規模にも共通性が認められることから、これらの組み合わせの確実性は高いと考えられる。柱間寸法は桁行2.4m、梁行約2.2mを測り、床面積は5.3㎡程度となる。検出された柱穴の平面は1m前後の隅丸方形呈し、底レベルは西部に向かって低くなる傾向がある。掘方床は横木部分が僅かに沈下するが、ほぼ水平を保つ。

14



出土遺物（第20図14～16）

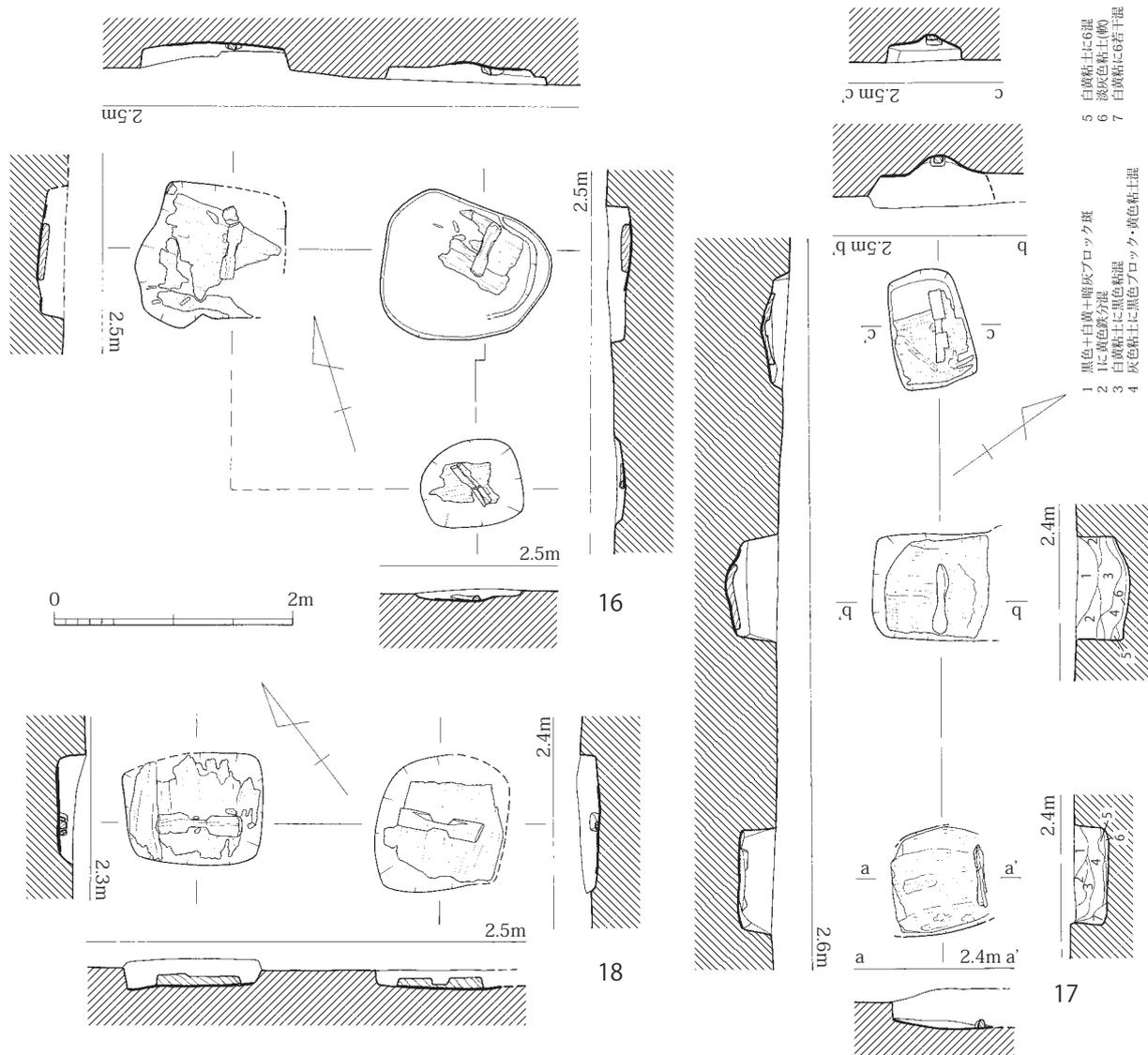
14・15は甕。14はやや大型の平底の底部片で、外面は細かいタテハケ、内面は強いタテナデで調整する。15は強く屈曲する口縁を有するもので、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。

16は器台の上端部で、外面はタテハケ、内面は摩滅のため調整不明。

第18図 14・15号掘立柱建物跡実測図（1/60）

14号掘立柱建物跡（図版6、第18図）

I区北側の礎盤集中部に位置する1間×1間の建物で、5・6号掘立柱建物に切られる先後関係にある。この部分は礎盤が集中し、何度も建て替えが行われているため削平された柱穴



第19図 16～18号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

が多く、残存状況も悪い。この建物を構成する柱穴は北西部の柱穴が横木を欠き、他の横木の残りは良好ではないが、繊維質敷設規模が他に比して大きいという類似性と、横木の形状に共通性があることからこの組み合わせとした。柱間寸法は桁行約2.9m、梁行約2.3mを測り、床面積は6.7㎡程度となる。検出された柱穴の平面は一辺120cm前後の隅丸方形呈し、底レベルは北部に向かって低くなる傾向がある。西側梁行柱列の柱掘方は、横木部分が重圧によって大きく沈下し、東側も若干沈下する。

出土遺物 (第20図17・18)

いずれも甕である。17は緩やかに屈曲する口縁部小片で、外面はタテハケ、胴部内面はヨコハケ調整をする。18は平底の底部片で、摩滅が激しく調整は不明。

15号掘立柱建物跡 (第18図)

Ⅱ区北側西寄りに位置する1間×1間の建物である。南東部の柱穴を欠損するが、柱穴の比較的少ない場所であり、横木の形状や規模、埋置軸に共通性が認められることから、この組み

合わせの確実性は高いと考えられる。柱間寸法は桁行約 2.45 m、梁行約 2.25 mを測り、床面積は約 5.5 m²程度となる。検出された柱穴の平面は 80cm 前後の隅丸方形を呈し、底レベルは北西が低くなる傾向がある。東側の梁行はどちらも切り合いがあることから、同じ場所での建て替えの可能性も考えられるが、削平されるため明確ではない。いずれの柱穴も横木部分が沈下し、特に北東部の掘方は沈み込みが激しい。出土遺物は小片で図示できるものがない。

16号掘立柱建物跡（図版6、第19図）

Ⅱ区の東南隅、10号掘立柱建物跡と重なって検出した1間×1間の建物で、10号に切られる先後関係にある。北東部の柱穴を欠損し、横木の形状や規模が近似するが、埋地軸や残存する繊維質の範囲に違いが見られることから、この組み合わせの確実性はやや低い。柱間寸法は桁行約 2.2 m、梁行約 2.5 mを測り、床面積は 5.5 m²程度となる。検出された柱穴の平面は 80～120cm の隅丸方形を呈し、底レベルは北東が低くなる傾向がある。いずれの掘方も底はほぼ水平を保つ。

出土遺物（第20図19）

19は甕の底部片である。平底で、外面はタテハケ、内面はタテナデで調整する。

17号掘立柱建物跡（図版6、第19図）

Ⅱ区とⅢ区の境、1号溝の下層で検出した桁行の柱列で、7号掘立柱建物跡柱掘方と重なるようにあって7号を切る先後関係にある。柱穴や形状や方向、規模が近似し、横木の埋置軸が共通する。東側の柱穴は横木が北側に寄るが、7号の柱穴掘削時の掘込によってずれた可能性が考えられ、掘方の中央にあったとすれば3本が一直線に並ぶ。これらの事から、この組み合わせは確実性が高いと考えられるが、梁行方向に組み合う柱は確認できなかった。柱間寸法は 2.3～2.4 mで、底のレベルは西がやや高くなる。2ヵ所の柱穴、横木部分が重圧で沈下する。

出土遺物（第20図20～22）

20は単純口縁の鉢で、体部がわずかに内湾する。内外面ともナデを施す。

21は脚部片で、高坏になると思われる。裾付近で大きく外湾し、端部は下に摘み出すため接地面が小さい。外面をタテハケ後屈曲部をヨコナデで調整し、内面は上位にシボリ痕があり、裾付近はヨコハケで調整する。

22は器台の裾部片で、外面が大きく剥離する。外面タテハケ、内面をヨコハケで調整する。

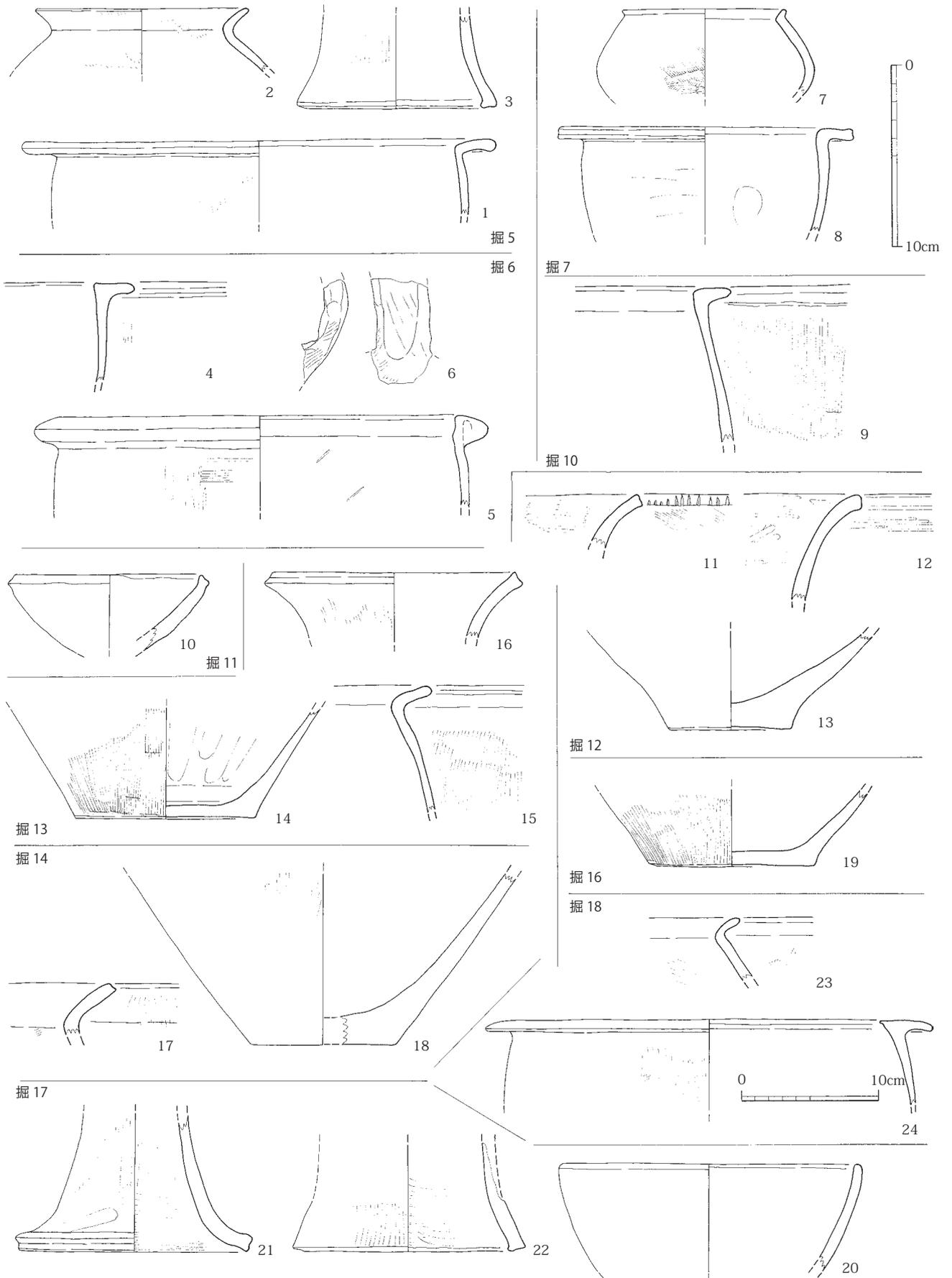
18号掘立柱建物跡（図版6、第19図）

Ⅱ区南東寄りに位置する梁行の柱列で、横木の大きさや形状は共通し、埋置軸も近似し、繊維質敷設規模や形状も近似する事から、これらの組み合わせの確実性は高いと考えられる。柱間寸法は 2.0 mで、検出されたプランは 1.2～1.1 mの隅丸方形を呈し、底のレベルはほぼ同じである。いずれも底の形状は水平を保っている。

出土遺物（第20図23・24、第86図8）

23は口縁部の短い壺小片で、内外面ともハケ調整する。

24は弥生土器の大型の甕で、T字口縁で外面をタテハケ、内面をナデで調整し、外面から口縁平坦部まで煤が付着する。



第20図 5～7・10～14・16～18号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1・24は1/4、他は1/3）

第 86 図 8 は凹み石である。上面および下面中央部に叩きによる凹みが認められる。左側面には不明確ながらもわずかに磨り面が認められるか。凝灰岩製である。

その他の礎盤式柱穴出土遺物 (図版 40・54 ~ 56、第 21 図、第 85 図 12、第 86 図 12、第 87 図 4・8)

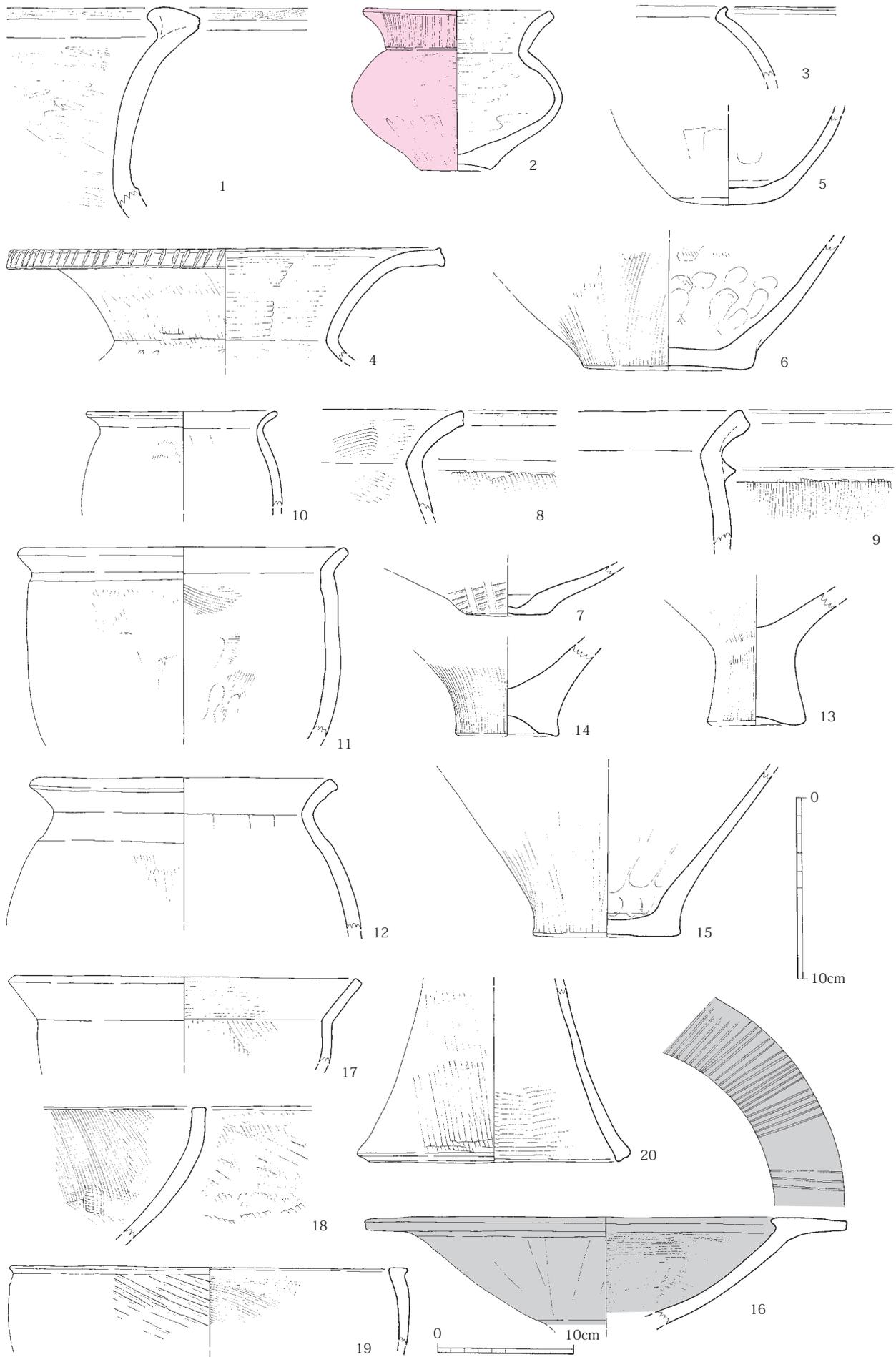
今回約 160 基の礎盤式柱穴を検出したが、建物として組み合わせられないものも多数あった。ここでは、これらの柱穴から出土した遺物を掲載する。

1 ~ 7 は壺。1 は広口壺で、頸部が締まり、口縁が内面に屈曲する。外面はヨコナデ、内面と口縁部の平坦部はヨコミガキを施す。頸部には断面三角の低い凸帯が廻る。2 は小型の広口壺で、完形品に近い。口縁が大きく開き、頸部が締まって胴部中位が大きく張り、底部はやや上げ底になる。外面は丹塗りを施し、口縁部をタテミガキ、体部上位をヨコミガキ、下位をタテミガキで調整する。内面は口縁から上位をヨコミガキ、下位はヨコナデで調整する。一部黒斑が認められる。3 は胴部が大きく張る無頸壺の小片で、内外面ともナデ調整である。4 は在地系の広口壺で、口縁は端部付近が強く外反する。端部は肥厚させて斜位のキザミを廻らせ、頸部には刺突文が認められる。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。5・6 は底部片。5 はややレンズ底になり、体部も丸みを持つ。外面は工具によるタテナデ、内面はナデ調整で、内底部にはコゲが付着する。6 は平底でやや上底になり、体部は丸く大きく張る。外面をタテハケ、内面は斜位のハケ調整後にナデ調整を行い、押し出しの指圧痕が多ヶ所に認められる。外底部は工具によるナデ調整。7 は第 V 様式系の平底の底部片で、底部径は小さいが胴が大きく張る。広口壺か。外面はタタキ後にナデ調整し、内面は摩滅するがナデ調整と思われる。内底部は中央が大きく凹む。

8 ~ 15 は甕である。8・9 は口縁が緩やかに屈曲する弥生土器で、9 は頸部に断面三角の凸帯を廻らせる。8 は外面をタテハケ、内面を斜位及びヨコハケで調整する。9 は外面タテハケで口縁から内面はヨコナデを施す。10 は口縁が緩やかに外湾する小型品で、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。11 は頸部の屈曲がほとんどなく、口縁が短い。外面タテハケ後に工具によるヨコナデ調整を行い、内面上位をヨコハケ、下位をタテハケで調整し、下位はその後強いタテナデで調整する。体部に黒斑が認められる。12 は口縁が緩やかに屈曲する。外面はタテハケ、内面はナデ調整で、頸部付近に工具痕が認められる。13 ~ 15 は弥生土器の底部片。13 はやや上底の高い底部を有し、外面はタテハケ、内面は工具ナデ調整を施す。14 も上底で、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。内外面ともに煤が多量に付着し、内面にはコゲが残る。15 は平底の底部で、若干レンズ状になりかける。外面はタテハケ、内面はやや強いタテナデで調整し、外底部はハケ状の工具によるナデで調整する。

16 は高坏坏部片。口縁は T 字でやや外側に下がる。外面は丁寧なタテナデ、内面は八分割の暗文状ヨコミガキで丁寧に調整し、口縁平坦部にも放射状の暗文を廻らせる。また、器壁が白く、外面には白い顔料を軟らかい刷毛で塗ったような痕跡が認められる (図版 40)。顔料は成分分析の結果カルシウムと判明している。胡粉のように貝殻などを磨り潰して塗布したものかもしれない。

17 ~ 19 は鉢。17 は屈曲口縁のもので、外面は摩滅で調整不明、内面はヨコ及びタテハケ調整で、頸部の稜は明瞭である。18 は単純口縁のもので、ボウル型になる。外面は左上がりの斜位のタタキ後に上位をタテハケ、下位を板状工具によるタテナデで調整し、内面はタテハケ後に底部付近をヨコハケ調整する。19 も口縁が肥厚する単純口縁で、口縁はやや内湾す



第21図 その他礎盤式柱穴出土遺物実測図 (19は1/4、他は1/3)

る。外面は左上がりの斜位のタタキ、内面はヨコ及び斜位のハケ調整を施す。

20は器台の裾部。外面はタテハケ、内面は裾付近をヨコハケで調整し、中位は器壁が薄い。

第84図12は石庖丁である。背部は直線をなし、外湾刃半月形を呈するものと考えられる。孔が4箇所穿孔されており、上部が外孔0.5cm、内孔0.4cm、背孔0.9cm、孔間1.9cm、下部が外孔0.8cm、内孔0.6cm、背孔2.2cm、孔間2.9cmを測る。外孔と内孔の差が殆どなく鉄錐などで穿孔されたものと考えられる。剥離が激しく明確ではないものの、刃部は遺存しているものと考えられ、使用により刃部が磨り減ったため孔との間隔が近くなり、上部に穿孔しなおしたものと考えられる。凝灰岩製である。第85図12は砥石である。上面のみ砥面とし、下側面は研磨による面取りを行う。中央部には叩きの痕跡が残る。砂岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。第86図4は叩き石およびすり石である。上面および側面を磨り、中央部に叩きの痕跡が見られる。凝灰岩製である。8は凹石である。上面および下面中央部に叩きによる凹みが認められる。左側面には不明確ながらもわずかに磨り面が認められるか。凝灰岩製である。

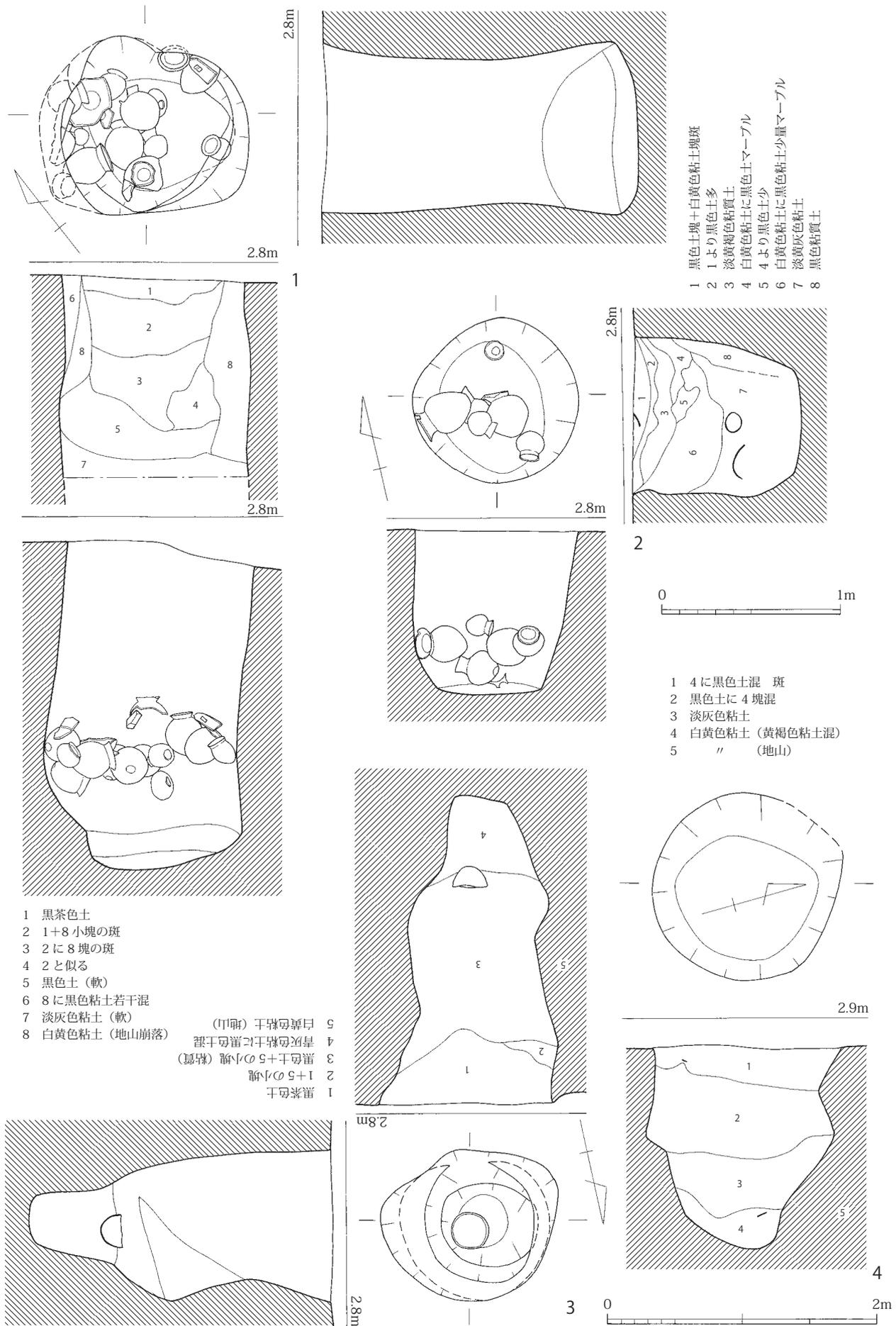
(2) 土坑

1号土坑 (図版10、第22図)

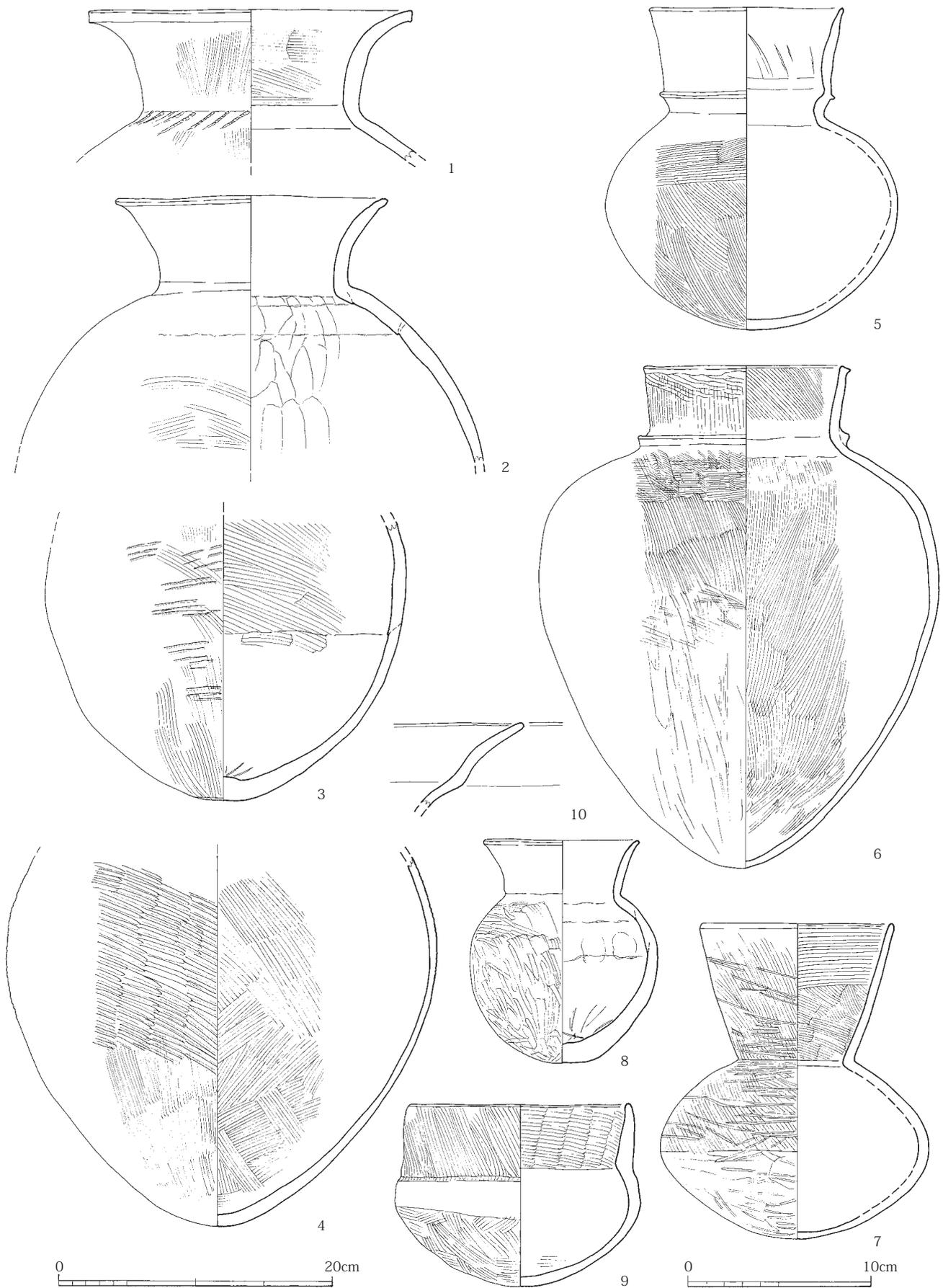
Ⅲ区中央、62号土坑の南に位置する土坑である。長軸100cm弱、短軸90cm前後のやや不整な円形を呈する。深さは最深で180cm弱、底部はレンズ状で東側が一段低くなる。壁の立ち上がりは直線的で、上位はほぼ直上に立ち上がり、下位は底付近が一部フラスコ状にオーバーハングする。使用時の壁面の崩落の可能性もある。埋土は最上層に黒色土と基盤土の混在土が被り、その下が遺構本来の埋土となる。上層は基盤土に近似する白黄色粘土や淡黄褐色粘土主体の埋土が中央に入り、中層は軟質の黒色粘土、下層は狭小なため深さ1m強しか図化できなかったが、黒色粘土や同様に軟質の淡灰色粘土が堆積し、最下層は軟質の青灰色粘土に黒色土が混じる。全ての層の単位が大きく、レンズ状堆積をしていないことから、意図的に埋められた事が考えられる。下層の淡灰色粘質土からは完形品を含む土器や木製品が多量に出土した。遺物は最下層ではなく底から40cm程上層に纏まって出土している。これ以下の遺物の出土は少量であった。

出土遺物 (巻頭図版1-1、図版40～42、第23～26図、第87図3・7)

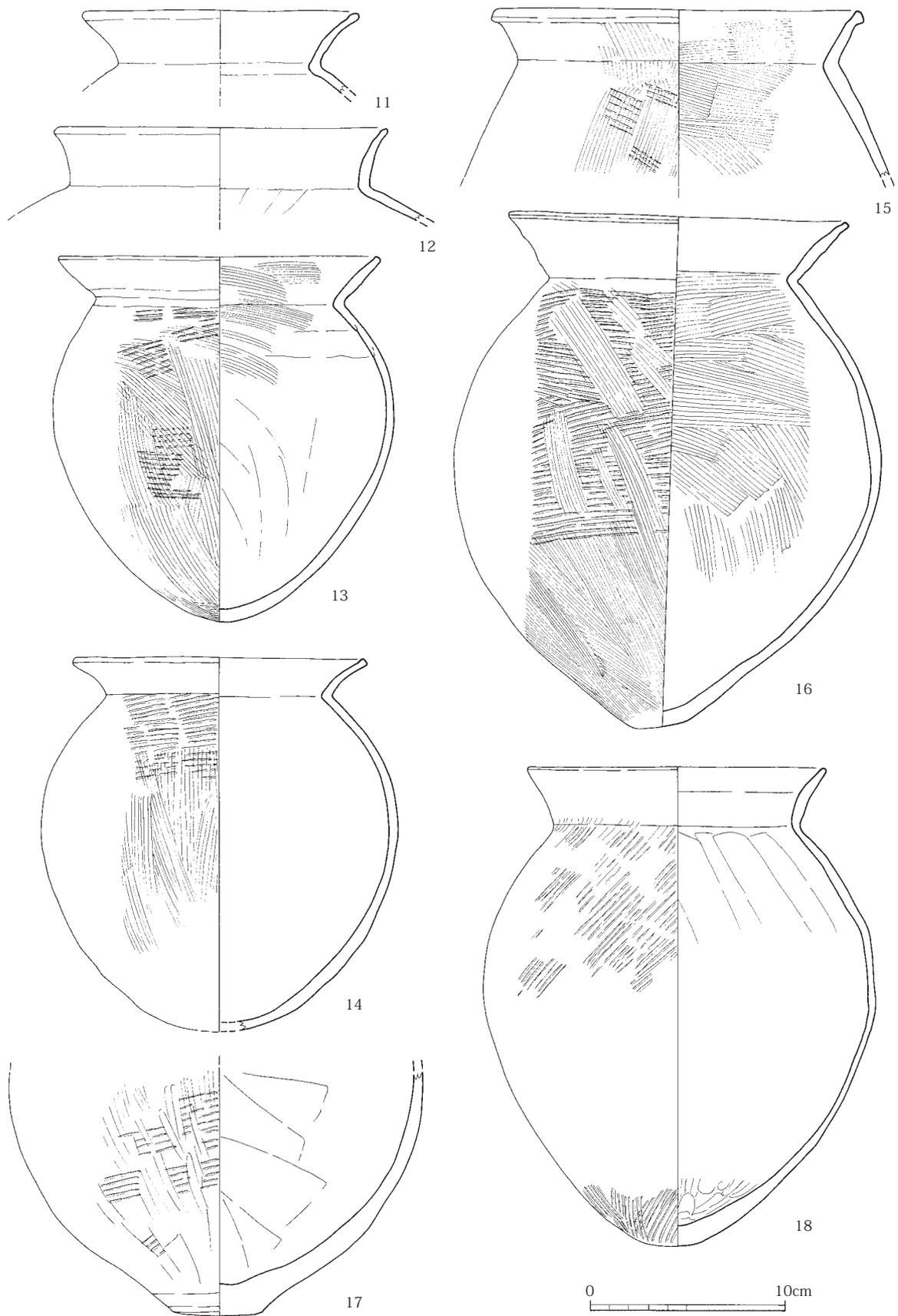
第23図1～9は壺で5・7以外は在地系。1は広口壺で、端部をさらに外反させる。頸基部は強く締まり、肩部にはキザミを廻らせる。口唇部に煤が付着する。2は口縁が緩やかに外反する広口壺で、頸部が締まり胴部最大径は中位にある。器壁には粘土紐の接合痕が多数認められ、接合痕付近に指圧痕が残る。外面は二次被熱で赤変し煤が付着する。3・4は胴部中位以下で、3は外面に横位のタタキ痕が認められ、内面上位はヨコハケ中位以下はナデで調整する。中位に粘土紐接合痕が認められ、底部は非常に狭いレンズ底になる。4も外面上位は左上がりのタタキで、下位は後にタテハケ調整する。胴部中位に最大径があり、丸底になる。外面は二次被熱により赤変する。5は山陰系の中型二重口縁壺で、完形品である。口縁が直立し、屈曲部は凸帯状になる。口縁部内面には縦位の工具痕が認められる。胎土は他の土器に比してやや精良である。6は在地系の直口壺で、完形品である。胴部上位が大きく張り、口縁は直立して端部をつまみ出す。底部はごく狭いレンズ底になり、頸部には三角の凸線が1条廻る。体部外面はタテハケ後に下位を工具によるナデで丁寧に調整する。内面



第 22 図 1 ~ 4 号土坑実測図 (4 は 1/40、他は 1/30)



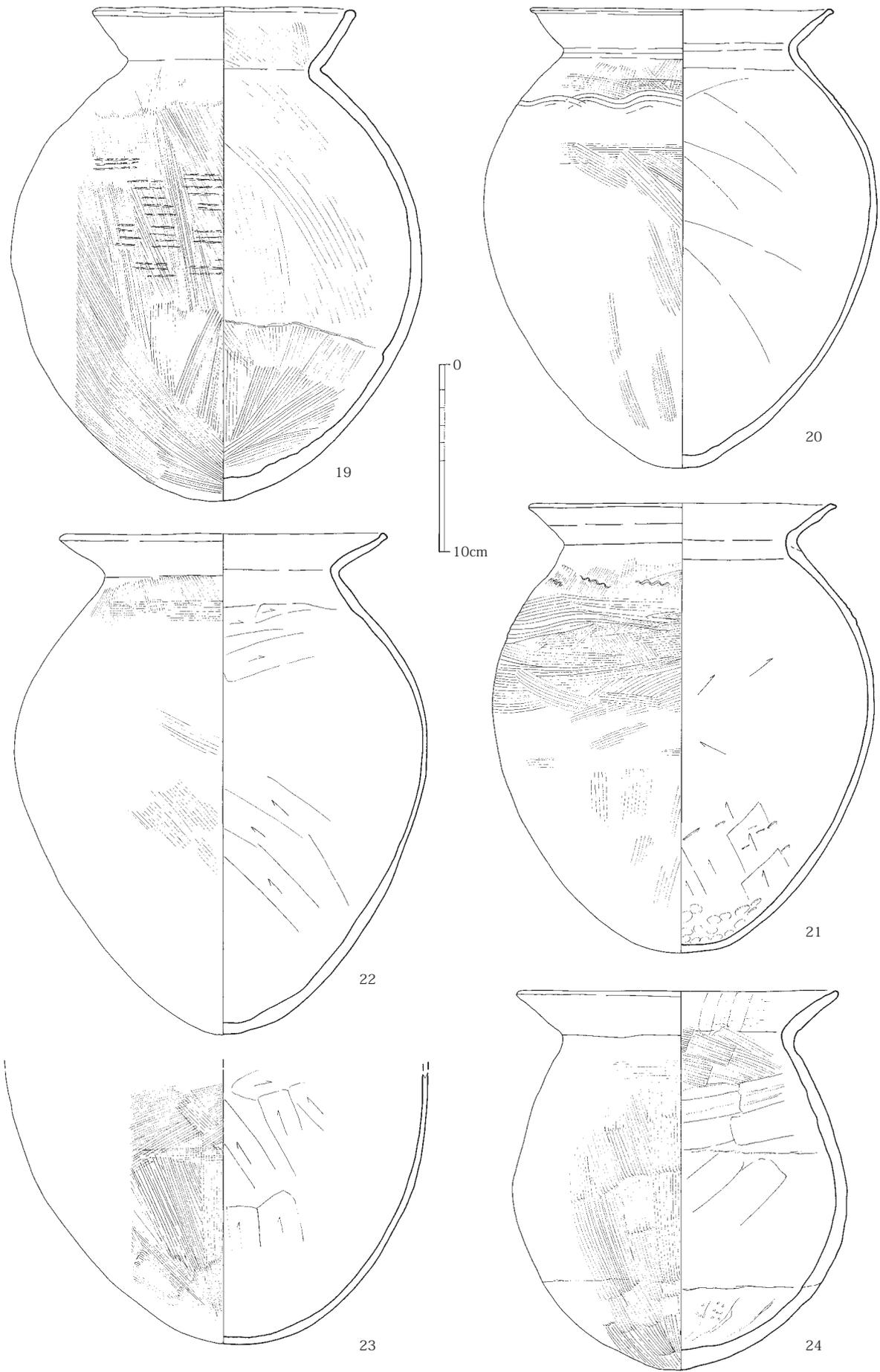
第23図 1号土坑出土遺物実測図(1)(4・6は1/4、他は1/3)



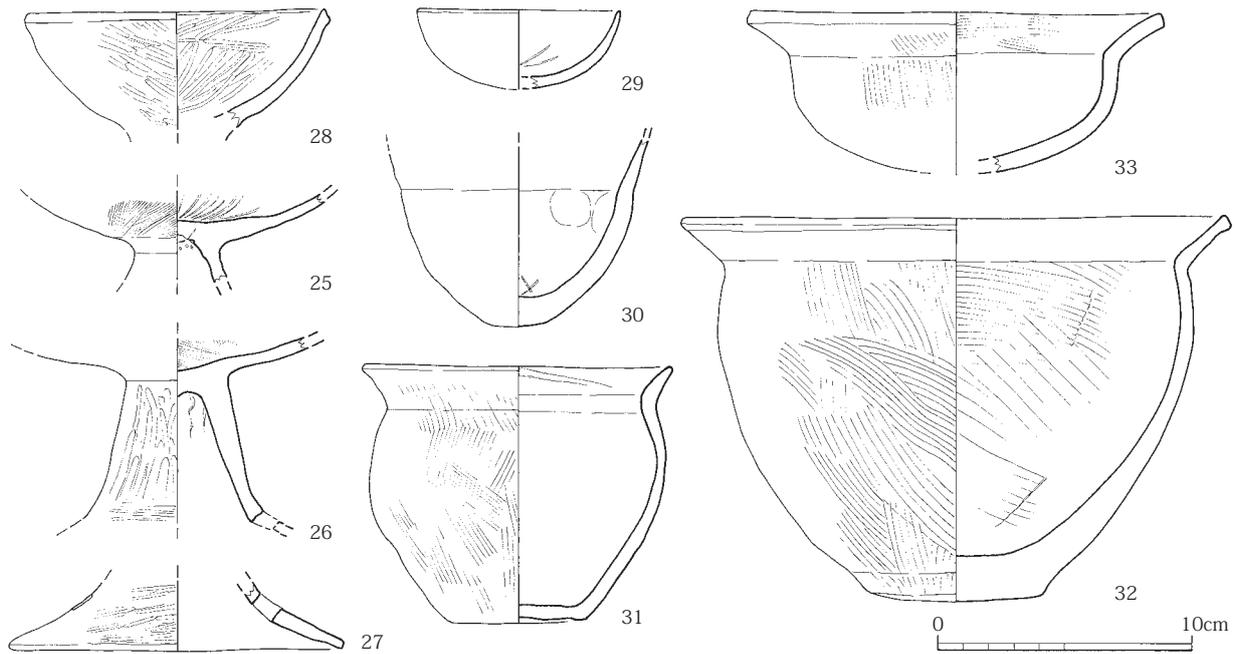
第 24 图 1 号土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)

はタテハケ調整。5と胎土が似ており、他の土器に比して精良である。7は畿内系の中型直口壺で、完形品に近い。長い口縁はやや内湾しながら開き、胴部は偏球形を呈する。外面は上位がタテハケ、下位がヨコケズリで、その後全体的にミガキ状条痕が認められる。8はやや小型の在り系直口壺で、ほぼ完形品である。口縁が僅かに外反し、外面は工具状のタテナデ後に短く粗いミガキで調整する。内面には粘土紐接合痕が多く認められ、接合部に指圧痕が認められる。底部内面には放射状の工具痕が残る。9は小型で短頸の在り系直口壺で、完形品である。外面口縁部はタテハケ、胴部上位は斜位のハケ調整後に強いナデ調整を施す。内面は口縁部を短いヨコハケ、胴部はヨコナデする。口縁部付近は二次被熱のため赤変する。10は畿内系の二重口縁壺口縁で、摩滅の為調整不明。

第24・25図11～24は甕。11はやや小型の在り系のもので、体部内面はケズリで、内外面ともに大量に煤が付着する。12も在り系の甕で頸部の締まりは弱く、胴部内面はケズリ調整で外面には煤が付着する。13～19は外面にタタキが認められ、畿内系もしくは畿内と在り系の折衷型である。13は完形品で、口縁が直線的に大きく開き底部はやや尖底になる。内外面に多量に煤やコゲが付着し、外面上位は何度も燻されたように器壁に炭素が吸着し、光沢のある黒色になる。他出土の同サイズの甕に比してやや軽い。14も同様に炭素吸着によって光沢を持つ黒色を呈し煤が多量に付着するが、外面の煤は横帯状に付着する。16は胴部最大径が中位にあり、丸底を呈する。底部内面にはコゲが残る。15は口縁が短く口縁端部を外に引き出し、頸部の締まりは弱い。外面は斜位のタタキ後にタテハケ調整し、内面はヨコハケ調整する。16・17はいわゆる畿内V様式様で底部付近は窄まり狭いレンズ底になる。胴部最大径がほぼ中位にあり、外面は炭素吸着により光沢のある黒色を呈し、煤が多量に付着する。外面は横位のタタキ後にタテハケ調整、内面はヨコハケ後に下位をヨコナデ調整する。内底部にコゲが残る。17は胴部下位のみで、底部付近は窄まり狭平底になる。外面はタタキ→ハケ調整→工具によるケズリ状の強いナデで、一部二次被熱により赤変する。18は口縁部は緩やかに外湾し、胴部は倒卵型を呈する。器壁は極めて薄く、底部のみが厚みをもつ。外面は右上がりの斜位のタタキ後下位は丁寧にタテナデ調整し、底部は放射状にタタキを施す。内面は上位が工具によるタテナデで、中位がタテナデ、底部は強い指ナデで調整し指頭痕が顕著である。外面は炭素吸着により光沢のある黒色を呈し、煤が多量に付着するが、下半部は二次被熱により器壁の剥離が激しい。19は完形に復元できるもので、口径がやや小さく頸部が強く締まり、胴部最大径が中位にある。外面は横位のタタキ後細かいタテハケで調整し、内面は胴部下位に粘土接合痕が残り、これより上位は粗いタテハケ、下位は細かいタテハケで調整する。外面底部付近には火襷が認められる。20～23も畿内との折衷型か。20・21は口縁が大きく開き、口縁端部を摘み上げる。胴部は倒卵型で最大径が上位にあり、底部は狭いレンズ底を呈する。外面は炭素吸着により光沢のある黒色を呈し、煤が多量に付着する。外面が斜位及びタテハケ、内面は斜位のケズリで調整する。20は完形品に近く、肩部にはヘラ描き波状文が描かれ、21は完形品で、肩部の波状文の上位に2枚貝による条痕が施される。底部内面には押し出しの指圧痕が認められ、煤やコゲが付着する。ともに他の同サイズの土器に比して軽く、21は特に器壁が薄い。22はほぼ完形品で、口縁が内湾しながら大きく開き、端部をつまみ上げる。胴部は倒卵型で丸底になる。外面は頸部をタテハケ後ヨコハケ調整し、体部は斜位のハケ調整後にこれをナデ消す。内面は斜位のケズリで器壁を極めて薄く作る。外面には煤が広範囲に付着する。23は胴部下位片で、丸底になる。外面はヨコまたはタテハ



第 25 图 1 号土坑出土遺物実測図 (3) (1/3)



第26図 1号土坑出土遺物実測図(4)(1/3)

ケ調整で、内面はケズリ、外面に調整が隠れるほど煤が付着する。24は完形品に近く、他の器種とやや様相を異にし、器壁が厚く鈍重な感を受けるもので、在地系と考えられる。口縁は直線的に開き、胴部下位が張る。内外面に粘土紐の接合痕が顕著である。外面はタテハケ、内面は工具による弱いケズリ状のナデで調整する。内底部にはコゲが付着し、穀物のような痕跡が認められる。

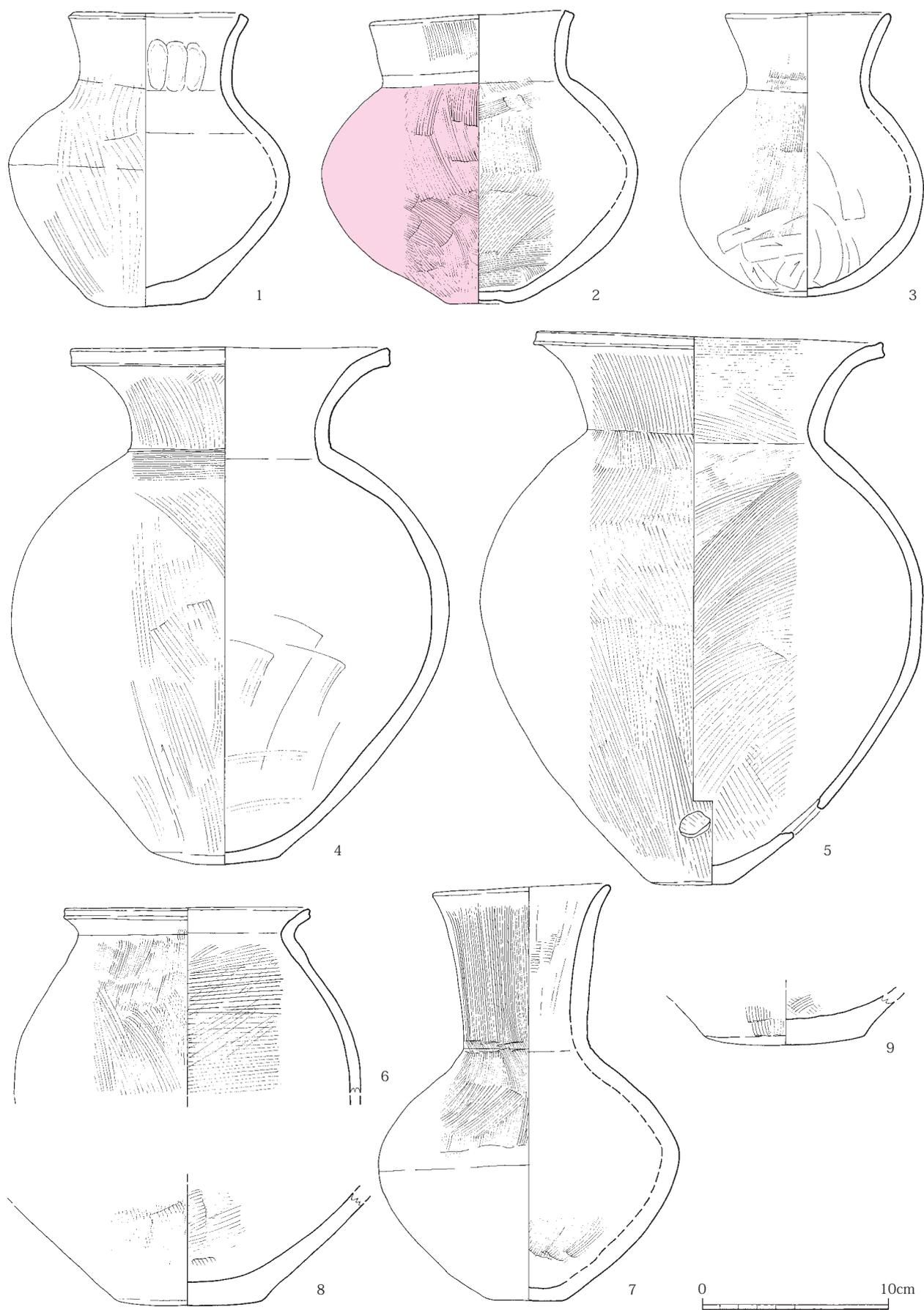
第26図25～27は高杯。25は外面が細かいタテハケ調整で、外底部に約1mm径の細かい刺突文が認められる。赤褐色を呈し、内底部に黒色顔料による放射状の暗文が施される(図版42)。26は杯で、内面は細かいミガキ、脚部外面は粗いタテミガキを施す。27は脚部裾のみで、外面をヨコミガキで調整し、孔が2カ所に認められる。

28～32は鉢。28は脚付き鉢で、外面を斜位のミガキ、内面を放射状ミガキで丁寧に成形する。外面の一部が二次被熱により赤変する。29は小型の単純口縁鉢で、内面に工具のあたりが認められる。30～32は屈曲口縁の鉢。30は厚底の小型品で口縁端部を欠き、内底部に工具痕が認められる。31・32は平底で、31は完形品に近いもので、内面には工具痕が残り、外面には煤が付着する。外面はハケ調整、内面は工具によるナデで調整する。32は体部下位から底部の器壁が厚く、内面底部付近に黒色・黒茶色の有機質が付着する。内外面ともやや粗いハケ調整を施す。33は浅い小型丸底鉢で、外面はタテハケ、内面は摩滅するがナデ調整か。

第87図3は不明木製品である。5.9×4.6cmの立方体の上部にやや斜めにずれて4.2×2.1cm、高さ0.8cmの突起が付く。7は木製の鋏である。基部中央に柄を差し込むための4.0×3.6cmの孔が斜めに穿たれる。刃部は左側がやや片減りする。先端があまり潰れておらず、鉄などの利器をつけた、もしくは加工後さほど使用していない可能性がある。

2号土坑(巻頭図版2-2、図版11、第22図)

Ⅲ区中央部、1号土坑の南東に位置する土坑である。直径約90cmの円形土坑で、深さは約



第 27 图 2 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

90cm と他の同様の土坑と比して浅い。壁は急な傾斜で立ち上がり、上方はやや開く。底部はやや狭くなりほぼ平坦になる。埋土は最上層に黒色土が被り、上層は基盤土に似た主体の埋土がレンズ状に堆積する。下層は軟質の黒色土と基盤土に似た淡黄灰色粘土が厚い層で入り、その中から土器や木質などが一括で出土した。土器は底に接地するものもあり、完形品が多い。**出土遺物**（巻頭図版 1-2、図版 42・43、第 27・28 図）

第 27 図 1～9 は壺。1～7 は在地系のものである。1～3 は小型の直口壺で、完形品に近い。1 は頸部の屈曲が弱く、緩やかに肩部に移行する。口縁はやや外反しながら直立気味に立ち上がり、端部が若干内湾する。底部は厚くレンズ状で、頸部内面には指圧痕が認められる。外面は粗いタテハケ、内面はナデで調整する。2 は胴が大きく張り、底部がやや薄く上底になる。底部外面と外面の一部には丹塗りが認められる。内外面とも細かいタテハケ調整で、体部中位に黒斑が認められる。3 も頸部から肩部への移行が緩やかで、長い口縁を有する。外面はタテハケ、下位はケズリで、内面はケズリで調整する。頸部から口縁部に黒斑が認められる。4 は口縁が強く外湾する広口壺で、完形品に近い。口縁端部は肥厚させ、頸部は強く締まり、胴部やや上位に最大径をもち、底部はレンズ状になる。また頸部には沈線が一条廻る。外面はタテハケ、内面はタテハケ後ナデ調整を施す。5 もほぼ完形品で、口縁部が大きく外反するが、頸部の締まりは緩い。底部は狭い平底で、胴部最大径は上位にある。内外面ともやや粗いタテハケ及び斜位のハケ調整で、底部付近に焼成後穿孔が 1 ヲ所認められる。6 は口縁が短くやや強く外反する。外面タテ、内面ヨコのハケ調整を施す。7 は長頸壺で、ほぼ完形品で、やや太い口縁と頸部を有し、端部が外反する。胴部は扁球形を呈し、底部はややレンズ状の平底になる。外面は細かいタテハケ後に胴部下位をナデ調整、内面はハケ後ナデ調整し、底部にハケ目が残る。外面は一部二次被熱により赤変し、胴部下位に黒斑が認められる。8・9 は底部のみの資料で、いずれもややレンズ底で、内外面ともハケ調整、9 は外面に煤が付着する。

10～13 は甕、10～12 は在地系のもので、口縁が緩やかに屈曲し、端部は断面方形になる。いずれも内外面ともハケ調整で、10・11 のハケ目は粗い。11・12 は外面に煤が付着する。13 は脚付き甕の脚部で、内外面ともハケ調整、色調が赤黒く胎土に雲母が多いなど他の資料と様相が異なる。

14 は高坏で、口縁が内側に強く折れ曲がり、端部が肥厚する。外面は摩滅し、内面はヨコハケ後にナデ調整、その後に放射状の暗文が施される。口縁部は一部二次被熱により赤変する。

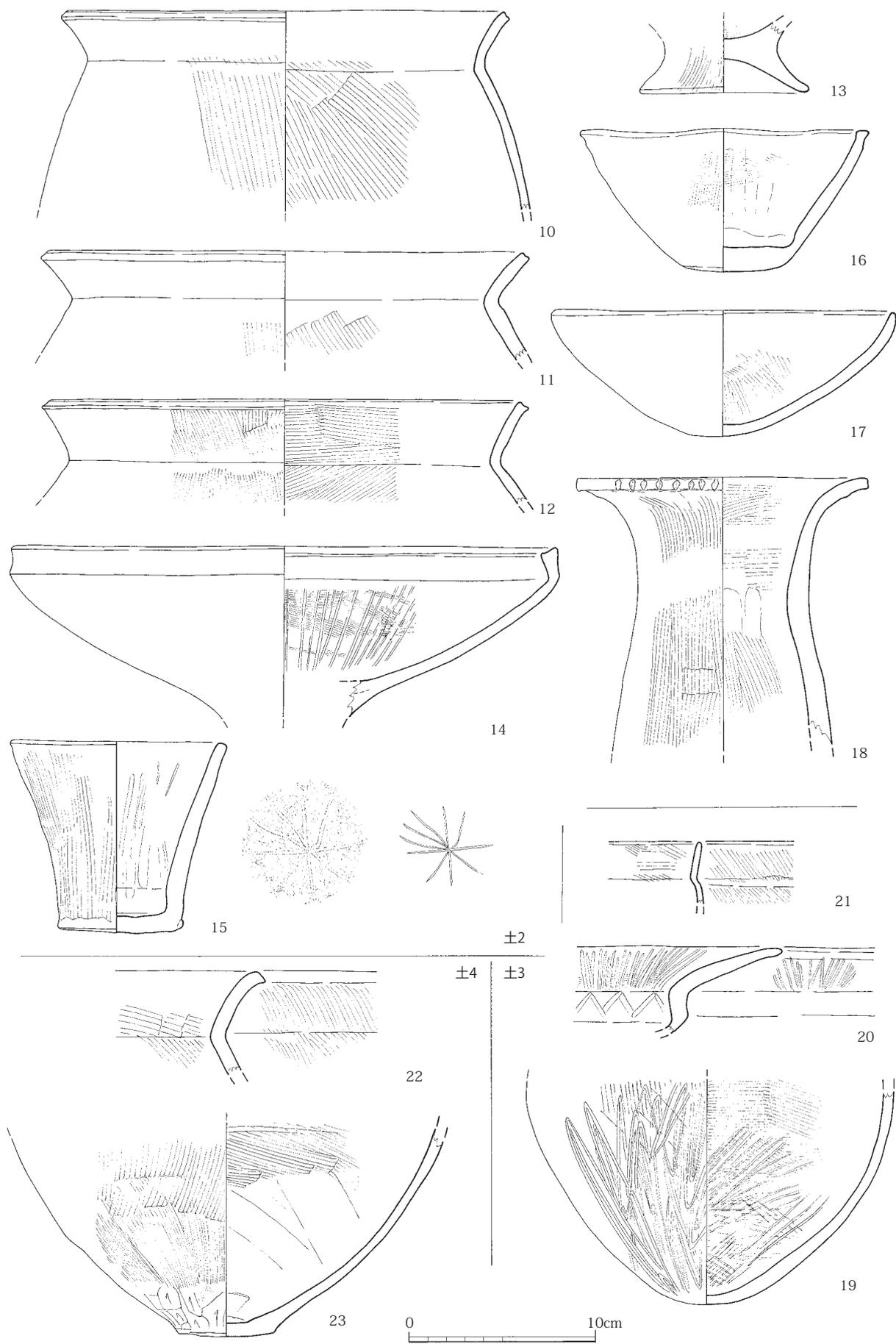
15 はコップ型のもので、体部中位から口縁にかけて大きく開く。外面はタテハケ調整だが底部付近は調整が粗いため未調整部分が突出する。内面はヨコナデ後にミガキ状条痕が認められる、また外底部には放射状の線刻が描かれている。

16・17 は単純口縁の鉢。16 は平底で底部が厚く、口縁が直線的に大きく開く。外面タテ、内面ヨコのハケ調整で、外底部に黒斑が認められる、17 はボウル型で、外面はナデ、内面はタテのハケ調整で、体部中位から底部にかけて黒斑が認められる。

18 は器台で、口縁が大きく開き、くびれ部は上位にあり屈曲は緩やかである。外面はタテハケ、内面上位はヨコハケ、下位はタテハケで調整し、その後中位をタテナデツケで調整する。口縁端部にはキザミを廻らせる。

3 号土坑（図版 12、第 22 図）

Ⅲ区中央、2 号土坑の南西に位置する土坑である。上面長軸 100cm 弱、短軸 90cm 弱の不整



第 28 图 2~4 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

楕円形を呈する。深さは約 170cm で、底はほぼ平坦になる。壁の立ち上がりは直線的で、下位は一部オーバーハングして最下層は窄まる。埋土は地表下 90cm 程までしか図化できなかったが、最上層に黒茶色土が被り、上層は基盤土に黒色土粒が混入したやや締まった土で、中層以下は軟質の黒色土主体の分層困難な埋土となり、炭や植物繊維なども認められた。最下層は地山粘土に黒色土が混じる。また、最下層上面で甕の胴下半部が正位で出土した。

出土遺物（図版 43、第 28 図 19～21）

19 は在地系の甕の胴部下位で、外面はタテハケ後下位に波状文状のミガキ状条痕が認められ、内面はヨコハケ後に斜位の粗いハケ調整を施す。底部付近に黒斑が認められる。20 は畿内系二重口縁壺の口縁部で、内外面ともミガキを施す。また二次口縁部内面は放射状に、一次口縁部は波状文状に、外面は細かい波状文状に文様的にミガキを施す。胎土が極めて精良で、焼成も極めて良好である。21 は口縁が直行する鉢で、器壁が薄く内外面ともハケ調整を施す。

4 号土坑（図版 13、第 22 図）

Ⅲ区南端中央部に位置する大型の土坑で、北側を 5 号土坑に切られる先後関係にある。直径 140cm 弱の円形を呈する。深さは最深で約 150cm で、底は窄まる。壁は緩やかに立ち上がり、中位がオーバーハングする。埋土は単位が大きくほぼ水平に堆積し、意図的に埋められた可能性もある。最上層は基盤土と黒色土の斑土で、上層が軟質の黒色粘土、下層は軟質の淡灰色粘土と基盤土に似た軟質粘土が堆積する。

出土遺物（第 28 図 22・23、第 85 図 7）

22 は外湾しながら屈曲する甕口縁部小片で、内外面ともハケ調整を施す。23 は在地系と畿内系の折衷と思われる壺か甕の胴部下位で、レンズ状の底部を有する。外面は細かいタテハケで、手持ちヘラケズリによって底部を小さく作る。内面はヨコハケ後に下位のみ工具によるナデ調整を施す。

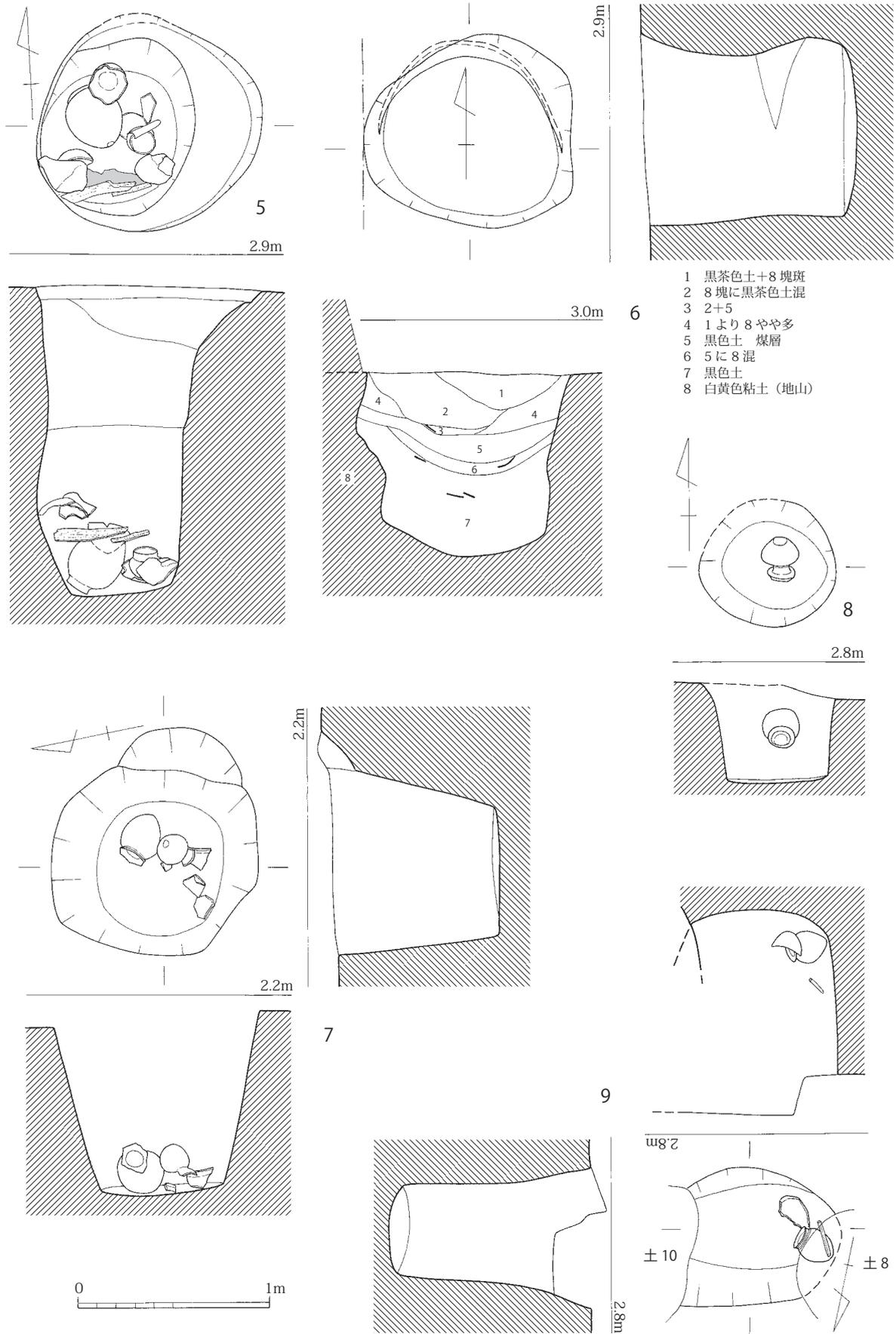
第 85 図 7 は砥石である。上面および左側面を砥面とする。白色頁岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。

5 号土坑（図版 13・14、第 29 図）

Ⅲ区南端中央部、4 号土坑の北側に位置する土坑で、4 号を切る先後関係にある。上面は直径 120cm 弱の円形で、中位以下は直径 70cm 前後の円形となる。深さは約 160cm で底は平坦になる。壁の立ち上がりは上位が緩やかで、中位以下は直線的に立ち上がり、下位で部分的にややふくらむ。土層は最上層に黒茶色土が大きく被り、上層は黒茶色土と基盤土の混在土がレンズ状に堆積する。中層には繊維や木質を含む軟質の黒色粘土が厚く堆積し、上面から自然木が出土している。下層には基盤土に似た黄褐色粘土に黒色土塊が混入した軟質の土が堆積し、この中から土器や自然木、礎盤式柱穴の横木、多量の貝殻などがまとまって出土した。

出土遺物（第 30～31 図 1～17）

1～4 は壺。1～3 は在地系の直口壺で、1 は口縁が長くやや外反し、長い胴部を持つと思われる。外面はタテハケ、内面は斜位のハケ調整で、内面は後に粗い工具ナデを施すが粘土の接合痕が残る。2・3 は口縁が直口し、胴部が扁球形になるもの。2 は内外面ともハケ調整。3 は外面タテハケ後に下位をケズリ調整し、後ナデで調整する。内面は黒色で付着物が多いがナデ調整か。4 は胴部のみで、頸部内面の稜が強い。胴部は倒卵型で、外面はタテハケ後



第 29 図 5 ~ 9 号土坑実測図 (1/30)

底部付近を粗いナデで調整し、内面は上位がナデで、下位はタテハケ調整。最大径付近に黒斑が認められる。

第30・31図5～11は甕で、全て在在系または畿内系との折衷型と思われる。5は小片で口縁部は弱く外反し、内外面ともハケで調整する。6は口縁端部を外に摘み出し、内外面ともヨコハケ及び斜位のハケ調整。7～10は胴部の破片。7・8の外面には横位のタタキが認められる。7はやや長胴になると思われ、外面はタタキ後に粗いタテハケ調整を施し、更に中位以下をタテケズリする。内面はタテハケ後ナデ調整による凹凸が認められる。8・9は底部片。8は外面をタタキ後にタテハケ調整し、さらに下位をナデ調整する。内面はヨコハケ調整。9は内外面ともタテハケ、後内面中位より上はヨコナデで調整する。外面に煤が付着し、特に底部には多量に付着する。10は長胴の甕で、底部は尖り気味の丸底になる。外面は横位のタタキ後タテハケを施し、内面はタテハケ後部分的にヨコ及び斜位のハケで調整する。内底部付近に工具痕が認められる。11は口縁が短く直線的でやや外傾する。全体に作りが粗く器壁が厚い。外面は上位はヨコ、下位はタテの粗い工具ナデで、僅かにハケ目が認められる。外底部付近はヘラケズリする。内面は粗い斜位のハケ調整で底部付近はタテハケ調整、口縁部分に工具によるナデの痕跡が認められる。

第32図12・13は高坏。12は外面をタテハケ、内面の裾部はヨコハケで調整し、4カ所に穿孔がある。13は外面をヨコハケ後タテミガキし、内面は裾部をヨコハケで調整する。

14～17は鉢。14・15は単純口縁のもので、ボウル型を呈する。14は外面上位がナデ、下位は細かいハケ、内面は工具によるナデで調整する。外面は二次被熱により一部赤変する。15は外面中位に押し出しの指圧痕が認められ、底部は手持ちヘラケズリ。内面は摩滅するが底部に工具痕が認められる。体部に黒斑が認められる。

16は屈曲口縁の鉢で、内外ともに粗いハケ調整、二次被熱により赤変する。

17は小型手捏ね土器で、尖底の鉢状を呈する。外面は破損により不明瞭であるが、内外面にハケ目が認められる。

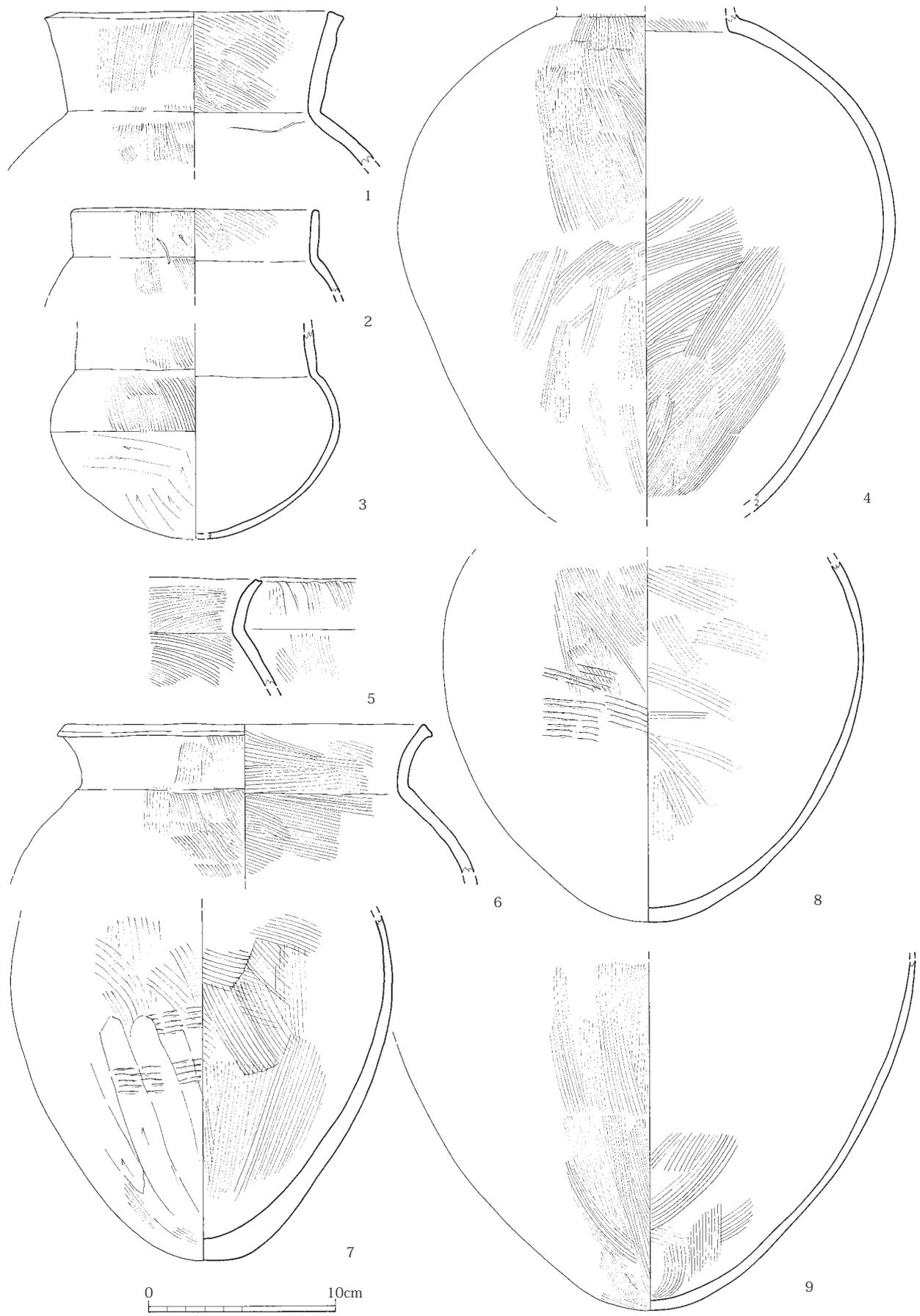
6号土坑（図版14・15、第29図）

Ⅲ区南西端、14号土坑の北西に位置する土坑である。長軸約110cm、短軸約100cmの不整形円形で、一部中位にテラスを有する。壁は直線的に立ち上がり、部分的にオーバーハングし、使用時の崩落と見られる。深さは約100cmで、底はレンズ状を呈する。埋土は上層に黒茶色土と基盤土の混在土が堆積し、中位からは分層困難な軟質の黒色土主体の層が堆積する。特に中層の黒色土には煤が多量に包含され、繊維質も混入していた。遺物は主に中層以下から出土した。

出土遺物（第31図18～25）

すべて在在系のものである。18は直口壺。口縁は長く直立し、底部は尖底気味になる。外面は口縁部にタテハケが装飾風に施され、体部は上位が粗いハケ、下位は細かいハケ、底部はナデで調整する。内面は口縁部がヨコハケ後ヨコナデ、体部はヨコナデで調整し、最大径部に押し出しの指圧痕と工具痕が認められる。外面は一部二次被熱により赤変する。

19・20は甕、19は口縁が緩やかに屈曲し端部は肥厚する。全体にハケで調整後、口縁部内面をヨコナデ、体部外面をタタキで調整する。20は丸底になる胴部下位で、外面は細かいタテハケ、内面は粗いハケで調整する。外底部に黒斑が認められる。



第 30 图 5 号土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)

21～23は高坏。21は口縁が強く屈曲するもので、やや古い様相があるため混入品の可能性もある。22の脚部片は外面をタテミガキし、端部を断面M字に作る。内面は摩滅が激しい。23の脚部は下位が強く屈曲するもので、全体的に剥離が激しい。外面に僅かにハケ目が認められ、屈曲部の穿孔は3カ所と考えられる。

24は単純口縁の鉢で、器高が高く、口縁端部は僅かに外湾する。外面はタタキ後ケズリ、内面はハケで調整するが、全体的に作りが粗雑で手捏ね状を呈する。

25は器台。外面はタタキ、内面はナデで調整し、裾端部は未調整で器壁に凹凸が激しい。

7号土坑（図版15、第29図）

I・II区の境、1号溝下層に位置する土坑である。長軸約110cm、短軸約90cmの隅丸方形を呈し、小土坑を切る。深さは約90cmを測るが、他の同様の土坑と異なり上位数10cmが削平を受けるため、本来は更に深かったと思われる。壁はやや急な傾斜で直線的に立ち上がり、底部はややレンズ状を呈する。埋土は上位を削平されるため最上層の被りは無く、上層に黄色土と黒色土の斑土が堆積し、下層はやや粘質の黒色土主体の土層となる。この層の底部に接地して完形に近い土器などがまとまって出土した。

出土遺物（図版43、第32図1～10）

1～6は壺。1は完形品に近いもので、口縁端部が屈曲してわずかに袋状を呈し、体部は球形で底部はレンズ底になる。外面は細かいタテハケ後頸部と胴部下位をナデ調整し、内面は細かいハケ後にナデで調整する。底部付近は指ナデツケで成形する。作りが丁寧で胎土は精緻、焼成も極めて良好で他の土器とは様相が異なり、外来品の可能性がある。2～6は在地系である。2は複合口縁壺で口縁を内側に強く屈曲させる。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。3は頸部が締まり、胴部上位が大きく張る器形で、頸部に刺突文を廻らせる。内外面ともハケ調整で頸部内面に指圧痕が認められる。4は広口壺で、頸部が締まり底部はレンズ底を呈する。外面は上位がタテハケ、下位はタテハケ後タテナデによってハケをナデ消す。内面はナデによって滑らかに整えられるが、部分的にハケ目や押し出しの指圧痕が認められる。外面頸部下に小さな孔を明け、それを繋ぐようにヘラで直線を描く。また、底部付近には2個の焼成後穿孔がある。5は胴部下位で平底を呈する。外面は工具ナデ調整、内面はハケ調整する。中位に黒斑が認められる。6は口縁が短いもので、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。

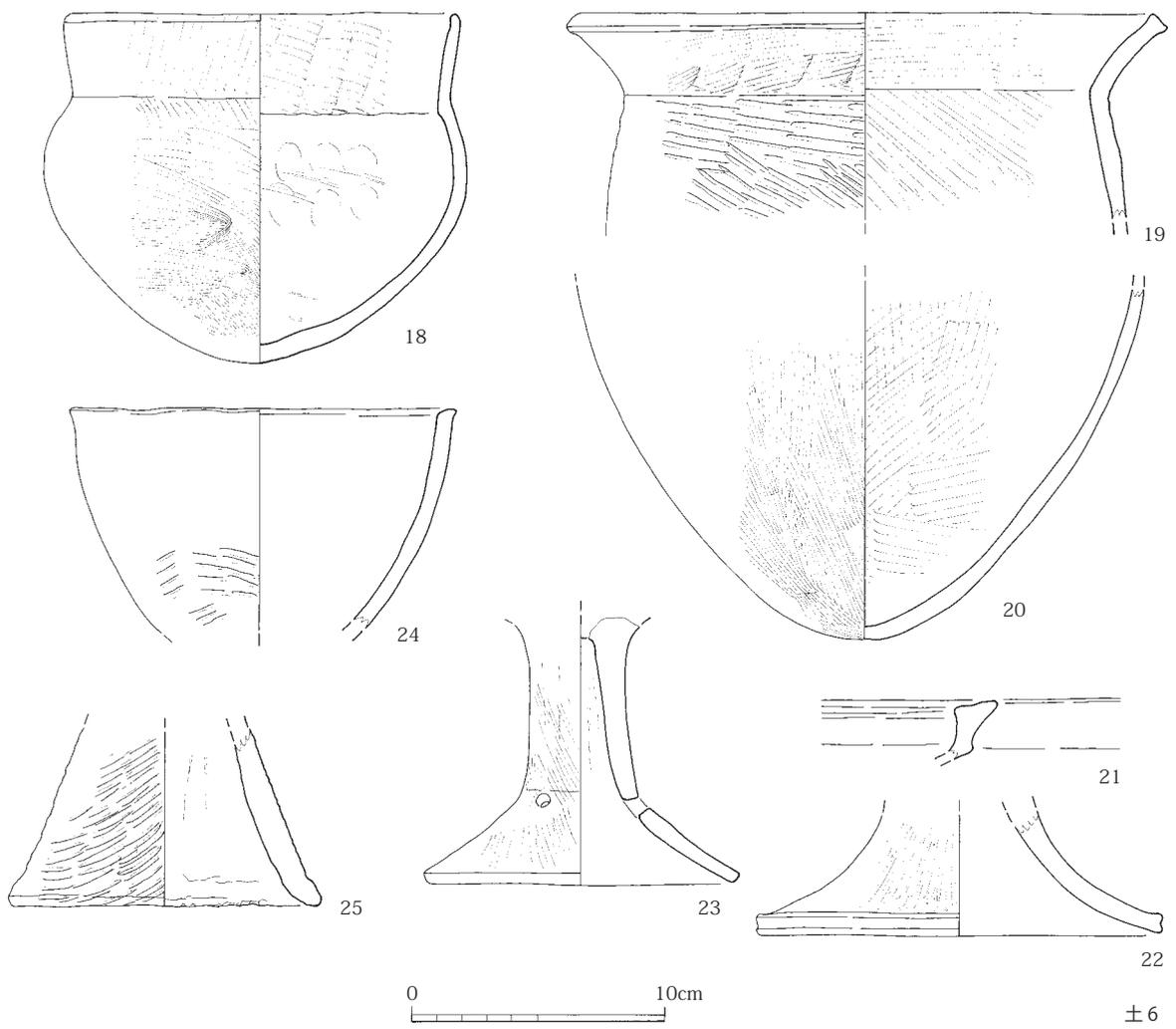
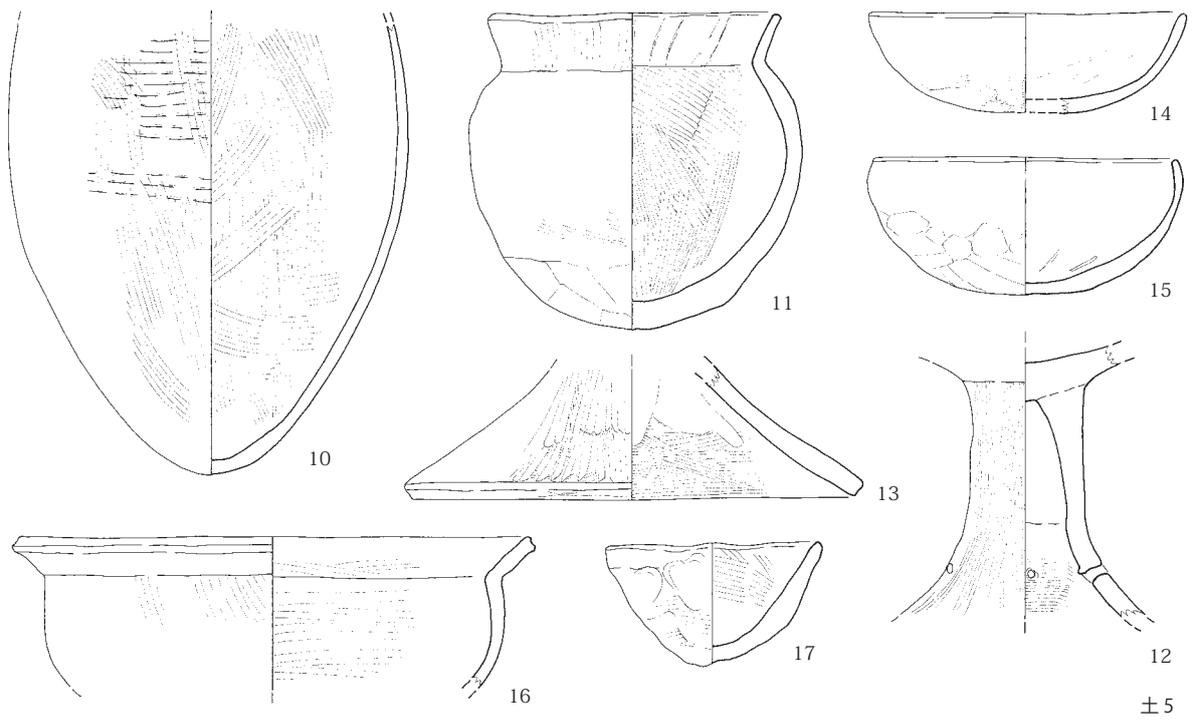
7は甕で口縁を強く外反させ、外面はタテ、内面はヨコのハケ調整を施す。

8は高坏口縁部小片で、内面に波状の暗文的なミガキを施す。

9・10は鉢。9は単純口縁のもので、外面はヨコナデ、内面はタテナデツケで調整し、痕跡が明瞭に残る。10は屈曲口縁のもので器壁が薄く、胴部が大きく張り、内外面とも丁寧なナデ調整を施す。

8号土坑（第29図）

III区東寄りに位置する土坑で、29号土坑に切られ、9・10号土坑を切る先後関係にある。最上層に茶灰色土が多量に被っていたため、1遺構と捉えて9・10号土坑と一連で掘削していたが、茶灰色土除去後にプランを確認した。直径約70cmの円形を呈し、深さは現存する最深で60cm強、壁は急な傾斜で立ち上がり、底部は平坦になる。埋土は上層が茶灰色土、中層



第 31 图 5・6 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

以下は黄褐色土で、中位から完形品の壺が1点だけ出土した。

出土遺物（図版 43、第 32 図 11）

11 は在地系の複合口縁壺で、口縁は短く強く内側に屈曲し、頸部に断面三角形の凸線を廻らせる。外面は細かいタテ及び斜位のハケ調整後、胴部下位をヨコナデでハケ目を消す。内面は頸部に細かいヨコハケが残り、他は丁寧にナデ消す。内面に煤と黒茶色の付着物が認められ、外面胴部下位には黒斑が認められる。

9 号土坑（図版 15・27、第 29 図）

Ⅲ区に位置する土坑で、8号土坑に切られ、隣接する10号土坑との切り合い関係は不明である。上層から中層まで茶灰色土が多量に被っていたため、1遺構と捉えて8・10号土坑と一連の遺構として調査していた。中層付近で3基の土坑としてプランを確認したが、それまでの出土遺物は10号土坑と混在している。上方は長軸80cm以上、短軸約70cm、中層以下は短軸約50cmの楕円形を呈する。深さは最深で110cm強で、底部はレンズ状になる。先述のように埋土は中層まで茶灰色土が入り、中層以下は黒色土と黄褐色土の斑土、下層は軟質の黒色粘土に黄褐色粘土が混入する埋土となる。底近くからは完形品を含む土器や自然木がまとまって出土した。出土遺物は10号土坑と合わせて記述する。

10 号土坑（図版 15・16・27、第 36 図）

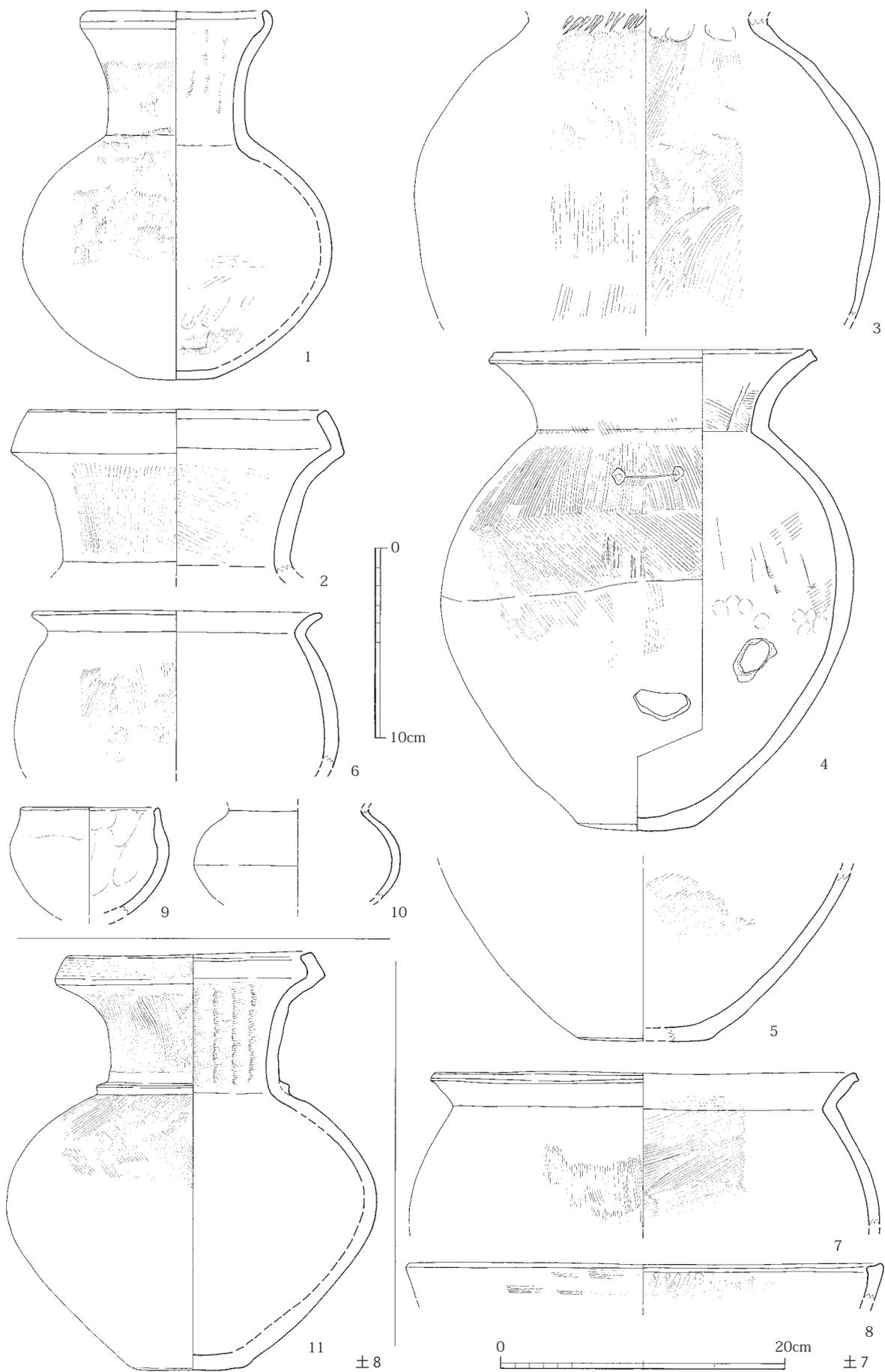
Ⅲ区に位置する土坑である。図上では隣接する9号土坑を切るように見えるが、混在して掘削した結果であり、先後関係は不明である。長軸120cm以上、短軸約80cmの楕円形を呈し、深さは約150cmで底はレンズ状になる。壁はやや急な傾斜で立ち上がり、底近くでは短軸が幅約50cmと狭小になる。埋土は中層まで茶灰色土が入り、中層以下は黒色土と黄褐色土の斑土、下層は軟質の黒色粘土主体の埋土となる。中層で木製臼の未成品や完形品に近い土器が出土したが、9号土坑の遺物の可能性がある。また、底近くにも完形品を含む土器や動物骨が纏まって出土している。臼は腐朽が激しく取り上げ不可であった。

9・10 号土坑出土遺物（巻頭図版 2-1、図版 44、第 33～35 図 1～27、第 87 図 6）

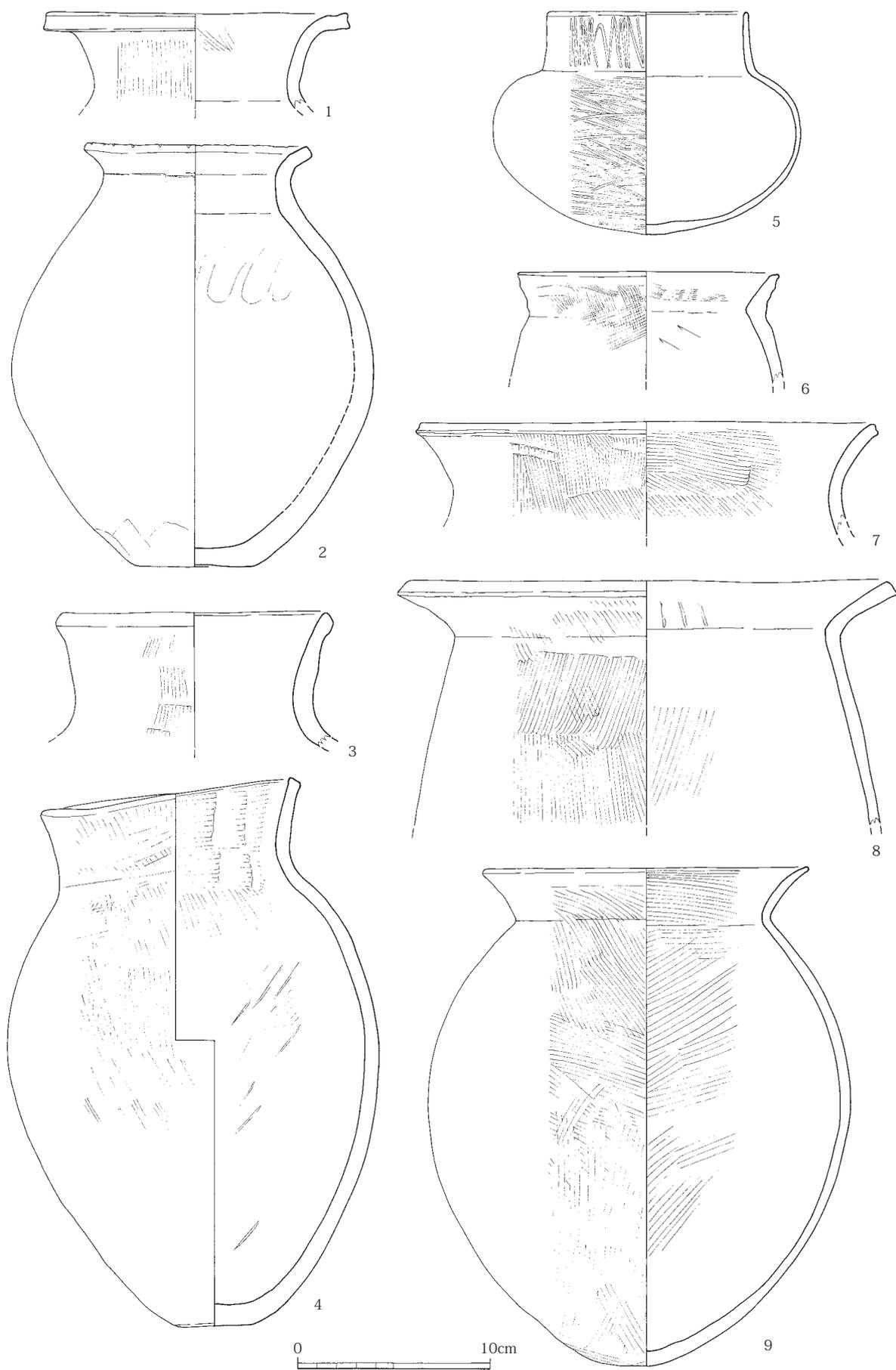
9・10号土坑は出土遺物が混在しているため、ここでは2基の出土遺物を同時に掲載する。ただし、9・24は9号土坑、4・5・12・18・26は10号土坑からの出土である。

第33図1～5は在地系の壺。1は口縁端部が強く屈曲し、端部を上方に摘み上げる。外面はタテハケ、内面はヨコハケ後にナデで調整する。2はほぼ完形品で、短い口縁が強く外反し、胴部は中位が大きく張り、平底になるもので遺跡内では他に類を見ない。口縁端にはキザミを廻らせる。外面は工具ナデ、内面はナデで調整し、底部付近に黒斑が認められる。4と胎土・焼成が近似する。3～5は直口壺で頸部の屈曲は緩やかである。3は摩滅が激しく外面のタテハケのみが確認できる。4は狭い平底を有し、外面は横位のタタキ後にタテハケを施し、下位は後にナデで調整する。内面は口縁部ヨコ、胴部タテのハケ調整後、胴部を工具ナデによって仕上げる。胴部下位に黒斑が認められる。2と胎土・焼成が近似する。5は扁球形の胴部を有するもので、外面は丁寧なミガキで調整され、口縁部は暗文状に施される。内面はナデ調整で下位に工具痕が認められる。また白色や灰色の付着物が多く、器面が荒れている。

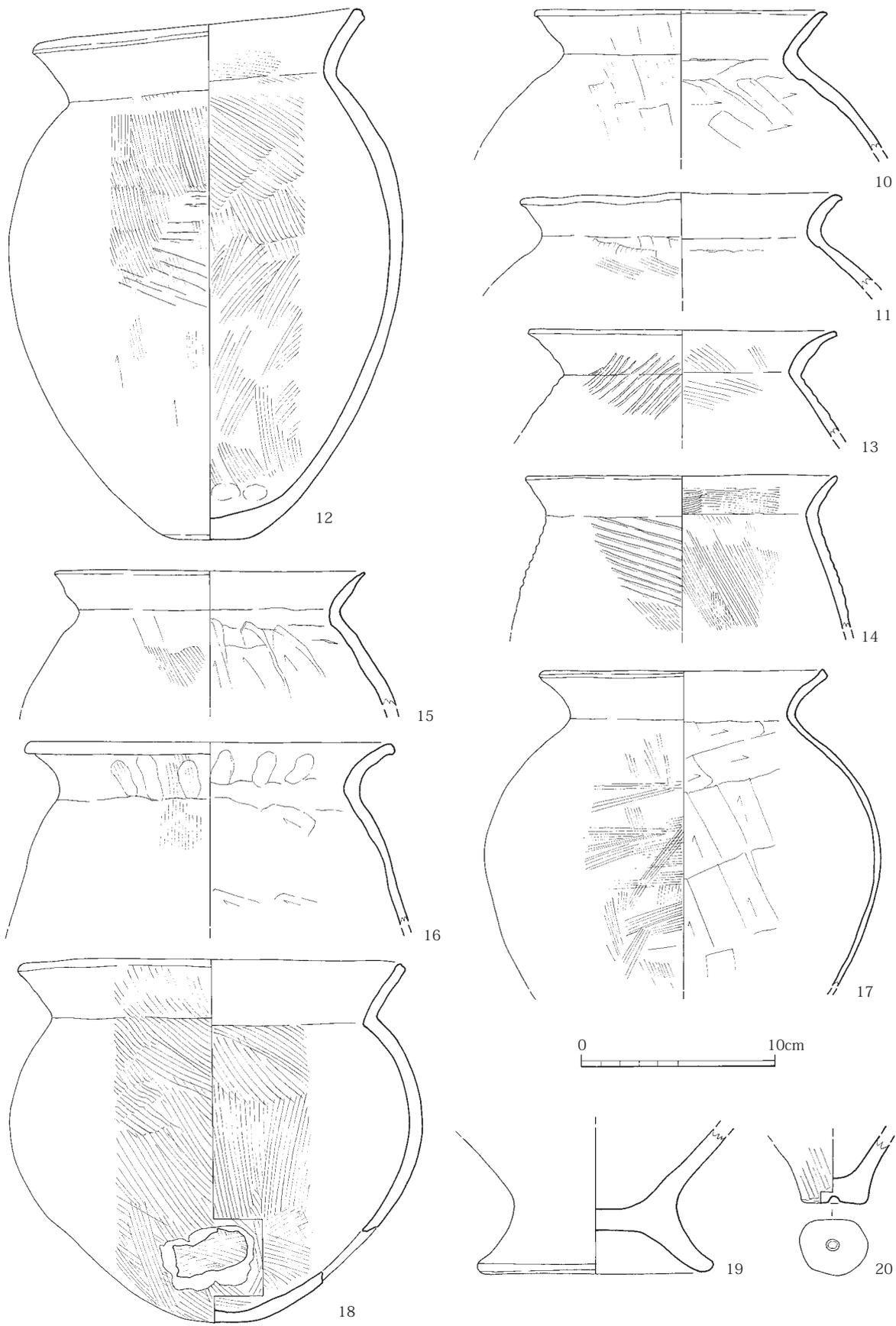
第33・34図6～19は甕で、6～13は在地系のもの。6はやや小型で頸部内面の稜が明瞭である。外面はタテヨコのハケ調整後口縁部を粗いナデ調整、内面は斜位のケズリを施す。7



第32図 7・8号土坑出土遺物実測図(7・8は1/4、他は1/3)



第 33 图 9·10 号土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)



第 34 图 9·10 号土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)

は頸部の屈曲が緩やかで外面タテハケ、内面ヨコハケで調整する。外面は二次被熱により赤変する。8は口縁が大きく開くもので、内外面ともタテハケ調整、口縁部内面に暗文状の工具痕が認められる。9は口縁が外湾し、胴部中位に最大径を持つ。外面は上位が細かいタテ及び斜位のハケ調整で、下位は粗いタテハケで調整する。内面は粗いヨコおよび斜位のハケ調整で、後に底部をヨコナデで調整する。外面下位には煤が多量に付着し、内面も被熱による器面の損傷が激しい。10・11は頸部が締まり胴部が張るもの。10は外面工具によるタテナデ、内面はタテケズリで調整する。11は外面がハケ、内面はナデで調整し、頸部に粘土接合痕が認められる。12はやや長胴のもので、焼き歪むが完形品に近い。口縁は緩やかに外反し、底部は器壁が厚くレンズ底を呈する。外面は横位のタタキ後に全面をタテハケで調整し、その後底部はナデ調整する。内面はタテ及び斜位のハケ調整で、底部に指圧痕が認められる。13・14は外面に斜位のタタキが明瞭に認められる。13は口縁が強く外反し、外面は右上がりのタタキが口縁部付近にまで及び、内面はハケ調整を施す。外面口縁部にススが付着する。14は頸部の屈曲が緩やかで、内面は細かいタテハケで調整する。15～17は内面をケズリで調整するもの。15は口縁端部が薄い。内面のケズリは粗く、口縁部付近は工具ナデ、外面はヨコハケ調整で一部二次被熱により黒変する。16は口縁が緩やかに屈曲し、端部を玉縁状に肥厚させる。外面はハケ後ナデ調整、内面もケズリ後にナデ調整する。口縁部内外面には指圧痕が認められる。二次被熱により全体に変形し、赤変する。17は口縁端部をナデによって内湾させ、端部を上方に摘み上げるもので、胴部は球形で大きく張る。器壁が薄く、外面はランダムなハケで調整し、黒変して一部煤が付着する。18は中型で器高の低い甕で、胴部は扁球形を呈する。外面は斜位のハケ、内面は強い斜位及びタテハケで調整する。胴部下位に長軸約4cm、短軸約2cmの焼成後の穿孔が1カ所ある。19は脚付甕の底部で、内外面ともナデ調整。

20は小型品で、底部に焼成前穿孔がある。外面はタテハケ、他はナデで丁寧に成形する。

第35図21は高坯口縁部片。内外面ともナデ調整で、内面には放射状の暗文が施され、外面にも一部施される。

22～24は鉢。22は脚付き鉢か。口縁端部をわずかに内側に屈曲させる。内外面ともナデ調整。23は口縁が直立して胴部が扁球形を呈するもので、内外面ともハケ調整、外底部付近はヘラケズリを施す。24は単純口縁の鉢で、口縁が肥厚し、体部が薄くなる。外面はタテ、内面は斜位の細かいハケで調整する。

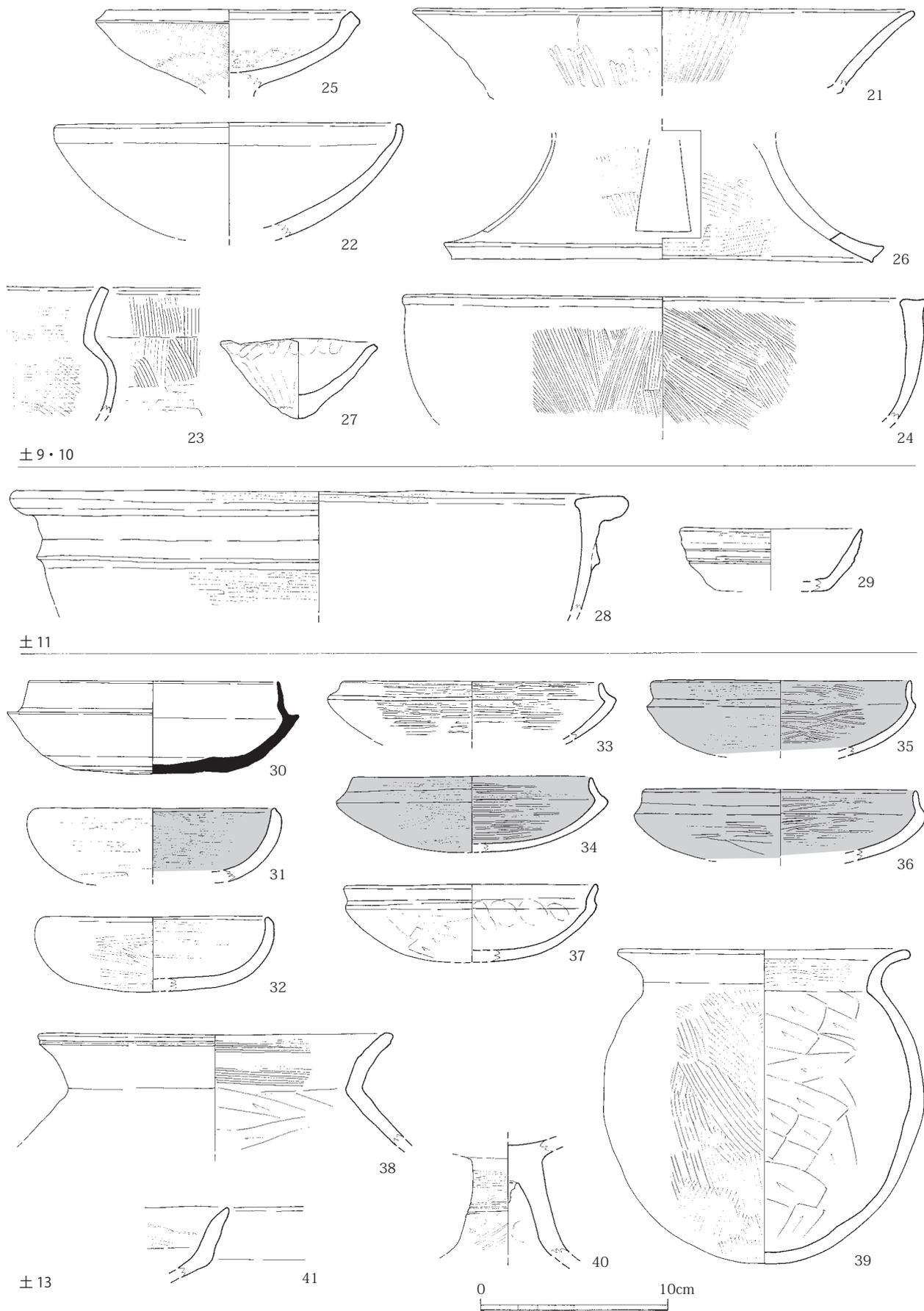
25は畿内系小型精製器台の坏部で、口縁が肥厚する。外面は斜位のハケ、内面はナデで調整し、内底部にミガキ状条痕が認められる。26は在地系の器台裾部で、平面台形の透かしが1ヶ所残存する。裾端部を下方に摘み出す。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整し、後に裾部内外面をヨコナデする。

27は逆三角錐の手捏ねのミニチュア品で、外面は工具ナデ、内面は粗いナデ、口縁部は指おさえで成形し、外底部は未調整である。器壁が荒れて割れが多く、一部黒斑が認められる。

第87図6は木製の底板である。3～4枚の組み合わせ式になると考えられ、内側側面に深さ0.5cm程の孔が穿たれる。また外側側面に側板と組み合わせるための径0.2cmの孔が穿たれ、中に留め具が残る。

11号土坑（図版16、第36図）

Ⅲ区やや南よりに位置する土坑である。隣接する落ち込みと埋土が判別困難であり、当初



第35图 9~11·13号土坑出土遺物実測図(1/3)

同時に掘削したため本来のプランは不明である。また、基盤土と埋土が判別しがたい上に木質や黒色土粒が多量に含まれていたことから掘りすぎてしまい、底面のプランも不確実である。最終形で長軸 120cm 以上、短軸約 100cm の楕円形を呈するが、本来は直径 100cm 前後の円形と考えられる。深さ約 80cm で底はほぼ平坦になると考えられる。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。埋土は基盤土と黒粘土・灰色粘土の斑土が上層に入り、中層は灰色系の粘土質の互層、下層は基盤土の粘土と似た淡青灰色粘土に黒色土が若干混じる。

出土遺物（第 35 図 28・29）

28 は鉢口縁部片で、丸みを持つ三角口縁を有し、口縁下には断面三角の凸帯が廻る。体部はタテハケ後にミガキで調整する。

29 は小型の坏で、糸切りの可能性もある。混入品と思われるが、中世の遺構の可能性もあることから掲載する。

12 号土坑（図版 17、第 36 図）

Ⅲ区南東隅に位置し、1/4 程度が調査区外に広がる土坑である。南接する 23 号土坑に切られる先後関係にある。調査区内で確認できる直径は約 100cm で、円形になると思われる。深さは最深で約 160cm で、底はほぼ平坦になり、壁は急な傾斜で立ち上がる。埋土は最上層に茶灰色土が被り、上層は茶灰色土に炭の小粒を含む土が東から流れ込むように堆積する。中層は黒色土と黄褐色土の斑土が堆積し、その上面には木の皮のような繊維が広がっていた。下層は軟質の黒色土主体の土層で、炭や木質、植物繊維などを包含する。土器はほとんどなく、図示できるものはないが、6 世紀代の土師器の小片が出土している。

出土遺物（第 87 図 9）

不明木製品である。中央に 2.0 × 0.9cm の孔を穿つ。部材等になるか。表面はやや炭化している。原形を保ったまま既に乾燥しており、新しいものである可能性も考えたが、出土層位などから遺構に伴うものと判断した。

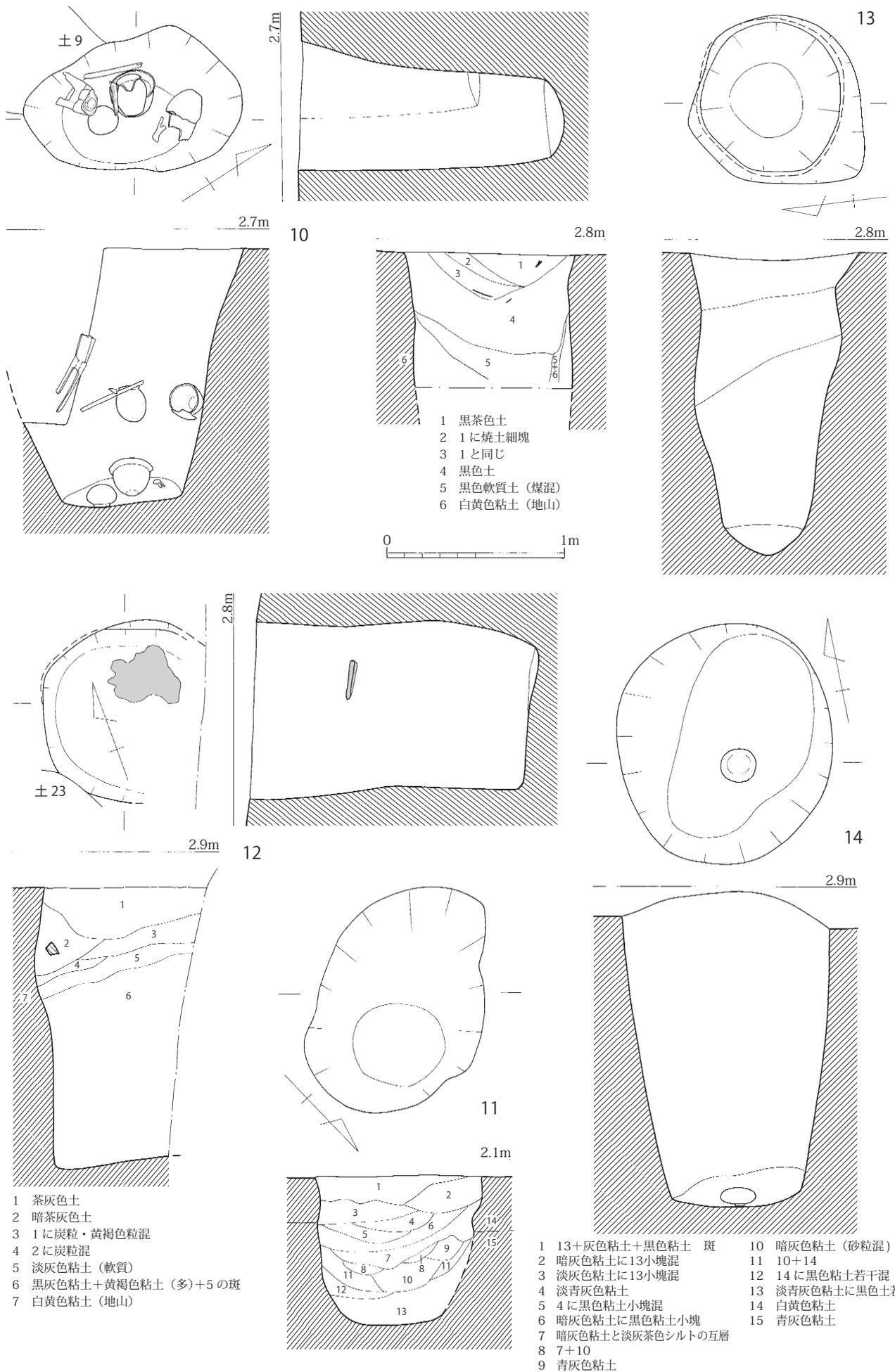
13 号土坑（図版 17・18、第 36 図）

Ⅲ区、3・5・6 号土坑のほぼ中間に位置する土坑である。直径 90 ～ 110cm の不整円形で、上位に稜を有し、それ以下は窄まる。深さは最深で約 190cm で、底はボウル状になる。壁は急な傾斜で立ち上がるが、部分的に広がり、底付近は直径約 50cm と狭小になる。埋土は最上層に黒茶色土に焼土が混入した層が被り、中層は軟質の黒色粘土とこれに煤が混入する層がある。この軟質層の上面には木の皮のような木質が広がっていた。下層は木質を多量に含有する黒色土で、最下層はグライ土化した青灰粘土と黒色粘土が混在した層になる。

出土遺物（図版 44、第 35 図 30 ～ 41）

30 は須恵器の坏。口縁が長くやや内傾し、外底部は回転ヘラケズリで調整する。生焼けで灰黄色を呈する。最上層からの出土であるため混入品の可能性も高い。

31 ～ 41 は土師器。31・32 は壙型の坏で、口縁部が肥厚してやや内湾する。31 は内面が黒塗りで細かいミガキ、外面は粗いミガキで調整する。32 は摩滅が激しいが内外面ともミガキ。33 ～ 37 は模倣坏。33・34 は口縁部が内傾して器高が低く、内外面ともミガキ、33 は一部赤味を呈するが、丹塗りは不明。34 は内面のミガキが細かく、内外面に黒塗りを施す。35・36 は口縁が直立し、体部がやや丸みを持つ。内外面ともミガキ調整で、35 の内面は特にミガ



第36図 10～14号土坑実測図(1/30)

キが細かく、双方内外面に黒塗りを施す。37は口縁が外反し、体部が丸みを持つ。体部外面はケズリ、内面はナデで調整し、屈曲部に指圧痕が残る。

38・39は甕。38は口縁が外湾し、外面は工具によるナデ、内面はケズリで調整する。39は口縁が大きく外湾して胴部が球形を呈するもので、外面はタテハケ、内面はケズリで調整する。

40は高坏脚部で、外面と坏部内底部をミガキ調整し、脚部中位に3本の沈線を廻らせる。須恵器を模倣したものか。

41は口縁部小片で、外面下位はケズリ、内面はミガキで調整する。

14号土坑（図版18、第36図）

Ⅲ区南端、4・5号土坑の西、6号土坑の南東に位置する土坑である。調査区外にはみ出すが、許可を得て調査区を拡張した。直径130cm前後の円形を呈し、深さは最深で180cm弱で、底部はほぼ平坦になる。壁は急な傾斜で直線的に立ち上がり、底部の形状は不整楕円形で、西側に緩やかな段を有する。埋土は最上層に茶灰色土が被り、上層が黒色土と黄褐色土の斑土で、中層は黄褐色粘土と灰色粘土主体の土層、下層は軟質の黒色土主体の土層となる。底部に口縁部を欠損する長頸壺が、逆位の状態で出土した。

出土遺物（図版45、第38図1・2）

1は長頸壺で、胴部が低い扁球形を呈する。外面は口縁部から胴部中位まで細かいタテミガキで丁寧な成形される。胴部上位は暗文状の装飾的な縦位のミガキで、中位はヨコハケ、外底部は丁寧なヘラケズリで成形する。胴部上位にはミガキ前のタタキが僅かに残り、頸部にはハケ目が残ることからタタキ→ハケ→ミガキの順で調整したと思われる。内面も細かいハケ調整で、胴部上位はナデでハケ目を消す。内底部は中心を指向する時計回りのハケ目が認められる。器壁の厚さは均一で、胎土はきわめて精製で焼成も良好、調整も装飾的な色合いが濃く、他の土器とは異なる様相を持つ。外来品の可能性が高い。

2は脚部片で、端部が強く屈曲する。外面はヨコナデ後粗い工具ナデで成形するため凹凸が多く、内面も粗い工具と強いナデで、全体的に作りが粗く形状もいびつである。

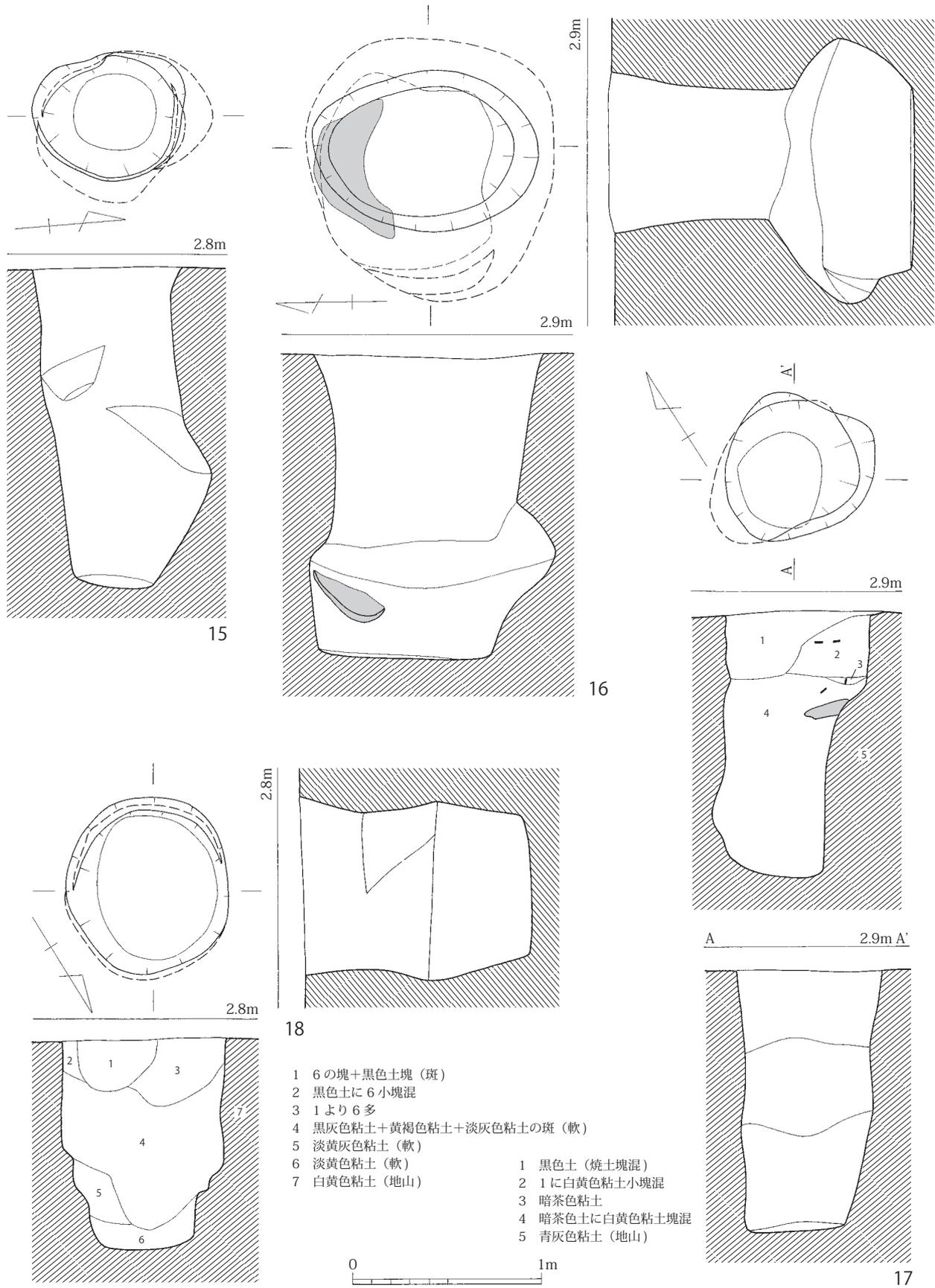
15号土坑（図版18・19、第37図）

Ⅲ区西寄り、1・26号土坑の南西に位置する土坑である。長軸80cm弱、短軸約70cmの不整円形を呈し、深さ約170cmで底はレンズ状になる。壁は急な傾斜で立ち上がるが、下位は部分的にオーバーハングし、他にも崩落によると思われる壁面の凹凸が多い。埋土は上層に黒色土・黒茶色土主体の層が厚くブロック状に堆積し、暗茶色土に基盤土の小塊が混入した層があり、それ以下は軟質で木質を多量に含む分層困難な黒色土主体の層になる。最下層は黒色土に基盤土の青灰色粘土が混じる。

出土遺物（図版45、第38図3～6）

3は頸部が小さく口縁が緩やかに外湾する壺で、外面は不定方向のハケ調整、内面はナデで一部ケズリを施す。

4～6は甕。4は口縁が短くわずかに外反するのみで、内外面ともに細かいタテハケ調整。5はやや小型で口縁は直立して端部がやや外湾し、胴部は球形を呈する。外面はタテハケ、内面はナデで調整する。6は口縁部片で外面はタテハケ、内面はケズリで調整し頸部に強い



第37図 15～18号土坑実測図(1/30)

稜がつく。全体に強い二次被熱を受ける。

16号土坑（図版19・20、第37図）

Ⅲ区中央、35・37号土坑の西に位置する土坑である。上面形状は長軸約120cm、短軸約80cmの楕円形を呈する。壁は長軸方向はやや緩やかに立ち上がるが、短軸方向は急な傾斜で直線的に立ち上がる。地表下約80cmで括れて稜がつき、約110cmの深さで最大径130cm程のフラスコ状に広がる。崩落によるものかも知れないが、オーバーハングした部分にヨシのような繊維質が重なり合っていた事から、意図的に広げて掘削された可能性も考えられる。埋土は最上層に黒茶色土が被り、中層上位には黒色土に基盤土の小塊が混入した層があり、中層下位以下は軟質の黒色粘土が堆積し、括れ部以下には木質を大量に包含する。最下層は基盤土のグライ土化した青灰色粘土に黒色粘土が混じる層となる。

出土遺物（第38図7～11）

7は須恵器を模した模倣坏蓋で、屈曲部に段を有し、内外面とも細かいヨコミガキを施す。

8・9は坏で、8は端部が外湾する。ともに内外面とも細かいヨコミガキを施す。

10・11は甕で、口縁部が緩やかに外湾し、外面は斜位のハケ、内面はケズリで調整する。

17号土坑（図版20・21、第37図）

Ⅲ区北西側、27号土坑と31号土坑の間に位置する土坑である。直径70cm前後の不整円形を呈し、深さ140cm強で底はレンズ状になる。壁は急な傾斜で直線的に立ち上がり、一部上層付近で緩い段を持って広がる。地表下60cmまでしか土層を図化できなかったが、上層に黒色土主体の層が厚く堆積し、中層は暗茶色土に基盤土の小塊が混入する層になり、下層は軟質の黒色粘土主体の層となる。この層の上面にはヨシのような繊維が広がって堆積しており、層の中には煤が混入していた。最下層は基盤土のグライ土化した青灰色粘土に黒色粘土が混入する。

出土遺物（第38図12～16、第85図9）

12は坏で、外面はヨコケズリ、内面は細かいミガキで調整する。

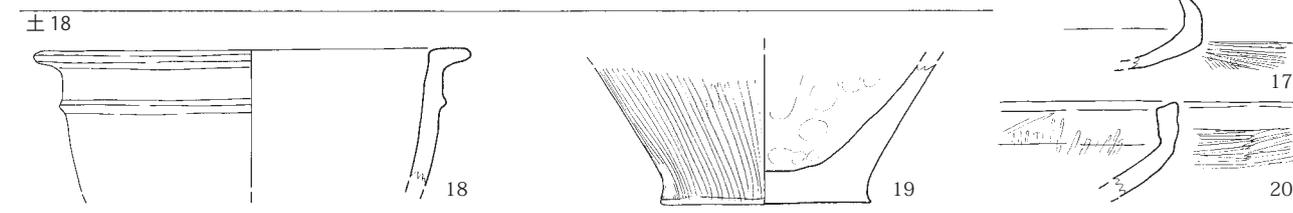
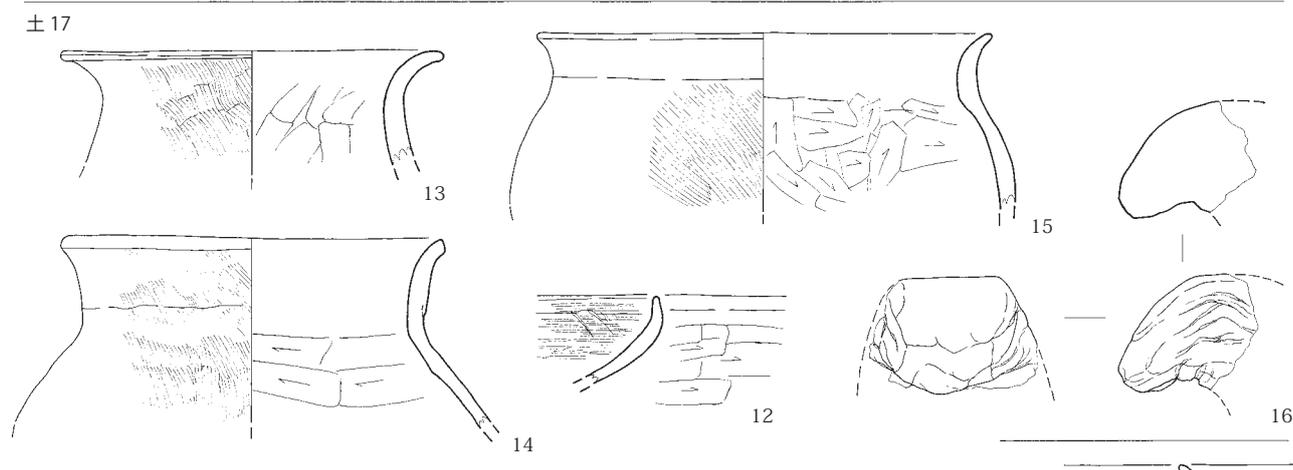
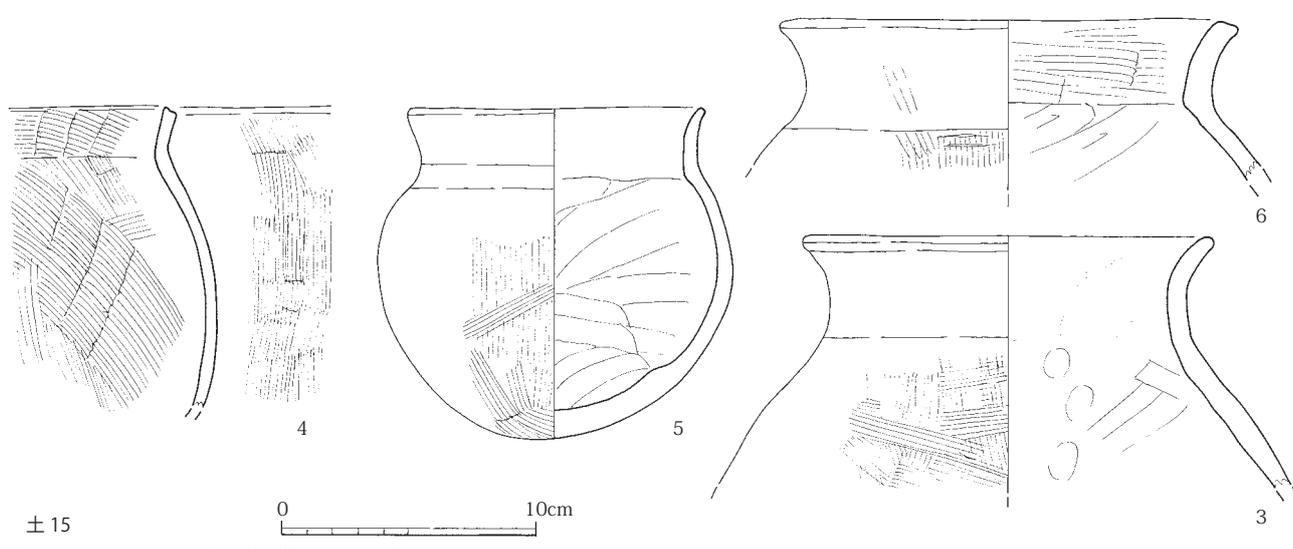
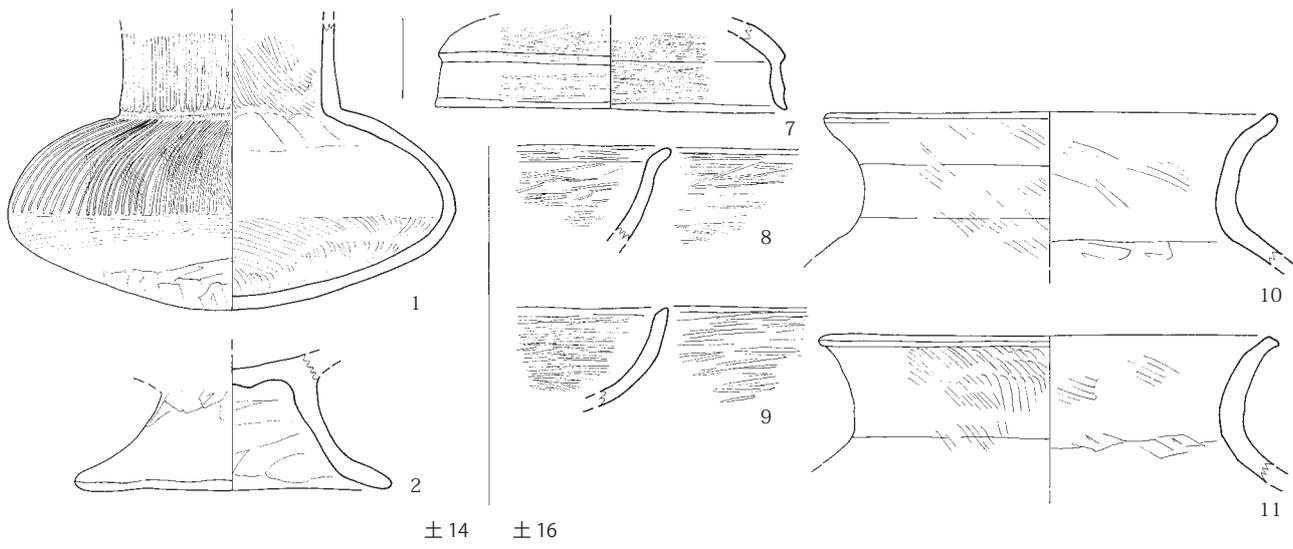
13～15は甕で、外面は斜位のハケ調整、内面はケズリを施す。14は頸部外面に粘土接合痕が明瞭に認められ、二次被熱により外面に煤が付着して黒変する。15の内面のケズリはランダムで、外面は全体的に被熱して一部黒変する。

16は屈曲する支脚の先端部片で、全体に粗いナデと工具によって調整する。スサが入る粗い胎土で、全体的に被熱して一部黒変する。

第85図9は砥石である。両面および左右側面を砥面とする。白色頁岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。

18号土坑（図版21、第37図）

Ⅲ区南端、9・10・29号土坑の南に位置する土坑である。直径90cm前後の円形を呈し、深さ130cm弱で底はほぼ平坦になる。壁はほぼ直に立ち上がり、中位が稜をもって下位がオーバーハングする。埋土は上層に黒色土主体の層が被り、中層は軟質の黒灰色土、黄褐色土、淡黄色粘土の混在した斑層となり、石が投棄されていた。下層は基盤土に近似した白黄色粘土に黒色粘土塊が混入した層が堆積する。



第 38 图 14 ~ 18 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第 38 図 17～20）

17 は袋状口縁壺の口縁端部小片で、下位はハケで調整する。

18・19 は甕で、18 は逆 L 字口縁のもので、口縁やや下に断面三角の凸線を廻らせる。19 は平底の底部で外面はハケ、内面はナデで調整し指圧痕が残る。

20 は高環口縁部片。端部を強く屈曲させて体部はケズリに近いミガキ、内面は放射状のミガキで調整する。

19 号土坑（図版 21・22、第 39 図）

Ⅲ区東寄り、57 号土坑の北に位置する土坑である。長軸約 100cm、短軸約 80cm の不整楕円形を呈し、深さ 180cm 強で底はほぼ平坦になる。壁は急な傾斜で立ち上がり、部分的にオーバーハングする。下層は狭小になり、底では径 40cm 前後の規模になる。埋土は上層に黒茶色土主体の層が厚く入り、中層が軟質で水分を多く含有する黒色土が堆積する。下層も同様の軟質の黒色粘土であるが煤を含有する。またこの層の上面にはヨシのような繊維質が広がって堆積し、その上に石が投棄されていた。最下層は基盤土のグライ土化した青灰色粘土に黒色粘土が混在する層となる。

出土遺物（第 40 図 1～6）

1～3 は口縁を内湾させる環。1 は摩滅が激しいが、全て内外面ヨコミガキ、底部外面はケズリで調整する。

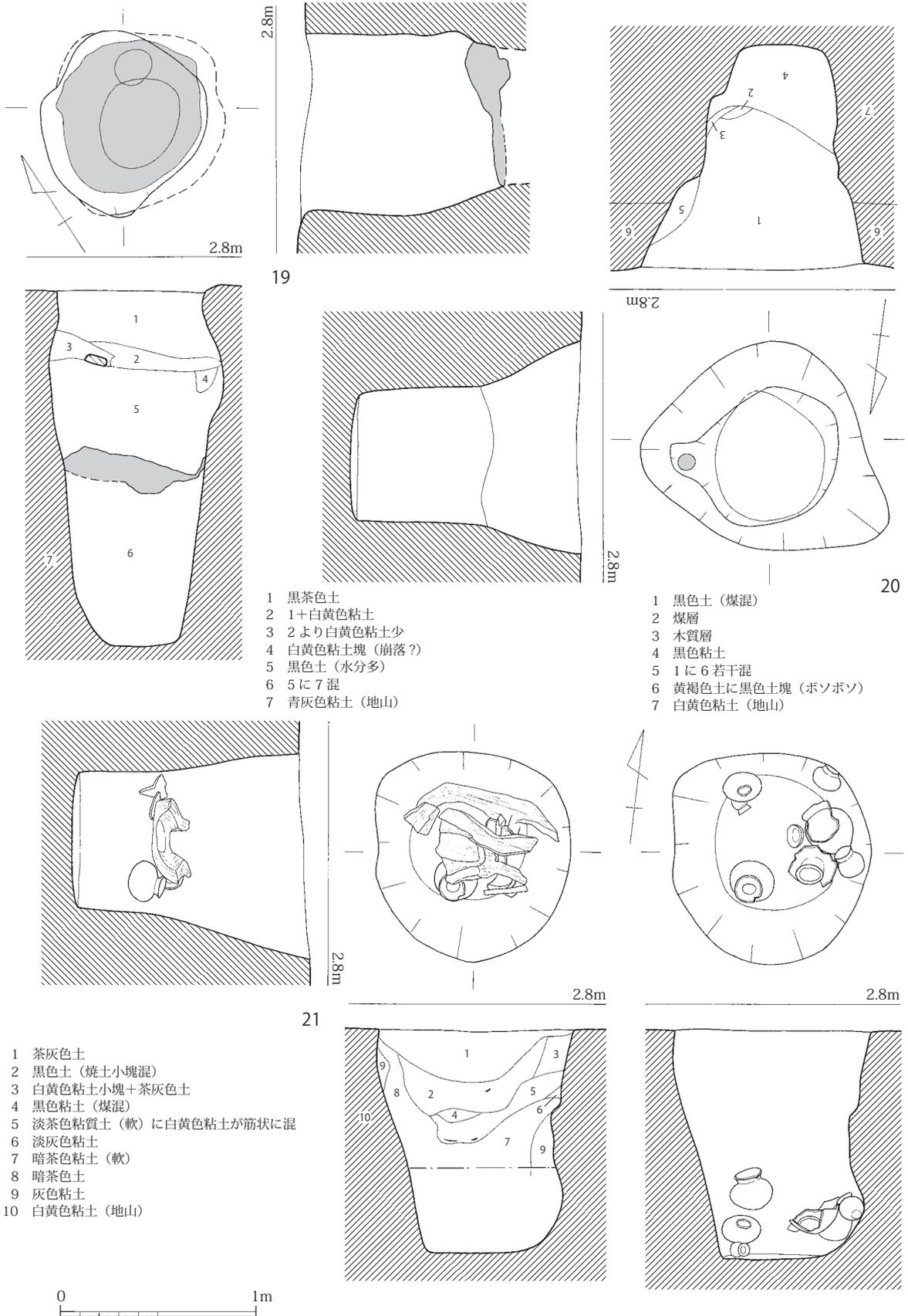
4～6 は甕。4 は口縁を短く外反させ、外面はランダムなハケ調整で、底部はケズリによって平底にする。内面はやや粗いナデ。5 は口縁部を強く外反させ、外面はタテハケ、内面はケズリで調整し頸部に強い稜がつく。6 は大型品で、口縁はやや内湾させる。外面はタテ、内面はヨコのケズリで、外面はその後粗いナデで調整する。

20 号土坑（図版 22、第 39 図）

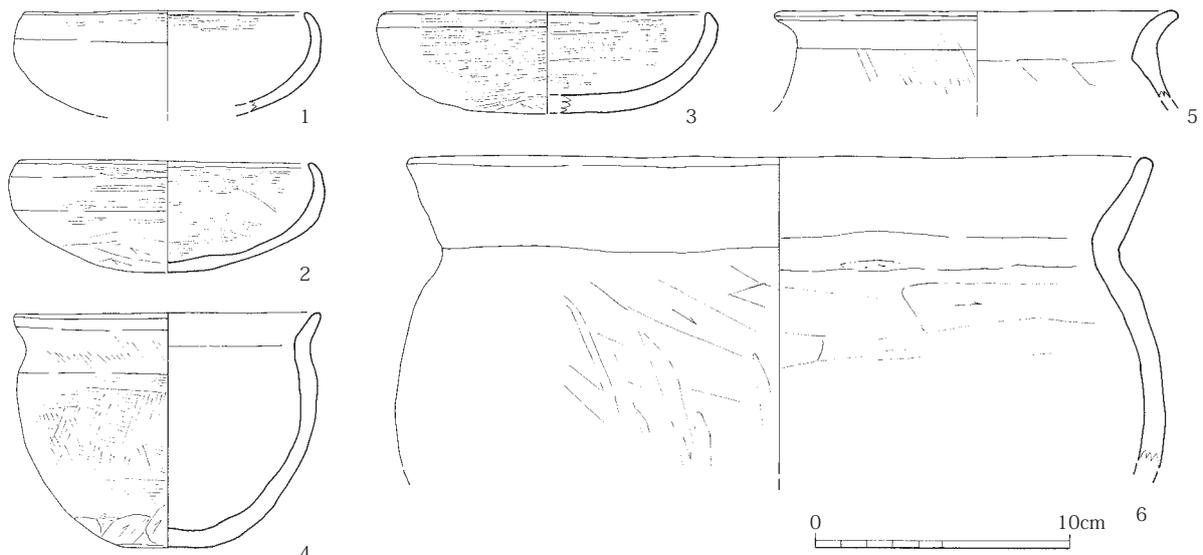
Ⅱ区西寄り、41 号土坑の南に位置する土坑である。長軸約 130cm、短軸約 110cm の不整楕円形を呈し、中層以下は直径約 70cm の円形となる。深さは 120cm 弱で底はほぼ平坦になる。壁は下位が急な傾斜で立ち上がるが、上位は緩やかに大きく開く。埋土は上層が煤を含む黒色土が厚く堆積し、下層は軟質の黒色粘土が堆積する。いずれも層の単位は厚い。下層の上面にはヨシの様な繊維が広がって堆積しており、また中位の東寄りには杭が打たれていた。西側にも同様にプランが突出する部分があるが、ここには杭は認められなかった。

21 号土坑（図版 23・24、第 39 図）

Ⅱ区北側東寄り、36・38 号土坑の南東に位置する土坑である。直径 100cm 前後の不整円形を呈し、深さ 120cm 弱で底は平坦になる。壁の立ち上がりはやや緩やかで、中位より上が開き、下位は一部膨らむ。埋土は最上層に茶灰色土が被り、その下は煤や焼土が混入する黒色土が堆積する。その下の軟質の暗茶色粘質土層は間に白黄色粘土が筋状に水平堆積する。この下は湧水が激しく、軟質の暗茶色粘土から木器や完形品を含む土器などがまとまって出土している。一番上には木製の臼の未製品があったが、腐食が進んでおり取り上げは不可能であった。また、最下層から頸部に編んだ紐を巻きつけた小壺が出土した。紐は出土時は安定していたが、埋土ごとに取り上げたものの最終的には一部しか残存しなかった。最下層の土器層は黒色土の



第 39 図 19 ~ 21 号土坑実測図 (1/30)



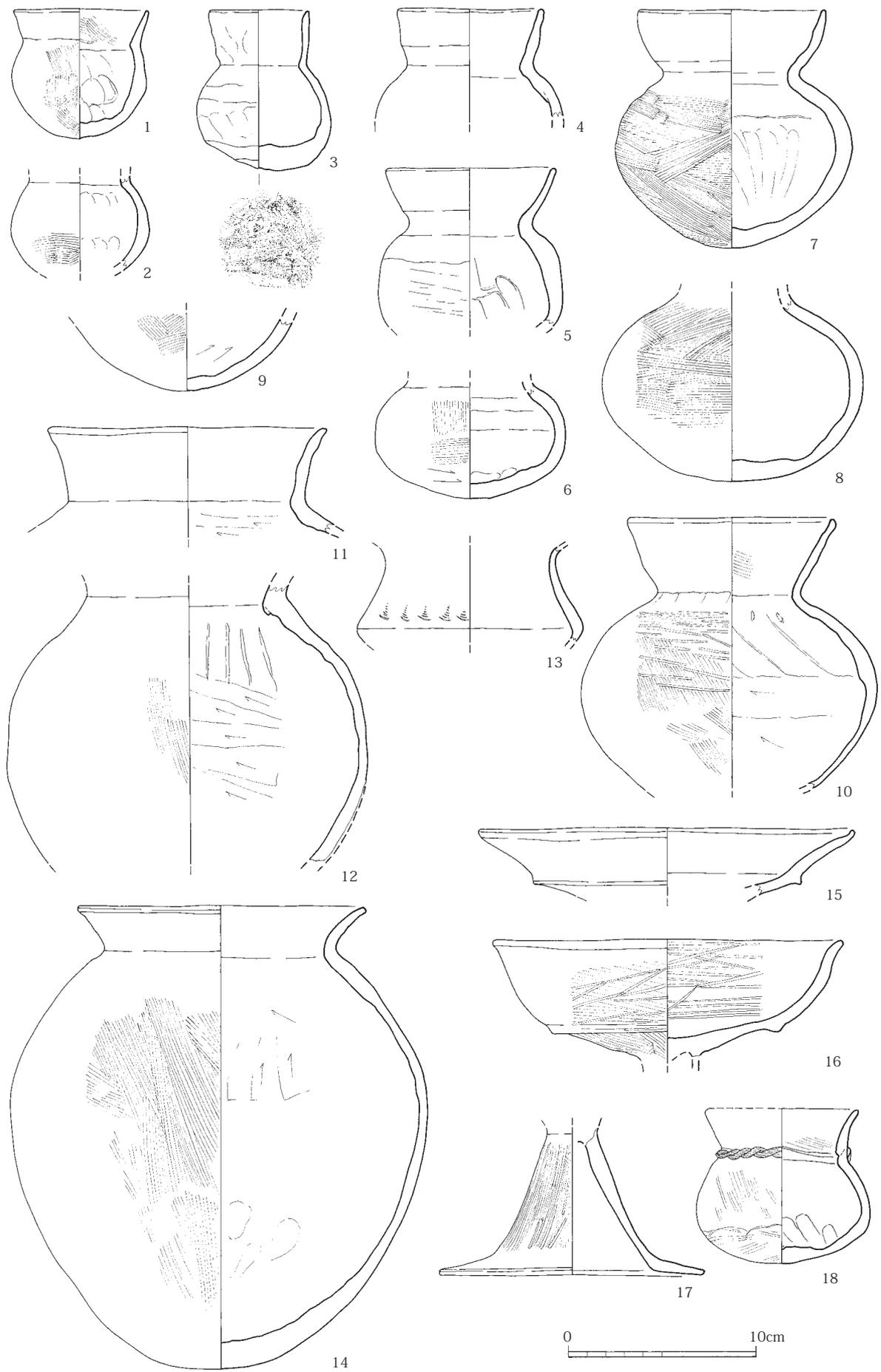
第40図 19号土坑出土遺物実測図(1/3)

下に一部軟質の灰色粘土が堆積しており、投棄は数回に及ぶと考えられる。

出土遺物（図版45、第41・42図1～31）

第41図1～14は壺。1～3はミニチュアとも呼ぶべき小型品で、甕か壺かの区別が付き難い。1は手捏ねで外面細かいハケ調整、内面には指圧痕が明瞭に残る。2はやや精製品で、外面下位は細かいハケ目残り、内面はナデツケと押し出しの指圧痕が認められる。外面は一部黒変する。3も手捏ねで、底部外面をケズリで調整し、内面には指圧痕が残る。外底部が黒変する。4～6も小型品。4・5は口縁が長く、内湾しながら立ち上がる。4は手捏ねで、内外面ともナデ調整、胴部内面は器壁が荒れ、外面は被熱で黒変する。5は内外面とも板状の工具によるナデ調整。6は胴部のみ。扁球形で外面はタテヨコのハケ後ナデ調整、底部付近はケズリを施す。内面はナデ調整で粘土の接合痕があり、底部には押し出しの指圧痕が残る。7は口縁が丸く湾曲し、胴部は球形を呈する。口縁部は内外ともナデ調整で、外面頸部付近まではナデ、胴部以下は丁寧なヨコハケで調整する。内面には粘土の接合痕が認められ、粗く強いタテナデで調整する。胎土は精良で、他の土器に比して器形・質感に違和感があり、外来品の可能性がある。8も扁球形で、外面は細かいヨコハケ、内面はナデで調整し底部は凹凸がある。外面底部は二次被熱により器壁が剥離している。9は底部片で外面ハケ調整、内面は削り調整する。10もやや小型品。長い口縁は直線的に外反し、胴部は扁球形で外面はタテハケ後、ミガキ状条痕が認められる。内面は胴部上位が強いタテナデで、下位はケズリを施す。器壁に化粧土のような白色の塗布物が認められる。11は直口壺の口縁で、内面はヨコケズリ。12は外面はハケ、内面上位は強いタテナデで調整するため指圧痕残り、下位はケズリを施す。外面下位は二次被熱による剥離が激しく、煤が付着する。13はブランデーグラス状の器形になる。外面はミガキで整えた後に、中位の屈曲部分にハケ状の工具で装飾を施す。他の土器に比して胎土が精緻で器壁も薄い。

14は甕で外面はタテハケ、内面はケズリで下位はヨコナデで調整し、押し出しの指圧痕が僅かに認められる。外面は二次被熱による損傷が激しく、煤の付着が多く内面にはコゲが残存する。



第 41 图 21 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

15 は畿内系複合口縁壺の口縁部で、屈曲部は凸線状を呈する。内外面ともナデ調整。

16・17 は高坏。16 は体部が丸みを持ち、口縁端部は外湾する。外面はヨコハケ、内面はナデで調整後、内外面ともミガキ状条痕が認められる。17 は脚部のみの破片。外面が細かいタテミガキ、内面はケズリ後ナデで調整する。

18 は小壺で、頸部に縄が巻きついた状況で出土した。縄ごと取り上げたが、既に劣化が激しく器壁に付着している部分以外は形を維持する事はできなかった。丸底だが胴部はやや扁平になるもので、口縁は端部付近がやや外湾する。口縁部は内外面ともナデ、体部外面はハケ調整後部分的にナデ、底部付近は強い板状のナデで調整し、粘土の凹凸が認められる。内面はナデ、底部付近は粗いタテナデで凹凸が激しく、指圧痕が明瞭に残る。底部内面には固形の付着物があり、外面口縁部から体部上位から中位にかけては液体が垂れたような痕跡が残る。縄は右捻りで頸部を一周して更に外側に引き出していた。ぶら下げて使用したものか。

第 42 図 19～30 は鉢または壺。19・20 は体部がやや直線的で口縁端部が外湾する。双方とも外面はヨコハケ、19 の内面はハケ調整後ナデで調整し、20 の内面は工具によるナデ後にヨコナデで調整する。21・22 は体部が内湾する。21 は外面が工具によるナデ。22 は体部の膨らみが強く、口縁端部は強く外湾する。外面はヨコハケ後ナデ調整、内面は工具によるナデ調整。23～26 は体部が丸みを持ちながら口縁が直立もしくはやや外反する。23 は外面が粗いヨコハケ、内面をナデで調整する。24 は器壁が厚く、内外面ナデ調整で外面は摩滅と剥離が激しい。25 は外面中位以下が細かいケズリで底部が薄くなり、その他はナデ調整。26 はやや深く、端部が強いナデによりやや外湾する。内外面ともナデ調整だが、外面にミガキ状条痕が認められ、内外面とも黒変する。27 は口径に比して浅い器形で、底部はやや平坦になる。外面はヨコハケ後上位のみナデ調整、内面はタテナデを施す。28 は口縁端部が外湾し、外面は斜位のハケ後ナデ調整、内面は細かいミガキを施す。29 は体部から口縁が直線的に大きく開くもので、鉢と呼ぶべきか。外面は斜位の細かいハケ、内面はナデで調整し、口縁付近が二次被熱により黒変する。30 はミニチュア品の手捏ね土器で、内外面ともナデで指圧痕が残る。底部付近が被熱により黒変する。

31 は支脚で、上部を鉤状に屈曲させるもの。断面台形で、粗いナデツケで全体を成形する。二次被熱の痕跡はないが、内部が剥離により空洞化している。

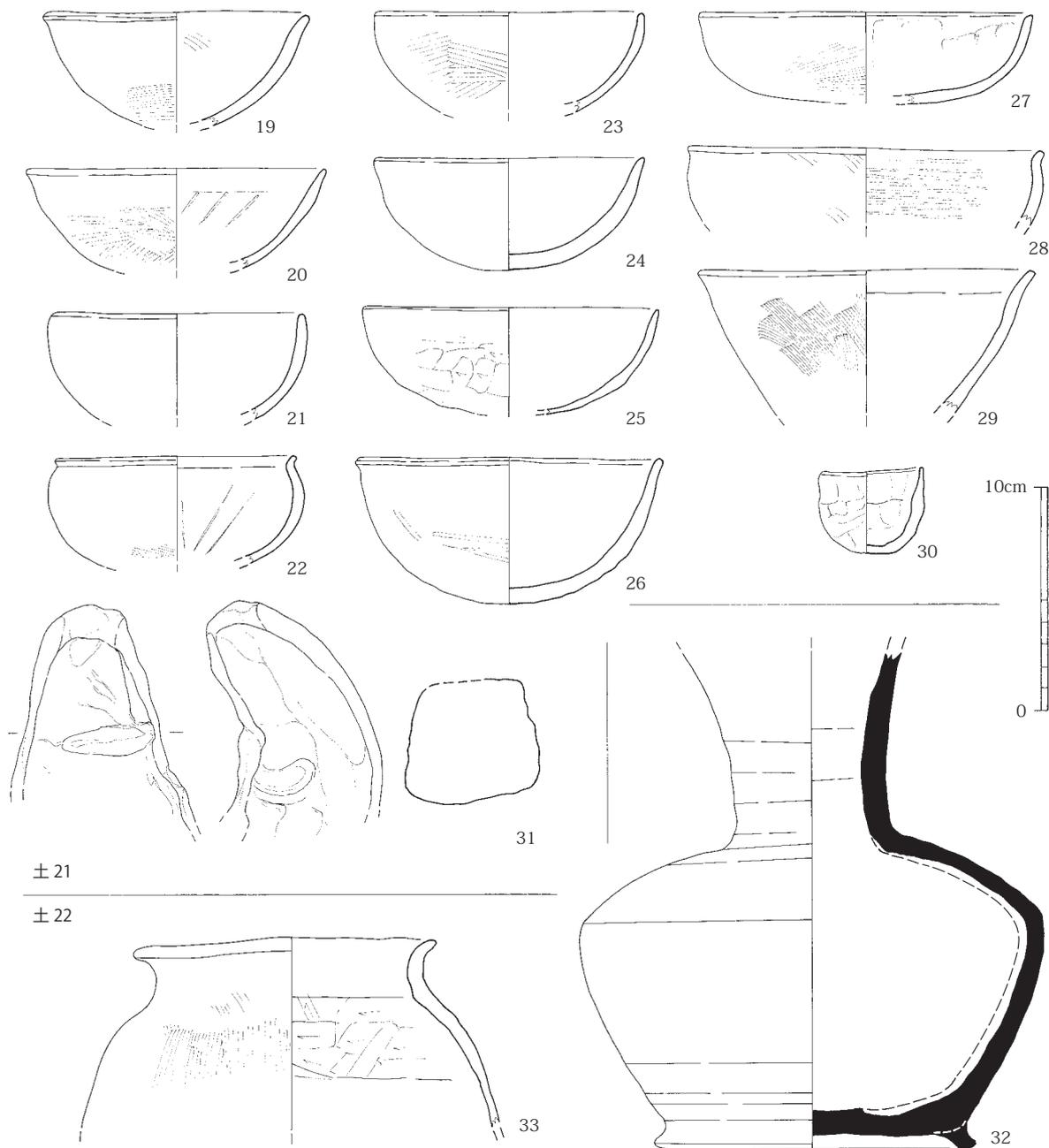
22 号土坑 (図版 24、第 43 図)

Ⅱ 区北端に位置する土坑で、2 号溝の南肩で検出した。長軸約 100cm、短軸約 70cm の不整楕円形を呈し、深さが最深で 110cm 強、底はレンズ状になる。壁は下位が直線的に立ち上がり、長軸方向の上位は緩やかに湾曲しながら開く。埋土は上層に黒色土主体の層が厚く堆積し、中層に軟質の黒色粘土があり、その下は軟質の灰色粘土となる。中層の黒色粘土層から須恵器の長頸壺が横倒しの状態で出土した。

出土遺物 (図版 46、第 42 図 32・33)

32 は須恵器の長頸壺。肩部の稜は緩やかで、胴部はやや丸みを持つ。高台は低く外側に踏ん張る。頸部は回転ナデでやや凹凸があり、胴部は上位が回転ナデ、下位は回転ヘラケズリ、底部は粗いナデで調整する。内面は回転ナデ、底部付近はヨコナデで調整する。器壁が厚く、頸部には粘土接合痕が認められる。

33 は土師器の甕。口縁は短く緩やかに外湾し、外面はタテハケ、内面はケズリで調整する。



第42図 21・22号土坑出土遺物実測図(1/3)

23号土坑 (図版24、第43図)

Ⅲ区南東隅、12号土坑の南に位置する土坑で、12号を切る先後関係にある。掘削途中で壁が崩落し、再度掘削を行ったが更に崩落したため安全性を考慮して全掘しなかった。このため平面図・断面図ともに完成していない。直径約90cmの円形を呈し、深さは120cm以上で、壁はほぼ直立すると考えられる。埋土は上層に黒茶色土が入るが、以下は一貫して分層の困難な黒色粘土主体で、木質を多量に含有していた。また底付近に大石が投棄されていた。

出土遺物 (第44図1～8、第87図4・5)

1～4は糸切り底の小皿。口径9.0～9.2cm、底径6.3～7.6cm、器高1.1～1.4cm(復元を含む)、いずれも外底部に板状圧痕は認められない。1の外底部は一部被熱により赤変する。

5は糸切り底の坏底部で、外底部に板状圧痕が認められる。内外面ともナデ調整。

6は小型の甕で、器壁が薄く口縁が外反する。内外面ともハケ調整。

7・8は瓦器塊。7は内面をヨコミガキし、外面はヨコナデ、口縁部が黒変する。8の底部も内面にミガキが残り、外面を燻す。

第87図4・5は木製の底板である。4は一枚板で底板をなすものと考えられ、1ヶ所に径0.25cm、長さ1.5cmの孔が穿たれ、中に留め具が残る。5は4と同じく一枚板で底板をなすものと考えられ、1ヵ所に径0.25cm、長さ1.1cmの孔が穿たれる。

24号土坑（図版25、第43図）

Ⅲ区中央、64号土坑の西に位置する土坑である。直径約90cmの円形を呈し、底部付近は中央が一段低くなる。深さは最深で約200cmで、底はややレンズ状になる。壁は上位は急な傾斜で直線的に立ち上がるが、下位はフラスコ状に大きく膨らみ、その下は窄まって底部は40～50cmの楕円形となる。埋土は上層隅に焼土小塊の多い層が縦に入るが、後世の杭と思われる。上層には黒茶色土主体層がレンズ状に堆積し、その下は分層困難な軟質の黒色粘土主体層となる。この層には木質や植物質が多く含まれ、遺物もこの層からの出土が多い。最下層は基盤土のグライ土化した青灰色粘土に黒色粘土が混入した層が堆積する。

出土遺物（図版46、第44図9～19、第87図1）

9～13は糸切り底の小皿で、12以外は板状圧痕が認められる。口径9.2～9.8cm、底径6.6～7.8cm、器高0.9～1.2cmですべて扁平。11は内外面に、12は内面に煤が付着する。

14・15は糸切り底の土師器坏。14は板状圧痕が認められる。直径16.8・17.6cm、底径10.0・11.6cm、器高3.3・3.9cm（復元を含む）。平底で体部はやや内湾する。15は底部に煤が付着する。16は口縁が開き、体部と底部の境が丸みを持つもので、残存部には糸切りは認められない。外底部に漢字と平仮名が混在する墨書が認められ、「称きね尔（に）」と読めるが意味は不明である。前後にさらに文字のあった可能性が考えられる。

17は瓦器塊底部片で、内外面とも粗いミガキを施す。

18・19は白磁の碗。18は口縁が大きく開いて端部が外反し、釉は灰色味を帯びる。19は端部を玉縁状に作るⅣ類で、釉は灰色味を帯びる。

第87図1は燃えさしである。棒状に四角形に加工している。下端から6cmほどが炭化する。

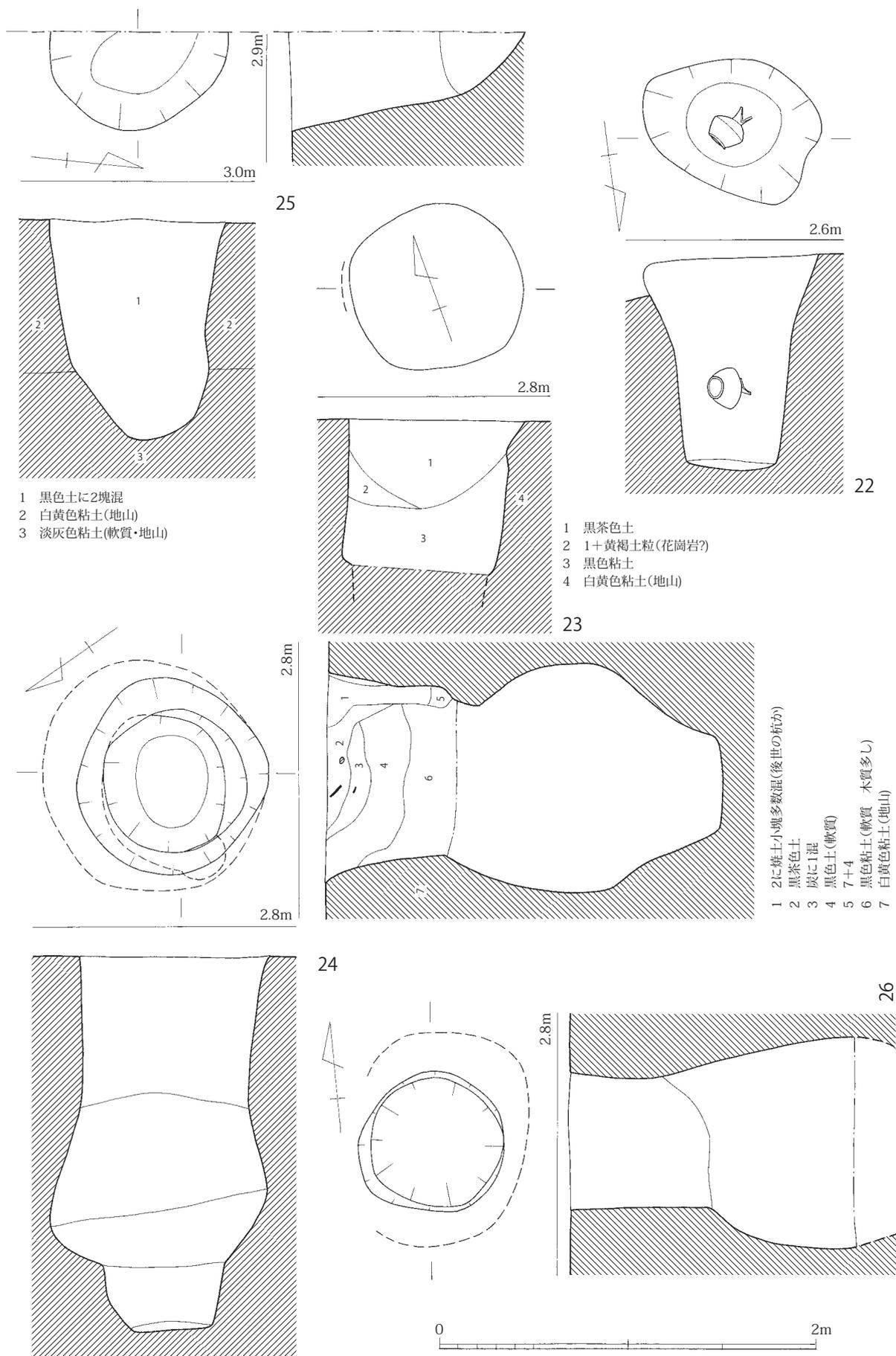
25号土坑（図版25、第43図）

Ⅲ区西端、32号土坑の西に位置する土坑で、約半分が調査区外に広がる。検出部分は直径90cm弱の半円形で、深さ約130cmまでを確認できた。壁は広がりながら立ち上がるが、最深部は未調査であるため底の形状は不明である。埋土は上層に茶灰色土が被り、その下は黒色粘土に基盤土の白黄色粘土ブロックが入る斑層となる。最下層は基盤土のグライ土化した青灰色粘土に黒色粘土が混入する層となる。

出土遺物（第44図20～23）

20・21は甕で、20は逆L字の口縁部小片。21は平底の底部片で、外面はタテハケ、内面はナデで調整して指圧痕が残り、内面に炭化物が付着する。

22・23は器台裾片。ともに外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整し、23はその上をケズリ調整する。



第43図 22～26号土坑実測図(1/30)

26号土坑（図版26、第43図）

Ⅲ区の西寄り、15号土坑の東に位置する土坑である。直径約75cmの円形を呈し、深さは1.5m以上であるが、調査途中で壁面が崩落して再掘削には危険が伴ったため、全掘できなかった。壁は上位が直線的に立ち上がるが、下位はフラスコ状に大きく膨らむ。埋土は最上層に焼土小塊を含む暗茶色土が被り、上層には基盤土の白黄色粘土のくすんだ土が堆積する。その下は軟質の黒灰色粘土主体層が厚く堆積するが、下層上部に基盤土に似た青灰色粘土があったため、基盤土と考えて一時掘削を終了した。しかし若干のくすみが確認できたためさらに掘り下げたところ、黒灰色粘土の堆積が認められ、その下が本来の基盤土である青灰色粘土となった。上部の青灰色粘土は壁の崩落と考えられ、その下の黒色粘土層が薄いことから、掘削後短い期間で壁が崩落したと思われる。下位のフラスコ状の形状は崩落による抉れであろう。

出土遺物（第44図24）

24は口縁が大きく開く染付けの小皿で、断面逆三角の高台を有する。内面は口縁部に一条と見込みに2条の圏線が廻り、外面は高台に圏線が廻る。体部には草花文様らしきものが描かれるが、全面に墨のような黒色の付着物があるため内容は不明である。

27号土坑（図版26、第45図）

Ⅲ区北寄り、1号溝の南、31号土坑の東に位置する土坑である。直径約80cmの円形を呈し、深さ約200cmで底はレンズ状を呈する。壁は上位が直上に立ち上がるが、下位はフラスコ状に広がる。埋土は最上層に暗茶色土が被り、その下は軟質の黒色土で、中層以下は黒色粘土と黄色粘土塊の斑層となる。下層は基盤土のグライ土化した青灰色粘土に黒色土ブロックが混入した層になり、最下層には竹や木屑が大量に堆積する。

出土遺物（第44図25～27）

全て瓦器。25は片口のすり鉢で、摩滅と剥離が激しい。一部粘土の接合痕が残る。26・27は火舎で、26は断面台形の圏線を廻らせ、その上に四菱のスタンプを廻らせる。27は底部片で体部下位に削り出しによる圏線を廻らせる。底部には剥離痕があり、脚部の痕跡と思われる。

28号土坑（図版27、第45図）

Ⅱ区北側中央、36・38号土坑に西接する土坑である。長軸約95cm、短軸約80cmの楕円形を呈し、深さ約85cmと調査区内ではやや浅めの土坑である。底は平坦であるが上方よりやや狭くなる。壁は上位が直上に立ち上がるが下位はやや湾曲する。埋土は全体的に茶灰土主体であるが、中位から底にかけて軟質の淡茶灰色粘土が土嚢状に丸く入る。その中には木質が多く包含され、底部直上には中央の腐食した丸太状の木があった。腐食が激しいため取り上げはできなかったが、自然木と思われる。全体的に一括で埋められたと捉えられる。

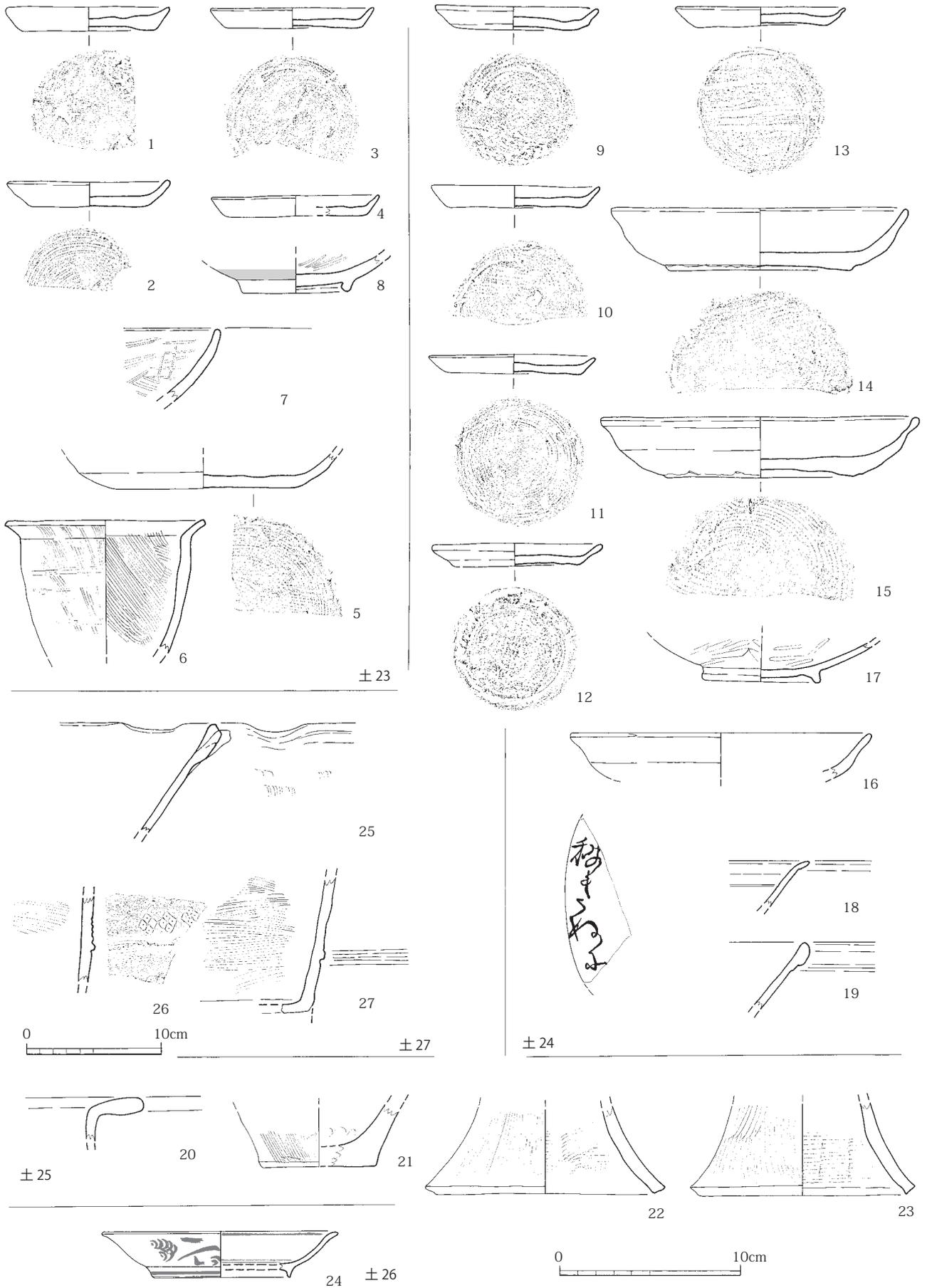
出土遺物（第46図1・2）

1は坏で、底部に僅かに糸切り痕が残る。器高が高く体部が大きく開くタイプか。

2は陶器の盤か。体部はやや内湾し、口縁は玉縁状に仕上げる。薄い褐色の釉がかかり、内面は口縁部以下に釉が垂れた状態である。外面下位は露胎で赤褐色の化粧土が施される。

29号土坑（図版27、第45図）

Ⅲ区東寄りに位置する大土坑である。8・9号土坑を切る先後関係にあるが、すべて最上層



第44図 23～27号土坑出土遺物実測図(25～27は1/4、他は1/3)

に茶灰色土が被っていたため掘削当初にプランの検出ができず、正確な上面プランは不明である。現存する形状では直径 200cm 前後の不整円形を呈し、地表下 80cm ほどにテラスを有する。壁面が剥離しやすい粘質土であったことから掘削途中で剥落が始まり、掘削に危険が伴う事から底までの掘削を断念した。このため正確な深さは不明である。確認できた深さは約 200cm で、ピンポールを刺したところ更に数十 cm は下がると思われる。埋土は最上層に茶灰色土が被り、その下にもやや黄色が飼った茶灰色土が厚く堆積していた。下層は軟質の灰色粘土主体で、その下には木質や煤を多量に含んだ黒色土層があった。今回の調査区内では特異な規模と形状であるが、北側に位置する西蒲池池田遺跡において、同時期の同様の土坑を 1 基検出している。

出土遺物（第 6 図 3・4）

いずれも瓦質土器の小片である。3 は鍋の口縁部か。口縁は大きく開き、端部が肥厚する。外面はヨコナデで成形するが、その後に指圧されるため器壁に凹凸が多い。内面はヨコハケ調整する。外面は被熱して煤が付着する。4 も同質のものであり、同一個体の可能性もある。底部付近で緩やかに屈曲し、外面はヨコナデと指圧痕が認められ、底部付近はタテヨコの細かいハケで調整する。内面はヨコナデ調整。外面が被熱して煤が付着するが、屈曲部の上約 1cm から下は煤が付着しない。

30 号土坑（図版 28、第 45 図）

Ⅱ区北側の西端に位置する大土坑で、全体の約 1/2 が調査区外に広がる。検出可能範囲で直径 170cm 前後の不正円形を呈し、深さ約 150cm で底はほぼ平坦になる。壁は北側が緩やかに立ち上がるが、東と南はやや急な傾斜で立ち上がり、下位は窄まって底は狭い。中位はやや膨らむ部分もあるが崩落によるものか。埋土は中層まで炭を包含する黒色土がレンズ状に堆積し、下層は軟質の黒色土で貝殻や木質などの有機物を多量に包含する。

出土遺物（図版 46、第 46 図 5～10）

5 は須恵器の坏で、口径 11.6cm、底径 7.6cm、器高 3.8cm と小型のもの。高台は低く断面逆台形で、底部はナデを施す。

6～10 は土師器。6・7 は大型の坏で、双方とも外面は丹塗りしてミガキで成形する。体部はほぼ直立で口縁端部はやや外反する。7 はほぼ完形品で、内面もミガキで調整し、外底部はヘラケズリで板状圧痕が認められる。

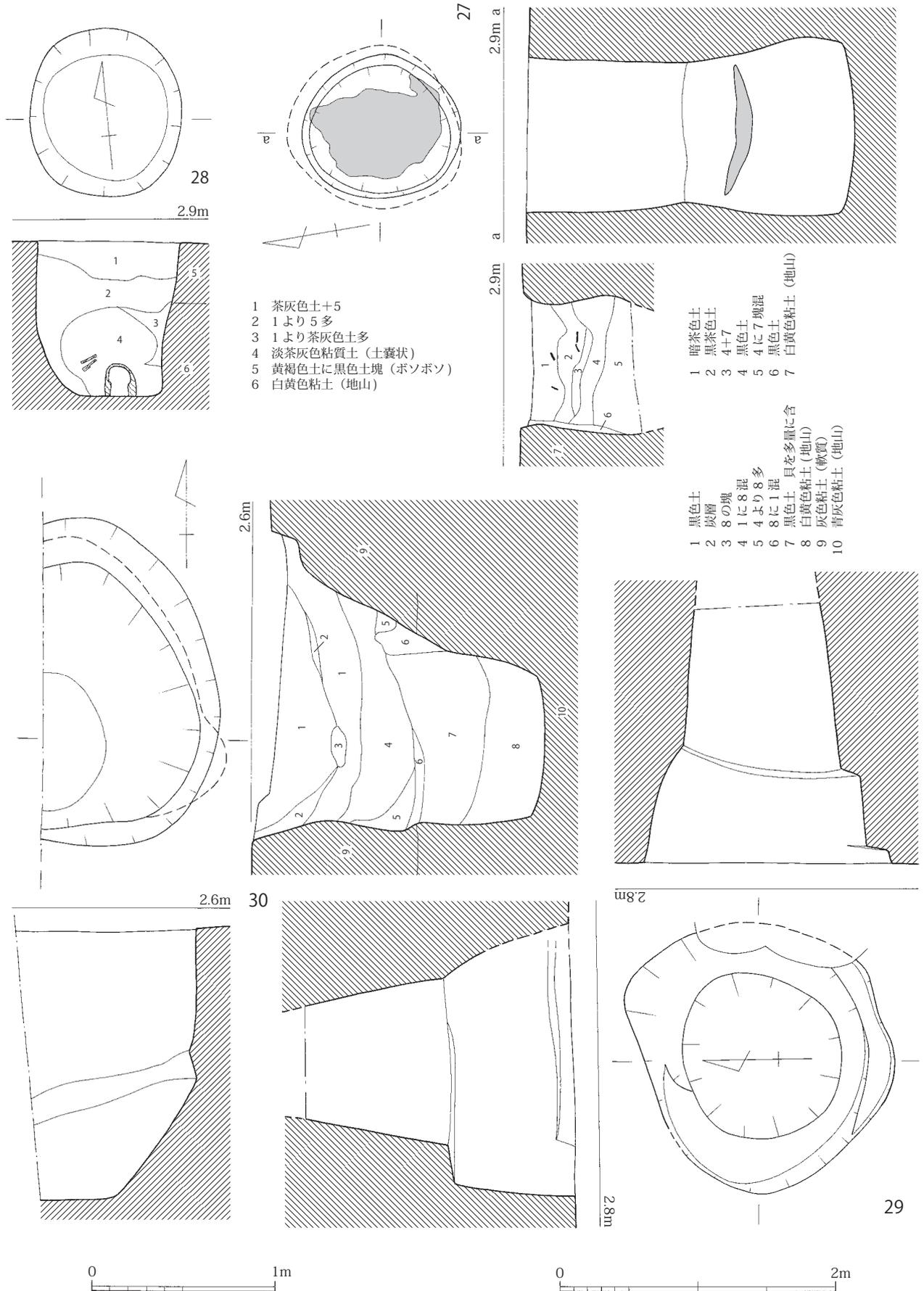
8・9 は皿で、内外面ともナデ調整、8 は底部の作りが 7 の坏と近似する。9 は外底部はヘラケズリで板状圧痕が認められる。

10 は小型の甗で、外面はタテハケ、内面はタテケズリで調整する。

31 号土坑（図版 28、第 47 図）

Ⅲ区北西寄りに位置する土坑で、59 号土坑の北に位置する。長軸 170cm 弱、短軸 130cm 弱の楕円形を呈し、わずかに調査区外に広がる。深さは 20～30cm と浅く、底は凹凸が激しい。壁は緩やかに立ち上がり、底との境は不明瞭である。埋土は淡黄色粘質土主体で、僅かに黒色粘土が混入する。調査区内で基盤土のレベルが最も高い部分であり、上面は削平されている可能性が高い。

出土遺物（第 46 図 11～17）



第 45 図 27 ~ 30 号土坑実測図 (29 は 1/40、他は 1/30)

11～15は甕。11・12は逆L字口縁で、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。13は丸みを持つ三角口縁で、口縁やや下に沈線が廻り、以下はタテハケ調整する。14・15は底部片で、上げ底になる。外面はタテハケで、14はハケ目が細かく15は粗い。内面は摩滅が激しいが、15の内面には指圧痕が認められる。

16・17は高坏。16は深い碗型の坏部を有し、口縁端部は肥厚して断面三角にする。内面にはミガキを施し、口縁部外面下には指圧痕が明瞭に残る。また体部中位には横位の工具痕が認められる。17は坏底部から脚部で、内外面丹塗りを施し、内底部と脚部外面にミガキを施す。

32号土坑（図版29、第47図）

Ⅲ区西寄り、61号土坑の西、25号土坑の東に位置する土坑である。北側を17号に切られるため正確なプランは不明であるが、長軸140cm以上、短軸130cm弱の楕円形を呈する。深さは最深で30cm弱で底はほぼ平坦になる。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は淡黄色粘質土主体で、基盤土と近似する。完形品に近い器台を含む土器片がまとまって出土した。

出土遺物（図版46、第48図1～7）

1～4は甕。1は丸みを持つ三角口縁で、内外面とも斜位のハケ調整、内面はその後ナデで調整する。2はT字口縁の甕で、器壁が薄く口縁下に断面M字の凸帯を廻らせる。外面はヨコミガキで、口縁と凸帯の間に波状の暗文を廻らせ、口縁平坦部に放射状の暗文を廻らせる。3・4は「く」の字に屈曲する口縁で、3は端部が肥厚する。いずれも内外面ともタテハケ、4はその後ナデで調整する。5は甕棺に使用される丸みのある甕の口縁部小片で、外面は細かいタテハケ、内面は摩滅するがナデ調整と思われる。

6・7は筒型の器台。6は上下とも端部が大きく開いて接地部分は跳ね上がり、7はややすくで端部は断面M字になる。いずれも外面と内面端部付近はヨコハケ、内面中央はヨコナデ後工具によるタテナデで調整する。

33号土坑（図版28、第47図）

Ⅲ区中央東寄り、40号土坑の東に位置する土坑で、40号を切る先後関係にある。長軸約240cm、短軸約100cmの不整長楕円形を呈し、深さは25～45cmと凹凸が激しい。東中央にピットを有する。土層から見ると二つの土坑が重なっていた可能性も考えられるが、一括で掘削した。南側の埋土は軟質の淡黄色粘土に基盤土の灰色粘土塊が入る斑土で、北側は淡灰色粘土主体の土層となる。

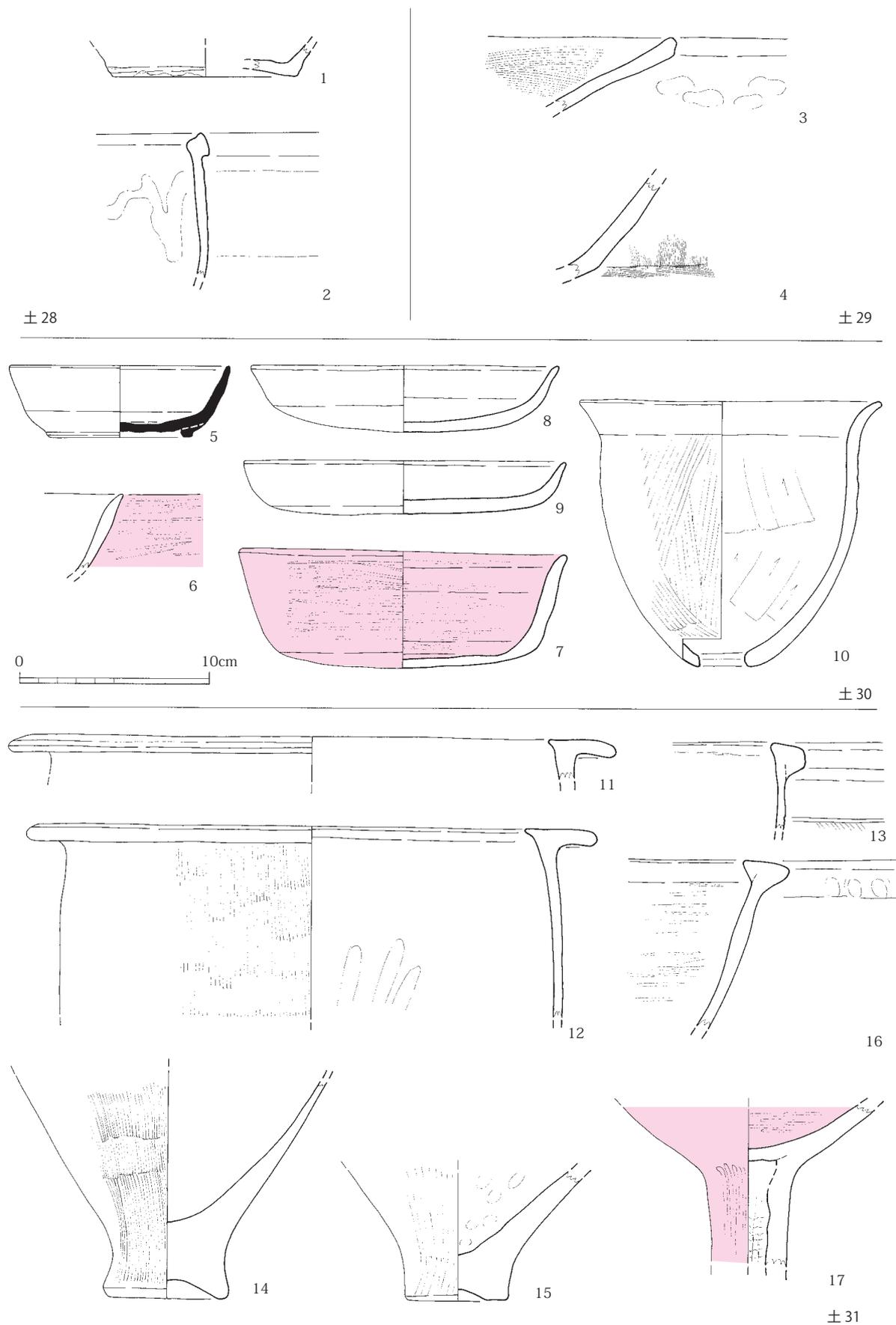
出土遺物（第48図8～12）

8は甕の蓋口縁部。裾が大きく開き、端部はやや肥厚する。外面はタテハケ後ナデで調整、内面は放射状にハケで調整し、工具の単位が認められる。

9は蓋付きの短頸壺で、口縁が短く頸部が締まり、胴が大きく張る。口縁部は平坦面を有し、穿孔がある。外面はヨコナデ、内面は不定方向のナデで調整する。

10・11は甕で、10は「く」の字に屈曲する口縁で、内外面ともタテハケ調整。外面は煤が付着し、被熱して黒変する。11は平底の底部片で、外面はタテハケ、内面はタテナデで調整する。

12は筒型の器台で、器壁の厚さは均一で端部のみやや肥厚し、裾が大きく広がる。外面はタテハケ、内面は工具によるヨコナデで調整し、上下の屈曲部に指圧痕が認められる。外面



第 46 图 28 ~ 31 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

には煤が付着する。

34号土坑（図版29、第47図）

Ⅲ区東寄り、73号土坑の西に位置する土坑である。長軸190cm弱、短軸130cm弱の不整楕円を呈し、南が深く最深で約50cmを測り、底は凹凸が激しい。北側にテラスを有し、南が一段深くなることから2つの遺構と認識して調査していたが、最下層の埋土が連続する事から1遺構とした。埋土は南側を主体に上層に黒色土が厚く堆積し、下層は軟質の淡灰色粘土が入る。

出土遺物（第49図1～4）

1は須恵器の坏蓋の口縁部片。浅い返りを有し、天井部肩は強く屈曲する。内外面とも回転ナデ調整。

2～4は土師器。2は壺で、口縁が開く。内外面ともヨコミガキ調整で丹塗りを施し、体部外面中位から底部にかけて手持ちヘラケズリする。胎土は極めて精緻で、淡橙色を呈する。

3・4は甕口縁部で、3は口縁端部が、4は頸部が緩やかに外反する。いずれも外面タテハケ、内面はタテケズリで調整する。

35号土坑（図版30、第47図）

Ⅲ区中央、37号土坑の西側に位置する土坑で、37号に切られる先後関係にある。長軸約370cm、短軸約240cmの不整楕円形を呈し、深さ約35cmで底はほぼ平坦になる。壁は緩やかに立ち上がるが、南側はやや急な傾斜となる。土層図の1・2層は37号土坑の埋土で、埋土のほとんどは暗茶色土と黄色粘土ブロックの混じった斑土になり、最下層近くには煤が堆積する。

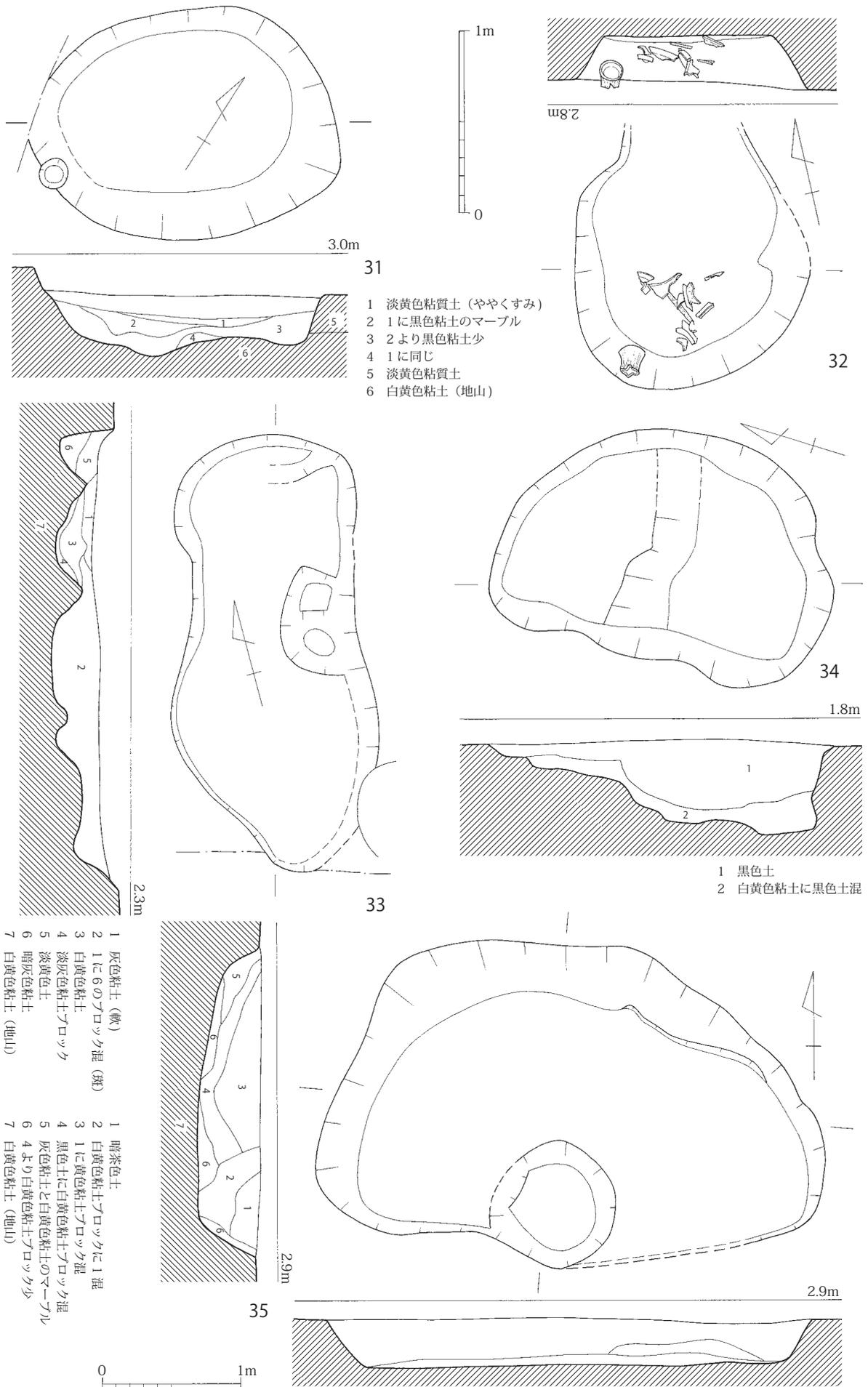
出土遺物（第49図5～21、第84図2・9・15、第85図4・13）

下層遺構を併せて掘削してしまったため、出土遺物の時期が混在するが、遺構の前後関係が不確定なため全て掲載する。

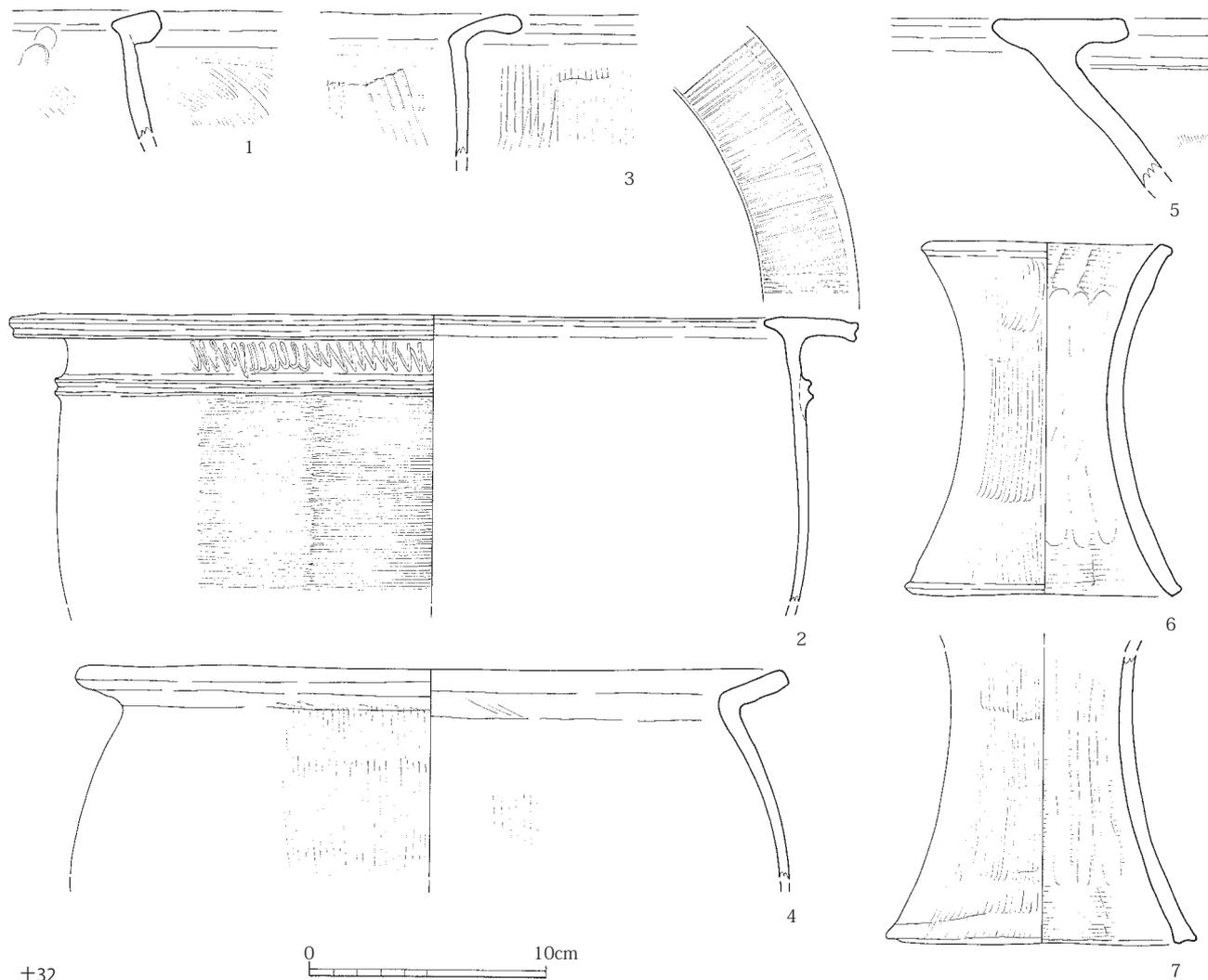
5～7は壺。5は口縁が外反し、胴が大きく張る。外面はヨコナデ後タテナデで調整し、内面は工具によるナデ調整。6は口縁が強く外反する短頸壺で、内外面タテハケ後にナデで調整する。7は広口壺口縁部片で、端部にキザミを廻らせる。

8～12は甕。8は弥生土器の口縁で、外面は細かいタテハケ、内面はナデで調整する。9は器壁が薄く、外面は摩滅で調整不明、内面は口縁から頸部にかけてヨコハケ、以下は斜位のハケで調整する。10は頸部に断面三角の凸帯を有し、内面には粘土接合痕が残る。11・12は口縁が厚く、頸部内面の稜が顕著である。外面はタテハケ、内面は斜位のハケで調整し、11は口縁端部と頸部にキザミを廻らせる。

13～15は口縁端部を口縁部が屈曲して立ち上がり、端部が外傾する高坏。13は口縁が直立して外面に明確な稜がつく。口縁部付近はヨコナデ、外面はヨコハケ、内面はタテハケで調整する。14は端部が緩やかに外反する。内外面ともミガキで、内面屈曲部にハケ目が残る。胎土が精緻で橙色を呈する。15は端部の屈曲が明瞭。外面は口縁部付近ヨコナデ、以下は細かいヨコハケ後に粗いタテナデで調整する。内面は口縁端部付近にヨコ及び斜位のハケ目が残るがその後ヨコナデ調整し、坏底部は放射状のミガキを施す。16は高坏脚部で、外面はミガキで丹塗りを施し、内面はタテナデ調整する。胎土が極めて精緻で、黄灰色を呈する。

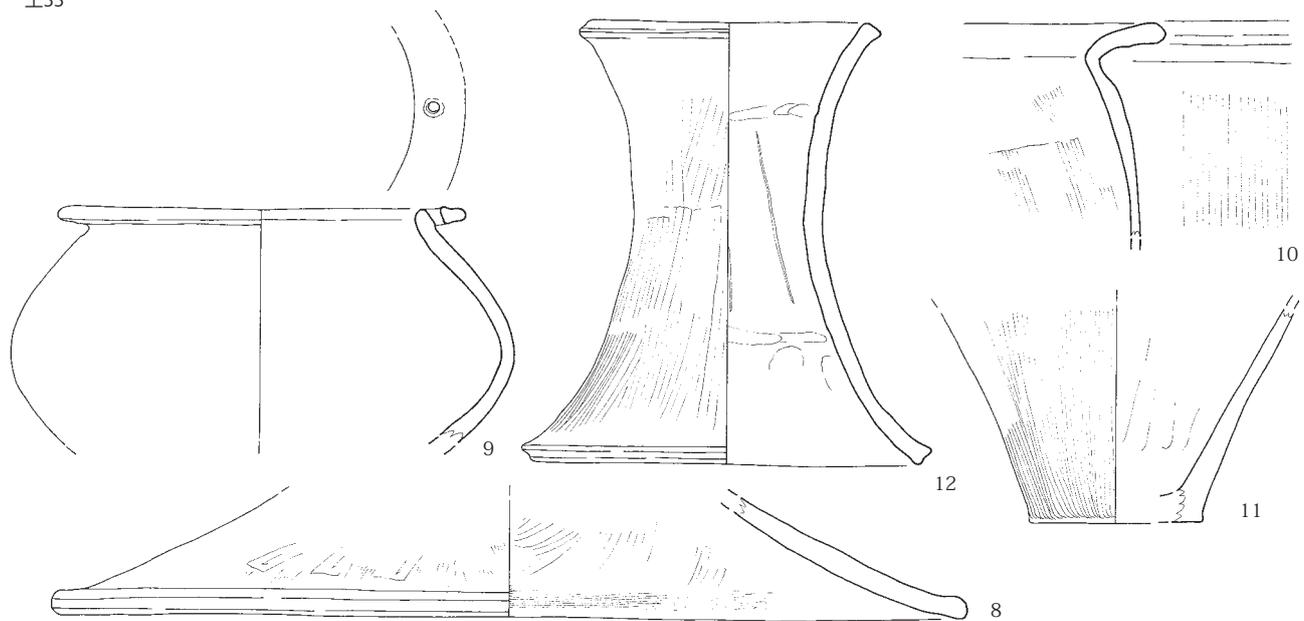


第47図 31～35号土坑実測図 (35は1/40、他は1/30)

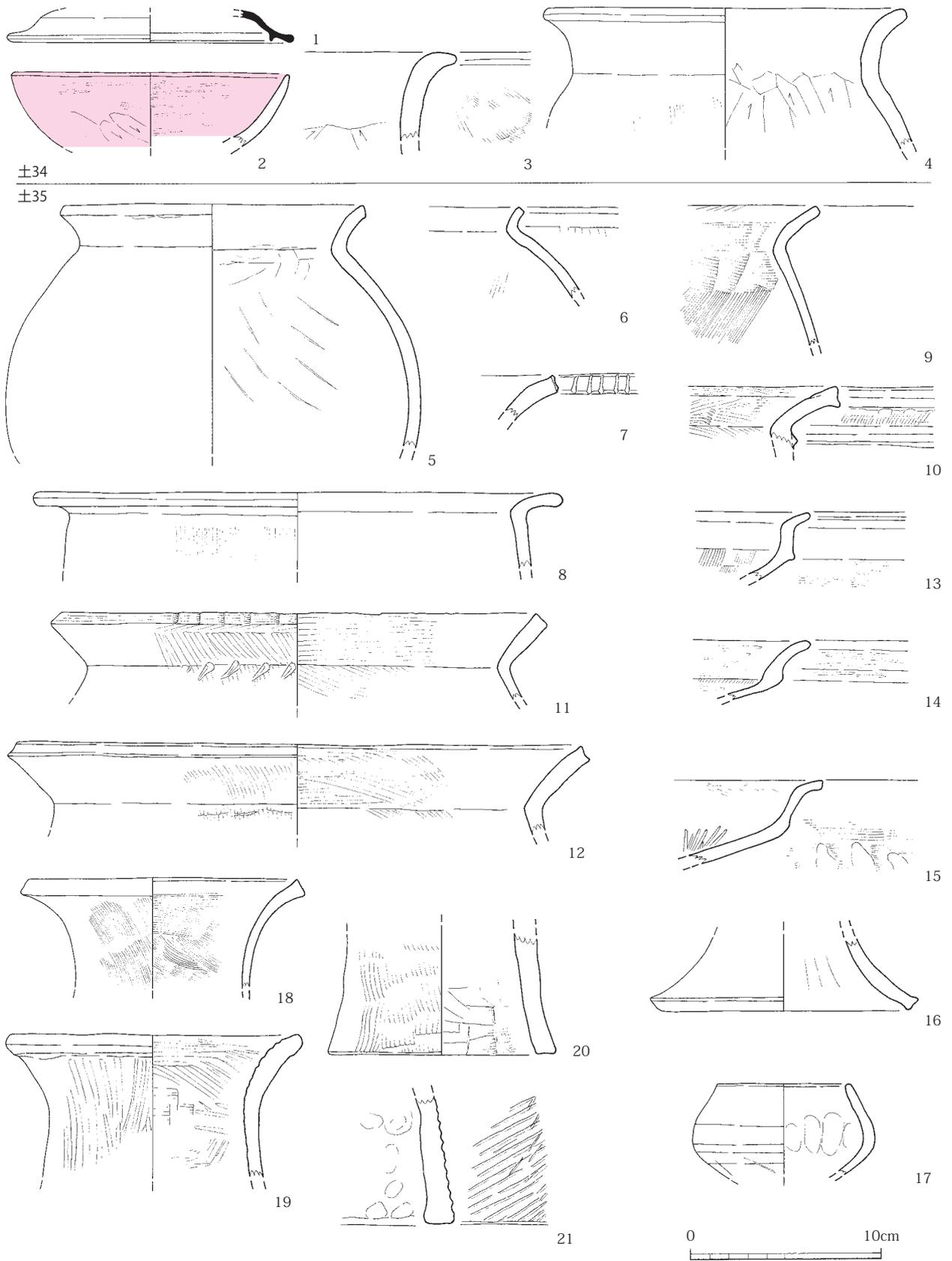


±32

±33



第 48 图 32·33 号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第 49 图 34·35 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

17は小型のガラス型の鉢で、口縁が内湾して胴部が張る。外面はヨコナデ、内面はタテナデで調整し、最大径部分に押し出しの指圧痕が残る。外面は二次被熱により赤変する。

18～21は器台。18・19は口縁が開く筒型で、18は端部が肥厚する。内外面とも斜位のハケ、口縁部付近をヨコナデで調整する。19は括れが上位にあり、端部が丸く肥厚する。外面はタテ、内面は斜位の粗いハケで調整し、中位はその後ナデ調整する。20・21は裾部がほぼ直立するもの。20は外面が粗いタテハケ、内面は工具によるタテナデ、裾部はヨコナデで調整する。21は外面に右上がりのタタキが認められ、内面はタテナデで端部に指圧痕が認められる。二次被熱により赤変しており、支脚の可能性もある。

第84図2は土製投弾である。指ナデにより成形し、紡錘形を呈する。焼成は良好で、灰白色を呈する。9は土師質の脚部か。前面指ナデにより調整を行い、直線的に仕上げる。焼成は良好で、黄灰色を呈する。

15は石庖丁である。背部はやや膨らむものの直線をなし、外湾刃半月形を呈する。外孔1.2cm、内孔0.45cm、背孔1.4cmを測る。端に剥離によって抉りを作り出す。片岩製である。第85図4は砥石である。上面を砥面とし、下面の一部は研磨を行う。頁岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。13は砥石である。両面を砥面とし、ともに中央部にわずかに叩きの痕跡が認められる。砂岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。

36号土坑（図版30、第50図）

Ⅱ区中央東寄り、38号土坑の南に位置する土坑で、38号を切る先後関係にある。長軸約180cm、短軸約150cmの楕円形を呈し、底はほぼ平らになる。深さは10cm前後しか残存しておらず、埋土は煤や炭化した植物繊維を含んだ黒色土が充填されていた。包含される遺物は弥生土器小片のみであるが、中世の38号土坑を切る為、それ以降のものと考えられる。

37号土坑（図版30、第50図）

Ⅲ区中央、35号土坑の東に位置する土坑で、35号を切る先後関係にある。長軸360cm、短軸約140cmの楕円形を呈し、深さ10～20cmで東側が一段下がるが、底はほぼ平坦になる。壁は緩やかに立ち上がると思われる。埋土は煤や木質を含んだ黒色土がほぼ全体に充填されていた。

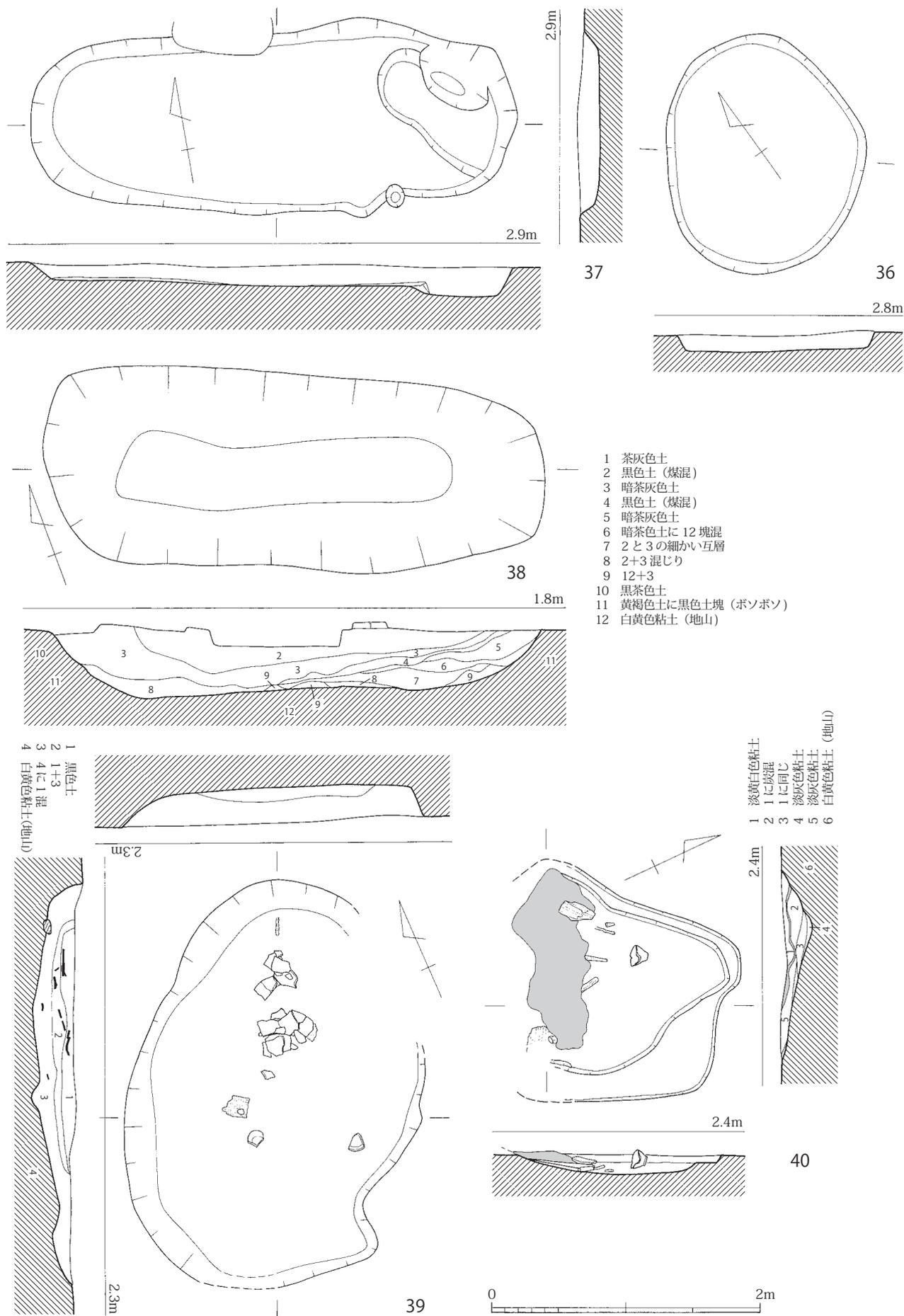
出土遺物（第51図1～6）

すべて糸切り底の土師器。1は小皿で、口径10.0cm、底径7.4cm、器高1.8cmを測る。板状圧痕は認められない。

2～6は坏で、2・4に板状圧痕が認められる。口径12.4～15.8cm、底径8.0～10.2cm、器高2.5～4.1cm(復元を含む)を測る。2は口縁がやや直立し、器高も深く器壁が厚い。やや古い様相か。3は口縁端部外面に強いナデによる段を有する。4は口縁が開き底径が小さい。5は上底で口縁がやや直立し、外面に回転ナデによる稜線が顕著である。6も外面の稜線が顕著で、口縁が大きく開き底径が小さくなる。

38号土坑（図版30・31、第50図）

Ⅱ区に位置する土坑で、28号土坑の東に位置し、36号土坑に切られる先後関係にある。長



第 50 図 36 ~ 40 号土坑実測図 (1/40)

軸約 370cm、短軸約 150cm の長楕円形を呈し、深さは最深で約 50cm で底はほぼ平らになる。壁は緩やかに立ち上がり、底部との境は不明瞭である。埋土は上層に茶灰色土が被るが、煤や炭化した植物繊維を含む黒色土と暗茶灰色土の互層が主体で、最下層はこの 2 層が細かい互層で水平堆積している。36 号と先後関係があるが、埋土の黒色土は共通するものである。

出土遺物（図版 46、第 51 図 7～20）

7～19 は糸切り底の土師器。7～10 は小皿で、口径 6.8～8.4cm、底径 4.5～6.3cm、器高 1.5～1.8cm（復元を含む）を測る。いずれも板状圧痕は認められない。10 は大きく変形し、外底部の糸切りは粗く、また外底部 1 条の縄目痕がある。

11～19 は坏。口径 10.5～13.4cm、底径 5.8～8.3cm、器高 2.8～3.7cm（復元を含む）を測る。19 以外は板状圧痕が認められない。11・12・15 は口縁がやや直立するが、他は口縁が開き、底径が小さくなる。特に 16 は口径と底径の差が大きく、外面には工具痕が残る。17 は全体に作りが粗い。19 の外底部の板状圧痕は通用のものより凹凸の幅が広く段差が激しい。また、板を綴る縄の痕跡も認められる。

20 は濃い緑色釉の磁器で、外面に片彫りの蓮弁が配され、器形は丸い坏型になるか。釉は厚く光沢がある。

39 号土坑（図版 30・31、第 50 図）

Ⅲ区の東寄り、33 号土坑の西に位置する土坑である。検出当初は灰色粘土に薄い炭が混じった土壌が散乱している状態で、明確なプランを確認できなかった。これらを除去後に確認したプランは 160～180cm の不整な方形に近い形で、深さは最深で約 25cm、底はレンズ状になり一部深くなる。埋土は上面に基盤土に近似した淡黄白色粘土が被り、その下には炭層があり、その下は炭を含有する軟質の淡灰色粘土主体の層になる。上面が削平されているらしく、炭層は部分的にしか確認できなかったが、本来は更に南側に広がっていたと考えられる。内部から完形品に近い鉢や木片などが出土している。

出土遺物（第 51 図 21～23）

全て弥生土器である。21 は壺の口縁。強く外湾し、端部が肥厚する。外面はヨコナデ、内面はヨコミガキで調整し、全体的に摩滅が激しい。

22・23 は甕の底部。いずれもやや上底で、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。22 の内底部には煤が付着する。

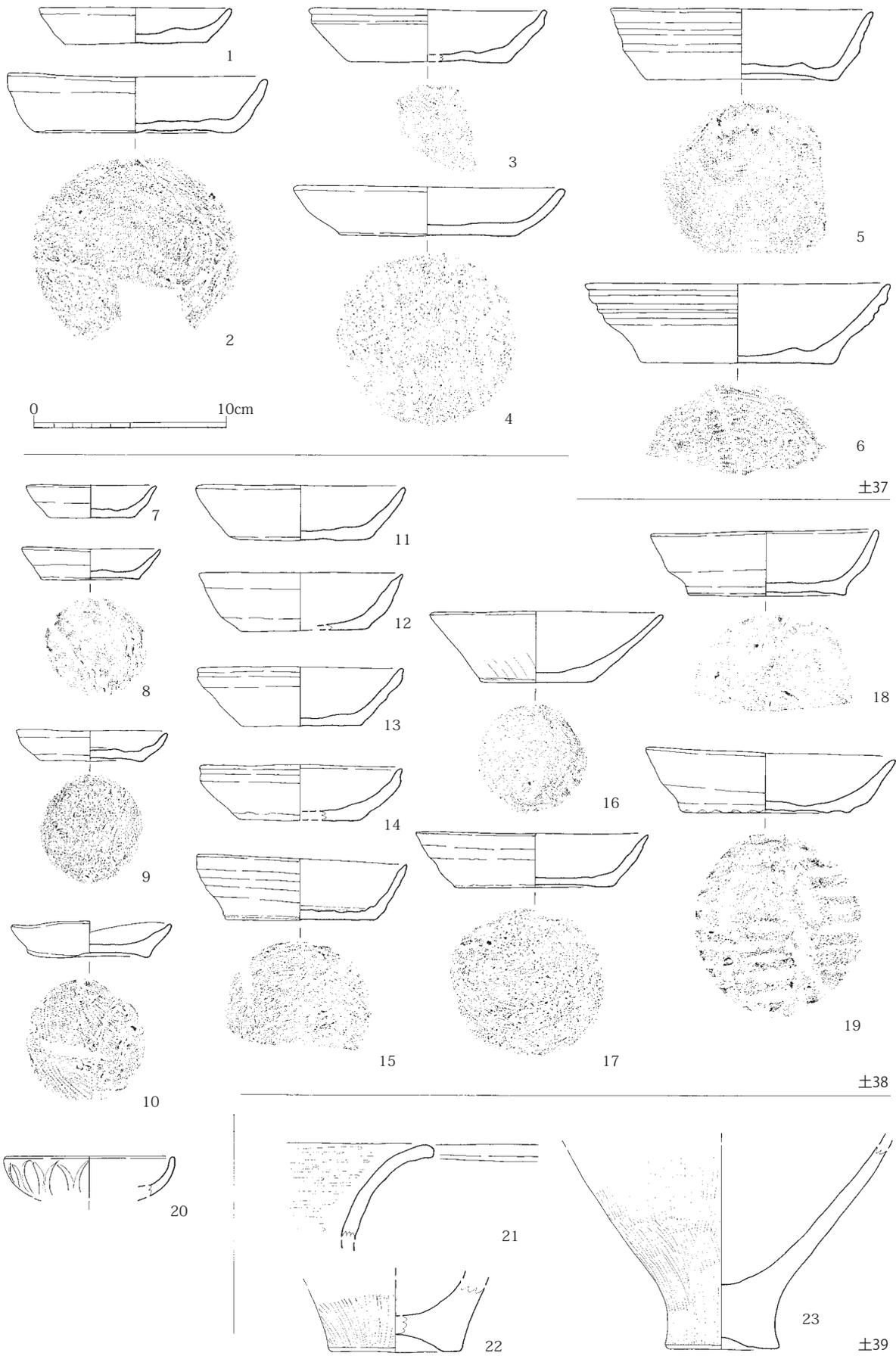
40 号土坑（第 50 図）

I 区南東隅、2 号溝の北に位置する土坑である。長軸約 300cm、短軸約 220cm の不整大楕円に復元でき、深さは 15～30cm で、底は凹凸が激しい。壁は緩やかに立ち上がり、特に東は底との境が不明瞭である。埋土は黒色土が主体のレンズ状堆積で、基盤土小塊が若干混入する。上層を中心に、土坑中央付近から土器片がまとまって出土している。

出土遺物（第 52 図、第 84 図 21、第 85 図 1～3・8、第 86 図 3）

1～6 は須恵器。1 は坏蓋で摘みを欠損する。口縁端部の返りは緩やかで、焼成が甘く生焼けである。

2～4 は坏で、2・3 は低い逆台形の高台を有する。2・3 は外底部はヘラケズリで調整し、2 は底部中央が接地する。4 は高台を有さず、底部は丸みを持つ。外底部は手持ちのヘラケズ



第 51 图 37 ~ 39 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

りし、ケズリと体部の回転ナデの境をヨコナデで調整する。形状・調整ともに土師器の様相が濃く、生焼けであるため土師器の可能性もある。

5は脚部片で、器台になるか。裾部が強く屈曲し、内外面とも回転ナデ調整。

6は大甕で、口縁部と底部を欠く。胴部最大径はやや上位にあり、外面は細かい格子タタキ、内面には同心円文当て具痕が認められる。内面口縁部から外面肩部まで自然釉が被り、外面は焼き膨れが多い。

7～12は土師器。7～10は坏で、9は摩滅が激しいが、全て体部が回転ナデ、内底部がナデ、外底部が手持ちヘラケズリで調整する。すべて底部に丸みを持つが、特に10は丸みが大きく器高も浅く、皿状を呈する。また、内底部に「×」のヘラ描きがある。

11は甕で、外面はタテハケ、内面は縦位のヘラケズリで調整する。12は把手付きの甕の上半部。口縁は強く外湾し、頸部は締まって胴部が大きく張る。胴部上位に把手を付ける。外面は把手部分を含めてタテハケ、内面は口縁部がナデ、体部は強いタテケズリで調整し、凹凸が激しい。

第84図21は鉄鏝か。断面四角形を呈し上部に向かって開く。

第85図1は砥石か。断面三角形を呈し、下部中央に径0.4cmの孔を穿つ。上面には稜が通っており、石戈の再利用品である可能性もある。粘板岩製である。2・8は砥石である。2は両面および側面を砥面とし、断面長方形を呈する。頁岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。8は両面および側面を砥面とし、断面四角形を呈する。上面がより研ぎ減りする。頁岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。第86図3は石斧か。上下面を研磨しており、側面はハ字状に開く。砂岩製である。

これ以降は小土坑となる。

41号土坑（図版31、第53図）

遺構の少ないI区西寄り、30号土坑の北に位置する。直径80cm強の円形を呈し、深さは最深で50cm弱で中央がやや深くなる。壁は北側が緩やかに立ち上がるが、その他はやや急な傾斜になる。埋土は最上層に茶灰色土が被り、その下は茶色及び黄色系の粘質土が主体になる。最下層には基盤土との混在土がレンズ状に堆積する。

出土遺物（第55図1）

器壁が薄い甕で、外面斜位のハケ後ナデ調整、内面はナデ調整。口縁端部外面に指圧痕が認められる。

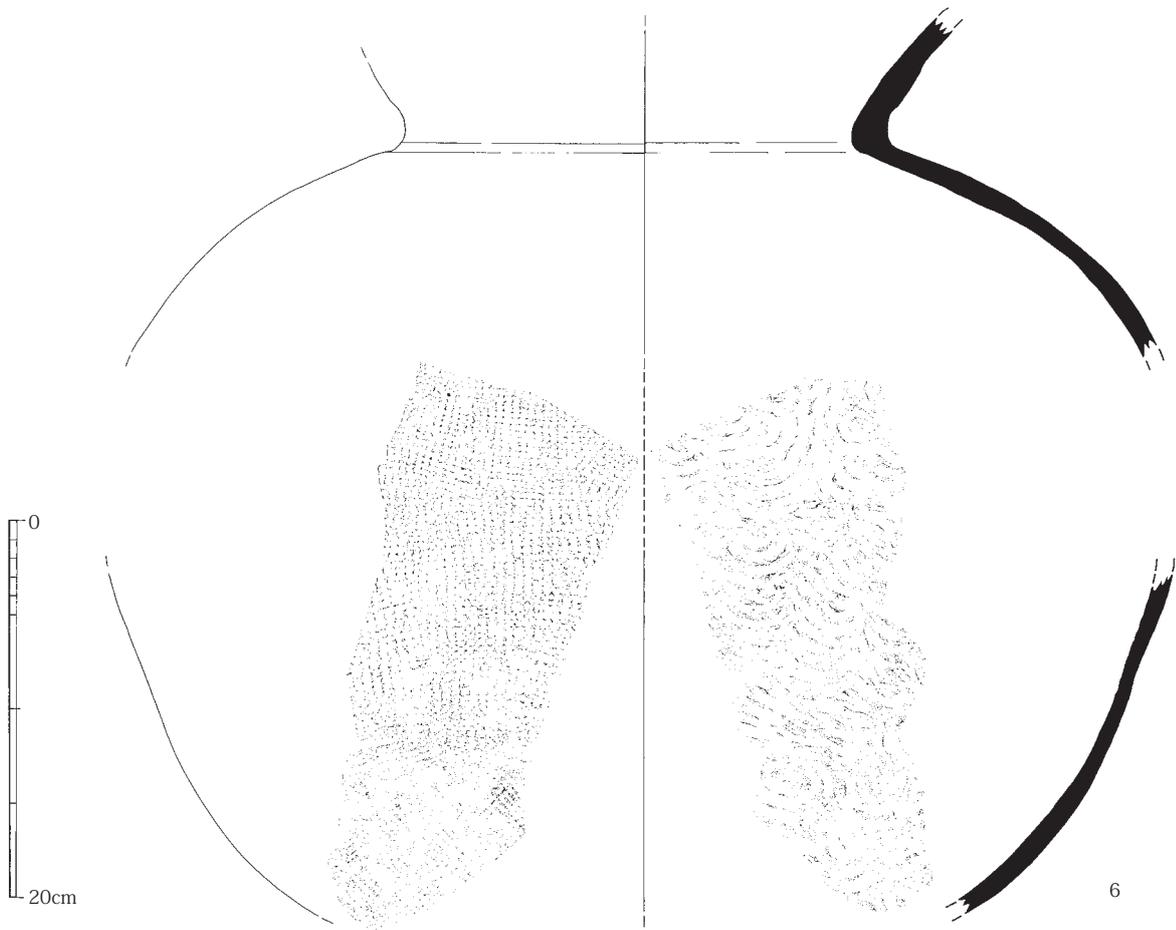
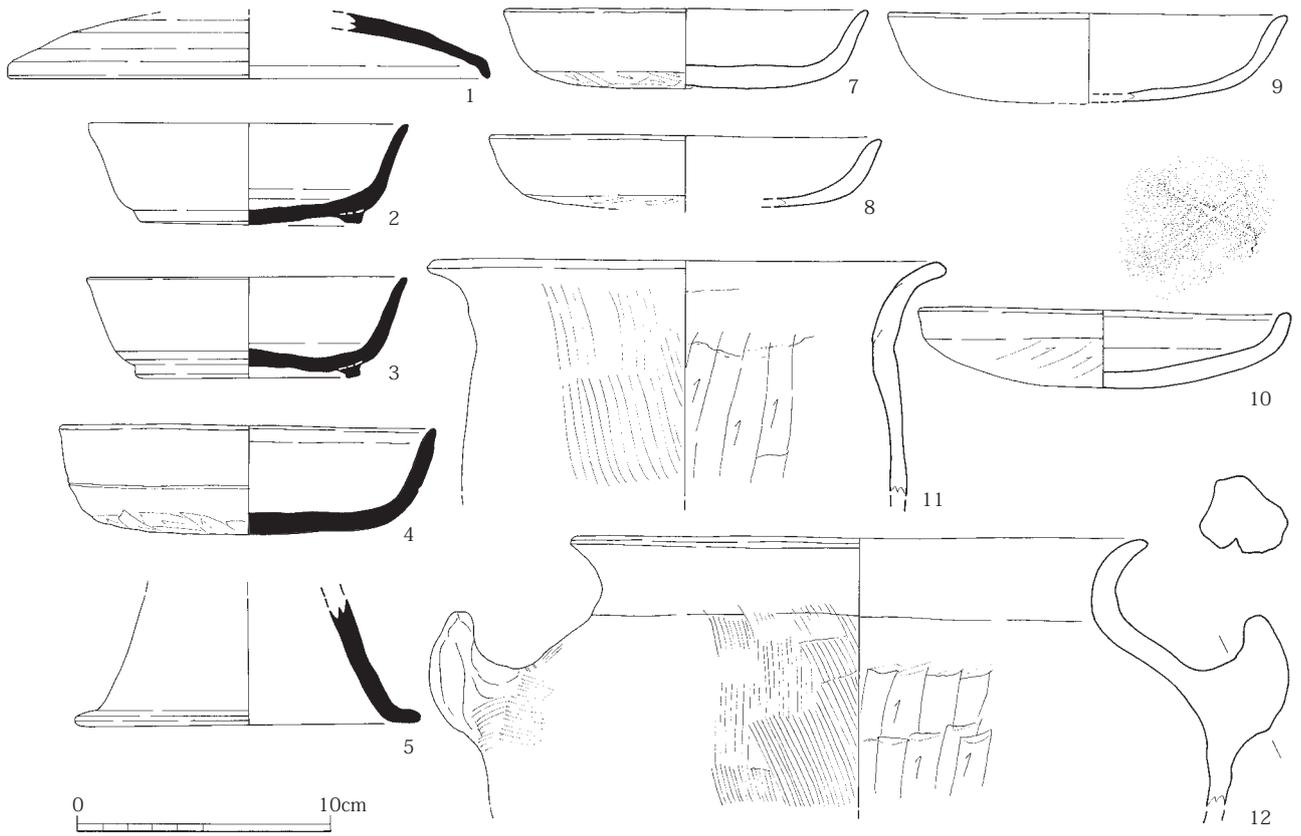
42号土坑（第53図）

II区中央、28号土坑の南に位置する土坑である。長辺約110cm、短辺50～110cmの台形を呈し、深さ約15cm底はほぼ平坦になる。南側に直径30cm前後の3つのピットを有するが、柱跡の可能性と後世の掘り込みの可能性がある。

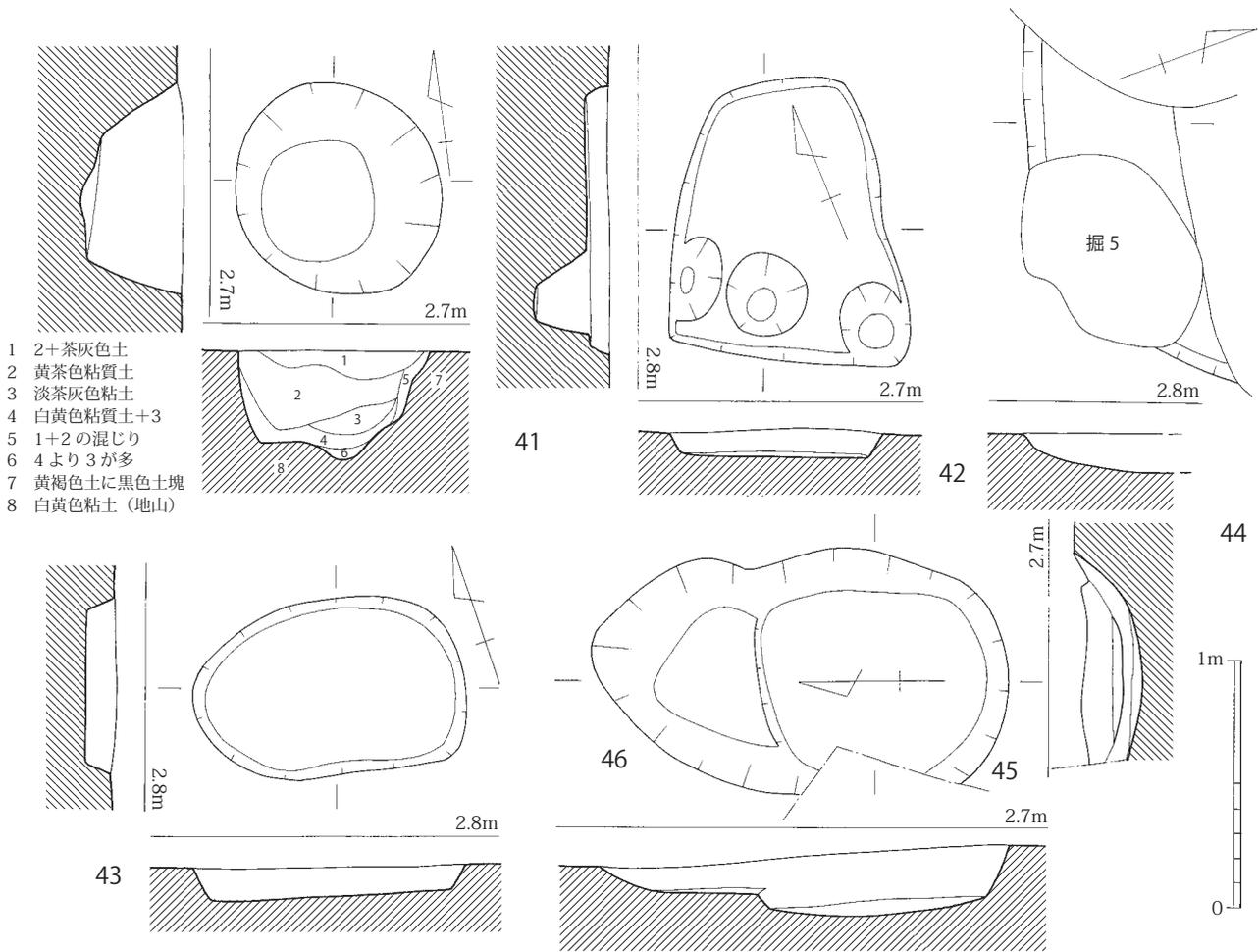
出土遺物（第55図2）

器壁が厚い甕で、口縁が外反し胴部は直線的に垂下する。内外面ともタテハケ調整で、外面の一部に横位のハケ目が認められる。

43号土坑（図版32、第53図）



第 52 図 40 号土坑出土遺物実測図 (6・12 は 1/4、他は 1/3)



第53図 41～46号土坑実測図(1/30)

Ⅱ区東寄り、21号土坑の西に位置する土坑である。長軸約110cm、短軸約70cmの楕円形を呈し、深さは10～20cmで底はほぼ平坦になり、西側にやや傾斜する。埋土は暗茶色土と黄褐色土のブロックが混在する斑土である。

出土遺物 (第55図3・4)

3は口縁部が強く屈曲して大きく開く甕の口縁部片で、端部を摘み上げる。器壁が薄く内外面ともハケ調整を施す。

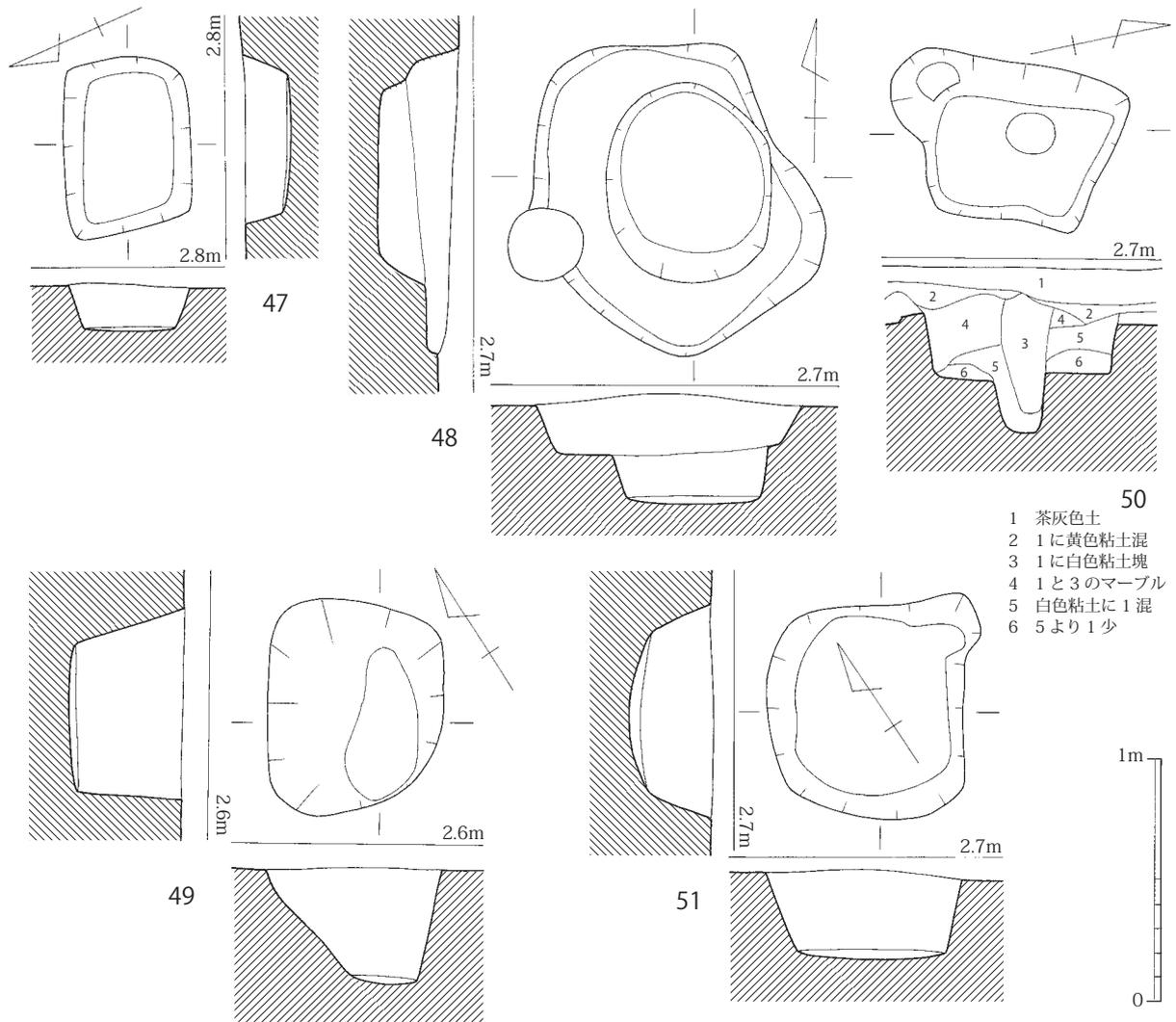
4は単純口縁の鉢で、底部に向かって器壁が厚くなる。内外面ともナデ調整で、口縁部内外面に丹塗りの痕跡がある。

44号土坑 (第53図)

Ⅲ区東寄りに位置する土坑で、1号掘立柱建物・36・38号土坑に切られ、ほとんどプランは確認できない。深さは残存部分で約15cm、削平された中央部に向かって深くなっていく。埋土は36・38号土坑に入る黒色土と似るがやや硬質の土壌である。

出土遺物 (第55図5、第86図9)

糸切り底の土師器坏で、内底部はヨコナデ調整、外底部に板状圧痕は認められない。



第54図 47～51号土坑実測図 (1/30)

第86図9は凹石およびすり石である。両面中央部に叩きの痕跡、右側面には磨りの痕跡が認められる。凝灰岩製である。

45号土坑 (第53図)

Ⅲ区1号溝南側の西端に位置し、47号土坑の西に位置する土坑である。検出当初は46号土坑と併せて1基の土坑として掘削していたが、46号の底にプランを確認した事から2基の土坑と確認できた。当初掘削時は出土遺物を一括で取り上げたため、遺物が混在している。調査区外に一部広がっているため正確なプランは不明であるが、直径100cm程度の円形土坑になると推測され、深さは最深で約30cmで底はレンズ状になる。壁はやや緩やかに立ち上がる。

46号土坑 (第53図)

Ⅲ区の1号溝南側の西端に位置し、47号土坑の西に位置する土坑である。検出当初は45号土坑で併せて1基の土坑として掘削していたが、底に45号のプランを確認した事から2基の土坑と確認できた。長軸100cm以上、短軸80cm程の楕円形に復元でき、深さは15cm前後で底は平坦になる。壁は緩やかに立ち上がり、45号土坑に切られる先後関係にある。

45・46号土坑出土遺物（第55図6～9）

45・46号土坑は遺物が混在しているため、ここでは併せて掲載する。

6～8は在地系の甕。6は、頸部に断面三角の凸帯を貼付する。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整し、口縁端部にはキザミを廻らせる。7は頸部の屈曲がほとんどなく、胴部の張りも弱い。内外とも口縁部はヨコハケ、胴部はタテハケで調整する。8は樽型甕の胴部下位か。底部は平底で全体に器壁が厚い。外面はヨコタタキ後タテハケ調整、内面はヨコハケ後下位をタテナデで調整する。外底部もランダムなハケで調整する。

9は裾が大きく開く高坏の脚部。外面はタテハケ後粗いミガキ、内面ヨコハケで調整し、外面の上位が二次被熱により赤変する。

47号土坑（第54図）

Ⅲ区1号溝南側の西端に位置し、45・46号土坑の東に位置する土坑である。長辺65～75cm、短辺約50cmの不整長方形を呈する。深さは約20cm、底は平坦になる。埋土は暗茶色土と黄褐色土のブロックが混在する単一埋土である。

出土遺物（第55図10・11）

10は壺口縁部小片で、強く外湾する。内外面に暗文が施され、外面は波状文様に描き、内面はハケ調整後放射状の暗文を描く。器壁が薄く、橙褐色を呈する。11は鉢で、外面は縦位のハケ調整、内面は口縁付近をヨコナデ、底部付近をケズリ後ナデで調整する。

48号土坑（図版32、第54図）

Ⅲ区1号溝の南に位置する土坑である。長軸約130cm、短軸約120cmの不整楕円形を呈し、中央が長軸約80cm、短軸約70cmの楕円形に一段低くなる。深さは最深で約45cm、テラス部分で約20cmで、いずれも底は平坦になる。埋土は黒色土主体で、深い部分は基盤土に黒色土が混入する。

出土遺物（第55図12～17、第84図17）

12・13は糸切り底の土師器。12は小皿で外底部に板状圧痕が認められる。復元口径8.8cm、復元底径7.0cm、器高1cm。

13は摩滅が激しく底部の調整は不明。復元口径14.6cm、復元底径10.8cm。

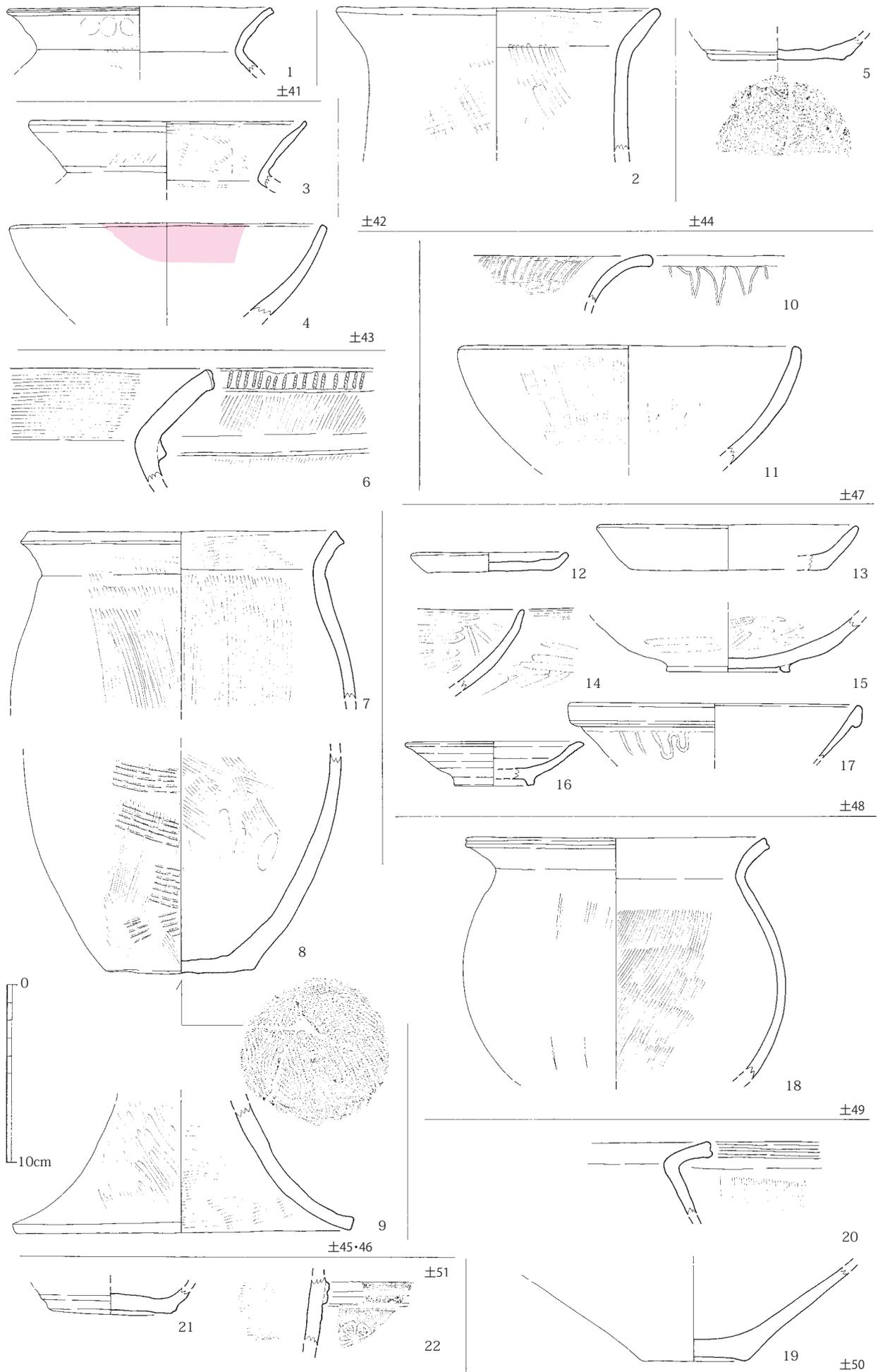
14・15は瓦器碗。内外面ともヨコミガキで、14の内面はコイル状のミガキを施す。

16は白磁の皿である。口縁が大きく開き、端部が屈曲して上部がやや平坦になる。内底部は釉を掻き取り、外面も中位から釉を掻き取って露胎になる。釉はやや灰色味を帯びる。17はⅣ類の白磁碗で、端部を玉縁状に作り、外面には釉垂れが認められる。釉は灰色味を帯びる。

第84図17は石庖丁である。背部が僅かにふくらみ杏仁形を呈する。外孔0.7cm、内孔0.4cm、背孔1.2cm（左）、1.5cm（右）、孔間1.9cmを測る。全面に研磨を施し、回転穿孔の痕跡が残る。刃部端に傾斜の違う研磨を施し、段が形成される。凝灰岩製である。

49号土坑（図版32、第54図）

Ⅲ区1号溝南側に位置し、50～54号土坑の西に位置する土坑である。長辺最大90cm、短辺70cmの不整隅丸方形を呈し、東側が深くなる。深さは最深で約50cmで、底はレンズ状になる。埋土は上層が暗灰色粘土で、下層は基盤土に似た淡黄色粘土である。当初50号土坑と対にな



第 55 图 41 ~ 51 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

る柱穴と考えたが、柱痕がなく埋土の状況も異なる。遺物は上層の灰色粘土層から主に出土している。

出土遺物（図版 46、第 55 図 18）

胴部が球形を呈する甕で、外面は摩滅が激しく工具痕が僅かに残る程度だが、おそらくハケ調整で、内面も縦位の細かいハケ調整。口縁端部には沈線が廻る。

50 号土坑（図版 33、第 54 図）

Ⅲ区 1 号溝南側に位置し、49 号土坑の南に位置する土坑である。一部をピットに切られるため正確なプランは不明であるが、長辺約 70cm、短辺 60cm 強の長方形を呈する。深さは最深で約 60cm で、底はレンズ状を呈する。中央やや西寄りに柱痕跡を確認し、柱穴と考えられるが、対になる柱穴が検出できなかったこと、柱痕跡に入る土が中世以降のものであることから、後世の柱などの打ち込みの可能性もあり、ここでは土坑として報告する。埋土は上層が暗茶色土と基盤土の混合土で、柱痕跡は茶灰色土である。下層の竪穴状の埋土は中層に広がる暗茶色土と基盤土の混在土と同じであり、茶灰色土柱穴の打ち込みに伴って粘土が下がった可能性もある。最下層は淡灰色粘土が堆積する。茶灰色土埋土の同様のピットが周辺にも多数認められることから、柱穴の可能性は低いと考える。

出土遺物（第 55 図 19・20）

19 は壺の底部で、やや上げ底になる。摩滅が激しく調整は不明である。20 は甕口縁小片で、端部断面は M 字になる。外面はタテハケ、内面はナデで調整し、口縁部付近が二次被熱により赤変する。

51 号土坑（第 54 図）

Ⅲ区の中央、35・37 号土坑の北に位置する土坑である。一辺 80～90cm の隅丸方形土坑で、深さ 40cm 弱で底はレンズ状になる。壁は急な傾斜で立ち上がる。埋土は黒色土と基盤土の混在する斑土で、最下は黒色土が堆積する。49 号土坑と同様に 50 号土坑と対になる柱穴と考えたが、埋土の状態は近似するものの柱痕跡はなく、土坑として報告する。

出土遺物（第 55 図 21・22）

21 は糸切り底の土師器の坏底部片で板状圧痕は認められない。底径 6.9cm を測り、体部は大きく開くと思われる。内底部に付着物が認められる。

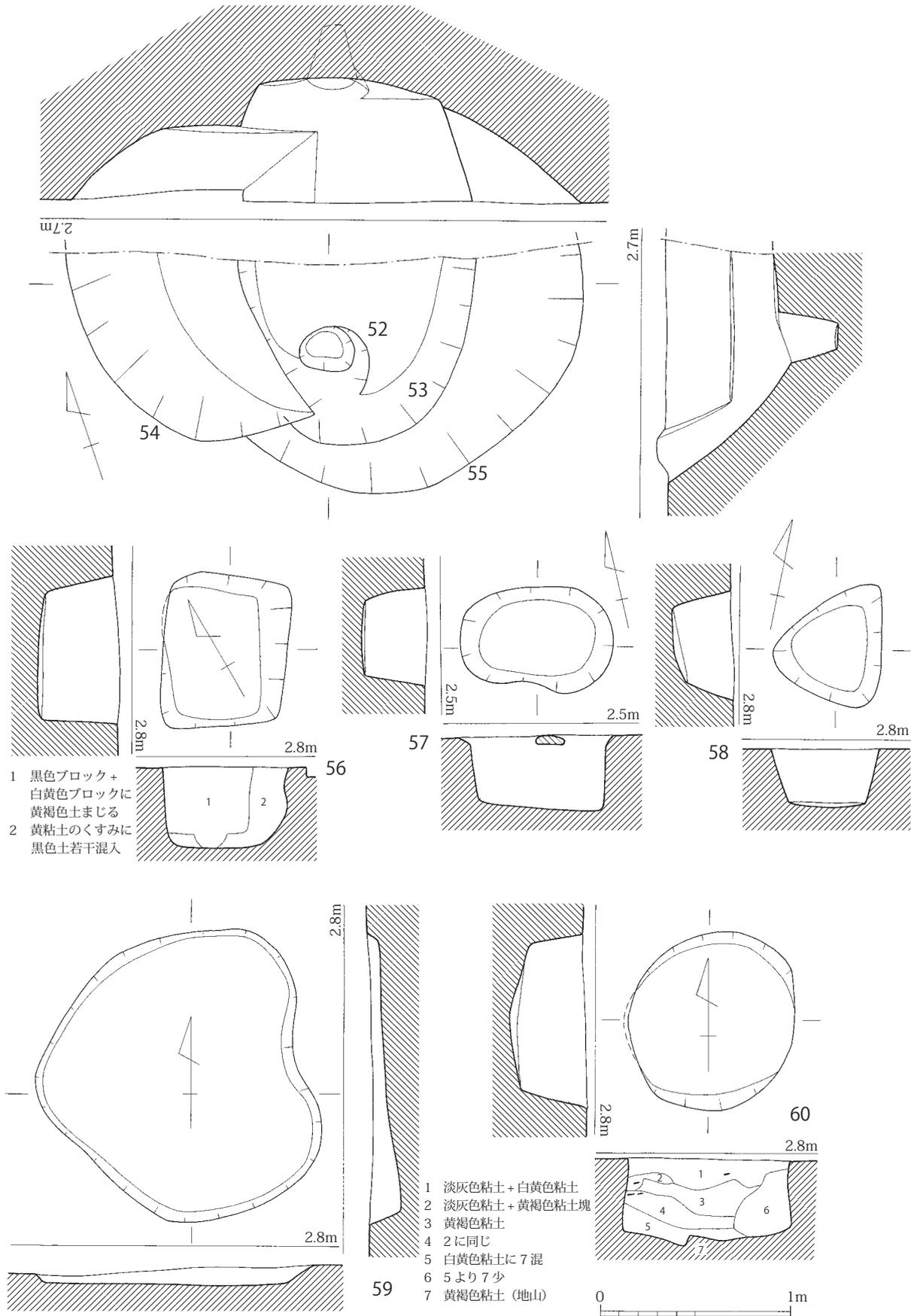
22 は瓦質の火舎の口縁部小片。外面端部下位に 2 条の断面かまぼこ型の凸線を廻らせ、その下に花文の押し型を飾る。内面はヨコハケ調整を施す。

52～55 号土坑（第 56 図）

Ⅲ区 1 号溝南側に位置する土坑群で、いずれも 1/2 ほどが 1 号溝に削平されている。4 基が切りあった状況で、埋土の違いが不明瞭であったため当初 1 遺構として調査していたが、最終的に 3 基の土坑と 1 基の小土坑が切りあった状態であることを確認した。ここでは併せて報告する。先後関係は古い順から 52 号・55 号→53 号→54 号となる。

52 号土坑（第 56 図）

中央に位置するピット状の小土坑で、直径約 40cm の円形を呈し、テラスを有する。深さは



第56図 52～60号土坑実測図(1/30)

30cm 前後で底は 15 ～ 20cm の楕円形になる。埋土は黒色土が主体である。

出土遺物（第 57 図 1 ～ 4）

1・2 は壺の底部である。丸みの大きいレンズ状底で、外底部はハケ調整する。1 は外面はタテハケ、内面ヨコハケで調整し、2 は内面をタテハケで調整する。外底部付近には煤が付着する。

3 は甕口縁部小片で、内面はヨコハケで調整する。4 は脚付き甕の脚部で、内外面ともナデで調整、外面裾付近が一部二次被熱により赤変する。

53 号土坑（第 56 図）

現存する規模が半径 90cm 強の半円形を呈し、深さは最深で約 60cm で底はレンズ状を呈する。壁はやや急な傾斜で立ち上がる。埋土は上層に黒色土と黄褐色土のブロックが混在する斑土が堆積し、下層は軟質の黒色粘土に黄褐色粘土ブロックが混入する。出土遺物は小片、少量で図示できるものがない。

54 号土坑（第 56 図）

半径 90cm 以上の円形になると考えられる。深さは約 40cm で底は平坦になる。埋土が 55 号の埋土と近似していたため一括で掘削してしまい、正確なプランは不明である。埋土は黒色土と黄褐色粘土ブロックの斑土が主体である。

出土遺物（第 57 図 5 ～ 8）

いずれも甕口縁部。5 は口縁端部を短い逆 L 字口縁で、屈曲部外面に指圧痕が残る。外面はタテハケ、内面はナデで調整する。6・7 は T 字口縁で上部は平坦になり端部が下がる。6 は外面をタテハケ、内面をナデで調整し、下位は工具によるタテナデを施す。7 は外面に煤が付着する。8 は緩やかな「く」の字口縁で、口縁端部は肥厚する。外面は剥離が激しいが、頸部にタテハケが残る。内面は工具によるヨコナデ調整。外面には煤が付着することから、剥離は二次被熱による可能性がある。

55 号土坑（第 56 図）

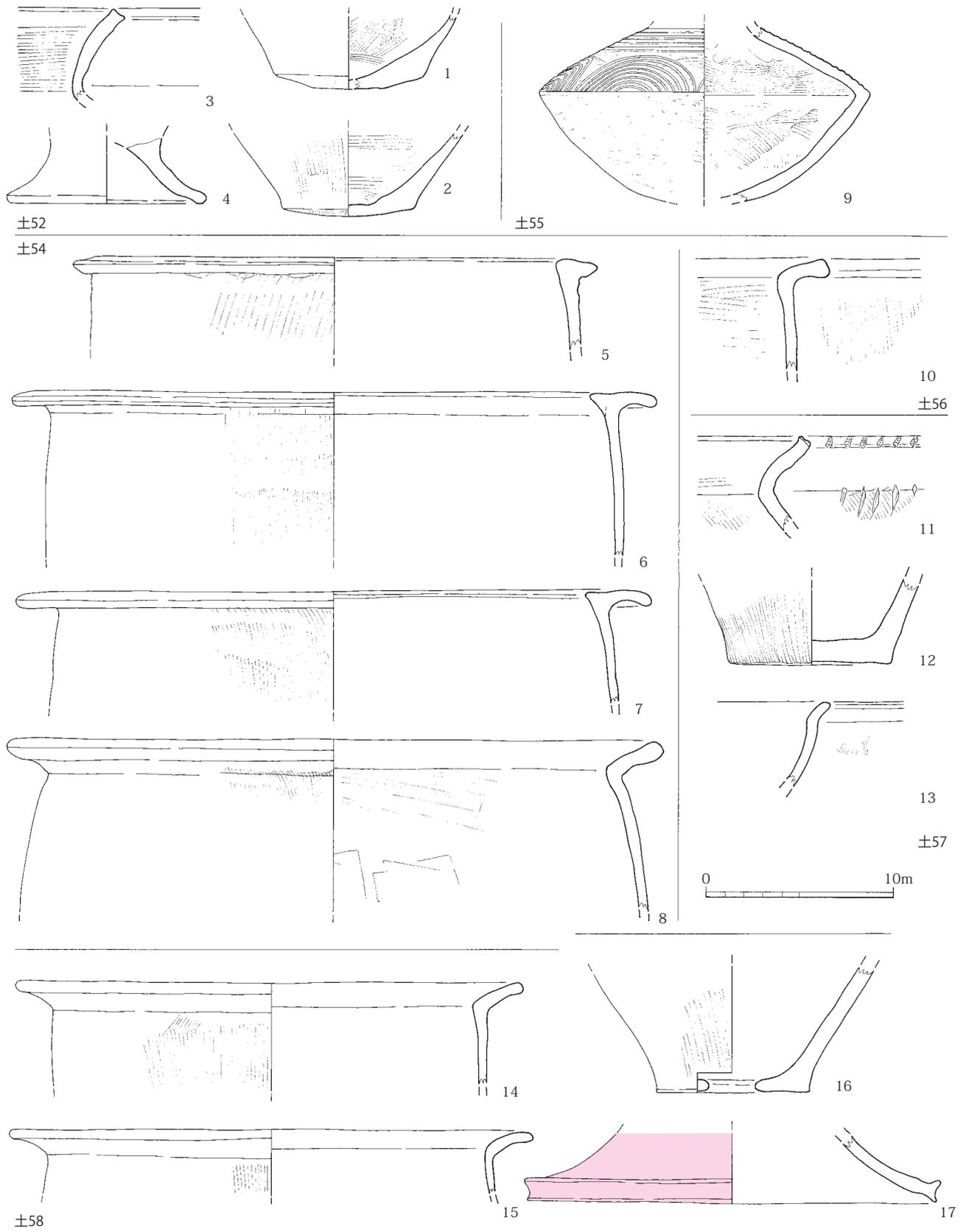
53・54 土坑に切られるため正確なプランは不明であるが、直径 200cm 以上の大型土坑になると考えられる。深さは 50cm 前後で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色土と黄褐色土のブロックが混在する斑土で、54 号土坑との区別は困難であった。

出土遺物（第 57 図 9）

免田式系の長頸壺体部片である。薄いソロバン玉型の胴部を有し、中位の屈曲は強く、底部はやや丸みを持つ。外面は全面的にヨコミガキを施した後に、頸部下付近にカキメ状の凹線を数条廻らせ、その下には 8 重の重弧文を配する。下位はヨコミガキで丁寧に調整する。内面は頸部下のカキメ裏部分に指圧痕が廻り、以下はヨコハケで調整後、屈曲部下をナデ調整する。外面中位に黒斑が認められる。

56 号土坑（第 56 図）

Ⅲ区東寄り、19 号土坑の南に位置する土坑である。長辺約 80cm、短辺 60cm 強の隅丸長方形を呈し、深さ約 45cm で底は平坦になる。壁は直上に立ち上がり、東側下位が若干膨らむ。



第 57 图 52・54～58 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

埋土は黒色土と基盤土のブロックが混在する斑土が中央に厚く入り、その周辺と下層にはくすみのある基盤土に黒色土が若干混入する。中央の埋土は使用時の再掘削の可能性も考えられる。

出土遺物（第 57 図 10）

甕口縁部で、口縁はL字に強く外反して肥厚し、外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。

57号土坑（第 56 図）

Ⅲ区中央東端、56号土坑の南東に位置する土坑である。長軸約80cm、短軸50cm強の楕円形を呈し、深さ40cm前後で底は平坦になる。壁はほぼ直上に立ち上がる。埋土は黄色粘土に黒色粘土のブロックが混在する斑土の単一層で、最上部に未加工の扁平な石があった。

出土遺物（第 57 図 11～13）

11・12は甕。11は口縁小片で、緩やかに内湾しながら開き、端部を上方につまみ上げ、キザミを廻らせる。外面は斜位のハケ調整で、頸部にもキザミを廻らせる。内面は口縁をヨコハケ、体部はタテハケで調整し、口縁はヨコナデする。12は平底の底部片で、外面はタテハケ、内面はナデで調整し、内底部に煤が付着する。

13は屈曲口縁の鉢口縁部小片。外面は上位がタテハケで、下位と内面はナデで調整する。

58号土坑（第 56 図）

Ⅲ区西寄り、16号土坑に西接する土坑である。長軸約70cm、短軸約60cmの隅丸三角形と異なるプランを持つ。深さは約30cmで、底はレンズ状になる。壁はやや開きながら立ち上がる。埋土は暗茶色粘土と黄褐色粘土のブロックが混在する斑土の単一層である。

出土遺物（第 57 図 14～17）

14～16は甕で、14・15は口縁を強く屈曲させ、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。16は平底の底部片で、中央部に直径約2.2cmの焼成後の穿孔がある。外面はタテハケ、内面はナデで調整する。

17は丹塗りの高坏脚裾部。端部を下に引き出す。摩滅が激しく調整は不明である。

59号土坑（図版 33、第 56 図）

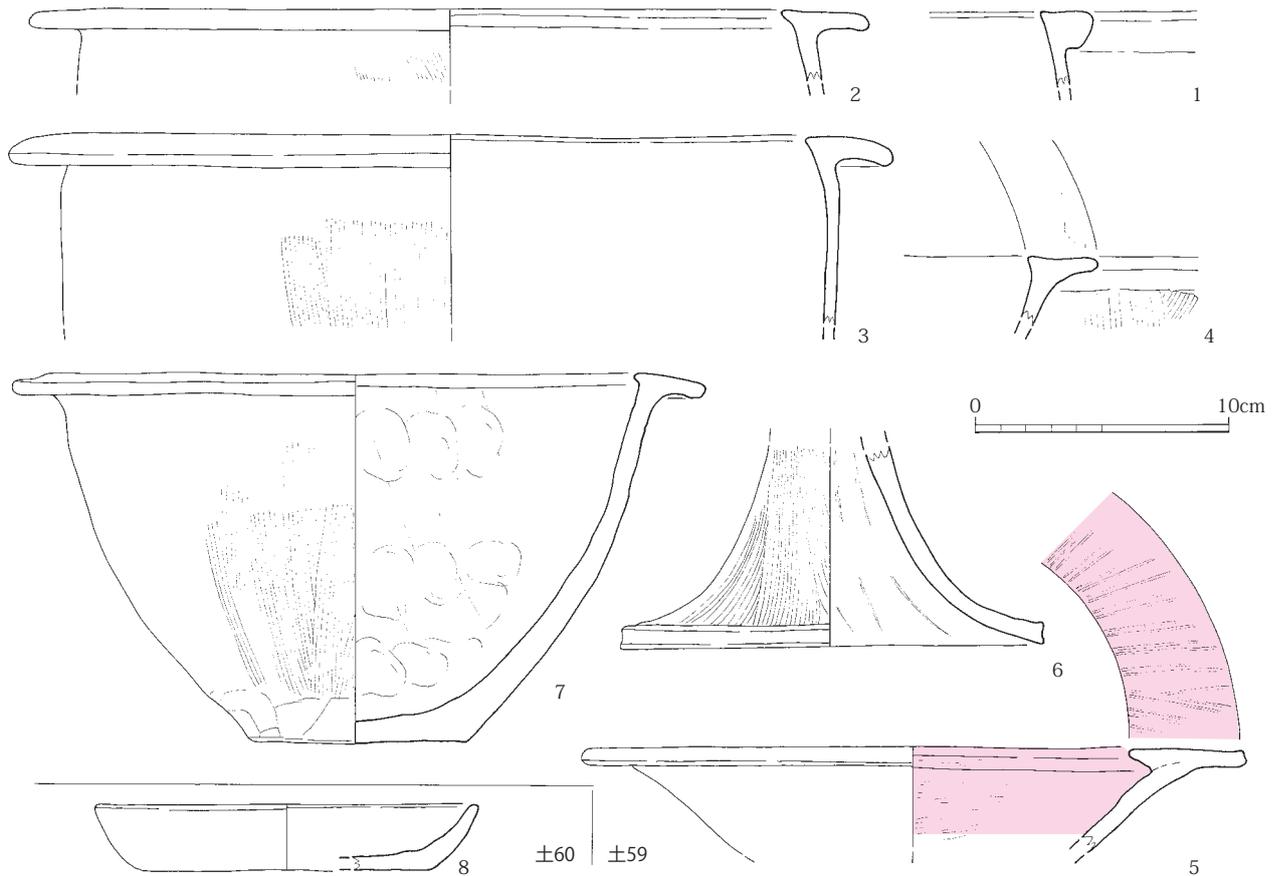
Ⅲ区西端、46・47号土坑の南に位置する土坑である。直径130～150cmの不整円形を呈し、深さは5～9cmしか残存しない。壁は緩やかに立ち上がるようで、底は平坦になる。埋土は淡灰色粘土の単一層である。

出土遺物（図版 46、第 58 図 1～7）

1～3は甕口縁部。1は丸みを持つ台形口縁を有し、外面はナデ調整で、内面は摩滅する。2・3は逆L字の口縁で外面はタテハケ、内面はナデで調整する。

4～6は高坏。4は逆L字の口縁部小片で、体部は丸みをもつ。外面と口縁平坦部をタテハケ、内面はナデで調整する。5はT字口縁で丹塗りを施す。摩滅が激しいが、内面にヨコミガキが認められ、口縁部平坦面は二本セットの暗文を放射状に施文する。6は裾が大きく広がる脚部で、外面を細かいタテミガキで調整し、内面は工具によるナデ調整を施す。

7は平底の屈曲口縁の鉢で、口縁はT字を呈する。外面はタテハケ、内面は指圧による押



第 58 図 59・60 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

し出し後にタテナデで調整する。

60 号土坑 (図版 33・34、第 56 図)

Ⅲ区西寄りに位置する土坑で、32 号土坑に北接し、32 号に切られる先後関係にある。直径 90cm 前後の円形土坑で、深さは最深で 50cm 弱、底は凹凸があるがレンズ状になる。壁はほぼ直上に立ち上がり、一部オーバーハングする。埋土は淡灰色粘土と基盤土、及び黄褐色粘土がほぼレンズ状に堆積する。

出土遺物 (第 58 図 8)

糸切り底の土師器坏で、復元口径 15.0cm、復元底径 10.8cm、器高 2.6cm。器壁が厚く口縁はやや内湾し、平坦な底部には板状圧痕が認められる。

61 号土坑 (図版 34、第 59 図)

Ⅲ区西寄り、62 号土坑の西側に位置する土坑で、62 号を切る先後関係にある。当初 62 号土坑と併せて掘削したため正確なプランは不明であるが、長軸 210cm 前後、短軸 150cm 前後の大型土坑に復元できる。南側が一段低くなり、深さは北側で約 15cm、南側で約 20cm を測る。壁はやや急な傾斜で立ち上がると思われる。埋土は黒色土主体で、若干基盤土が混入し、南側は底付近に淡灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 60・61 図 1～22、第 84 図 4)

1～13は口縁部片で、1～7は逆L字もしくはT字口縁のものである。1～5は口縁部に最大径を持ち、外面はタテハケ、内面はヨコナデで調整し、3は頸部外面をヨコナデする。2・5は外面に煤が付着する。6～8は体部最大径が口縁部径を上回る器形である。6・7は逆L字口縁で、外面はタテハケ、内面はナデで調整し、6の頸部付近には指圧痕が残り、外面には煤が付着する。8は強く屈曲する口縁で、口縁端部が肥厚する。内外面ともタテハケで調整する。9は緩やかに屈曲する口縁で、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。10～12は部分的に丹塗りが認められる甕で、T字口縁を有し口縁部下に断面M字の凸帯を廻らせる。10は口縁端部にキザミを廻らせ、11は平坦部に4本セットの暗文を放射状に施文する。12は平坦部に放射状の暗文を、頸部には波状文状の暗文を施文する。13は甕棺の口縁端部片である。内側に大きく突出する逆L字型で、内外面ともナデで調整する。

第61図14～18は平底の底部片。14は内底部が緩やかに肥厚し、内外面タテハケ、内底部のみナデで調整する。外底部は粗いナデを施し、黒斑が認められる。16・18は内底部が緩やかに肥厚するが、15・17は体部と底部の境が明瞭である。15・16・18は外面をタテハケ、内面はタテナデで調整し、15・16は底部付近に指圧痕が残る。15の外底部のナデは粗い。17の内面は剥離が激しく外面はタテハケで調整する。

19は高坯口縁部で、肥厚する逆L字の口縁を有し、体部は丸みを持つ。内外面ともナデ調整。

20は屈曲口縁の鉢小片である。外面はタテハケ、内面は粗いヨコハケで調整する。

21・22は器台である。21は裾部がやや強く屈曲し、中位の器壁が薄く裾に向かって肥厚する。外面はタテハケ、裾付近のみヨコハケ調整で、内面はヨコハケで調整する。22は上下の口径がほぼ同じになるもので、外面はタテハケ、内面端部付近はヨコハケ、中位はタテナデで調整する。

第84図4は土製投弾である。指ナデにより成形し、紡錘形を呈する。焼成は良好で、灰白色を呈する。

62号土坑（第59図）

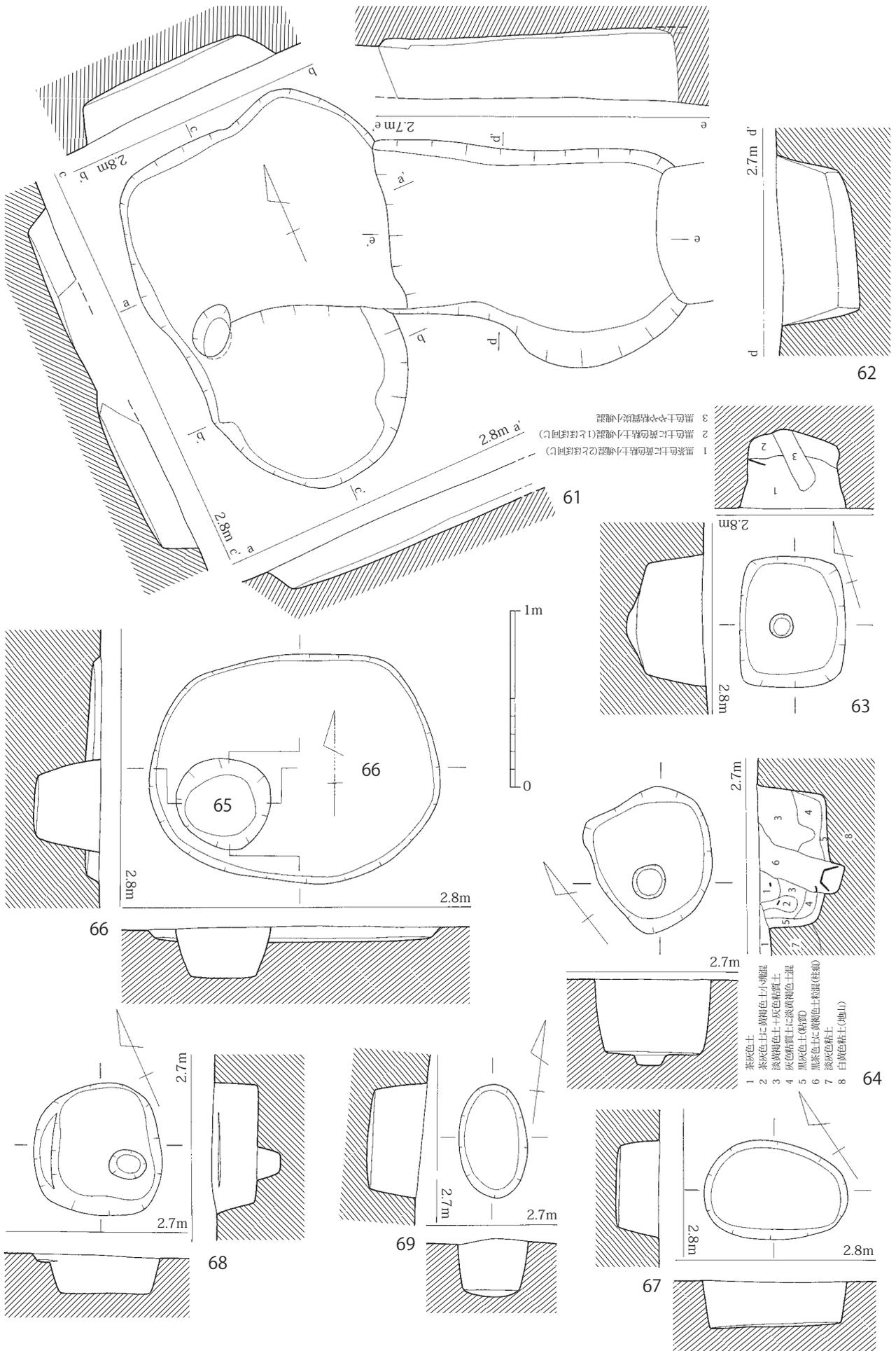
Ⅲ区西寄り、61号土坑と63号土坑の間に位置する土坑で、双方に切られる先後関係にある。長軸150cm以上、短軸150cm前後の楕円形土坑で、壁は急な傾斜で立ち上がる。深さは最深で約40cmで、底は平坦になる。埋土は上層が61号と同様の黒色土主体で、下層は灰色粘土主体の層となる。出土遺物は小片のため図示できるものがない。

63号土坑（図版34、第59図）

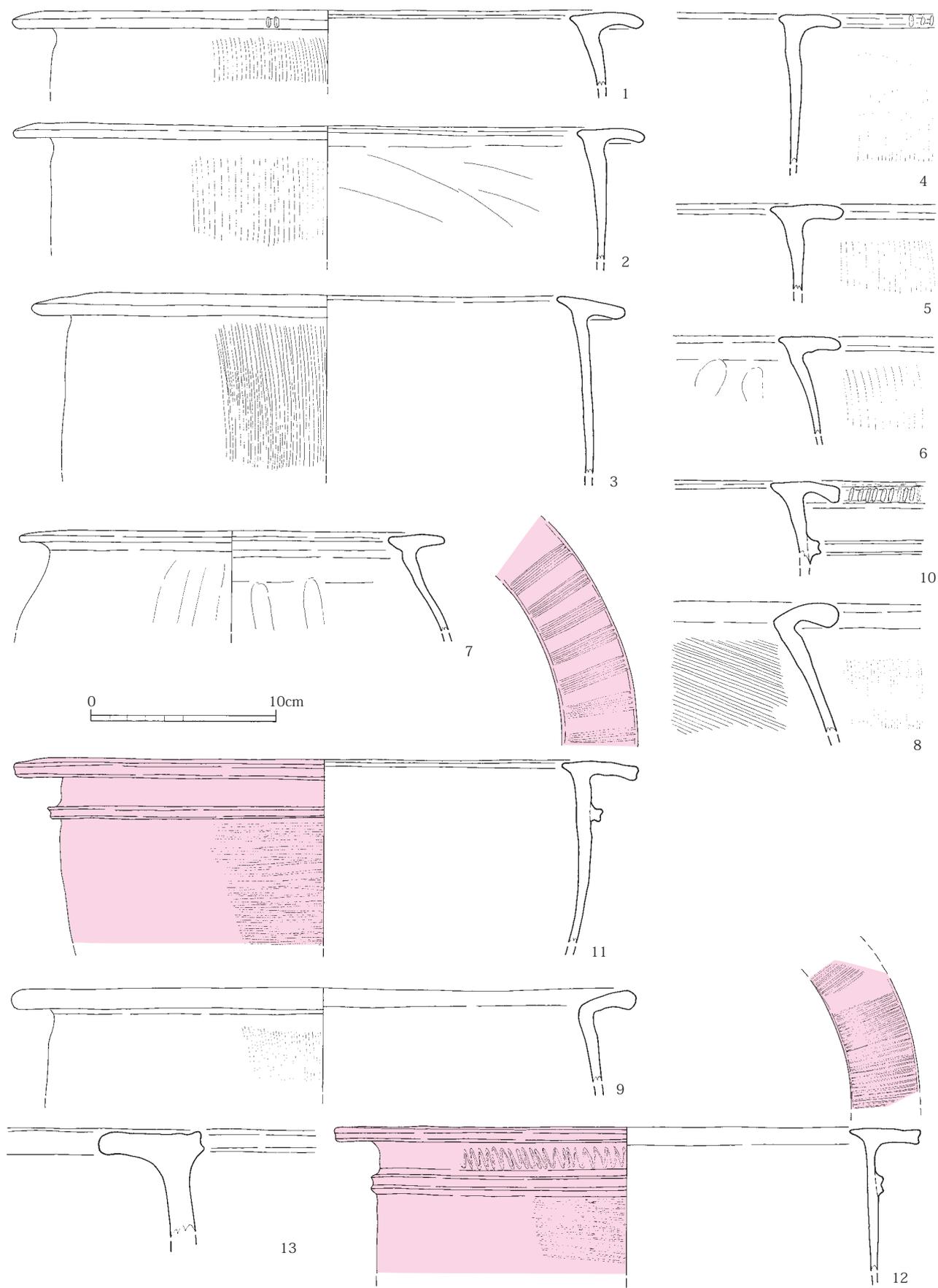
Ⅲ区南中央、62号土坑に東接する土坑で、62号を切る先後関係にある。長辺70cm強、短辺約60cmの隅丸長方形を呈し、中央に柱痕跡を有する。深さは掘方部分で約40cm、柱痕跡部分で45cm前後である。壁は急な傾斜で立ち上がり、底はレンズ状を呈する。埋土は掘方部分が黒色土に黄色粘土が混入する層が主体で、柱痕跡部分は軟質の黒色土に炭の細粒が混入している。柱痕跡は直径10cm強で、断面観察では斜めに倒れたような傾斜を有する。周辺に対になる掘方を探し、64号土坑はその可能性が考えられたが、その他は確認できなかった。50号土坑同様、柱痕らしき痕跡は後世の柱の打ち込みの可能性も考えられる。

出土遺物（第61図23～28）

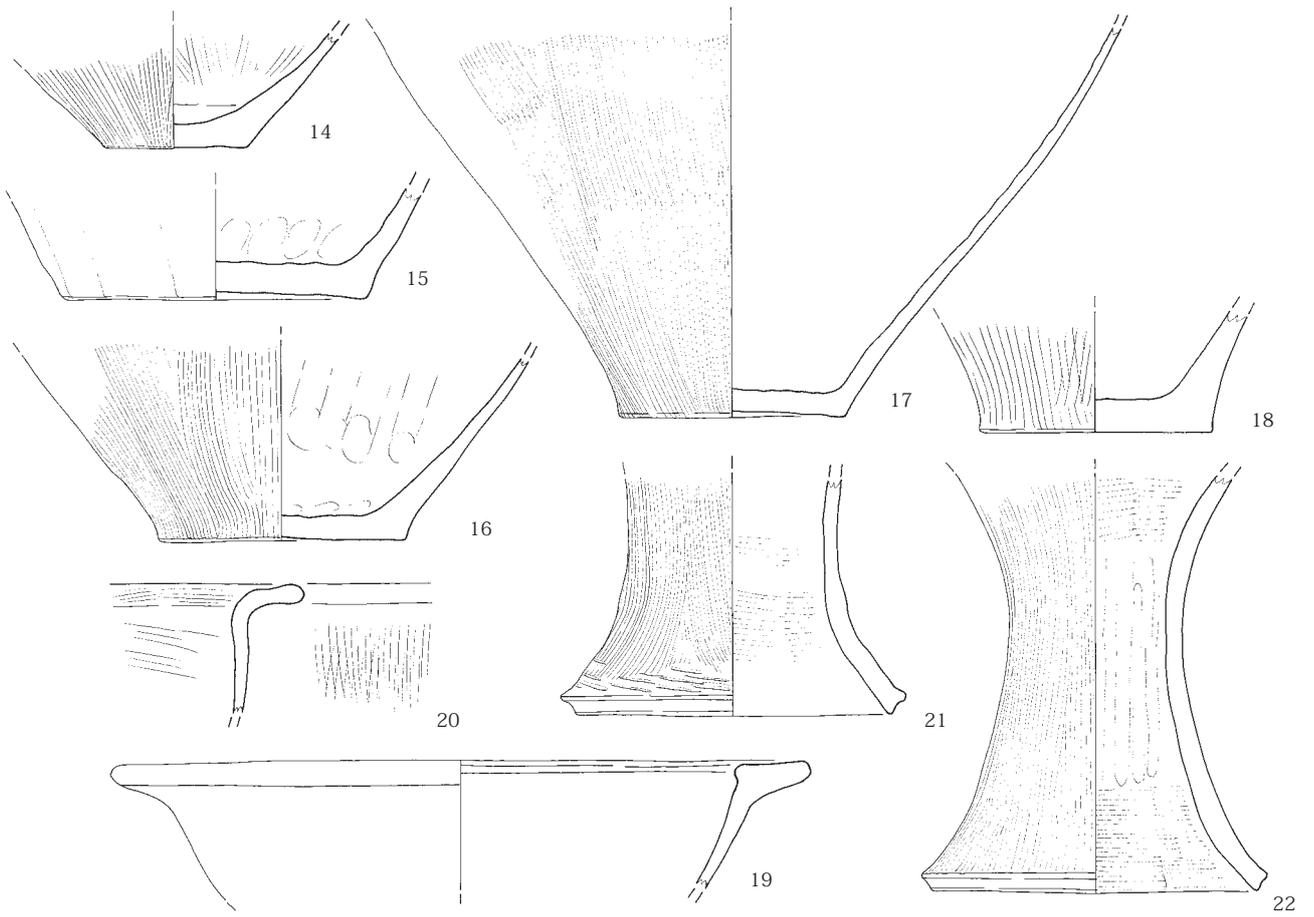
23は壺で、外面は斜位のハケ、内面は工具によるタテナデで調整する。



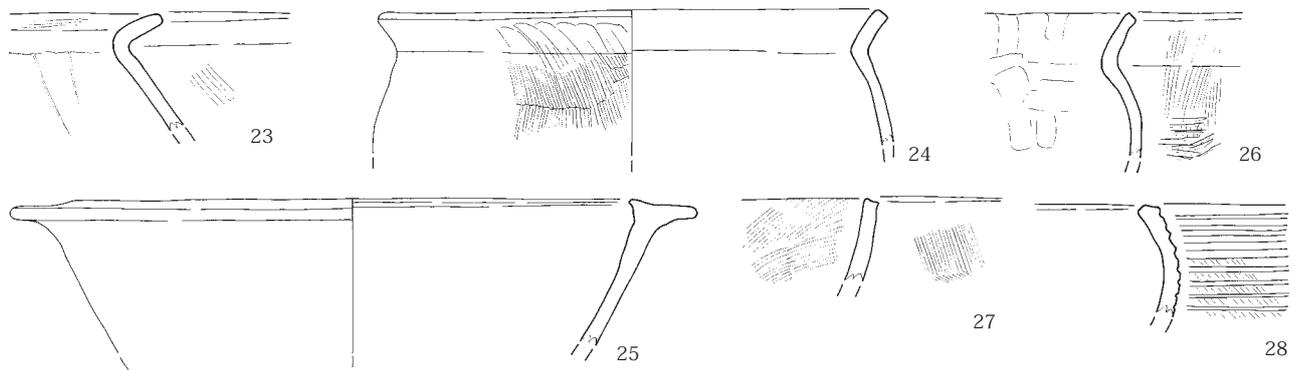
第59図 61～69号土坑実測図(1/30)



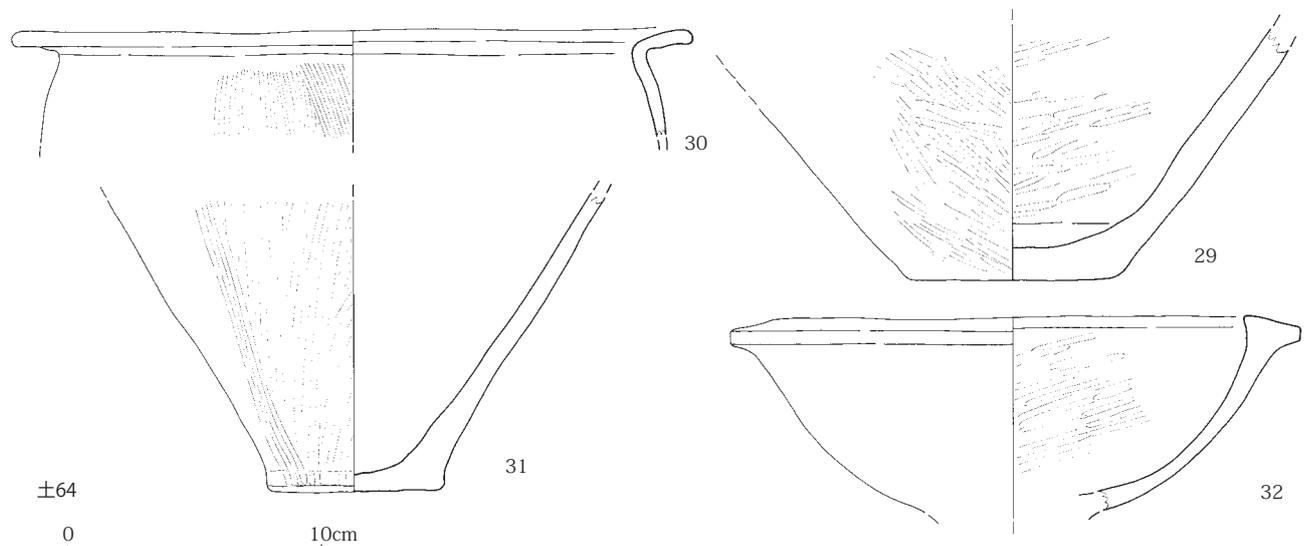
第 60 图 61 号土坑出土遺物実測図 (1/3)



±61



±63



±64

0 10cm

第 61 图 61·63·64 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

24は頸部内面の稜が明瞭な甕で、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。

25は高坏で、内外面とも摩滅が激しいがナデ調整か。

26～28は鉢。26は屈曲口縁のもので外面はタテハケ、内面は強いナデで調整する。27・28は単純口縁で、27は外面をタテハケ、内面は斜位のハケで調整し、外面に黒斑が認められる。28は外面は斜位のハケ調整後にタタキを施す。外面は二次被熱により赤変する。

64号土坑（図版35、第59図）

Ⅲ区やや西寄り、24号土坑の北東に位置する土坑である。一辺70cm前後の不整隅丸方形を呈し、南側に直径約15cmの柱痕跡を有する。深さは掘方部分で約40cm、柱部分で約50cmで、壁はほぼ直上に立ち上がり、底はレンズ状を呈する。埋土は掘方部分が灰色粘土と黄褐色粘土主体の水平体積で、最下層には軟質の黒色粘土が入る。柱痕跡部分は黒茶色土に黄褐色土の細粒が混入する。柱痕跡は直径20cm弱で、断面観察では斜めに傾斜しており、その最下には壺の底部が逆位に据えられていた。柱の基礎として使用されたものか。周辺に対になる掘方を探したが、63号土坑はその可能性が考えられるが、その他は確認できなかった。

出土遺物（第61図29～32）

29は平底の壺胴部下位。器壁が厚く、内外面ともミガキで丁寧に仕上げる。外面の一部に黒変が認められる。

30・31は甕。30は強く屈曲する口縁部で、外面はタテハケ、内面はナデで調整。31は底部がやや絞られ器壁が厚い。外面はタテハケ、内面は摩滅するがナデか。

32は高坏坏部で口縁断面が三角を呈する。摩滅が激しいが、内面にヨコミガキが残る。

65号土坑（第59図）

Ⅲ区東寄りに位置する小土坑で、2号窪み状遺構の西側に位置し、66号土坑を切る先後関係にある。直径50cm前後の円形を呈し、深さ約30cmで底はレンズ状になり、壁はやや急な傾斜で立ち上がる。埋土は茶灰色土の単一層である。

出土遺物（第62図1～3）

1・2は糸切り底の土師器で、いずれも板状圧痕は認められない。1は小皿で、底径4.1cm、2は坏で底径7.0cmを測る。

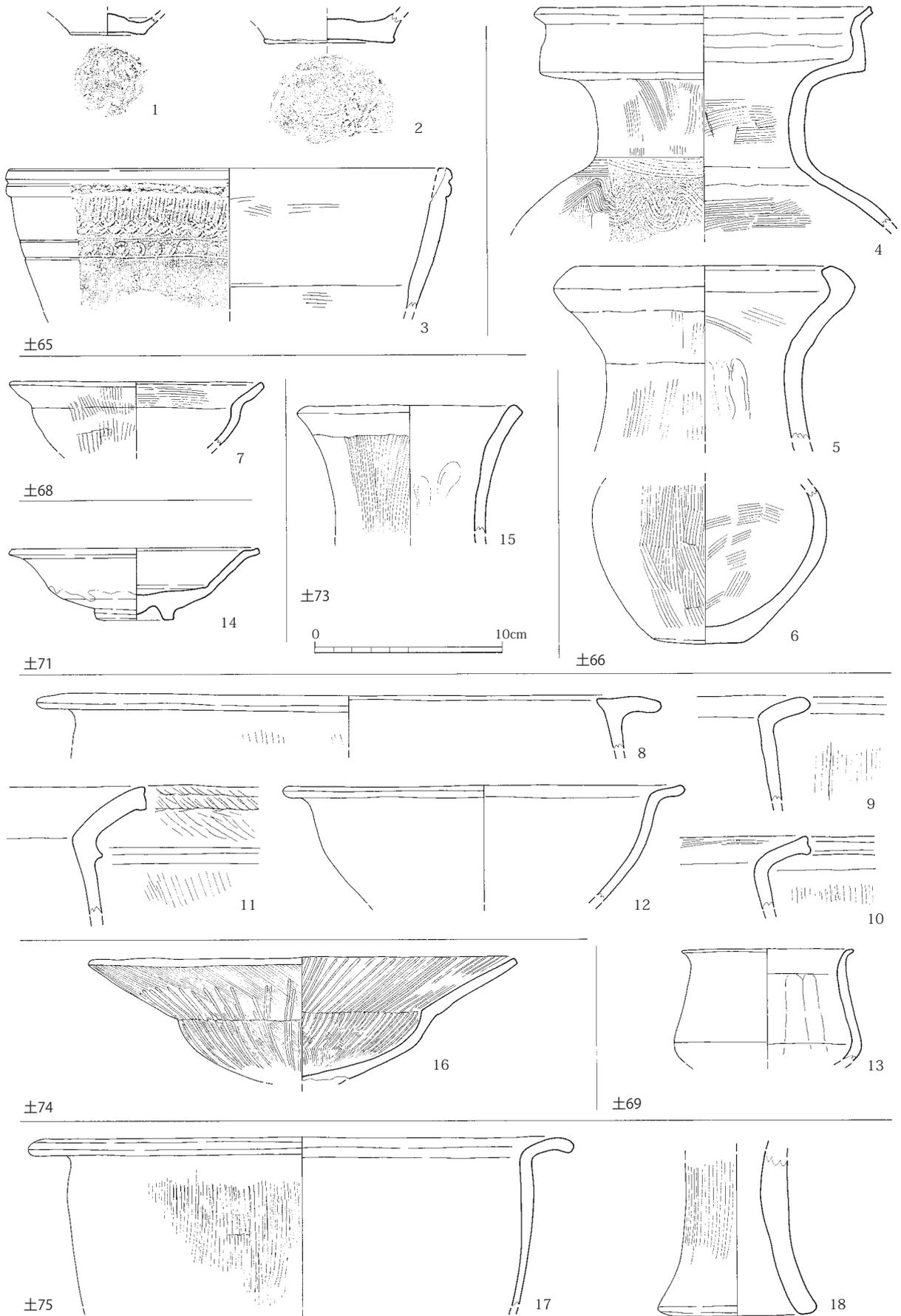
3は瓦質の火舎。口縁端部内面は欠損する。外面口縁部下に断面半円形の凸線を廻らせ、その下に剣文と細い2条の沈線の間歯車文の押し型を廻らせる。内面はヨコハケ後ヨコナデ調整、外面はミガキか。

66号土坑（第59図）

Ⅲ区東寄りに位置する小土坑で、2号窪み状遺構の西側に位置し、窪み状遺構を切る先後関係にある。長軸約160cm、短軸約130cmの楕円形を呈し、深さは約10cmで底はややレンズ状を呈する。埋土は灰色粘土の単一層である。

出土遺物（図版46、第62図4～6）

全て壺。4は畿内系の二重口縁壺。1次口縁は垂直に直立して2次口縁は短く外反する。頸部は長く直立する。外面は口縁の屈曲部以下はタテハケで調整し、その後頸部にはカキメを、肩部には波状文を廻らせる。内面は口縁部と頸部に粘土接合痕が顕著で、ヨコハケ後に部分



第 62 图 65・66・68・69・71・73～75 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

的にヨコナデで調整する。胎土は精緻で焼成も極めて良好である。5は口縁が小さな袋状になるもので、頸部が長く太い。器壁が厚く、胎土に赤褐色小粒を多数含み、やや粗い。摩滅が激しいが、外面はタテハケ、内面は口縁部が斜位のハケ、頸部はタテナデで調整する。外面は一部被熱する。6は胴部のみで、器壁が厚くややレンズ底で体部が大きく丸く張る。外面はタテハケ、内面はヨコハケ後ナデで調整し、外底部もナデ調整。

67号土坑（第59図）

Ⅲ区東寄り、68号土坑の北西に位置する土坑である。長軸約80cm、短軸50cm強の楕円形を呈し、深さは30cm弱で底はややレンズ状になる。壁はほぼ直上に立ち上がる。埋土は黄褐色土に黒色土ブロックが混入する層が主体である。

出土遺物（第84図5）

土製投弾である。指ナデにより成形し、紡錘形を呈する。焼成は良好で、灰白色を呈する。一部掘削時の傷が残る。

68号土坑（第59図）

Ⅲ区東寄り、67号土坑の南東に位置する土坑である。直径70cm強の円形もしくは隅丸方形を呈し、西側に狭いテラスを有する。南側に直径20cm前後のピットを有するが、土層観察では柱痕跡は確認されなかった。深さは20cm強で底は平坦なり、ピット部分は更に10cmほど下がる。壁は急な傾斜で立ち上がる。埋土は暗茶色土と黄褐色粘土のブロックが混在する斑土で、ピット部分は基盤土に僅かに暗茶色土が混入する。

出土遺物（第62図7）

小型の屈曲口縁の鉢で、口縁が大きく開き浅いもの。外面はタテハケ調整で黒斑が認められ、内面口縁部はヨコハケ調整で体部はナデで調整する。

69号土坑（第59図）

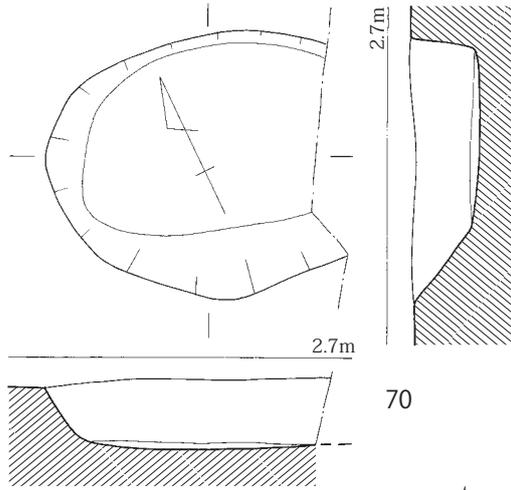
Ⅲ区東寄り、70号土坑の西に位置する土坑である。長軸65cm、短軸40cmの楕円形を呈する小土坑で、深さ30cm弱で底はレンズ状を呈する。壁はほぼ直上に立ち上がり、埋土は暗灰色土の単一層である。

出土遺物（第62図8～13、第84図6）

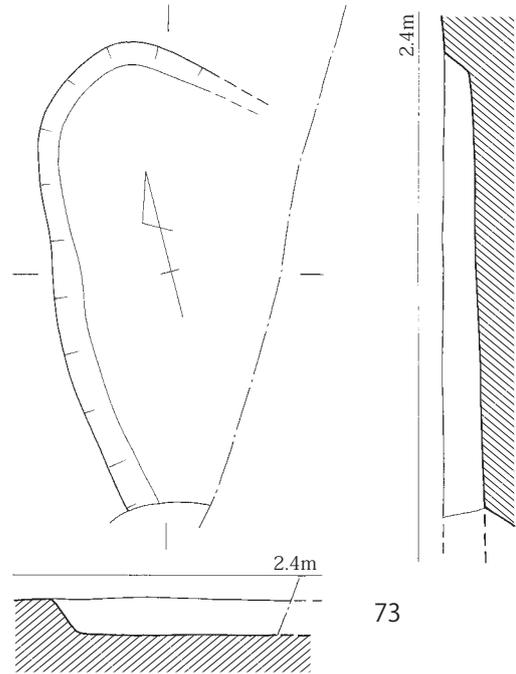
8～11は甕。8は逆L字の甕口縁部で、混入の可能性がある。外面はタテハケ、内面ナデで調整し、外面は二次被熱により茶変する。9・10は口縁が外湾し、外面はタテハケ、内面はナデで調整する。11は口縁が外反して体部はやや直線的に垂下し、頸部には断面三角の凸帯を廻らせる。口縁端部は肥厚して垂直な平坦面を作り、斜位のキザミを廻らせる。外面はタテハケ、内面はナデで調整する。

12・13は鉢。12は屈曲口縁の鉢で、内外面ともナデ調整。13は体部下位が膨らんでブランデーグラス状になる小型の脚付きの鉢で、口縁端部が外湾する。外面は水引ナデ、内面は強いタテナデ付け後ヨコナデで調整する。胎土は極めて精良で、橙色を呈する。

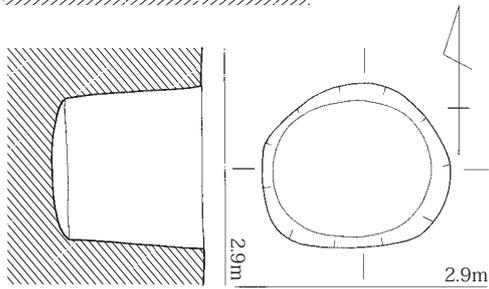
第84図6は土製投弾である。焼成前に下部を削りだし、長2.1cm、径1.3cmの茎状突起を作り出す。下端から1.3cm部分でキザミを施すが一周しない。北部九州では同様の例は佐賀県神埼市(旧千代田町)詫田西分遺跡において1例のみ出土している。矢柄につけて鏃状に使っ



70

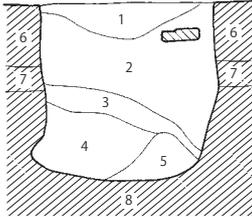


73

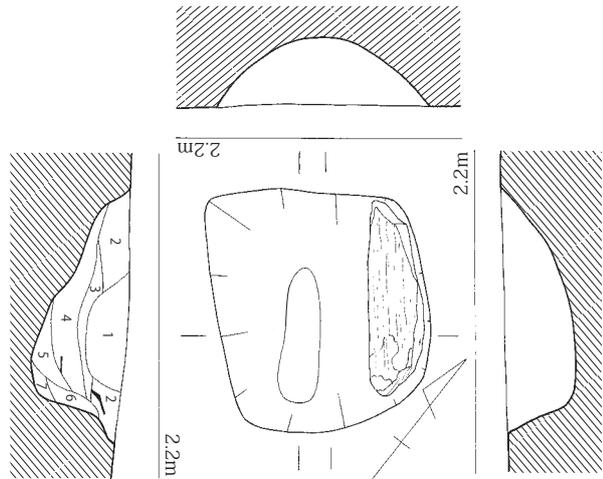


71

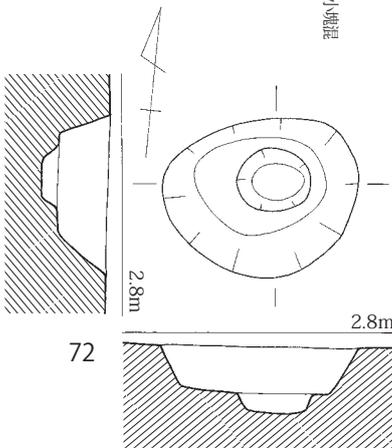
- 1 灰色粘質土+8小塊
- 2 黒灰色粘質土に8小塊
- 3 5+8塊
- 4 8に5小塊混
- 5 黒色粘土
- 6 淡黄褐色粘土
- 7 淡灰色粘土
- 8 白黄色粘土(地山)



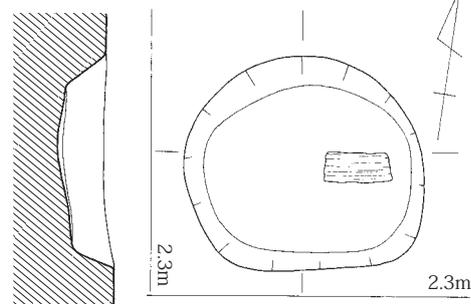
- 1 淡黄色粘土に黒色土・黄色土混
- 2 1より黄色土少ない
- 3 灰色粘土(木質混)
- 4 3に黒色土混
- 5 淡灰色粘土
- 6 淡黄褐色粘土に黒色土小塊混
- 7 暗灰色土



74



72



75

- 1 淡黄色粘土に黒色土混
- 2 淡黄色粘土に黄色土混
- 3 淡灰色粘土に黒色土混



第63図 70～75号土坑実測図(1/30)

たり、スリングに固定しやすかったりなどの機能が想定されるが詳細は不明である。ただし、同じ有明海沿岸で出土していることから今後類例が増加すれば、地域的な特徴となる可能性がある。焼成は良好で、灰黄色を呈する。

70号土坑（第63図）

Ⅲ区東端、69号土坑の東に位置する土坑で、1/4ほどが調査区外に広がる。長軸120cm以上、短軸100cm強の楕円形に復元でき、深さは約40cmで底はレンズ状を呈する。壁は緩やかに立ち上がるが、北側の傾斜は強い。埋土は淡灰色土が主体で、黒色土が若干混入する。出土遺物は小片のため、図示できるものがない。

71号土坑（第63図）

Ⅲ区東寄り、8～10号土坑の北に位置し、34号土坑に東接する土坑である。直径65～75cmの円形を呈し、深さは約70cmで底はレンズ状を呈する。壁は急な傾斜で立ち上がり、西側の下位が若干オーバーハングする。埋土は黒灰色粘土や黒色土が主体で、下層はやや軟質になる。上層には切り石状の板石が入っていた。

出土遺物（図版47、第62図14、第87図2）

唐津焼の小皿で口縁が大きく開いて端部が屈曲する。外面下位から底部は露胎で、内底部には砂目が認められる。釉は灰黄緑色に発色し、胎土は茶色を呈する。

第87図2は木製織器か。両端を細く加工しており、断面を四角形に削る。中央部がわずかに凹む。

72号土坑（第63図）

Ⅲ区南寄り、3号土坑の西に位置する土坑である。長軸80cm弱、短軸60cm強の不整楕円形を呈し、中央やや東側に直径30cm弱のピットを有する。深さは約25cmで、壁はやや緩やかに立ち上がるが、下位は傾斜が強くなる。出土遺物は小片のため、図示できるものがない。

73号土坑（第63図）

Ⅲ区東寄り、70号土坑の南に位置する土坑で、70号に切られる先後関係にある。東半部は調査区外に広がり、南北は上層遺構に切られて正確なプランは不明であるが、長軸180cm以上、短軸100cm以上の楕円形を呈すると推測される。壁は緩やかに立ち上がり、底はほぼ平坦になる。埋土は軟質の淡灰色粘土が主体となる。

出土遺物（第62図15）

器台の上半部で、外面はタテハケ、内面はナデで調整し指圧痕が残る。

74号土坑（第63図）

Ⅲ区北寄り、48号土坑の南に位置する土坑である。長軸95cm、短軸85cmの不整楕円形を呈し、深さは15～30cmで底は凹凸が多い。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は淡黄色粘土が主体であり、最下層に軟質の淡黄色粘土が堆積する。内部から薄い板状の木質が出土したが、腐食のため取り上げることはできなかった。

出土遺物（図版47、第62図16）

口縁が大きく開く高坏で、坏部は浅く丸みを持つ。内外面とも斜位のハケ調整後に、放射状の暗文を施して装飾する。胎土は極めて精良で焼成も極めて良好の精製品である。

75号土坑（図版 35、第 63 図）

Ⅲ区北寄り、27号土坑の北東に位置する土坑で、11号土坑に切られる先後関係にある。長辺約 100cm、短辺約 85cm の隅丸長方形を呈する。深さは最深で約 35cm で、南側が深くなるすり鉢形になり、底は丸くなる。埋土内に一部炭化した木が入っていたが、未加工のものであった。埋土は灰色土及び軟質の淡灰色粘土が主体となる。

出土遺物（第 62 図 17・18）

17 は甕で、外面は細かいタテハケ、内面はナデで調整する。

18 は直線的な器形の器台で、器壁が厚く中位が特に厚くなる。外面はタテハケ、内面はタテナデで調整し、裾部は内外面ともヨコナデ調整。

(3) 溝

1号溝（図版 36・37、第 64 図）

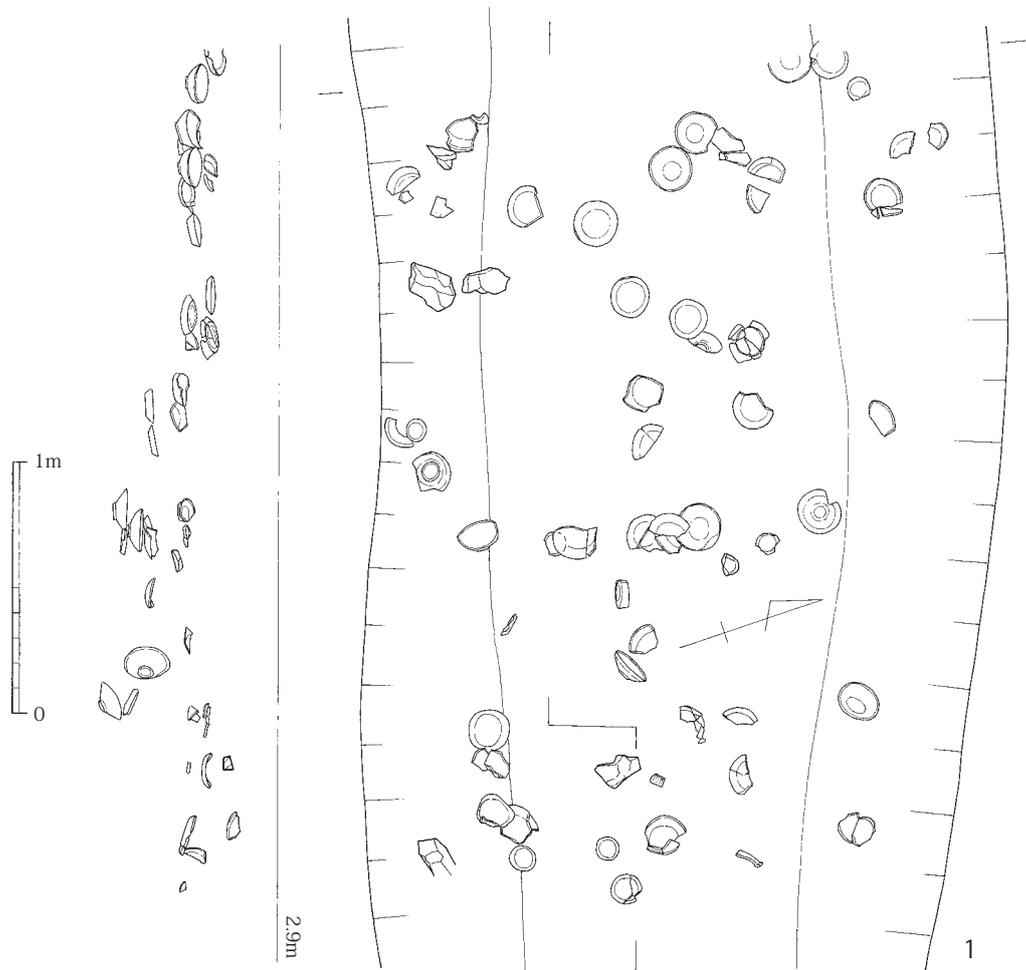
Ⅲ区を北西－南東に横断する直線的な溝である。一部壁面崩落と思われる広がりがあるが、平均的に 2m 前後の幅を持つ。深さは中央部（土層図作成部）が約 70cm で、西側の底がやや高くなる。壁は緩やかに立ち上がり、断面は椀型もしくは隅丸逆台形を呈する。また、中央部やや東側に、底のレベルが一段高くなる部分が認められた。高まりは意図的に基盤土を掘り残したもので、上端幅 70～90cm、下端幅 130～150cm、上面は平坦で東西断面台形状を呈する。溝底及び溝の上端とのレベル差はともに 30cm 前後である。橋脚の可能性を考えて周辺にピット等を探したが、該当すると考えられるものはなかった。この高まりを境に溝埋土が変化する事はなく、用途は不明である。本溝については、直線的であること、現在の水田の区画方位とほぼ同じ方位を取る事などから、区画溝の可能性が考えられる。これについては、隣接する西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点において延長が検出されているため、Ⅱ地点の報告時に併せて検討する。

埋土の土層は大きく 4 つに分けられる。上層は黒茶色土の単一層で、この層の底付近に完形品を含む土師器や瓦器などが多量に出土した。中層は茶灰色土に煤が混入する層がレンズ状に堆積し、一部煤のみの層も認められる。下層は基盤土に茶灰色土と灰色粘土が混在し、凹凸が激しい。最下層は基盤土に黒色土の小塊が若干混入し、出土遺物がほとんどない。

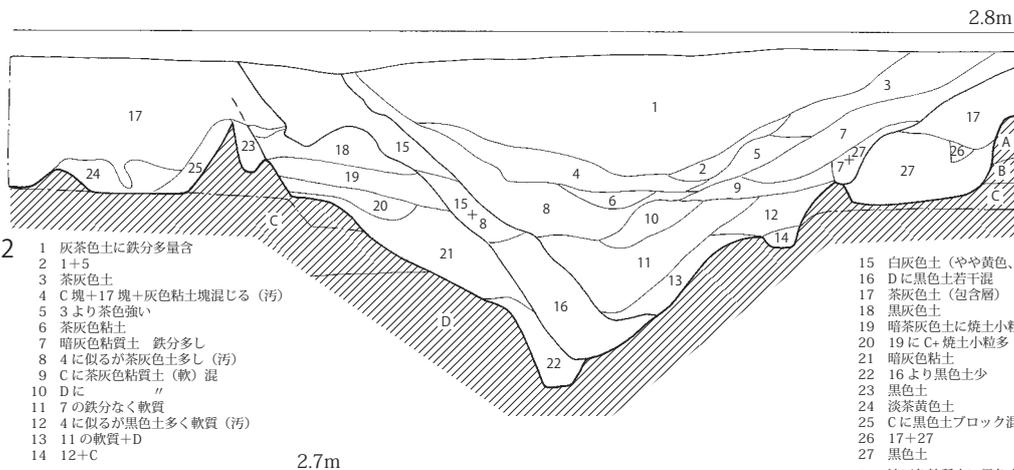
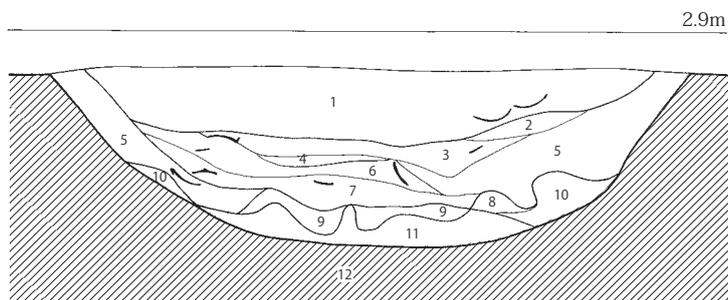
上層の黒茶色土の堆積は、開口していた溝を一括で埋めたものと考えられ、大量の土師器や瓦器等はその折に一括で廃棄されたものとも捉えられる。図示した遺物はその一部であり、破片を含めると更に大量の土器が出土している。土器は正位で出土したものや完形品のものもあるが、ほとんどは破片もしくは何処かが欠損し、正位には座らない。この黒茶色土は包含層として遺跡全面に認められることから、整地の可能性を考えている。上層出土土器類は整地直前か整地時投棄されたものと考えられ、黒茶灰色土包含層の上限を示す資料と捉えられる。

中層からも土器が大量に出土している。しかし上層出土の遺物と大きな時期差は認められない。若干土師器が少なく陶磁器が多いことが指摘できる程度である。

下層は遺物が多少出土したものの、基盤土中心の土壌が溜まった状態である。水流が少な

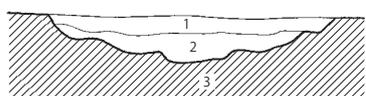


- 1 黒茶色土
- 2 1+3
- 3 黒茶色土に焼土塊混
- 4 煤層
- 5 茶灰色土
- 6 5に煤混
- 7 茶色粘質土
- 8 12+灰色粘土の斑
- 9 12+黒色土+灰色粘土
- 10 9の各粘土塊が小
- 11 12に黒色粘土小塊混
- 12 白黄色粘土(地山)



- 2 1 灰茶色土に鉄分多量含
- 2 1+5
- 3 茶灰色土
- 4 C塊+17塊+灰色粘土塊混じる(汚)
- 5 3より茶色強い
- 6 茶灰色粘土
- 7 暗灰色粘質土 鉄分多し
- 8 4に似るが茶灰色土多し(汚)
- 9 Cに茶灰色粘質土(軟)混
- 10 Dに "
- 11 7の鉄分なく軟質
- 12 4に似るが黒色土多く軟質(汚)
- 13 11の軟質+D
- 14 12+C

- 15 白灰色土(やや黄色、鉄分多)
- 16 Dに黒色土若干混
- 17 茶灰色土(包含層)
- 18 黒灰色土
- 19 暗茶灰色土に焼土小粒(汚)
- 20 19にC+焼土小粒多(汚)
- 21 暗灰色粘土
- 22 16より黒色土少
- 23 黒色土
- 24 淡茶黄色土
- 25 Cに黒色土ブロック混
- 26 17+27
- 27 黒色土
- A 淡灰色粘質土に黒色土塊混
- B Cに鉄分沈殿(黄色粘土)
- C 白黄色粘土
- D 淡青灰色粘土(軟質)



- 1 淡灰色粘土(黒色粘土塊混)
- 2 1よりやや灰色味濃い
- 3 白黄色粘土(地山)



第64図 1・2・4号溝平面・土層実測図(1号は1/30、他は1/40)

い状態で開口していたものか。

最下層は層が薄く出土遺物も少ないことから、開削直後の自然堆積と考えられる。

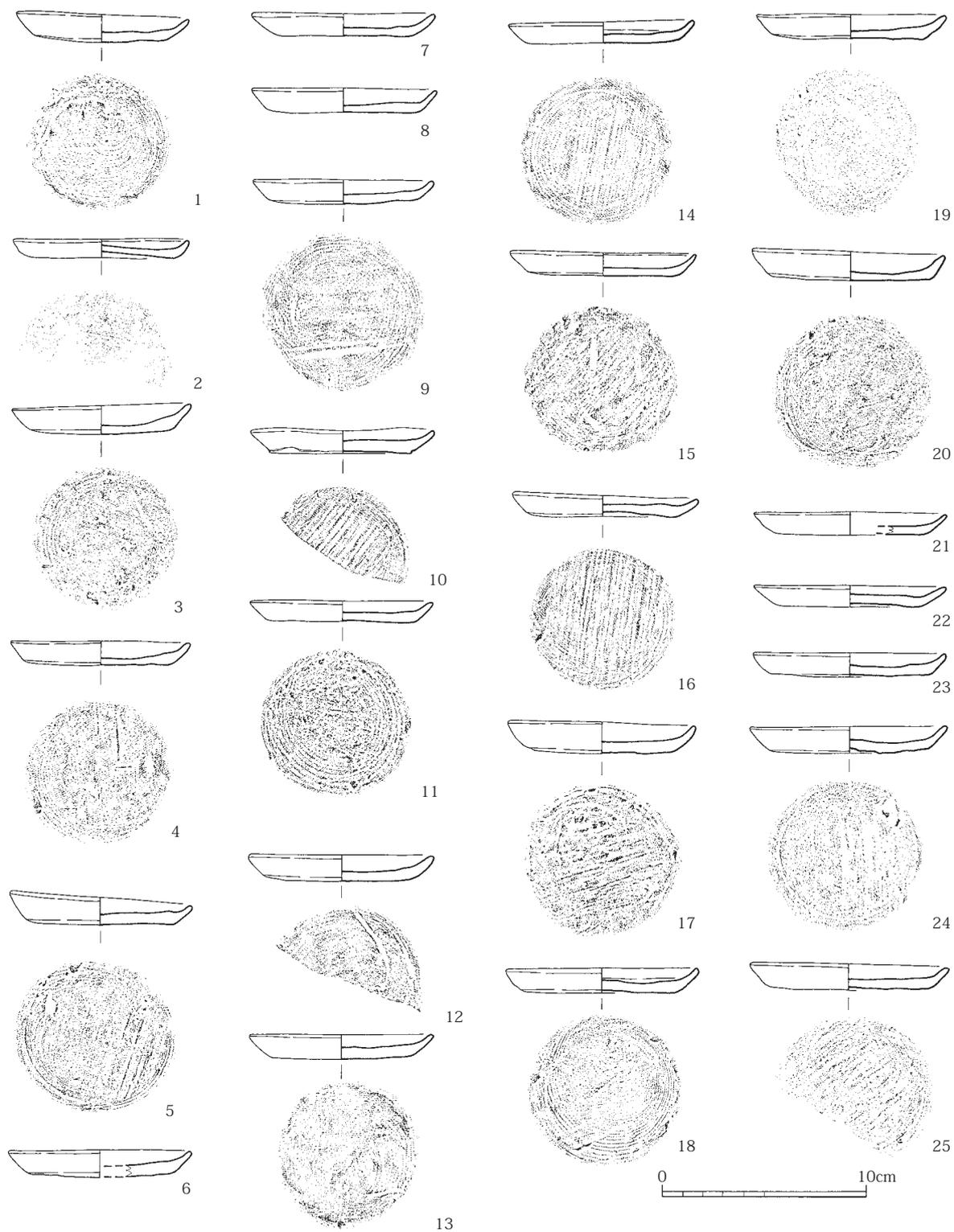
出土遺物 (図版 47～51、第 65～72 図、第 84 図 3・7・11・19、第 85 図 3・14、第 86 図 2・6)

出土遺物は埋土の堆積状況から、上層・中層・下層・最下層に分けて取り上げたが、最下層は図示できる資料がない(第 64 図土層図参照)。また、特殊遺物については明らかに混入品か否かを確定し難いことから、可能な限り報告する。

第 65～69 図は上層出土遺物である。第 65～68 図 1～63 は糸切り底の土師器。1～25 は小皿で、2・6・12・13 以外は底部外面に板状圧痕が認められる。口径 8.4～9.8cm、底径 6.8～8.4cm、器高 0.9～1.2cm(復元を含む)と概ね扁平で、規格に大きな差異は認められない。ただ、底部の形状がやや丸みを持つものと平底のものがあり、後者が大勢を占める。糸切りが粗く凹凸のあるものもある。5 は外底部が二次被熱により赤変する。14 は全体に二次被熱を受けて赤変し、特に内底部の赤変が強いため灯明皿に使用されたと考えられる。

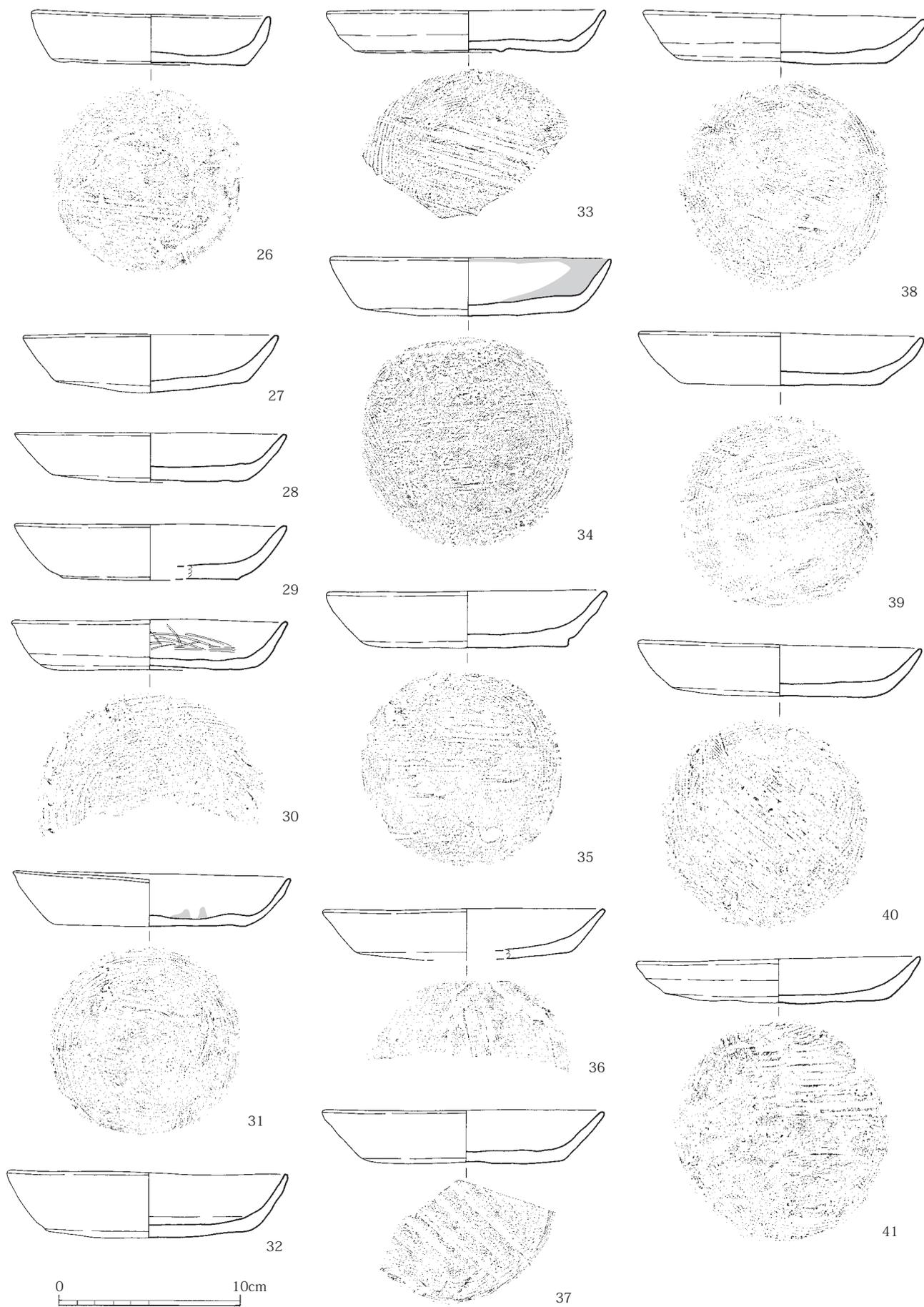
26～63 は坏で、54・63 以外は底部外面に板状圧痕が認められる。54・63 は糸切り後に外底部をナデ調整するため板状圧痕は不明である。直径 13.2cm～16.6cm、底径 9.4～13.1cm、器高 2.1～3.4cm(復元を含む)と規格に差異が認められるが、概ね浅めの器形を呈する。28・29・34・35・46・48・49 は体部下位に糸切り痕が残り、48 は内面にも糸切り痕が残る。26・61 は作りが悪く、他資料に比して体部が直立しやや内湾する。30・49・50・56 は内面にミガキ状条痕が認められ、30・50・56 は工具痕が波状文状になることから、文様の付けたものとも考えられる。31 は内面に煤が付着する。32 は内面に墨痕らしきものが認められるが明瞭でない。34 は内面に墨のような黒色の液体状の付着物が流れた痕跡が認められる。25 も内面に工具痕が認められるが明瞭でない。37・38 は底部外面が二次被熱により一部赤変する。43 は糸切り離しが粗いため体部下位のナデが及ばず粘土がはみ出ており、内面には工具のあたりのような傷がある。47 は際立って浅いもので、内面に煤が付着する。56 は口縁端部がやや黒変する。55 は他に比して器高が高く口縁が大きく開く器形であり、壺と呼ぶべきかもしれないが、ここでは坏として取り扱った。

第 68・69 図 64～93 は瓦器。64・65 は小皿で、口径 9.7・10.7cm、器高 2.0・2.2cm、ともに板状圧痕が認められる。64 は内外面ともミガキ調整で、外面を一部ヨコナデ調整するが部分的に糸切り痕が残る。65 は外面には内面からの押し出しによるヒビが残り、内面には重ね焼きの痕跡が残る。66～93 は壺で、口径 16.0～18.2cm、底径 6.2～7.6cm、器高 4.9～6.1cm(復元を含む)である。67 は体部外面下位に粘土の接合痕があり、内底部付近に工具痕が認められる。69 は外面に強いナデによる稜線がつき、その頂部のみを削るようにミガキを施す。70 は底部内面に粘土の接合痕が認められ、内面のミガキは波状文状に施す。71 は口縁部付近を燻し、内外面のミガキはやや粗い。72 は上位の器壁が薄く口縁端部を玉縁状に作る。73 は内外面ともミガキを施すが、特に上位のミガキが細かい。74 は口縁がやや開き気味で、外面下位に糸切り痕が残り、内面のミガキは波状文状。75 は外面下位がヘラケズリ調整。76～78 は外面は強いヨコナデによる稜線のみミガキを施し、下位には押し出しの指圧痕が認められる。内面のミガキは波状文状で、78 は底部付近に粘土の接合痕が認められる。79 は外面下位に粘土接合痕があり器壁が肥厚する。内面のミガキは波状文状。80 は外面下位に粘土接合痕があり、それ以下に糸切りが残る。体部上位には燻しがかかり、高台豊付には板状圧痕が認められる。81 は体部外面中位まで糸切り痕が残り、口縁付近を燻す。内面のミガキは

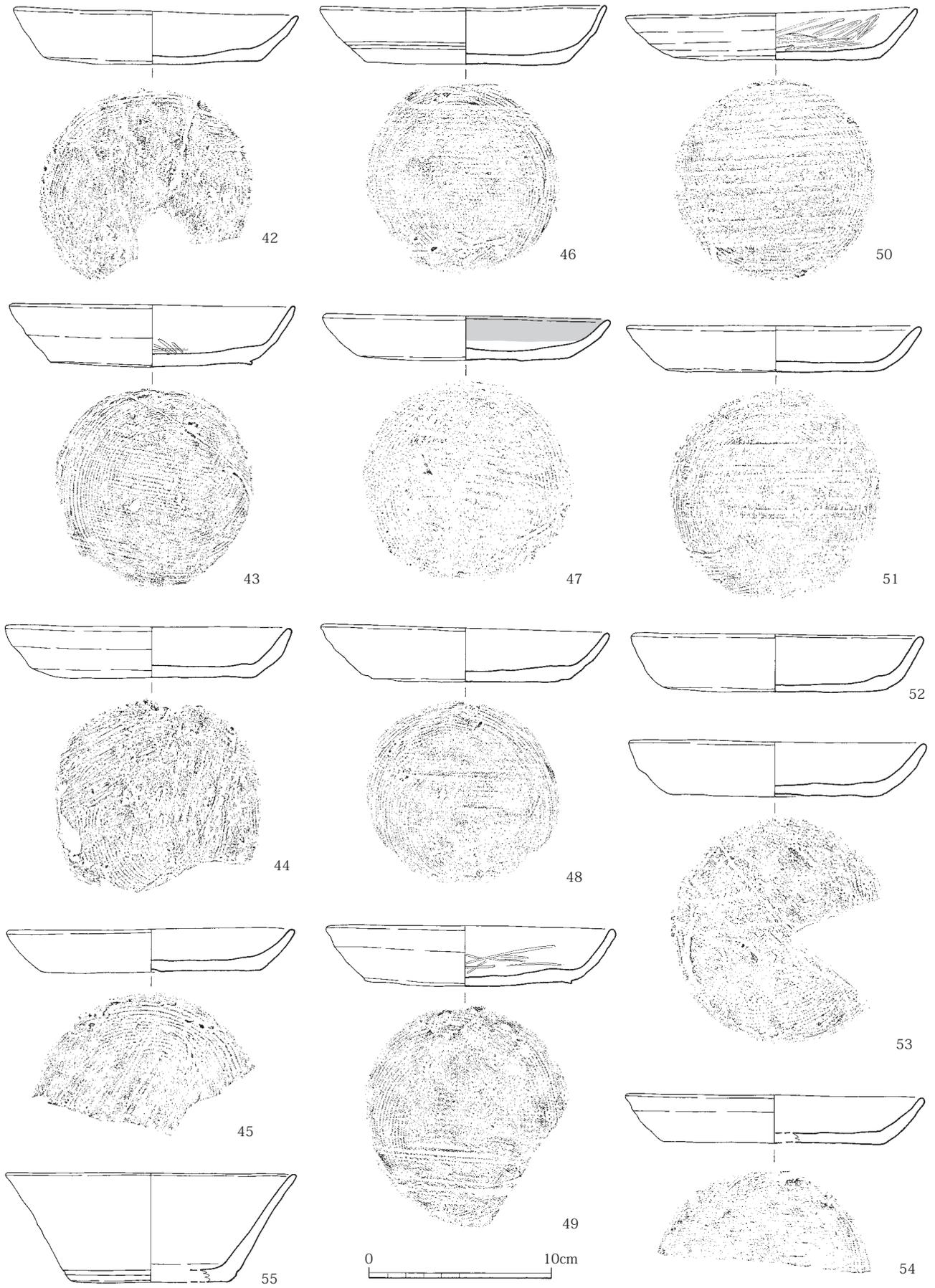


第 65 図 1 号溝上層出土遺物実測図 (1) (1/3)

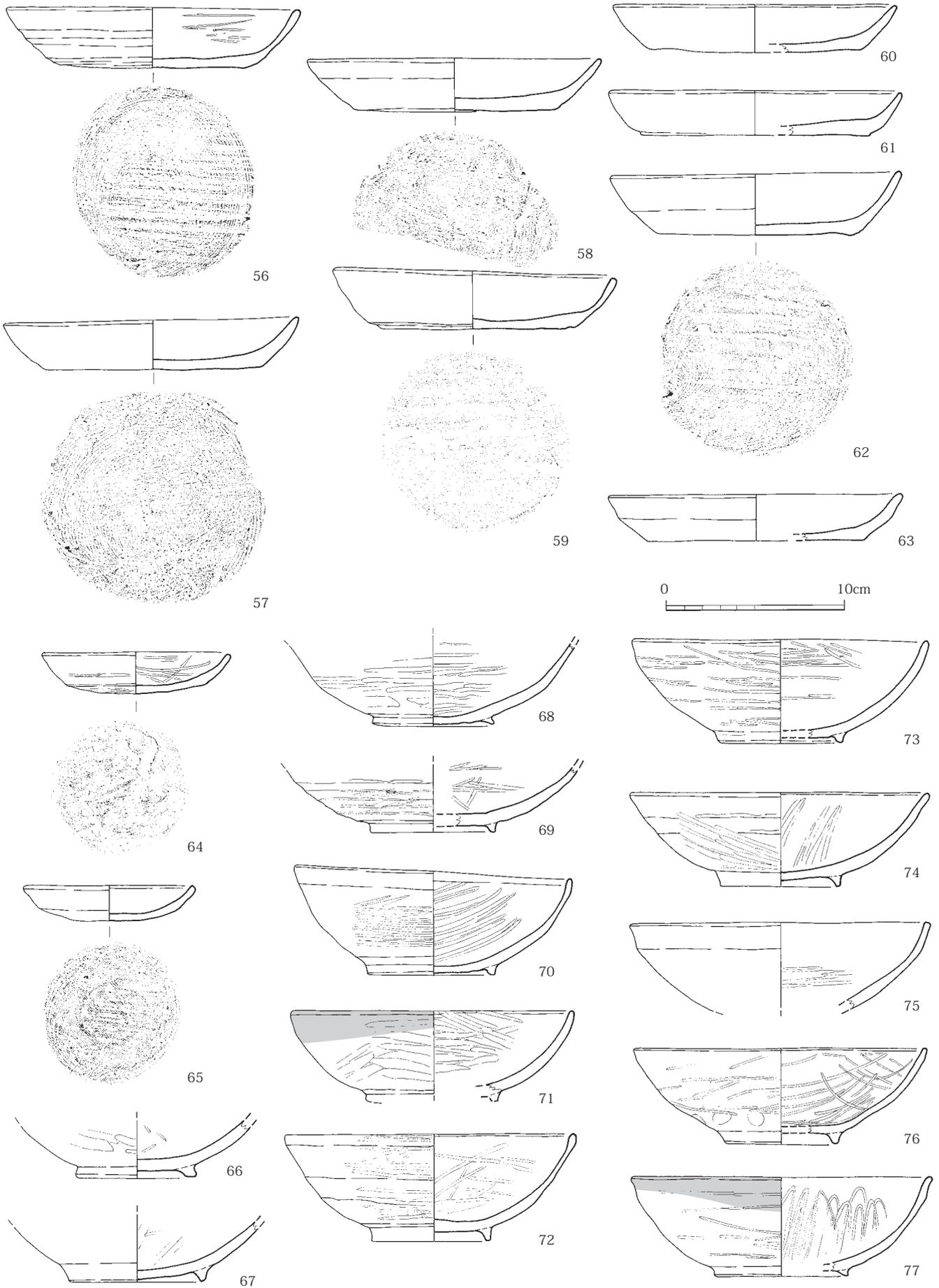
波状文状。82 は外面はナデによる稜線のみミガキ調整で、下位に指圧痕が認められる。内面のミガキは波状文状で、底部に板状圧痕が認められる。83 は外面下位がケズリ後ミガキ調整で、口縁付近が燻される。内面は摩滅するがミガキは波状文状の可能性ある。84 は外面のミガキが粗く、下位に指圧痕が認められ、内面のミガキは波状文状。86 は外面はヨコナデの稜線のみをミガキ調整、下位には粘土接合痕があり器壁が肥厚する。内面のミガキは波状文状。



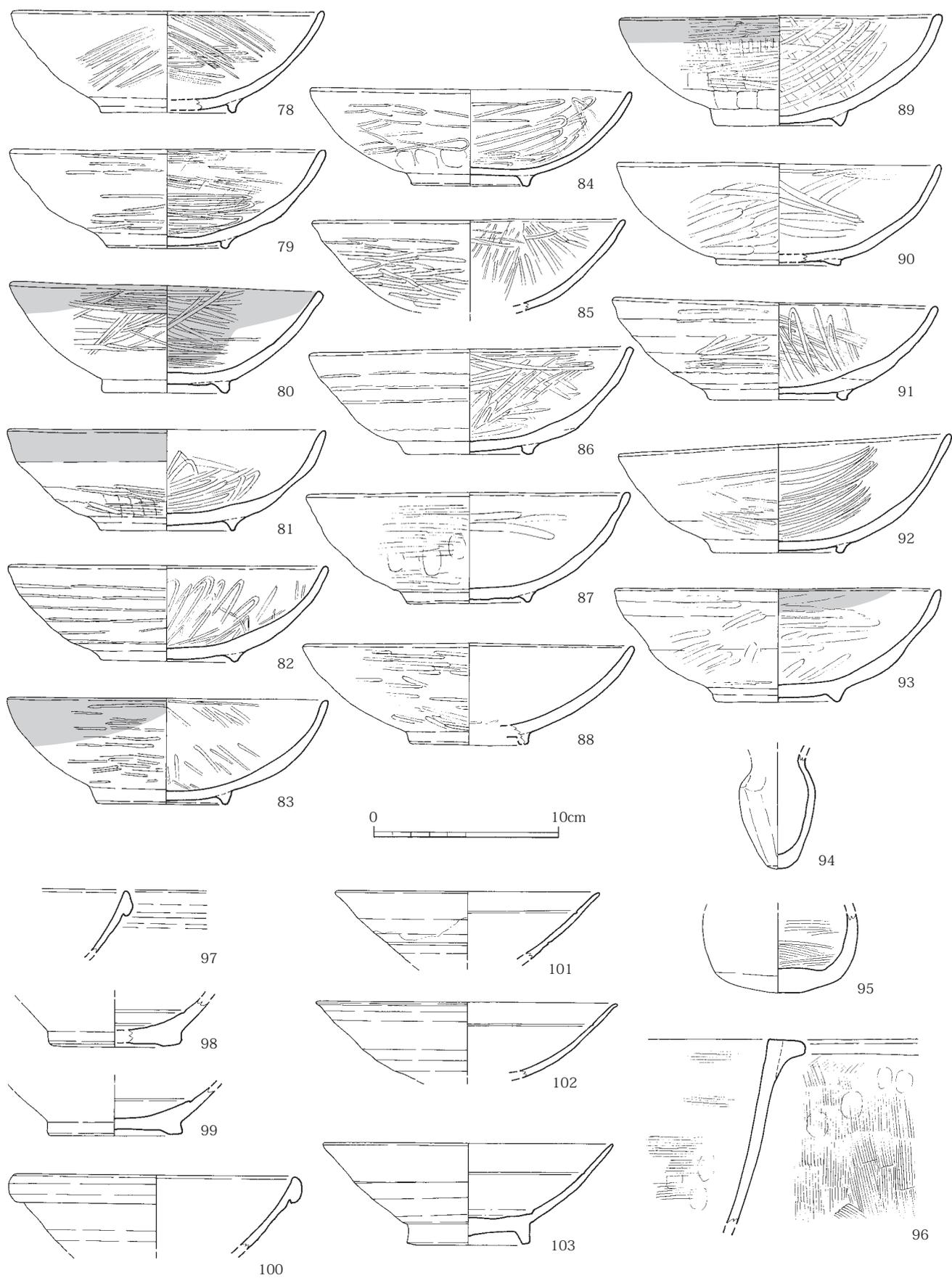
第66图 1号溝上層出土遺物実測図(2)(1/3)



第 67 图 1 号溝上層出土遺物実測図 (3) (1/3)



第 68 图 1 号溝上層出土遺物実測図 (4) (1/3)



第 69 图 1 号溝上層出土遺物実測図 (5) (1/3)

87は内外面ともに粗いミガキで、外面下位に指圧痕が認められる。88は外面下位が工具状のナデツケで一部ミガキを施し、内面のミガキは波状文状。91は外面はナデによる稜線の頂部を中心にミガキを施し、下位には粘土接合痕があり器壁が肥厚する。内面のミガキは波状文状。92も内面のミガキは波状文状。93は作りがやや粗く、全体に凹凸があり器壁の厚さも異なる。外面に粘土接合痕があつて器壁が肥厚し、口縁内部は一部燻しがかかる。

第69図94～96は土製品。94は壺のミニチュアと思われる。内面はナデ調整で一部指圧痕が認められる。外面が下位をケズリ、後に全体をナデ調整する。95は小型の壺底部と思われる。外面はマメツするが、内面は工具によるナデ調整。

96は土鍋。内外面ともハケ調整で、一部に指圧痕が認められる。外面には煤が付着する。

97～103は磁器の白磁碗。97～100はIV類で、97・100は口縁が玉縁状、98・99は下位が露胎となり、99の内面には段が認められる。101～103はVIII類か。器壁が薄く外面下位は露胎で胎土は赤褐色を呈し、貫入が多い。102は器壁が薄く口縁端部はやや屈曲し、上端部が平坦になる。内面上位に沈線が廻る。103も器壁が薄く、外面の施釉は上位のみで下位露胎となり、ケズリを施している。内面見込みは輪状に釉を掻き取る。

第84図3は土製投弾である。指ナデにより成形し、紡錘形を呈する。焼成は良好で、灰白色、黄褐色を呈する。7は土玉である。焼成は良好で、灰白色を呈する。11は土錘である。両端がすぼみ、中央に径0.85cmの孔を穿つ。体部に「×」の線刻がなされる。焼成は良好で、橙色を呈する。

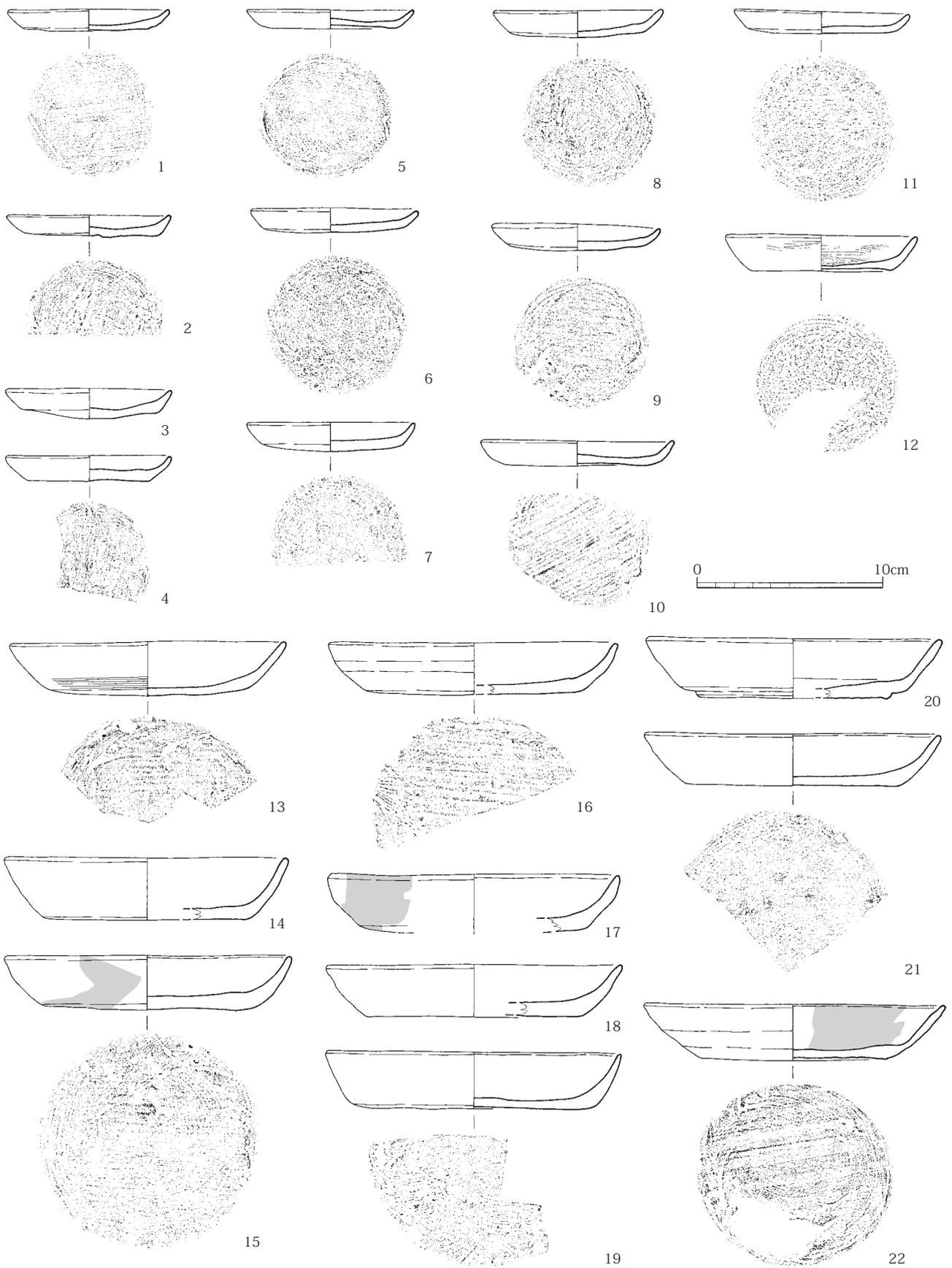
19は石庖丁である。背部が膨らみ杏仁形を呈する。外孔1.3～1.5cm、内孔0.5～0.8cm、背孔1.0cm(左)、1.2cm(右)、孔間2.3cmを測る。孔から斜め上方に磨滅が認められ、紐をかけて使用した際の痕跡と考えられる。片岩製である。第85図3は砥石である。両面を砥面とし、下側面は研磨による面取りを行う。砂岩製である。石質から仕上げ砥と考えられる。14は砥石である。両面を砥面とし、上側面は研磨による面取りを行う。上面に金属製刃器の研磨痕が8条認められる。片岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。第86図2は石錘か。左側面および上側面に剥離を施す。左側面の剥離部分中央部には鉄分がわずかに付着する。凝灰岩製か。6は凹石か。上面中央部にわずかに叩きの痕跡、左右側面上方にわずかに磨りの痕跡が認められる。凝灰岩製である。

第70・71図は中層出土遺物である。1～28は糸切り底の土師器。1～12は小皿で、7・8・12以外は板状圧痕が認められる。口径8.8～10.4cm、底径6.5～7.4cm、器高1.2～1.9cm(復元を含む)と概ね扁平ではあるが12のみがやや深めである。底部の形状はやや丸みを持つものと平坦なものがある。10はやや口径が大きく、底部内面に煤が付着する。12は内外面に工具状の痕跡が認められる。

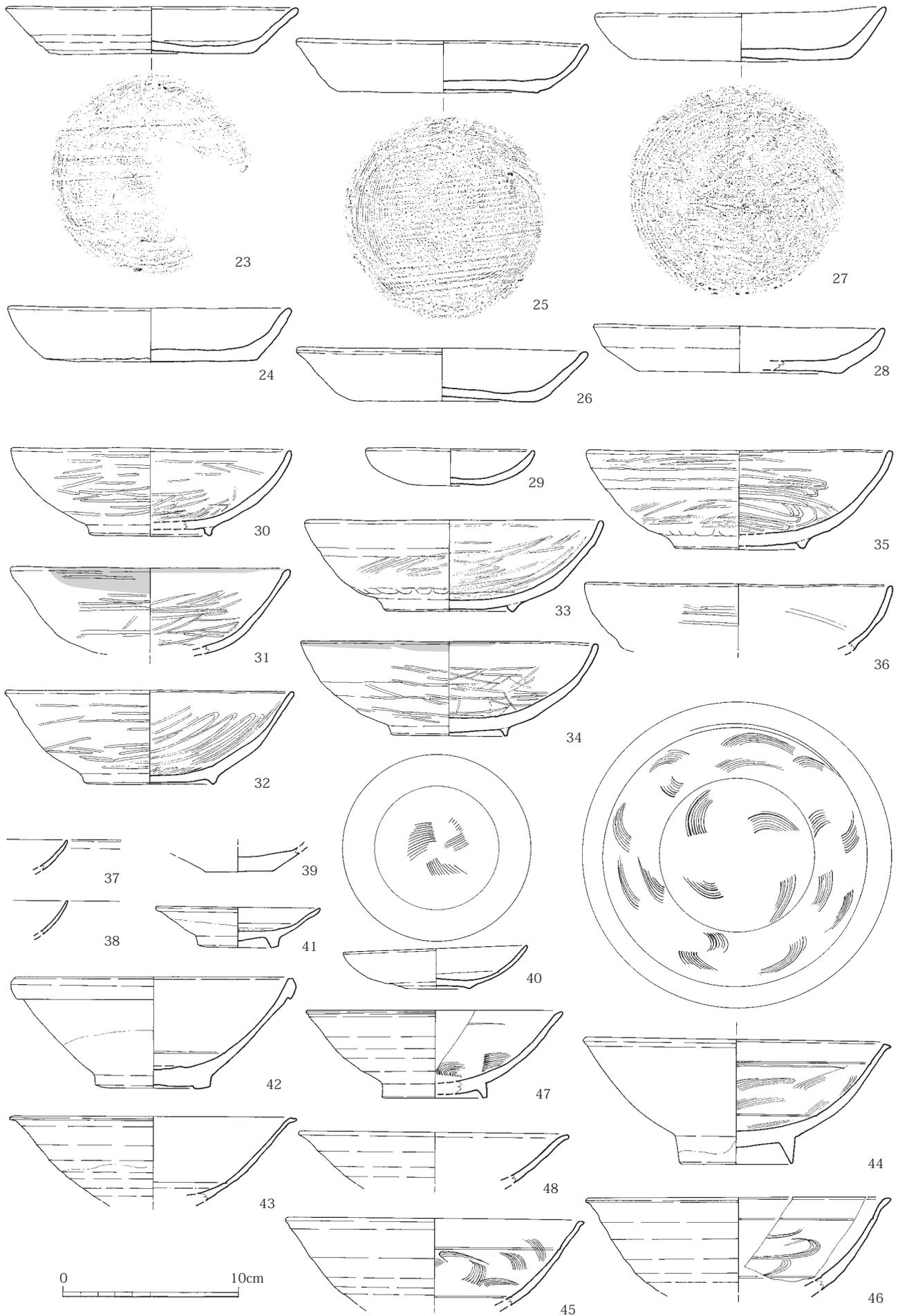
13～28は坏で、マメツにより調整が不明な17と14・26以外は全て板状圧痕が認められる。口径15.0～16.6cm、底径10.1～13.1cm、器高2.6～3.1cm(復元を含む)と規格に若干の差異が認められる。13・22は体部外面下位に糸切り痕が残り、13の内外面上位と15・17の外面、22の内面には若干煤が付着する。

第71図29～36は瓦器。29は小皿で、内外面のミガキが粗く底部外面に糸切り痕と板状圧痕が残る。復元口径9.6cm、器高2.1cm。

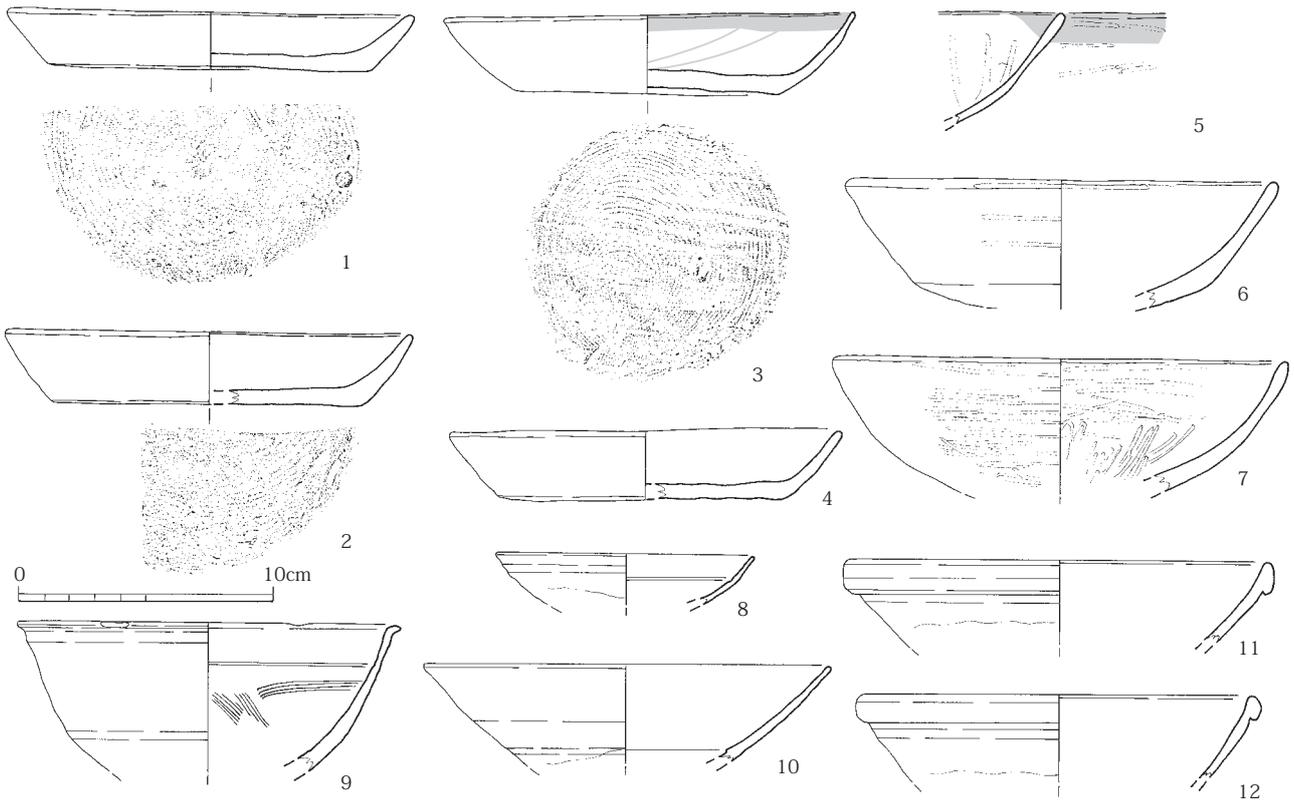
30～36は埴で、口径16.0～17.6cm、底径6.6～7.5cm、器高4.9～5.6cm(復元を含む)を測る。



第 70 图 1 号溝中層出土遺物実測図 (1) (1/3)



第71图 1号沟中層出土遺物実測図(2)(1/3)



第 72 図 1 号溝下層出土遺物実測図 (1/3)

30 は外面下位にミガキ前のケズリが認められる。31 は外面下位に粘土の接合痕があり、内面のミガキは波状文状、口縁部が燻される。32 は外面上位にまで糸切り痕が残り、一部に指圧痕が認められ、外面のミガキはナデの稜線のみに施す。内面のミガキは波状文状。33 は外面中位まで糸切り痕が残り、ミガキは下位に少し施す程度で、高台畳付に板状圧痕が認められる。外面下位には粘土の接合痕と指圧痕が認められる。内面のミガキは波状文状。34 は内外面ともミガキが粗く、外面にはナデによる凹凸が顕著である。口縁は一部燻される。35 も内外面ともミガキが粗く、外面はナデの稜線のみに施し、底部には板状圧痕が認められる。内面のミガキは丸みを持つ波状文状。36 は摩滅が激しいが、内面のミガキは波状文状の可能性がある。

第 71 図 37～48 は磁器。37～46 は白磁。37～41 は皿で、37・38 は口縁部のみの破片であるが、口縁が内湾し器壁が薄い。釉はやや灰色味を帯びる。40 は口縁部は直口でややあげ底になる。器壁が薄く、見込みに短い楕目文を有し、やや黄味がかかった釉を施す。41 は平底で外面下位は露胎である。

42～46 は碗。42 はⅣ類で、口縁を玉縁状に作り、内面底部付近に圈線が廻る。釉はやや緑味を帯び、外面下位は露胎である。43 は器壁が薄く、口縁端部はやや屈曲し上端部が平坦になる。底部内面の釉を輪状に掻き取る。Ⅷ類か。44 は欠損が無いもので、細く高く直立する高台を有する。体部は内湾し、口縁端部は強く屈曲して内面に稜がつき上端部が平坦になるが、釉が厚くかかるため丸くなる。内面には短い楕目文で花文を描き、底部と体部の境に段を有する。Ⅴ類か。45 は器壁が薄く、口縁端部は僅かに屈曲して上端部が平坦になる。内面には楕目文を施し、中位に一条の沈線が廻る。46 はⅣ類で、体部が内湾し、口縁端部が肥

厚するが、端部を屈曲させたものかもしれない。外面はナデの凹凸が目立ち、内面には櫛目文を有し、上位に沈線が廻る。

47・48は青磁碗。47は同安窯系で、断面逆台形の高い高台を有し、口縁端部は外反する。高台畳付から底部は露胎で、内面には短い櫛目文で花文を描く。48は口縁が大きく開き端部が外反する。ナデによる凹凸が目立ち、貫入が多い。

第72図は下層出土遺物である。1～4は糸切り底の土師器坏。1以外の底部外面には板状圧痕が認められる。復元口径12.6～16.2cm、復元底径10.6～12.6cm、器高2.8～3.1cmで、1以外はほぼ同じ規格である。1は器高が低く扁平で、器壁も厚い。色調も明るい橙色で他資料と異なり、やや古い様相を呈するか。3は内面に墨の様な液状の付着物が流れたような痕跡が残る。

5～7は瓦器塚で、6・7は復元口径17.0・18.0cm。5は口縁を燻し、6・7は器壁が厚い。6は粗いミガキで、外面はナデの稜線のみ施す。体部下位にまで糸切り痕が残る、湾曲部は器壁が肥厚して外面に緩やかな稜がつく。7も内外面ともミガキがやや粗く、内面下位は波状文状に施す。

8～12は白磁。8は小皿で口縁はやや内湾しながら開く。内面中位に沈線が廻り、外面は下半が露胎になる。釉はやや緑味を帯びる。

9～12は碗。9は体部が内湾して口縁端部が屈曲する。内面には櫛目文が描かれ、上位に沈線が廻る。釉はやや黄色味を帯び、貫入が多い。Ⅶ類か。10は器壁が薄く口縁が直線的に大きく開く。内面底部には段を有し、外面底部付近は露胎となる。釉はやや黄色味を帯びる。11・12はⅣ類で口縁端部を玉縁状に作り、外面中位以下は露胎となる。双方とも釉はやや灰色味を帯びる。

2号溝（図版37、第64図）

調査区北側を1号溝と同様に北西－南東に横断する直線的な大溝である。幅3～4mで、深さは最深で180cmである。断面観察からは大きく1～3期の3時期の掘削が認められ、断面形状は3期ともに逆三角形とほぼ同じ形状を呈する。平面観察によって2期・3期溝は確認したが、1期溝を2期溝と同じものとして掘削したため、出土遺物が混在している。また、最上層の灰茶色土から下層まで、弥生中期～古代の遺物が多量に包含されていることから、出土遺物については若干混乱がある。以下、時期ごとに説明する。

1期溝は茶灰色土包含層の整地前に掘削されている。断面逆三角形で、埋土は大きく3つに分けられ、上層は茶灰色土と黒灰色土が主体であり、茶灰色土整地時に開口していた溝を埋められたものと考えられる。中層は暗灰色粘土が厚く堆積し、下層はさらに逆台形に深く掘削されている部分で、基盤土のグライ土化した青灰色粘土に黒色土が僅かに混入する。2期以降は茶灰色土整地後に開削されており、3期溝は2期溝の再掘削と考えられる。2期溝は白色系の粘土主体の埋土で、最下層は1期溝の最下層同様の青灰色粘土に黒色土が混入する層となる。3期溝は上層に鉄分を多く含む灰茶色土がレンズ状に厚く堆積する。一時に埋められたもので、耕作土の可能性もある。中層以下は暗灰色粘土主体の埋土がレンズ状に堆積し、最下層は基盤土の青灰色粘土に暗灰色粘土が混入する層になる。1・2期溝ともに最下層は基盤土主体の埋土であり、自然堆積と考えられる。

3 時期がほぼ重複する流路方向を取っており、また断面形状や規模も近似することから考えると、元より 3 期溝は 2 期溝の掘りなおしと考えられるが、2 期溝自体も茶灰色土整地後の 1 期溝の掘り直しと考えられる。

出土遺物（図版 51、第 73 図、第 85 図 10）

1～3 期溝の埋土全てに弥生時代中期以降の各時代の混入品が多い。1 期溝の最下層から中世の糸切り底の土師器が出土していることから中世を上限と捉え、中世以降の遺物を選別して掲載する。

1～11 は確実に 2 期溝からの出土と捉えられる資料。1～8 は糸切り底の土師器。1～3 は小皿で、いずれも板状圧痕は認められない。口径 6.0～6.6cm、底径 2.6～4.6cm、器高 1.2～2.0cm（復元を含む）。底部は器壁が厚く、外底部以外は全面ヨコナデで内底部はナデ。3 は耳皿。長径 6.2cm、短径 4.8cm、底径 2.5cm、器高 1.4～2.0cm を測る。

4～8 は坏で外底部以外は全面ヨコナデで内底部はナデ。4～6・8 は底部の器壁が厚く、板状圧痕が認められる。4 は小型品で体部がやや内湾し、ナデによる内面の稜線が顕著である。5・6 も同様の器形か。7 は中型品で口縁が大きく開き、全体的に器壁が薄い。8 は体部が内湾し、ヨコナデによる外面の稜が顕著である。糸切り痕は体部下位にまで残る。

9 は瓦質の火舎。外面はヨコナデし、底部やや上方に 2 条の断面台形の凸線を廻らせ、その間に縦位の波状文を廻らせる。内面はヨコハケ調整する。

10・11 は備前焼。10 はすり鉢で、口縁部を「く」の字に強く屈曲させる。内外面ともナデ調整、内面には 6 本一単位の縦位の櫛描きを入れる。屈曲部下位には粘土接合痕が顕著である。11 は大甕の口縁部で、端部を外面に折り返す。全面に海老茶色の釉がかかり、頸部外面は自然釉がかかる。

12～26 は 1～3 期溝を合わせて掘削した際の出土資料。

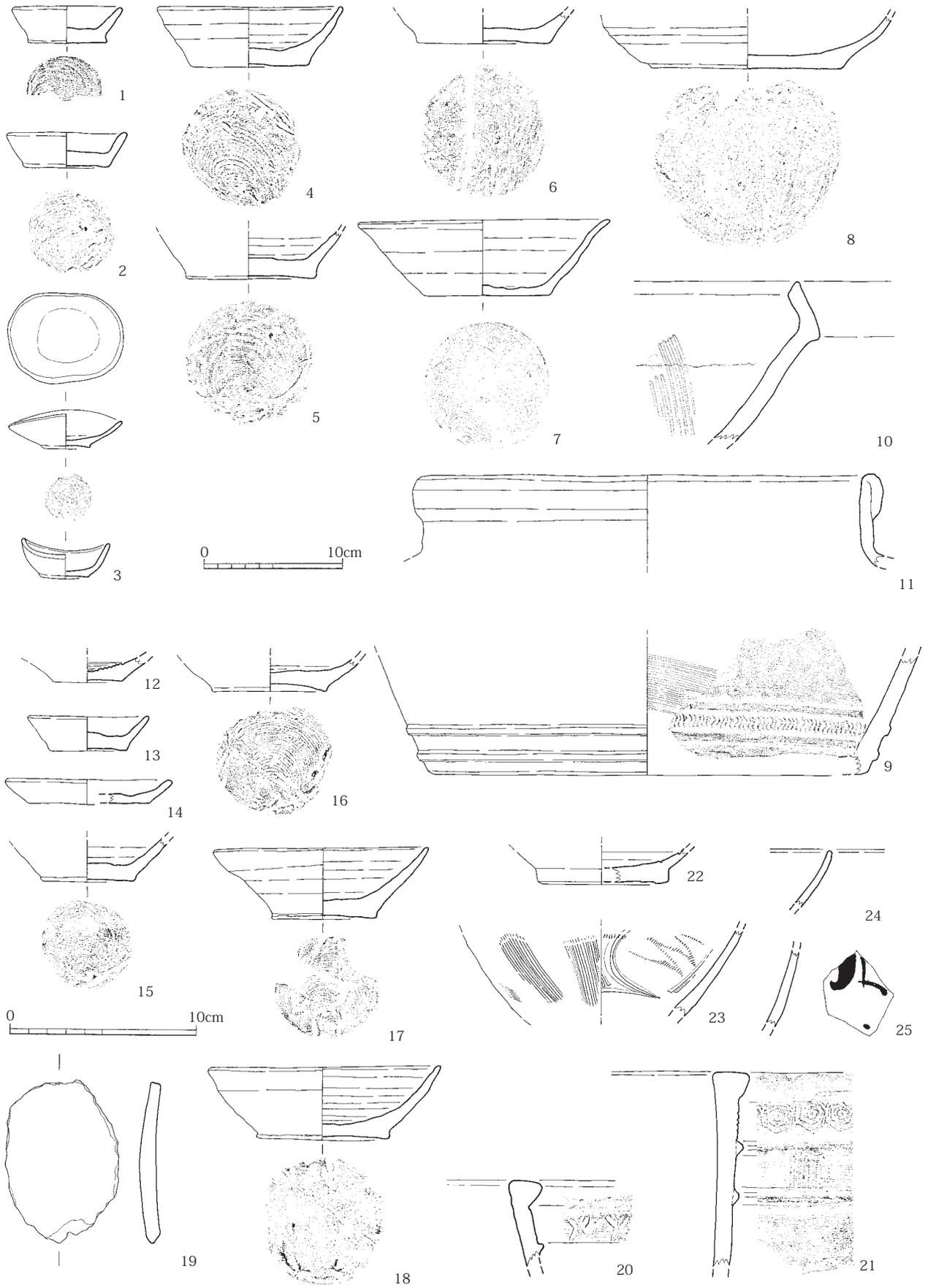
12～18 は糸切り底の土師器。12・13 は小皿で板状圧痕が認められる。12 は体部が大きく開き、内底部に工具による渦巻状の稜線が数条廻る。底径 3.8cm。13 は底部の器壁が厚く、器高が高い。復元口径 6.5cm、底径 4.1cm、器高 1.9cm、14 は扁平なもので板状圧痕は無く、若干古相を呈することから混入品の可能性がある。復元口径 9.0cm、復元底径 6.5cm、器高 1.3cm。

15～18 は坏。口径 11.6～12.5cm、底径 4.9～6.1cm、器高 3.8～4.0cm（復元を含む）を測る。いずれも回転ナデ調整で、体部が大きく開く。15 は小さな平底で体部が大きく開く。内面は工具によるナデ、外面はヨコナデ調整する。16 はやや上げ底になる。17・18 は体部上位がやや内湾し、内面にはヨコナデによる稜が顕著である。

19 は土器転用の円盤型土製品で、土器片を意図的に打ち欠いて楕円形に成形している。弥生土器と思われ、内面にハケ目が認められる。

20・21 は瓦質の火舎でいずれも口縁端部を肥厚させる。20 は端部が玉縁状でやや下方に凸線を一条廻らせ、その間に「×」のスタンプを廻らせる。21 は凸線を 2 条廻らせ、口縁と上の凸線間に三重六角文を廻らせ、凸線間には 6 本の縦位の平行線を配する。全面ヨコナデで、凸線より下はその後にミガキを施す。

22～25 は磁器。22 は露胎の底部で、低い高台を有する。23 は同安窯系の青磁碗で、外面に縦位の櫛目文を配し、内面には略化した花文と、ジグザグ状の点描文を描く。釉はやや灰色味があって光沢がない。24 は青磁碗口縁部小片で、内面に貫入が多い。



第73図 2号溝出土遺物実測図 (9・10・21は1/4、他は1/3)

25は染付の碗であるが、小片のため文様は不明である。

第85図10は砥石である。三角柱形を呈しており5面全てを砥面とする。右側面に金属製刃器の研磨痕と考えられる痕跡が4条認められる。砂岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。

3号溝

調査区の東端をほぼ南北に流れる大溝で、他のすべての遺構を切る。今回確認できたのは約20mで、西側の肩を確認した。一部を深く掘削して底を確認したが、肩から約1m東側で急激に落ちるため、調査区端であり掘削による隣接地の崩落と、作業の危険性を鑑みて完全掘削を断念した。このため土層図や個別図は作成できなかった。埋土は灰茶色土に鉄分を多量に含む埋土で、下層は軟質の黒灰色土で湧水が激しかった。出土遺物に近現代のものは確認していないことから、近世以前のある時期のクレークではないかと考える。

出土遺物（図版51・52、第74図1～12、第84図13）

1～5は糸切り底の土師器。1～3は小皿で、板状圧痕は認められない。1は器壁が厚く、二次被熱により赤変する。復元口径6.0cm、復元底径4.6cm、器高1.6cm。2は体部が直線的に立ち上がり、器壁が薄い。底径5.6cm。3は扁平なもので形状から混入品の可能性が考えられる。口径9.1cm、底径8.1cm、器高1.1cm、二次被熱により赤変する。

4・5は坏底部片で板状圧痕は認められない。双方とも焼き歪みが激しく、ヨコナデによる稜線が顕著である。底径6.9・7.1cm。

6は土師器の鍋で、口縁すぐ下に取手を有する。取手には径1.0cm前後の孔が二つ並び、体部内面まで斜めに貫通する。内外面ともハケ調整で、外面には煤が多量に付着する。

7～10は磁器。7は低い高台を有する白磁碗で、外面下位から底部は露胎になる。

8～10は青磁。8は坏で、口縁端部が外反し体部が丸みを持つ。外面に片彫りの文様を描く。9・10は碗で、9は外面に簡素化した花文を描く。釉は深い緑に発色する。10は外面に粗い線刻の蓮弁を描く。豊付から外底部は露胎。釉は灰緑色に発色する。

11は染付け碗の底部で、器壁が薄く、高台部内面のみ露胎になる。外底部には「宣徳年造」の銘がある。宣徳年間は1426～1435年であり、福岡県内では16世紀代に出土例がある。

12は丸瓦であるが、焼成前に平面六角形に加工し、凸面は下刷り調整、凹面はナデ調整で、糸切り痕が顕著に残る。側面はケズリ調整。

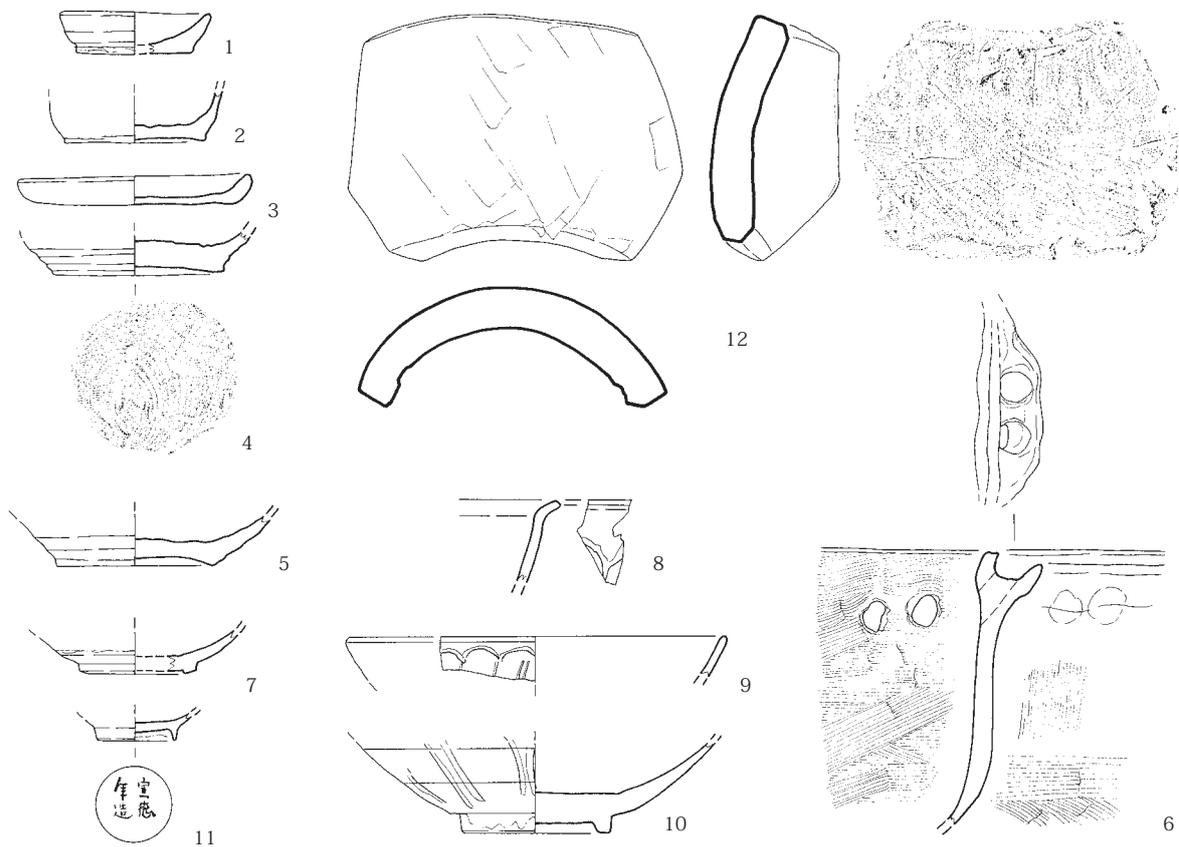
第84図13は石庖丁である。刃部端片であるが、背部がわずかにふくらみ杏仁形になるか。刃部端に傾斜の異なる研磨を施し、段が形成される。輝緑凝灰岩製である。

4号溝（第64図）

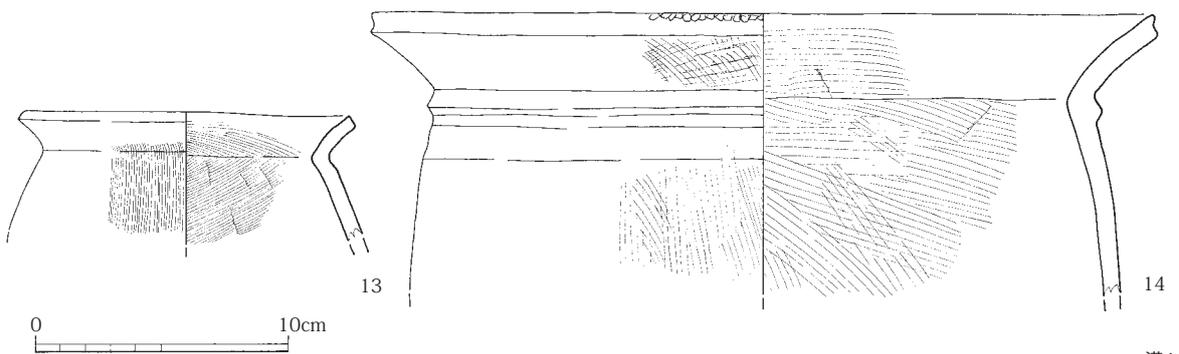
Ⅱ区西寄りを南西―北東に流れる直線的な溝である。北は落ち込みに切られ、南は1号溝に切られるため約20m延長しか確認できなかった。幅は120～140cmで、深さは15～25cm程残存していた。埋土は淡灰色粘土と灰色粘土で、出土土器は少ないが、礎盤式柱穴の横木が埋まっていた。

出土遺物（第74図13・14）

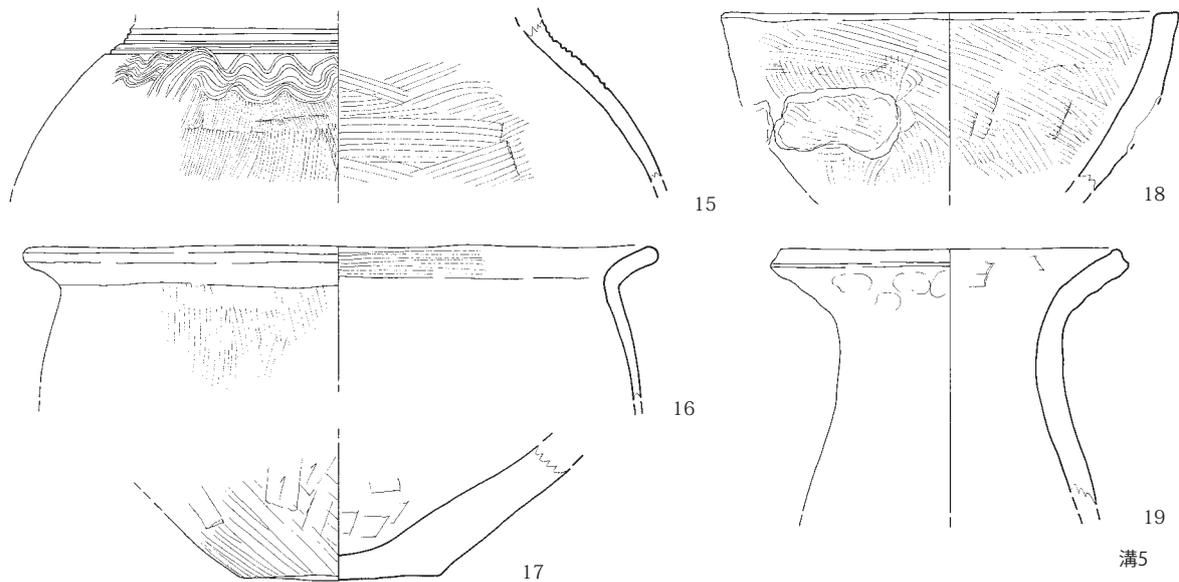
いずれも甕である。13は小型のもので、頸部内面の稜は明瞭である。外面はタテハケ、内面は斜位のハケで調整し、いずれもハケ目は細かい。14は大型のもので、頸部に断面三角の



溝3



溝4



溝5

第74图 3~5号溝出土遺物実測図 (1/3)

凸帯が廻る。口縁端部は断面 M 字になり、上端部に細かいキザミを廻らせる。外面口縁部は粗いヨコハケ後にタテハケ調整、内面は口縁がヨコハケ、体部は斜位のハケで調整する。

5号溝

Ⅲ区東寄りを南西―北東に流れる溝で、削平を受けるため一部しか確認できなかった。他の溝と異なり蛇行するプランをもち、壁も緩やかに立ち上がる。延長約 7.3m を確認し、幅は約 60～120cm、深さは 15cm 前後である。埋土は灰色粘土の単一層である。

出土遺物（第 74 図 15～19）

15 は壺の肩部片である。頸部が締まり胴部は球形を呈するもので、頸部外面にカキメ状の沈線が 5～6 条廻り、その下には 5 条の楕描き波状文が廻る。その下は細かいタテハケ調整で、内面は粗いヨコハケで調整する。

16・17 は甕。16 は口縁が緩やかに屈曲して端部は肥厚し、体部の器壁は薄い。外面はタテハケ、内面は口縁部をヨコハケ、体部をヨコナデで調整する。17 はややレンズ状になる平底である。外面下位は粗いタテハケ、外面上位と内面は工具によるナデで調整する。

18 は単純口縁の鉢で、器壁が厚く、内外面とも斜位のハケ調整を施す。外面器壁には靱圧痕の様な痕跡が目立つ。一部に器壁が剥離したような痕跡があり、剥離の下にハケ目が認められる。把手の剥離痕か。

19 は器台で、口縁が短く大きく開き、体部上位に最小径がある。体部外面は工具等による丁寧なタテナデで調整し、口縁付近は工具によるヨコナデ調整、内面はナデ調整で、口縁部付近には指圧痕が認められる。

6号溝

I 区南寄り、2号溝の北側を東西に流れる溝で、2号溝に切られるため一部しか検出できなかった。延長約 10 m、最大幅 0.9 m、最深 0.2 m を検出し、埋土は茶灰色土の単一層である。出土遺物は少量で、図示できるものがない。

(4) 窪み状遺構

今回の調査では、明確なプランを持たず、壁の立ち上がりも緩やかで下端も明確ではない遺構が数基あった。すべて等しく淡灰色粘土が堆積している。大小サイズは様々であるが、特に大きなものは土器や木製品、自然木などを多量に包含していた。基盤土が軟弱な粘土質である事から地面の凹凸がいくつもあり、そこに高所から流された土器が溜まったものと考えられる。その場合出土遺物の一括性は確実ではないが、遺構の可能性も無ではないため、ここでは窪み状遺構として報告する。

1号窪み状遺構（図版 38、第 75 図）

Ⅲ区中央、1号溝の南に位置する遺構である。上層には包含層である茶灰色土も窪み状に堆積しており、大きな窪地か池になっていたことも考えられる。平面で確認できた規模は長軸約 370cm、短軸約 300cm の不整な形を持つ。深さは最深で 20cm 弱、緩やかに壁が立ちあがるため下端はない。埋土中から土器や木製品、自然木などがまとまって出土した。本来、もっと規模が大きかったと思われる。

出土遺物（図版 52、第 76 図 1～3、第 84 図 20、第 85 図 11、第 87 図 8）



第75図 1・2号窪み状遺構実測図 (1/30)

1は裾が大きく広がる蓋で、ほぼ完形品に復元できる。頭部は器壁が薄く平坦面を持ち、屈曲は強く裾端部は肥厚する。内外面ともにタテハケ調整で、口縁部内面には煤が多量に付着する。

2は壺底部で、平底を呈する。内外面ともヨコハケ、底部はナデで調整する。

3は器台口縁部片で、外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整し、中位はナデ調整する。

第84図20は石庖丁未成品である。背部は直線をなし、外湾刃半月形を呈する。表裏ともに穿孔のための敲打を行い、その後径2mmほどの利器で深さ1mmほど穿孔した途中で終了している。背孔1.7cm、孔間2.1cmを測る。刃部端には表面のみ傾斜を違えて研磨を行い、段が形成される。剥離が多く明確ではないが、穿孔部とは異なる部分で欠損していることから、穿孔による破損ではなく、端をぶつけるなどして破損してしまったことで廃棄されたものか。片岩製である。第85図11は砥石である。両面および左右側面を砥面とする。中央部が使用のために薄くなる。表面に金属製刃器の研磨痕と考えられる痕跡が4条ほど認められる。砂岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。

第87図8は木製柄杓か。杓部分のみが遺存しており、外面に突帯状の出っ張りが柄から続くように作り出される。外面の加工がより丁寧になされる。

2号窪み状遺構（図版38、第75図）

Ⅲ区東端、66号土坑に隣接し、66号に切られる先後関係にある。調査区外に広がるため一部を確認したに過ぎないが、現存で長軸400cm、短軸200cm以上の不整楕円形で、下端はなく、調査区外に向かって緩やかに低くなっていく。深さは最深で20cm弱である。埋土中からは土器や石器、動物骨が出土した。

出土遺物（図版52、第76図4～11）

全て在地系のもの。4・5は広口壺で、4は頸部に1.5cm程の縦位のキザミを廻らせる。外面はタテハケ、内面はヨコナデで調整する。5は頸部に3～4条のカキメを廻らせ、口縁端部にはキザミを廻らせる。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。

6～8は甕。6は口縁が強く屈曲し、口縁端部が肥厚する。内外面ともヨコナデ調整で、その後外面には暗文状に縦位のミガキを施し、内面は口縁部と頸部の屈曲部にヨコミガキを施す。7は逆L字口縁で、外面はタテハケ、内面はヨコナデで調整する。8は口縁の屈曲が緩く頸部が大きい。外面は斜位のタタキ後ヨコナデ調整し、内面は粗いハケで調整する。

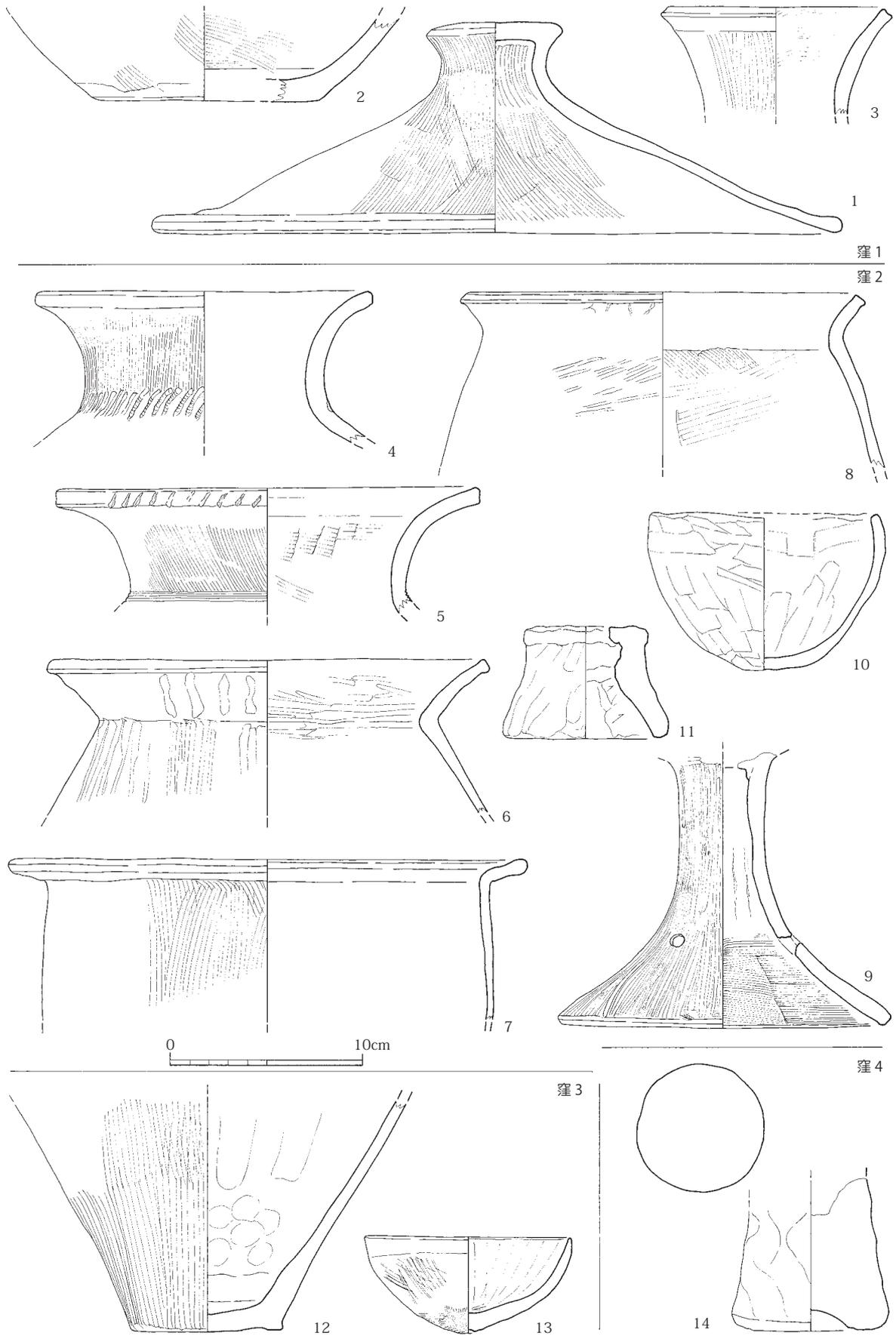
9は高坏脚部で、裾が緩やかに大きく開く。外面はタテハケ後丁寧なタテミガキで調整し、内面は裾部を細かいヨコハケで調整する。屈曲部に3カ所の穿孔がある。

10は小型の単純口縁の鉢で、口縁がやや内湾して端部が肥厚する。内外面とも工具によるナデ調整で、部分的に指ナデする。

11は小型の支脚で、天井部中央に穿孔がある。器壁が厚く、全面粗いナデで成形する。

3号窪み状遺構

Ⅲ区西端、59号土坑の下層に位置する土坑である。埋土上層の粘土層と基盤土との区別が困難で、遺構検出時に土器の一部が表面に露出したことからトレンチを設定し、底から追いかける形でプランの検出を試みた。しかし明瞭なプランは一部しか確認できず、南側の上端ラインの検出と土器の取上げだけを行った。土器検出の範囲は約3m四方で、深さは最深で



第76图 1~4号窪み状遺構出土土器実測图(1/3)

約40cmである。埋土は上層の基盤土に似た淡黄白色粘土と下層は淡灰色粘土である。埋土の状況から、他の窪み状遺構と同様に扱った。

出土遺物（第76図12・13、第84図10・18・22、第86図1）

12は平底の甕で、胴部は直線的に開く。外面をタテハケ、内面をタテナデ、底部付近はヨコナデで調整し、その上には指圧痕が多数認められる。13は単純口縁の鉢で、底部は凹凸が激しい。外面上位はヨコナデ後粗いタテハケ調整、底部付近は細かいハケで調整する。内面はタテナデ調整で稜がつき、内底部には工具痕が認められる。

第84図10は土製紡錘車である。断面形が台形状を呈し、上部径3.6cm、下部径4.45cmを測る。中央部に径0.5cmの孔を穿つ。焼成は良好で黄褐色を呈する。

18は石庖丁である。背部は直線をなし、外湾刃半月形をなす。外孔1.4cm、内孔0.75cm、背孔2.7cm、孔間3.0cmを測る。右側の孔はわずかに残るのみである。穿孔前敲打の痕跡が残る。孔の位置から復元すると全長が18cmほどになり、やや大形の石庖丁となる。片岩製である。22は柱状片刃石斧か。剥離しているが刃部に近い部分の側面と考えられる。頁岩製である。第86図1は石錘か。右側面に両面から剥離を施すが、その他の面には認められない。凝岩製である。

4号窪み状遺構

Ⅲ区東寄り、66号土坑と重なるように位置し、66号に切られる先後関係にある。長軸約200cm、短軸約100cmの楕円形を呈し、中央部が最深で、深さ9cmほどしか残存していない。出土遺物は小片ばかりであった。

出土遺物（第76図14）

14は支脚と思われる。上位が細くなる円柱状で、底部中央は上底になる。外底部の接地面には焼成前の傷が多数つく。胎土はスサが入ったような粗いもので、全面ナデ調整する。

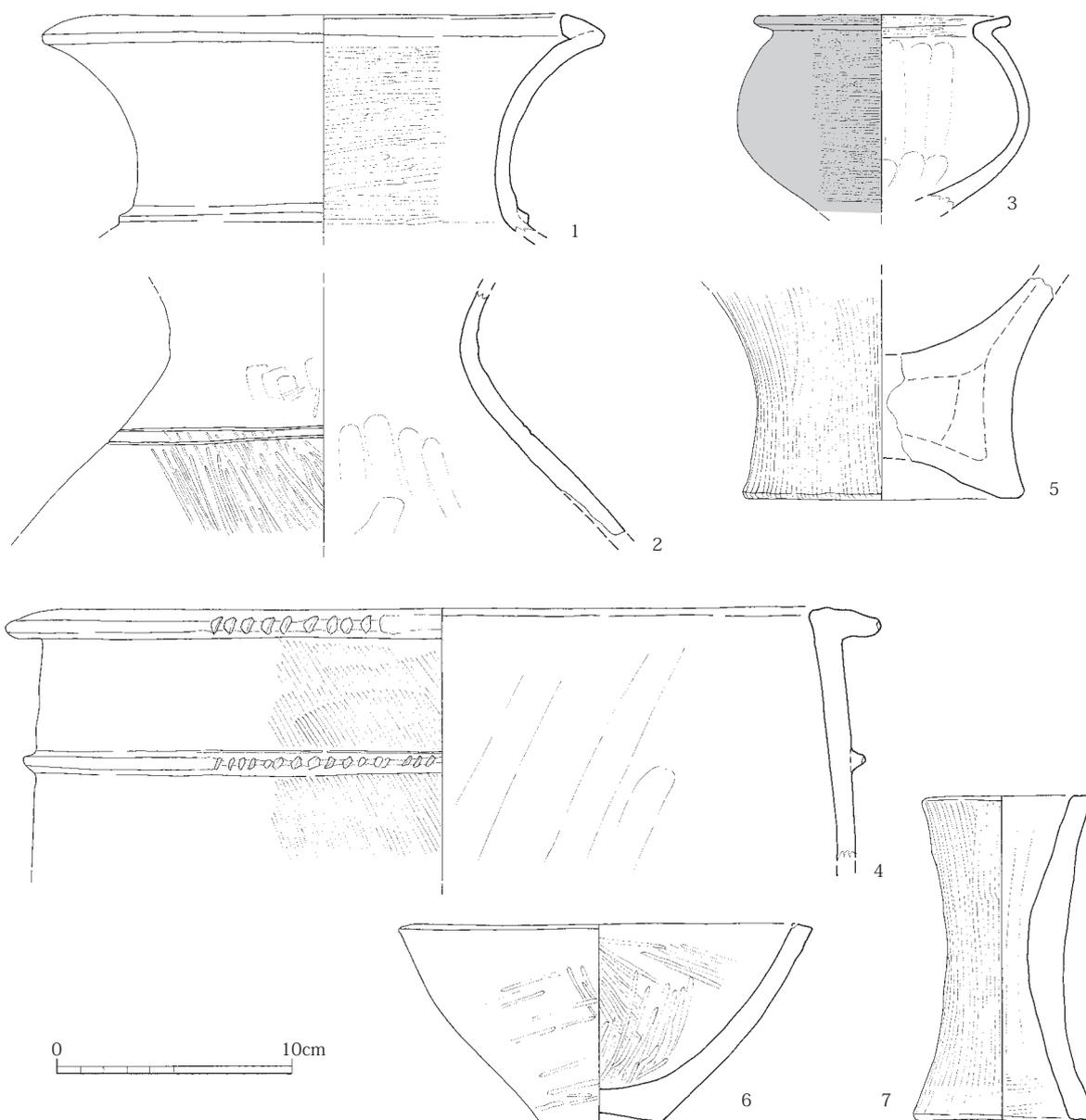
5号窪み状遺構

Ⅲ区中央、35・37号土坑の下層に位置し、両土坑に切られる先後関係にある。このため北側のプランは検出できず、また上層も削平されているため逆三角形の歪なプランとなっている。確認できた規模は長軸約220cm、短軸最大約140cmで、中央が更に深くなり最深で14cmと浅い。形状から考えると、溝の一部が残存している可能性もあるが、ここでは窪み状遺構とした。

出土遺物（図版52、第77図）

1～3は壺で、1は口縁が外湾して端部が内側に強く屈曲する袋状を呈する。頸部には断面三角の低い凸帯が廻る。外面はヨコナデ、内面はヨコミガキで調整する。2は口縁が小さくなで肩になるもので、外面頸部下位に2条の沈線を廻らせる。外面上位をヨコナデ、下位をヨコミガキで調整し、内面は強いタテナデのために指圧痕が顕著である。3は小型の蓋付きの壺で、外面を細かいヨコミガキで丁寧に成形し、内面は強いタテナデ調整する。外面が光沢のある茶色を呈し、着色された可能性が高い。

4・5は甕で、4は口縁下位に断面三角の凸帯を廻らせ、口縁と凸帯の端部にキザミを廻らせる。外面はタテハケ、内面はタテナデで調整する。5は上げ底の底部で、粘土接合痕が顕著である。外面タテハケ、内面ナデで調整する。



第77図 5号窪み状遺構出土土器実測図(1/3)

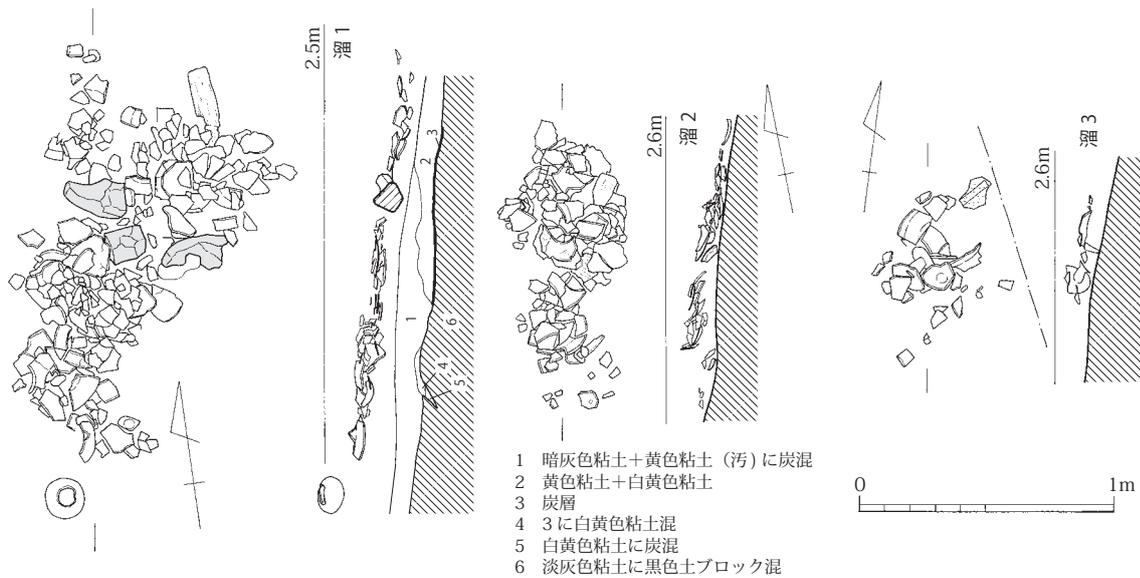
6は単純口縁の鉢で、やや上げ底である。内外面ともナデ調整後にミガキを施す。

7は筒型の支脚で、器壁は中央が肥厚する。外面はタテハケ調整、内面はタテナデ調整で、裾部のみヨコハケを施す。

(5) 土器溜まり

土器溜まり (図版 38・39、第78図)

I区とII区の境に位置し、落ち込みの上面で検出した。黄色粘土包含層の直下で3ヵ所を確認したが、包含層に切られると考えられ、本来は更に広範囲に広がっていたと思われる。最も西側の土器溜まり1では特に遺物量が多く、土器の他に支脚がまとまって出土している。土器等の最低レベルと落ち込み上面との間には炭層を挟み、支脚がまとまって出土した箇所



第78図 土器溜まり遺物出土状況 (1/30)

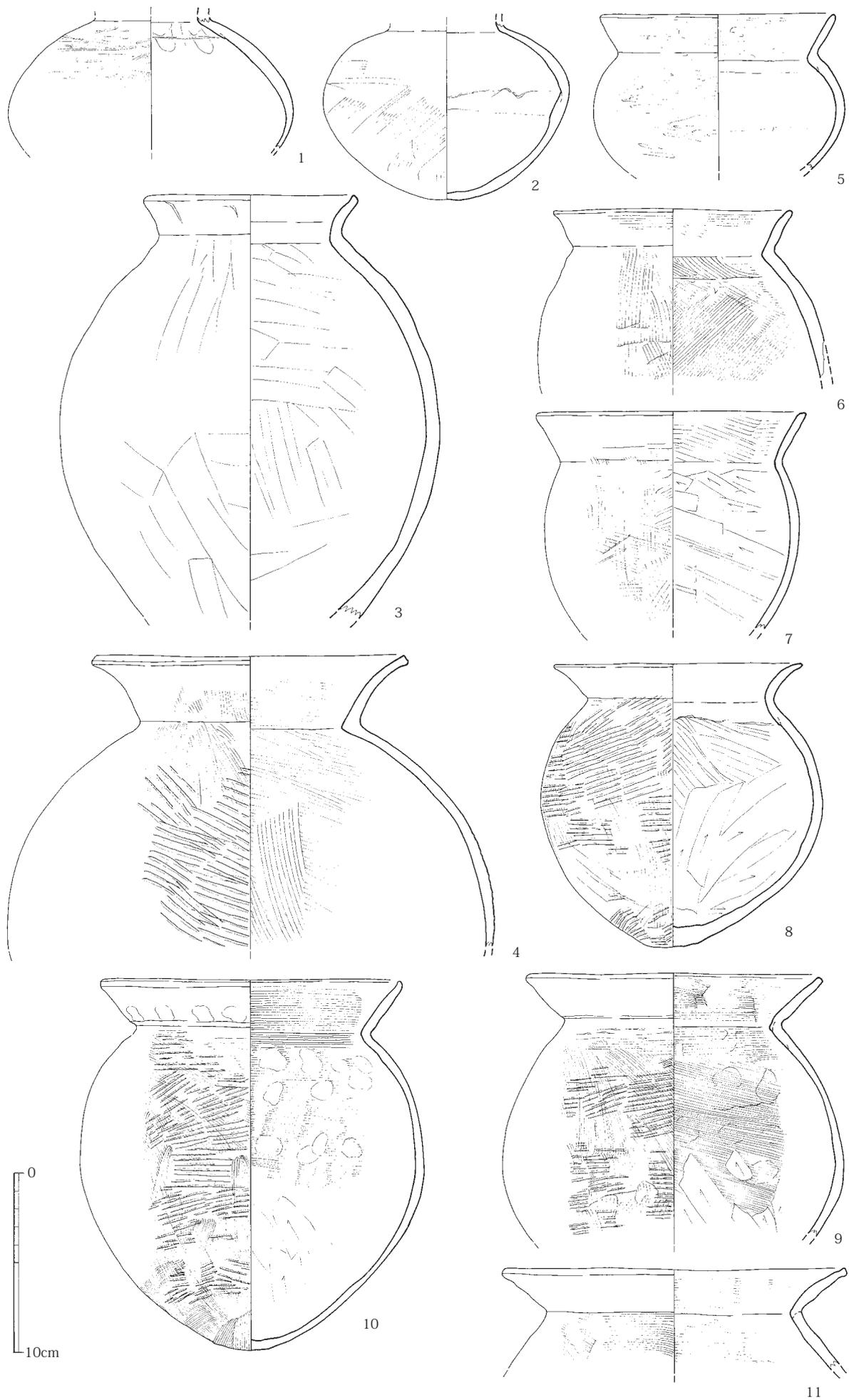
では支脚が激しく被熱しているとともに、周囲の土壤も被熱していた。被熱した支脚を高熱のまま一括廃棄したか、この場所で何らかの理由で火が焚かれたと考えられる。3カ所の集中部はすべて検出面が包含層直下であること、堆積状況が近似すること、レベルや埋土が同じであった事から同一時期のものと捉えた。3カ所とも南から北に流れたような傾斜で帯状にまとまっており、遺物はいずれも完形品はなく、明らかに廃棄された状態であった。

出土遺物 (図版 52・53、第79・80図)

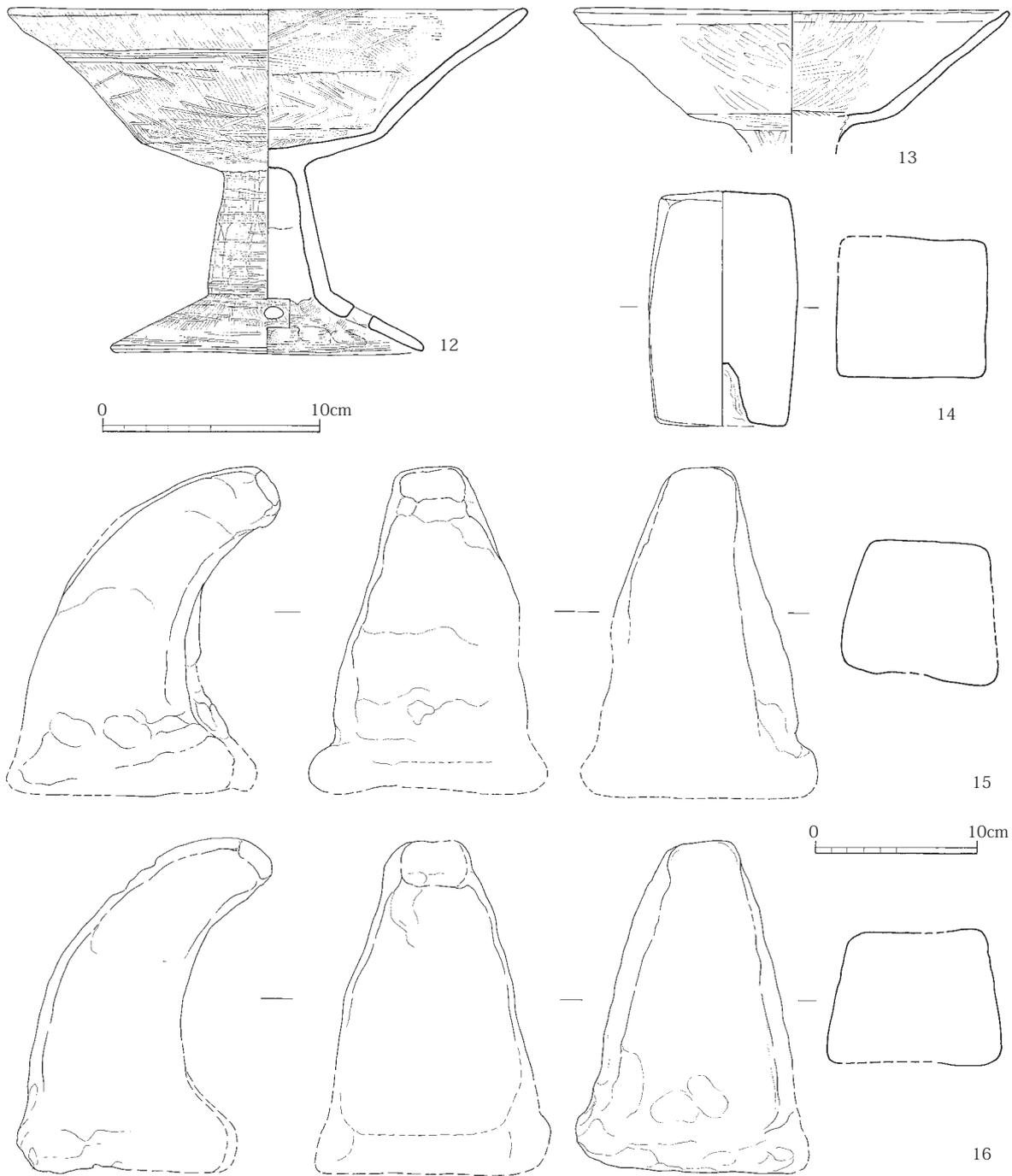
土器溜まりは全て同一遺構と捉えるため、3カ所の出土遺物をまとめて掲載する。

第82図1～4は壺。1は扁球形の胴部を有し頸部が強く締まる。外面は摩滅が激しいが、ヨコナデの後に一部粗い横位のミガキ状条痕が認められる。内面はヨコナデで、後に頸部付近を強いタテナデで調整する。頸部下は粘土接合痕が顕著である。2は頸部が締まり、胴部は上位が大きく張る。外面はヨコナデ後斜位のハケで調整し、中位から下はタテナデ後ハケで調整する。内面はヨコナデで、胴部中位に粘土接合痕が顕著である。内面が所々赤く、赤色顔料が付着するものかもしれない。3は口縁が短く緩やかに外反する在地系のもので、頸部が締まり長胴になる。外面はヨコナデ後に上位を工具によってタテナデし、下位はタテケズリする。内面は上位が工具によるヨコナデ、下位はタテケズリ、底部付近はヨコケズリで調整する。内外面ともに二次被熱によって広い範囲が赤変し、内面は縦位の帯状に煤が付着する。全体的に作りが粗い。4も在地系で口縁が大きく開き、頸部の屈曲も強く、胴が大きく張る。外面はタテハケ後胴部を斜位のタタキで調整し、内面はヨコハケ後一部タテハケで調整する。

5～11は甕。5～7は在地系のもので、5は小型で口縁開き、胴部が張る。外面はヨコミガキで、中位から下にヨコケズリの痕跡が残る。内面はナデ調整で、口縁部付近はヨコミガキ、底部付近にはヨコケズリが僅かに認められ、頸部付近に粘土接合痕が顕著である。外面が一部二次被熱し、内面は黒色を呈する。6は全体に器壁が厚く、口縁部のみが薄い。内外面ともハケ調整で、頸部下に粘土接合痕が顕著である。7は最大径が口縁にあって頸部の屈曲が緩や

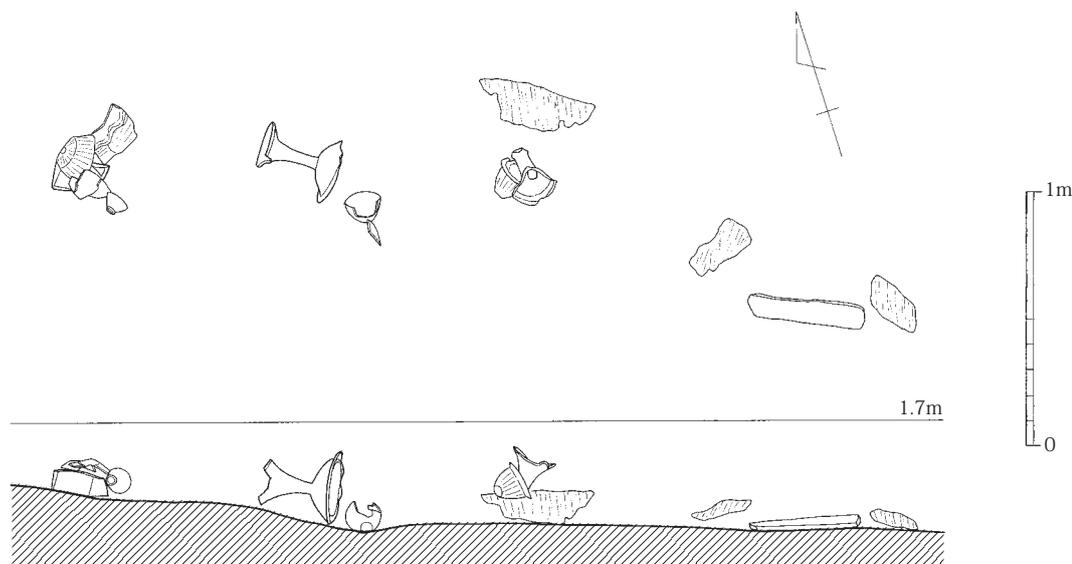


第79図 土器溜まり出土遺物実測図(1) (1/3)



第80図 土器溜まり出土遺物実測図(2) (12・13は1/3、他は1/4)

かで、外面はタテ及びヨコハケ、内面は口縁付近をヨコハケ、体部をヨコケズリで調整する。8は畿内第V様式系のもので、やや小型品で、口縁が強く外湾するが頸部の屈曲は緩やかで、底部は小さいレンズ状を呈する。外面のタタキは斜位及び横位で、上位に顕著である。また底部も調整時に倒立させて放射状にタタキを施す。その後、外面下位は部分的にタテハケで調整する。底部外面は二次被熱により赤変する。9～11布留系のもので、口縁部がやや内湾しながら開き端部を上方に摘み上げる。器壁が薄く、体部外面に横位のタタキが認められる。9は外面は横位のタタキ後タテハケ、内面はヨコハケ、底部付近をタテケズリで調整する。



第 81 図 落ち込み最下層遺物出土状況実測図 (1/30)

部分的にハケ調整前の指圧痕が認められ、その間に粘土接合痕が顕著である。内外面とも二次被熱により赤変し、外面の一部には煤が付着する。10 は外面は横位のタタキ後にタテ及び斜位のハケで調整し、頸部付近に鈍い指圧痕が並ぶ。内面はヨコハケ後胴部下位をタテケズリする。また数カ所に指圧痕が認められる。全面的に二次被熱を受けて赤変する。11 は口縁端部が肥厚し、器壁がやや厚い。内外面ともヨコハケ調整で調整する。

第 80 図 12・13 は高坏。12 は口縁が緩やかに外湾しながら大きく開き、脚部が強く屈曲するもの。外面は放射状のタテハケ後一部粗いヨコナデを施し、その後底部付近に横位のランダムなミガキ状条痕を施す。内面は上位がヨコハケ調整後一部粗いヨコナデ、下位はタテハケ後丁寧なナデで調整し、その後全体にランダムなミガキ状条痕を施す。脚部外面はタテケズリ後にタテミガキし、その後横位のミガキ状条痕を施す。内面は上位をタテナデ、下位をヨコハケで調整する。脚部に 4 カ所の穿孔があり、その下に指圧痕が廻る。13 は坏部のみ破片で、体部は直線的に大きく開く。内外面とも粗いミガキで、口縁付近に黒斑がつく。

14～16 は支脚。今回の調査ではこのような支脚の破片は各所から出土しているが、ここではその全容が理解できる資料が纏まって出土した。これらは二次被熱するものと、全く被熱の痕跡のないものがあり、被熱するものがあることから支脚として使用されたと考える。資料は一様にスサが入ったような粗い胎土で、表面はわずかに堅く焼き締まっているが、内部は機密性が薄く軟弱で、表面に亀裂が入るとすぐに崩壊するような状態である。ここで出土した支脚はすべて二次被熱を受けており、また直下の土壌が焼けていたこと、下に炭層があったことなどから、直接火にかけられた直後に廃棄したか、この場で火を焚いたと考えられる。図の破線は表面の剝離である。14 は直方体で中位がやや肥大する。底部中央には直径 3cm の円錐形の孔があるが軽量化か焼成時の火の回りを考慮したものか。全体をナデで成形する。15・16 は規格・形状とも近似し、2 つか 3 つをセットで使用したか、14 と合わせて使用したものと考えられる。14 と同様の胎土であるが、底部が正方形の台座を持つため安定がよく、また破損するもののほぼ全形がわかる。全体を粗いナデで調整し、指圧痕やナデの痕跡が顕著である。

(6) 落ち込み

落ち込み (図版 39、第 81 図)

調査区内の基盤土レベルは北に向かって低くなるが、特に下層において、Ⅱ区 2 号溝のやや南側から北に極端に落ち込む遺構を検出した。落ち込み内の埋土上層が緩やかに傾斜するため、落ち際のプランが不明瞭で検出が困難であったが、上面にあった黄色包含層を除去後に、調査区東側で明確なラインを確認し、西側については土器溜まりを除去後にそのやや南側に落ち際のラインを確認した。第 6 図の調査区内土層図とともに土層図に掲載したが、落ち込み上層の傾斜は緩やかで、灰色粘土包含層に似た土壌や基盤土の流れ込みと見られる土壌が厚く水平堆積し (2～4 層)、緩やかに北に下がる。しかし基盤土に似た青灰色粘土 (5 層) を挟んで傾斜強くなり、最下層上部には土坑等の上面に入る埋土と近似した土壌が堆積し、最下層は軟質の淡黄灰色粘土が堆積して自然木や土器などが溜まっている状況であった (6～9 層)。水平堆積する上層と激しく落ち込む下層とでは堆積状況や土壌の様相が異なることから、上層が自然堆積、下層が開口時の堆積と考えられる。また、この落ち込みの下で確認できた掘立柱建物柱穴は、落ち込みにより礎盤が基盤土にめり込んだ状態であったり、横木が流されたように溜まっていた事から、掘立柱建物群廃絶後に掘削されたか、自然沈下などにあった状況と考えられる。落ち込みの中には土器が多く包含され、最下層では土器や自然木とともに貝殻が窪みに溜まるような部分もあった。包含される土器は時期が多岐にわたり、南及び西側から遺物を含んだ粘土が流れ込んだような状況であると考えられる。

また、木質や土器、貝殻などが包含されていた最下層には、特に調査区西側で破損の少ない土器が底に接地してまとまって遺存していた。

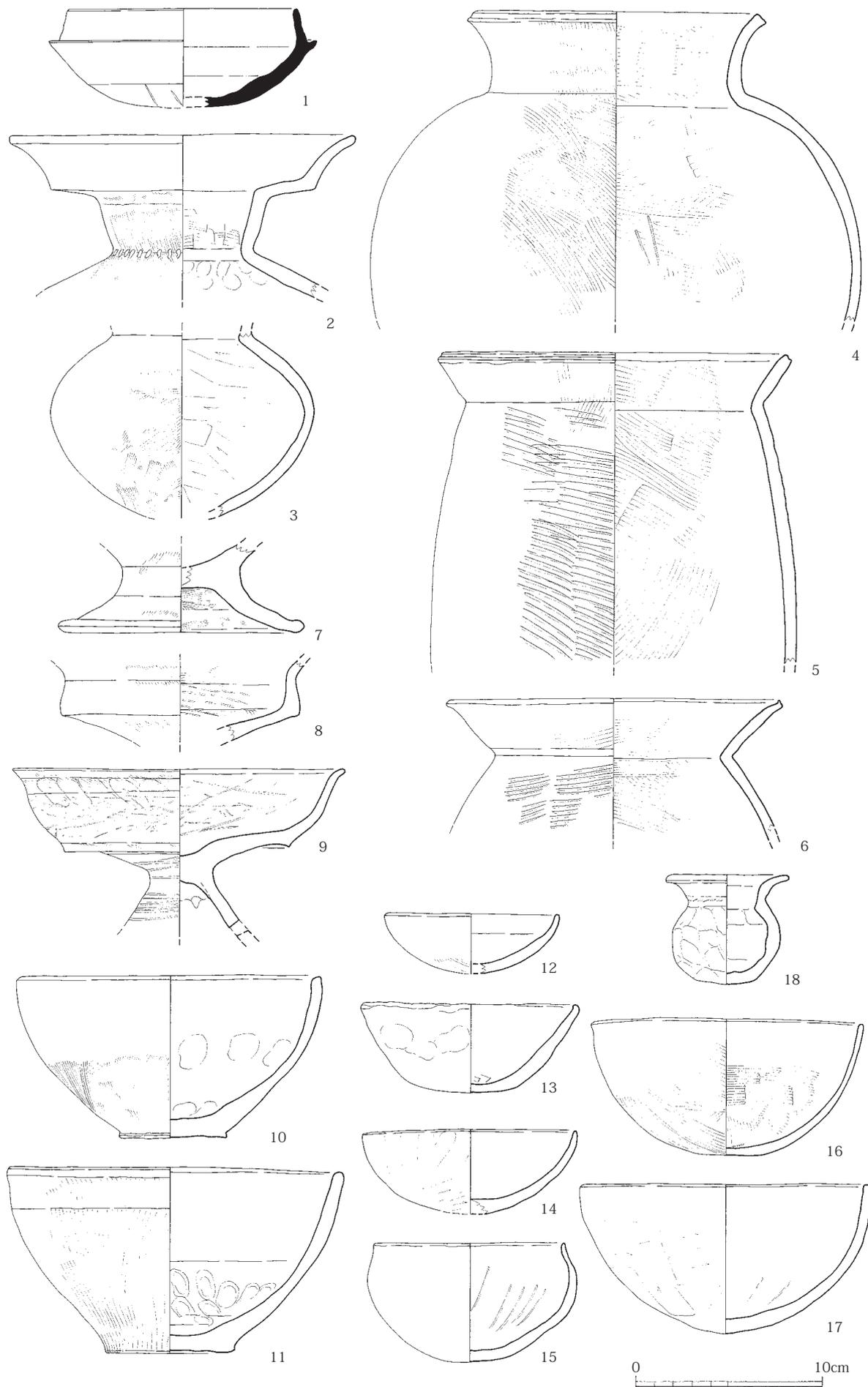
出土遺物 (図版 54、第 82・83、第 84 図 1)

出土遺物については、調査時は上・中・下層として取り上げたが、遺物の時期が混在するため、一括して報告する。

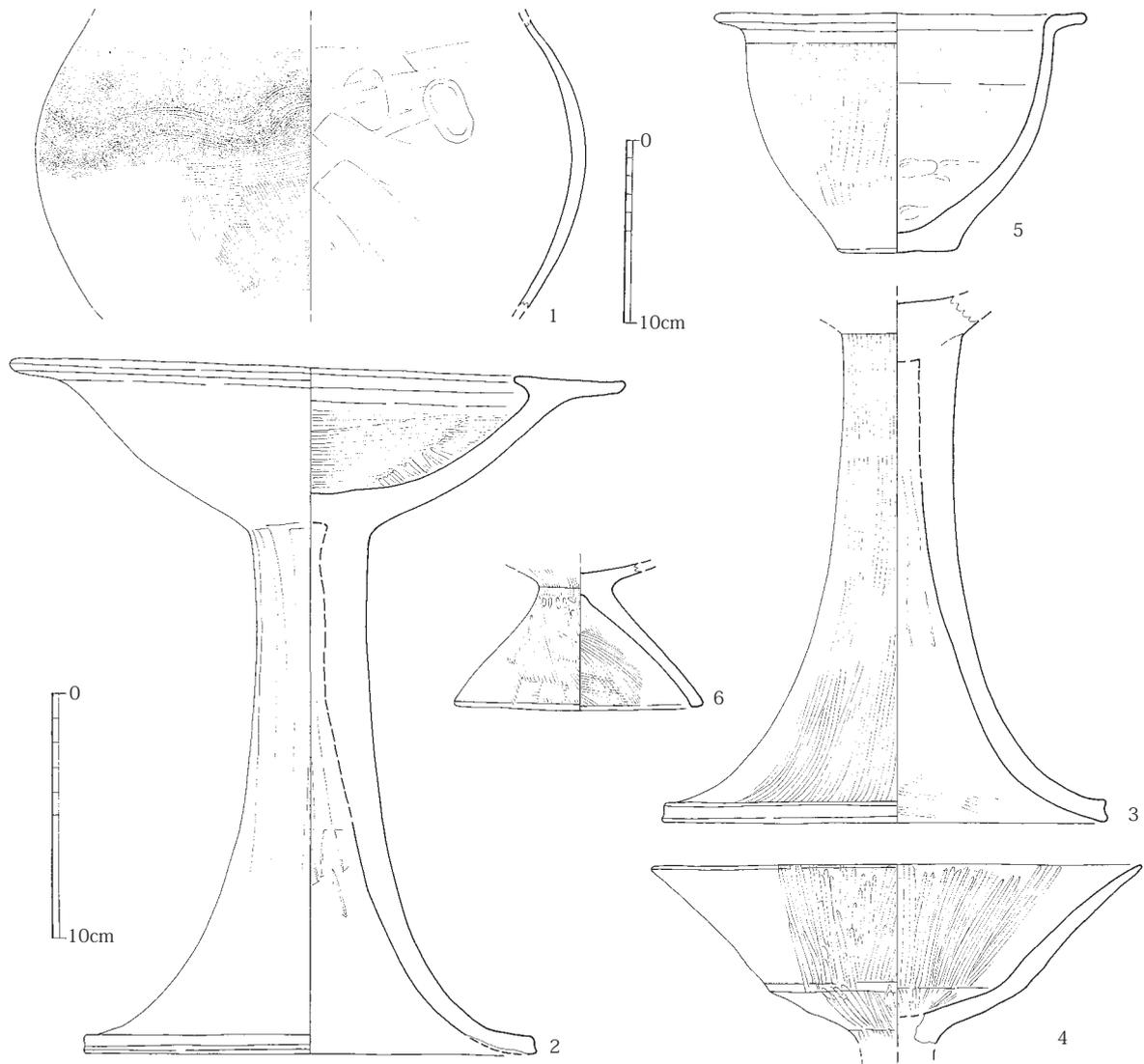
第 82 図 1 は須恵器の坏である。須恵器は上層からの出土のみである。口縁が立ち上がり気味で長く、体部は丸みを持って器高も高い。底部には 2 本線のヘラ描きがあり、自然釉を被る。

2～4 は壺。2 は畿内系の二重口縁壺で、1 次口縁はほぼ水平になり、2 次口縁は大きく外湾する。口縁部はヨコナデ、外面頸部から肩部はタテハケで調整し、頸部屈曲部に刺突文を廻らせる。内面は頸部がヨコハケ後ナデで調整、肩部はナデで指圧痕が顕著である。頸部外面に一部煤が付着し、淡黄褐色を呈する。3 は上位が張る胴部を有する壺で、頸部は強く締まる。小型の広口壺になるか。外面はタテ及び斜位の細かいハケ、内面はヨコケズリで調整し、凹凸がやや激しい。4 は在地系の壺で、口縁が強く外反し、肩が大きく張り出すが頸部内面の屈曲部は緩やかで、胴部上位が最大径となる。外面は斜位のハケ、内面は肩部を工具による斜位のナデで調整し、以下はヨコ及びタテハケで調整する。胴部中位に一部工具痕が認められることから、部分的に工具ナデが入ると思われる。

5～7 は甕。5 は在地系の長胴の甕で、口縁は緩やかに屈曲する。器壁の厚さは均一で、体部は下方に開き気味に垂下する。外面はヨコタタキで口縁部をタテハケで調整し、内面は上位を斜位のハケ、下位をタテハケで調整する。6 は布留系の口縁部片で、口縁は直線的に外反し、端部を摘み上げる。外面はヨコタタキ、内面はヨコハケで調整する。7 は脚付き甕の脚部で、大きく外湾して踏ん張り、端部を肥厚させる。外面はタテハケ後ナデ調整で、内面はヨコハケ後一部ナデ調整、甕内底部はナデで調整する。



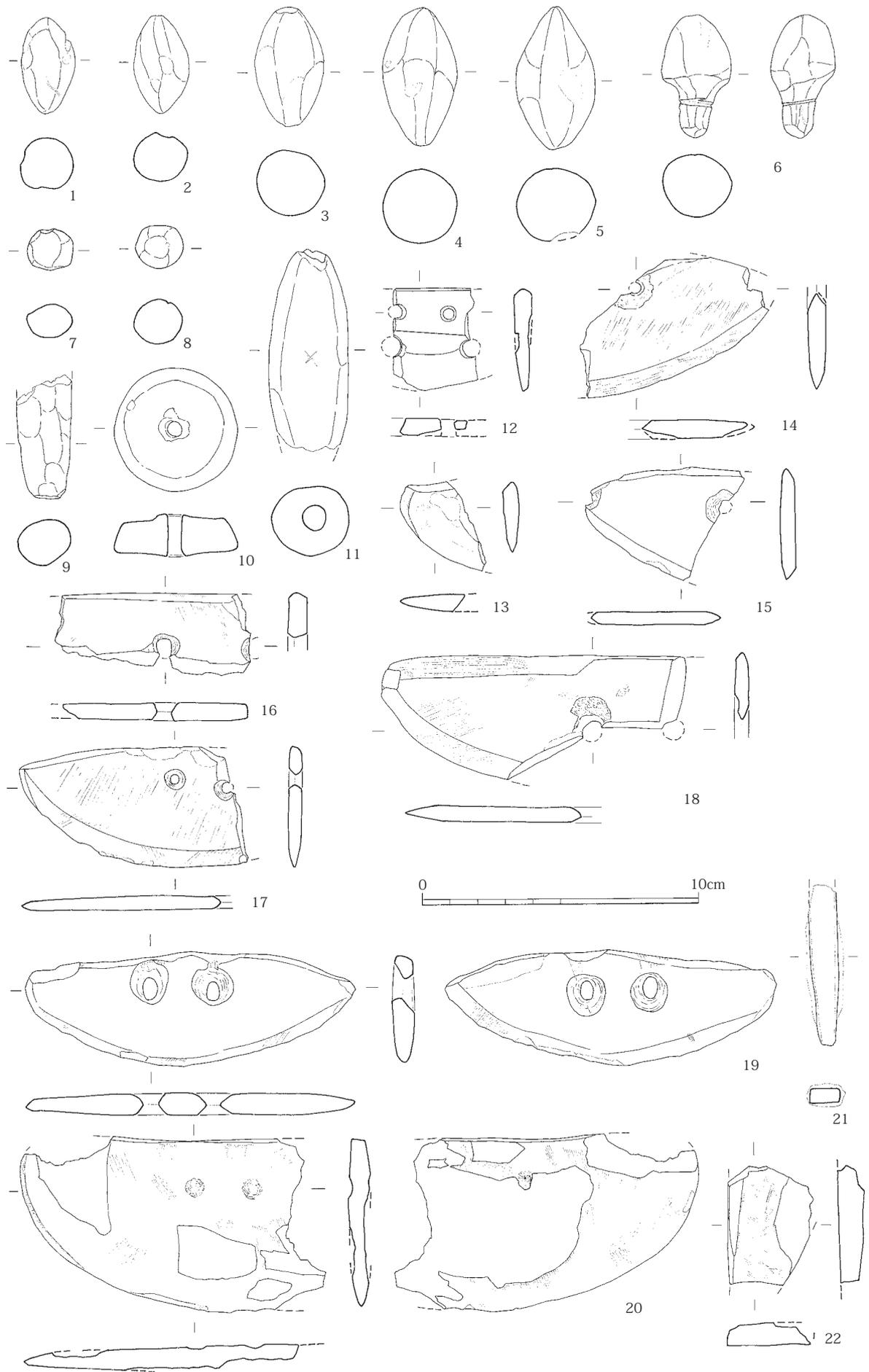
第 82 図 落ち込み内出土遺物実測図 (1/3)



第 83 図 落ち込み最下層出土遺物実測図 (1 は 1/4、他は 1/3)

8・9 は高坏。8 は畿内系の有段高坏で、口縁を欠く。外面をタテハケ後一部ナデ調整、内面は斜位のハケ後ナデ調整で、内底部にミガキ状条痕が認められる。胎土は在地のもので、調整も在地のものである。9 は口縁が緩やかに内湾して端部が外湾するもので、底部との屈曲部に凸帯状の稜線が廻る。内外ともヨコナデ後に横位のミガキ状条痕が認められ、外面口縁部付近は指圧痕及び斜位のハケ目が残る。脚部はミガキを施した後、中位にカキメ状にミガキ状条痕が7重に廻る。胎土は精良で器壁も滑らかであり、明橙色を呈する。

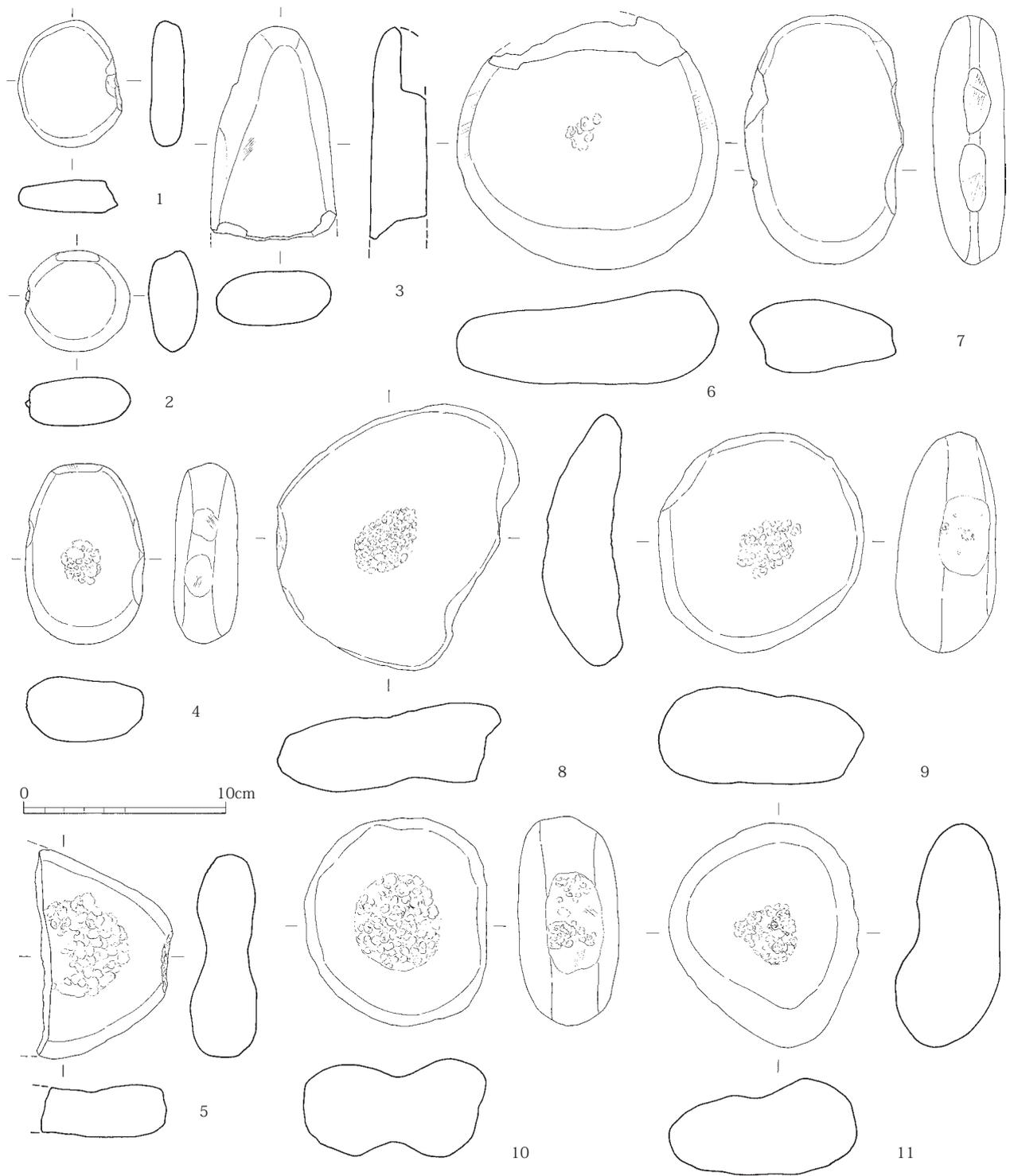
10～17 は単純口縁の鉢。10・11 は平底で体部が内湾しながら立ち上がる。外面はナデで下位は細かいハケ、内面はナデで調整し、中位に押し出しの指圧痕と底付近に押さえの指圧痕が残る。外底部はナデ調整で、ここにも指圧痕が認められる。11 は外面がタテハケ、内面はヨコナデで調整し、底付近に指圧痕が多数認められる。いずれも体部中位の器壁が薄くなる。底部付近には黒斑が認められる。12～14 はボウル型。12 は全体的に丸い器形で、外底部をハケ調整し、他はヨコナデ調整する。13 は体部がやや直線的に立ち上がる。外面は工具によるナデ調整を施すが指圧痕が顕著である、内面はヨコナデ調整で、底部に放射状に工具痕が



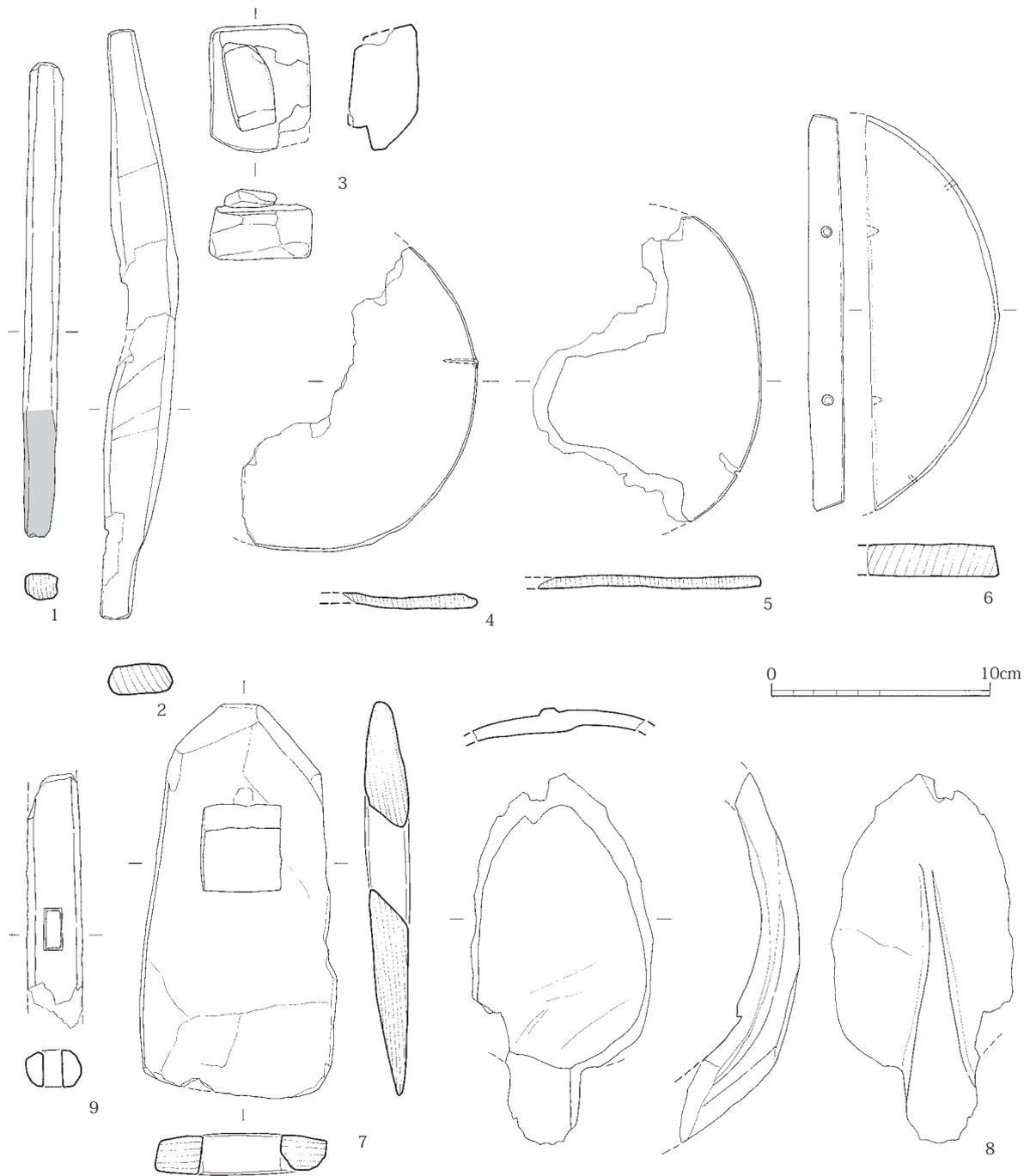
第 84 图 遺跡内出土特殊遺物実測図 (1) (1/2)



第 85 図 遺跡内出土特殊遺物実測図 (2) (1は1/2、他は1/3)



第 86 图 遺跡内出土特殊遺物実測図 (3) (1/3)



第 87 図 遺跡内出土特殊遺物実測図 (4) (1/3)

認められる。14 も丸味を持ち、外底部をケズリで調整し、他はヨコナデ調整する。15 は丸味を持つが口縁部が内湾し、端部がわずかに外反するもので、器壁が薄い。内外面とも水引き状のナデの痕跡が認められる。内面には縦方向の工具痕が何条も認められ、外底部に黒斑が付く。16・17 はやや大型のもので、16 は器壁が薄い。内外面ともヨコハケ、底部をタテハケで調整する。体部下位に黒斑が認められる。17 は外面に粗いケズリを施した後、一部ナデ調整する。内面は工具によるタテナデ後にヨコナデを施す。底部に黒斑が認められる。

18 は手捏ねの壺のミニチュア品。口縁は大きく外反し、端頸部内面の稜は強く、平底で胴

部が小さい。通常の壺の形をリアルに写している。内外面とも工具による細かいナデで調整し、頸部外面には工具を押し当てたような痕跡が残る。

第 83 図は最下層でまとまって出土した遺物である。1 は球形を呈するやや大型の壺の胴部片で、中位に櫛描きによる波状文を廻らせる。外面は中位がカキメ状のヨコハケ、下位をタテハケで調整した後に中位をヨコナデ調整する。内面はヨコ及び斜位のケズリで調整し、部分的に当て具痕のような凹みが数カ所に認められる。

2～4 は高坏。2 は欠損が少なく、T 字口縁で上部はほぼ水平になり、坏部は浅い。脚部は中位がほぼ直立し、裾部は端部付近が強く屈曲する。坏部外面は摩滅のため調整不明、内面は器面を八分割する装飾的なヨコミガキを施し、口縁部付近をナデ調整する。脚部外面は工具によるタテナデで、裾部は摩滅のため調整不明、内面は上位にシボリ痕が認められ、中位は工具によるヨコナデを施す。3 は脚部片で、2 と器形が近似する。坏部内底はナデ、脚部は外面をタテハケ、内面は下位がナデで裾付近をヨコハケで調整し、上位はシボリ痕が残る。4 は口縁が大きく開き、端部に向かって器壁が薄くなる。外面はやや細かいタテミガキで丁寧に調整し、内面はヨコハケ調整後に放射状のミガキを暗文的に施す。内外面とも煤が付着して黒変するが、廃棄後の付着の可能性が高い。胎土は精良で焼成も良好、明橙色を呈する。

5 は屈曲口縁の平底の鉢で、上面は水平になる。外面は粗いタテハケ、底部付近は器面剝離のため調整不明、内面はタテナデで調整し、底部付近には押し出しの指圧痕が認められる。

6 は小型精製器台の脚部片で、内湾する円錐形を呈する。内外面とも細かい斜位のハケ調整で、外面は一部粗いミガキを施し、頸部屈曲部に刺突文が廻る。穿孔はない。

第 84 図 1 は土製投弾である。指ナデにより成形し、紡錘形を呈する。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

(7) その他の遺構

その他の遺構出土特殊遺物 (図版 55・56、第 84 図 14・16、第 85 図 6、第 86 図 5・10・11)

今回の調査では、ピット等からも特殊遺物が出土している。

14・16 は石庖丁である。14 は背部がふくらみ、杏仁形を呈する。内孔 0.45cm を測る。孔周辺に穿孔前敲打の痕跡が残る。輝緑凝灰岩製である。16 は背部が直線をなし、外湾刃半月形を呈する。外孔 0.95cm、内孔 0.55cm、背孔 1.9cm、孔間 3.3cm を測る。輝緑凝灰岩製である。第 85 図 6 は砥石である。3 面のみ遺存しておりその全てを砥面とする。斑岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。第 86 図 5 は凹石および磨り石である。両面中央部に叩きの痕跡、右側面に磨りの痕跡が認められる。凝灰岩製か。10 は凹石である。両面中央部に叩きの痕跡、右側面には磨りの痕跡が認められる。凝灰岩製か。11 は凹石である。上面中央部に叩きの痕跡が残り、深く凹む。凝灰岩製である。

IV まとめ

今回の調査では、弥生時代中期～戦国時代の遺構と大量の遺物を検出した。調査地は、国道385号バイパス道路改良事業に係る西蒲池池淵遺跡の全調査域の北半部にあたるが、調査区北側約3分の1には遺構は確認できず、遺構は南および東西へと展開していくことを確認した。ここでは今回調査分の遺構についてまとめを行うが、平成23年度に行った、遺跡の南半分にあたるⅡ地点の調査では、Ⅰ地点を上回る数の遺構や遺物を検出してことから、遺跡全体のまとめについてはⅡ地点の調査成果も合わせた上で検討を行うべきと考え、ここでは今回報告した遺構について時期的な整理を行い、各時期の特徴について簡単にまとめることとしたい。また複数層認められる包含層についても、前述のとおりⅡ地点の調査で続きを検出していることからまとめて報告するものであり、ここでは遺構との前後関係について触れるのみとする。

今回報告した遺構は掘立柱建物跡18棟、土坑75基、溝6条、窪み状遺構5基、土器溜まり、落ち込み、ピット等である。各遺構の時期は弥生時代中期・弥生時代後期・弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代中期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・戦国時代以降で、多時期の遺構が複雑に切り合う状態で検出された。また、これらの遺構内には、上面を覆う12～13世紀の包含層と下層に位置する弥生時代中期の包含層の遺物が多量に混入しており、時期を確定することが困難な遺構もある。ここでは出土遺物から時期を確定できるものについてのみ整理を行い、また窪み状遺構については明確な遺構ではない可能性もあるため、時期区分以外はここでは言及しない。

各遺構の時期については、前述のとおりに細かく分けることも可能ではあるが、本遺跡で主となる時期は限られることから、ここでは大きく弥生時代中期・弥生時代後期・弥生時代終末～古墳時代初頭・古墳時代～古代・中世～近世という分け方でまとめたい。

今回検出した遺構を、出土遺物や切り合い関係から検討した時期区分は以下のとおりであり、その配置については第88図に示している。

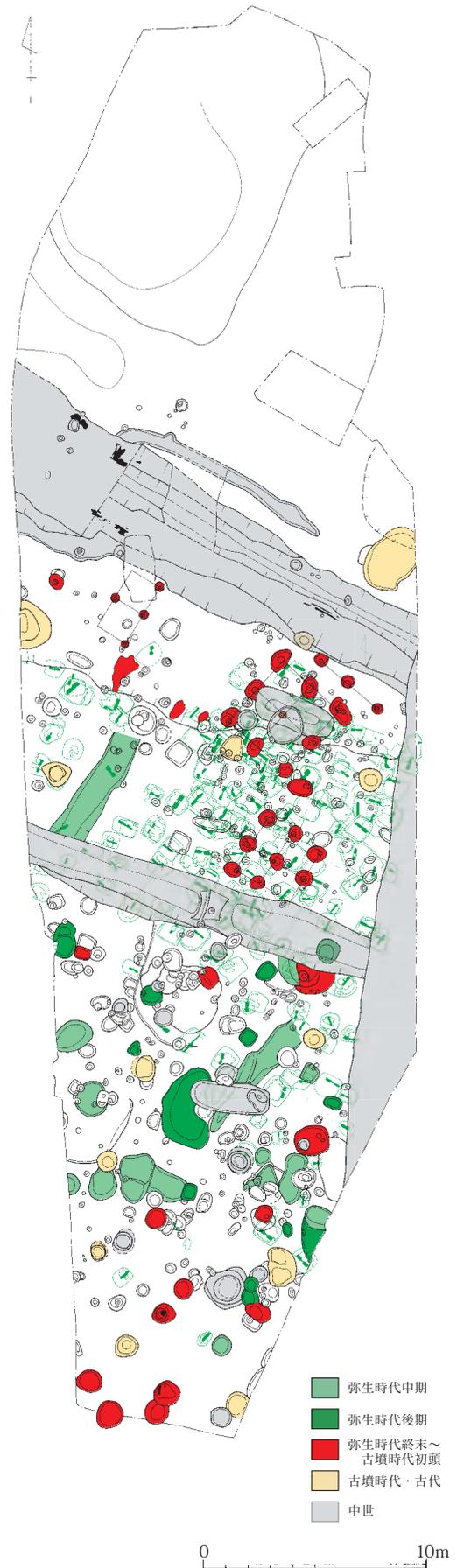
- 弥生時代中期 : 土坑 18・25・31・32・33・40・54・56・59・61・62・64・70・73号
溝 4・5号 窪み状遺構 1・5号
- 弥生時代後期 : 掘立柱建物跡 5～18号 窪み状遺構 2・3号
土坑 7・8・9・35・45・46・49・50・52・57・58・63・69・75号
- 弥生時代終末～古墳時代初頭 : 掘立柱建物跡1～4号
土坑 1・2・3・4・5・6・10・14・41・43・47・53・55・66・68・74号
落ち込み 土器溜まり
- 古墳時代～古代 : 土坑 13・15・16・17・19・21・22・30・34・39・42・12・20号
- 中世 : 土坑 11・23・24・26・27・28・29・36・37・38・44・48・51・60・65・71号
溝 1・2・3・6号

時期ごとに概観すると、まず弥生時代中期においては、土坑・溝および包含層を検出している。包含層はⅢ区北側から北に向かって広がるものであり、この包含層を除去した段階および、包含層のないⅢ区で検出した遺構の一部が当該時期に相当する。遺構はⅡ区南半部か

らⅢ区北半部に集中するが、溝をはじめ浅いものが多いことから、上部を削平されていると思われ、標高の高い調査区南側にも本来展開していたことも考えられる。これらは集落の一部と思われるが、住居跡なども確認されないため性格については言及が難しい。なお、Ⅲ区のトレンチにて包含層が東南に向かって流れ込んでいる状況を確認しており、当時の地形が北西に向かって低くなっていたと想定される。

弥生時代後期においては、礎盤式掘立柱建物跡を調査区中央のⅡ区で検出し、南側のⅡ区で土坑を検出している。掘立柱建物跡については、出土遺物が少量かつ各時期のものが混在していることから正確な時期の決定は難しいが、弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる土器溜まりや落ち込みに切られることから、弥生時代中期後半以降終末以前と考える。また、弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構面との間に約40cmの包含層があることも勘案して、時期を弥生時代後期とした。掘立柱建物跡はⅡ区以南で検出したが、特にⅡ区東部に多くの重複が認められる。これらの柱穴の中には、当初の柱設置レベルから20cm以上横木が沈み込むものもあり、また同じ場所に繰り返し建てられるものもあった。調査区内でも特に軟弱な粘土の基盤土上に集中して建てられた理由は不明であるが、建物の耐久年数は短かったと考えられ、各柱穴の時期差は然程ないものとする。ただし、5号掘立柱建物跡は横木の形状が特殊であり、また掘方の規模が際立って大きいことから、時期差や機能的な差がある可能性も考えたい。土坑は掘立柱建物跡の希薄なⅢ区を中心に検出しており、掘立柱建物跡集中地区と土地利用区分があるように捉えられる。規模や形状は様々であるが、9号土坑のように、後述する弥生時代終末～古墳時代初頭以降に見られる井戸様で完形品を含む深い土坑に近似するものがあり、一部の土器に煤が付着するなどの共通点も見られ、土坑の用途や出土土器の時期を考える上で注目される。

弥生時代終末～古墳時代初頭については、掘立



第88図 西蒲池池淵遺跡Ⅰ地点遺構配置略図(1/300)

柱建物跡が北側のⅡ区で検出され、井戸様の深い土坑を含めた土坑を南側のⅢ区を中心に検出しており、前述の弥生時代後期の土地利用区分とほぼ同じである。掘立柱建物跡のうち、3・4号は総柱で2棟がほぼ同じ方位を取っており、柱筋は揃わないものの企画性を窺わせる。またこの建物群周辺にのみ存在する黄色土包含層は、遺跡の他所では見られない水分の少ない土壌であり、一定の厚さで堆積していたことから、軟弱地盤に大型建物を建設するにあたり、良質な土壌を運び込んで整地した可能性も考えられる。なお、土器溜まりはこの包含層の最下層にあたることから掘立柱建物跡の上限と考えられ、落ち込みは包含層に覆われた状態であることから、整地前の掘削もしくは自然地形であると考えられる。この時期の土坑は1号土坑をはじめとして、壁が直立して深さ1.5m以上と深くなるものが多く、一部には完形品を含む土器が多量に投棄または埋設されていた。本来このような形状は「井戸」と呼ぶべきではあるが、当時の湧水の痕跡が明確に認められず、また短期間に繰り返し掘削されている事などから、本報告では井戸と断定することを避けた。遺物の出土は中層以下が多く、埋土の状況も上層と中層以下で大きく異なる。完形品が出土するものと、破損した土器が多く動物遺体が同時に出土するものがあり、用途については若干違いがあることも考えられる。

古墳時代～古代については土坑を検出している。総体的に数が少なくⅡ～Ⅲ区の全域に分布する事から、土地利用やその性格について言及することは難しい。ただしこの時期も井戸様の深い土坑が出土しており、中でも特徴的なのは、古墳時代後期の土坑埋土中に木の皮か植物の茎のような木質層が認められることである。この下には炭を含有する層もあり、土器はその下に廃棄または埋設されていた。この木質層についても、Ⅱ地点検出分と合わせて分析し、その結果を踏まえて考察したい。また、21号土坑から出土した頸部に縄を巻いた小型壺については、小型品の用途について一つの例を提示するものであろう。

中世については土坑・溝及び包含層を検出しているが、3号溝は近世に入る可能性も考えられる。土坑には深いものと浅いものがあり、深いものは前時期同様壁が垂直に立ち上がるものと、上位が大きく広がるものが認められる。特に29号土坑は規模が大きく、完掘はできなかったが木質や煤などを含有していた。また浅いものには規模が大きく底面が平坦で埋土が水平堆積するものがあり、その多くに炭や煤が含まれていた。このような土坑は北接する西蒲池池田遺跡でも確認されている。床面に被熱の痕跡などはないが、Ⅱ地点では一部焼土が認められた箇所もあり、なんらかの生産に関わる遺構の可能性も考えられる。しかし特徴的な遺物が確認できていない現段階では、その性格については言及が困難である。溝については中世のものは3条確認しているが、特に1・2号溝は直線的で企画性があり、1号溝では遺物が一括して出土している。この2条はほぼ同様の方位で流れており、一時期併存しているが、1号溝は包含層形成時に埋められた後は掘りなおされず、2号溝は埋められた後に再度掘削され、さらに掘りなおしが行われている。直線的な形状と同方位をもち、時期によって併存・廃絶するこれら2条の溝を計画的に設置された区画溝と考え、12～13世紀前後という時期から蒲池氏による整備事業の一環である可能性が高いと考える。

以上、今回報告を行った西蒲池池淵遺跡Ⅰ地点の遺構の時期や特徴について簡単にまとめ、各時期の出土遺構の種類や調査地内での土地利用区分について若干を考察した。この他、包含層から多量に出土した土器や包含層の性格、及び動物遺体や土壌の分析から得られる検討結果については、今後Ⅱ地点の調査における成果と合わせて分析・検討し、今回想定や類推のみで先に送った様々な検討課題についても、合わせてまとめることとしたい。

第2表 遺構番号対照表

遺構番号	S番号
掘立柱建物跡	
1号	398
	399
	400
	401
2号	215
	219
	329
3号	177
	208
	212
	213
	214
	218
	224
4号	275
	97
	99
	100
	191
	201
	202
5号	225
	247
	①
	714
	766
6号	688
	635
	743
	E
	772
7号	741
	852
	827
	704
8号	610
	637
	685
	686
	757
9号	795
	610
	637
9号	685
	686
	757
9号	795
	634
	640
9号	650

遺構番号	S番号
掘立柱建物跡	
10号	623
	660
	671
	781
11号	620
	667
	669
	789
12号	756
	661
	621
13号	A
	652
	682
	706
14号	771
	705
	730
	734
15号	746
	718
	739
16号	755
	625
	630
17号	648
	687
18号	725
	729
18号	675
	821
土坑	
1号	29
2号	267
3号	14
4号	274
5号	268
6号	27
7号	671
8号	157
9号	59-1
10号	59-2
11号	664
12号	16
13号	24
14号	800
15号	13
16号	43
17号	10

遺構番号	S番号
土坑	
18号	23
19号	30
20号	253
21号	204
22号	504
23号	15
24号	17
25号	25
26号	26
27号	20
28号	211
29号	80
30号	270
31号	9
32号	234
33号	633
34号	32
35号	8
36号	221
37号	7
38号	217
39号	646
40号	603
41号	252
42号	226
43号	206
44号	223
45号	87
46号	88
47号	85
48号	228
49号	233
50号	230
51号	65
52号	438
53号	341・439
54号	440
55号	441
56号	39
57号	41
58号	90
59号	64
60号	11
61号	82
62号	407
63号	12
64号	63
65号	38
66号	62
67号	69

遺構番号	S番号
土坑	
68号	33
69号	70
70号	34
71号	272
72号	406
73号	639
74号	653
75号	654
溝	
1号	1
2号	249
3号	3
4号	600
5号	450
6号	477
窪み溜り状遺構	
1号	608
2号	463
3号	818
4号	815
5号	819
土器溜まり	
	604-1～3
落ち込み	
	604・605

第3表 遺跡内出土特殊遺物計測表

挿図	番号	図版 番号	出土遺構	種類	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	残存	備考
84	1	54	落ち込み	土製品	投弾	3.50	1.95		8.90	完形	
84	2	54	35号土坑	土製品	投弾	3.60	1.95		6.70	完形	
84	3	54	1号溝	土製品	投弾	4.35	2.40		17.48	完形	
84	4	54	61号土坑	土製品	投弾	5.00	2.60		21.07	完形	
84	5	54	67号土坑	土製品	投弾	5.20	2.80		24.09	ほぼ完形	
84	6	54	69号土坑	土製品	投弾	4.45	2.50		14.25	完形	有茎
84	7	54	1号溝上層	土製品	土玉	1.65			2.20	完形	
84	8	54	4号掘立柱建物跡	土製品	投弾	1.60	1.70		3.43	完形	球形
84	9		35号土坑	土製品	脚?	(4.40)		1.95	(15.14)	1割	
84	10	56	3号窪み状遺構	土製品	紡錘車	4.45		1.55	31.08	完形	
84	11		1号溝上層	土製品	土錘	(7.30)	2.90		49.42	7割	
84	12		ピット	石製品	石庖丁	(3.10)	(3.75)	0.55	(8.62)	2割	
84	13		3号溝	石製品	石庖丁	(3.25)	(3.10)	(0.65)	(5.24)	1割	
84	14		ピット	石製品	石庖丁	(5.00)	(6.85)	0.70	(26.54)	3割	
84	15		35号土坑	石製品	石庖丁	(4.10)	(5.75)	0.50	(17.22)	3割	
84	16		ピット	石製品	石庖丁	(2.75)	(7.00)	0.70	(20.22)	2割	
84	17	55	48号土坑	石製品	石庖丁	4.30	(8.25)	0.50	(29.32)	6割	
84	18		3号窪み状遺構	石製品	石庖丁	(4.50)	(10.95)	0.55	(41.85)	4割	
84	19	55	1号溝中層	石製品	石庖丁	4.15	11.90	0.80	57.21	ほぼ完形	
84	20	55	1号窪み状遺構	石製品	石庖丁	6.30	(11.00)	0.80	(66.23)	6割	
84	21		40号土坑	鉄製品	鉄鏃?	(5.80)	0.90	0.50	(5.51)	3割	
84	22		3号窪み状遺構	石製品	柱状片刃石斧	(4.30)	(3.15)	(1.00)	(20.86)	1割	
85	1	55	40号土坑	石製品	砥石	5.75	1.80	1.45	17.13	完形	石戈再利用?
85	2		40号土坑	石製品	砥石	(5.10)	2.55	1.30	(23.04)	6割	
85	3		1号溝上層	石製品	砥石	(7.05)	(5.20)	2.00	(100.80)	5割	
85	4	56	35号土坑	石製品	砥石	5.60	9.10	2.30	117.47	完形	
85	5		4号掘立柱建物跡	石製品	砥石	(7.30)	(2.30)	(4.20)	(66.66)	2割	
85	6		ピット	石製品	砥石	(7.60)	(2.20)	(5.50)	(112.91)	1割	
85	7		4号土坑	石製品	砥石	(7.45)	3.60	3.40	98.65	2割	
85	8		40号土坑	石製品	砥石	(7.45)	4.40	3.90	(105.89)	5割	
85	9	56	17号土坑	石製品	砥石	(8.00)	4.40	3.55	(100.11)	6割	
85	10	56	2号溝下層	石製品	砥石	10.15	5.40	4.10	155.77	ほぼ完形	
85	11		1号窪み状遺構	石製品	砥石	(9.10)	6.80	5.30	(384.00)	3割	
85	12		8号掘立柱建物跡	石製品	砥石	(8.30)	9.20	3.70	(522.00)	3割	
85	13	56	35号土坑	石製品	砥石	(16.80)	9.85	4.10	(1105.00)	6割	
85	14	56	1号溝上層	石製品	砥石	12.40	10.50	2.40	506.00	完形	
86	1		3号窪み状遺構	石製品	石錘	6.30	5.15	1.65	82.01	完形	
86	2		1号溝上層	石製品	石錘?	5.00		2.40	82.02	完形	
86	3		40号土坑	石製品	石斧?	(10.55)	(6.20)	(2.85)	(243.46)	5割	
86	4		17号掘立柱建物跡	石製品	叩き石・すり石	8.95	5.85	3.20	268.00	完形	
86	5		ピット	石製品	凹石	(10.35)	(6.80)	3.30	(238.46)	6割	
86	6	55	1号溝上層	石製品	凹石	12.90		4.65	1087.00	9割	
86	7	55	3号掘立柱建物	石製品	叩き石	13.00	7.85	3.60	505.00	完形	
86	8		18号掘立柱建物跡	石製品	凹石	13.10	11.90	4.40	788.00	完形	
86	9		44号土坑	石製品	凹石・すり石	10.90	10.15	4.95	774.00	完形	
86	10	55	ピット	石製品	凹石	10.30	8.90	4.90	707.00	完形	
86	11	55	ピット	石製品	凹石	11.00	9.40	5.20	615.00	完形	
87	1		24号土坑	木製品	燃えさし	21.90	1.60	1.30		完形	
87	2		71号土坑	木製品	織機?	27.20	2.30	1.40		ほぼ完形	
87	3		1号土坑	木製品	不明木製品	5.90	4.60	3.20		ほぼ完形	
87	4		23号土坑	木製品	底板	15.60		0.60		4割	
87	5		23号土坑	木製品	底板	17.00		0.55		4割	
87	6		9・10号土坑	木製品	底板	20.00		1.60		3割	
87	7	56	1号土坑	木製品	鍬	18.10	9.00	2.00		ほぼ完形	
87	8		1号窪み状遺構	木製品	柄杓?	(17.00)	(8.40)			1割	
87	9		12号土坑	木製品	不明木製品	(11.80)	2.5	1.7		5割	

() は残存値

西蒲池池淵遺跡図版

1 上層全景
(航空写真
上が北)



2 下層全景
(航空写真
上が北)





1 上層遠景
(航空写真 北から)



2 礎盤集中部
(航空写真 上が北)

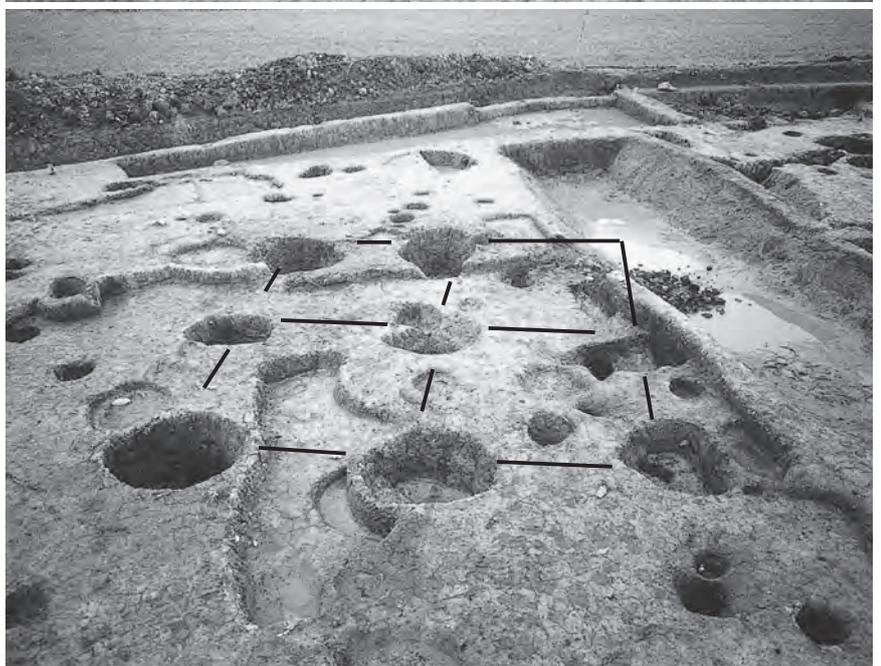
1 2～4号掘立柱建物跡
(左が北)



2 3号掘立柱建物跡
(西から)



3 4号掘立柱建物跡
(西から)





1 3号掘立柱建物跡
柱穴断面



2 4号掘立柱建物跡
柱穴断面 1



3 4号掘立柱建物跡
柱穴断面 2

1 7号掘立柱建物跡
(西から)

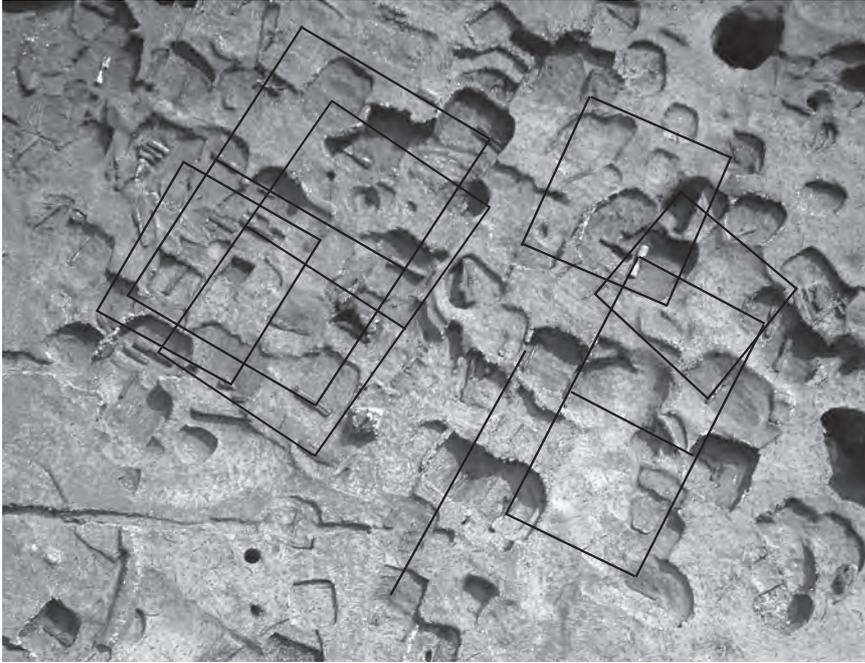


2 8号掘立柱建物跡
(東から)



3 10号掘立柱建物跡
(東から)





1 5～7・11・12・14・17号
掘立柱建物跡（左が北）



2 8・9・18号
掘立柱建物跡（左が北）



3 10～12・16号
掘立柱建物跡（左が北）

1 礎盤検出状況 1



2 礎盤検出状況 2



3 礎盤検出状況 3





1 礎盤 1



2 礎盤 2



3 礎盤 3

1 礎盤土層断面 1

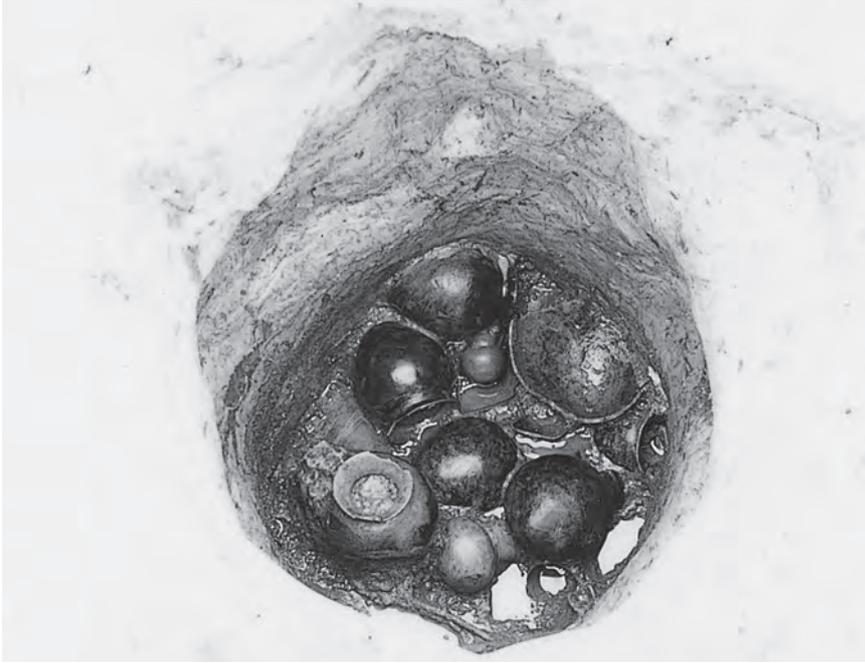


2 礎盤土層断面 2



3 礎盤土層断面 3





1 1号土坑遺物出土状況
(東から)

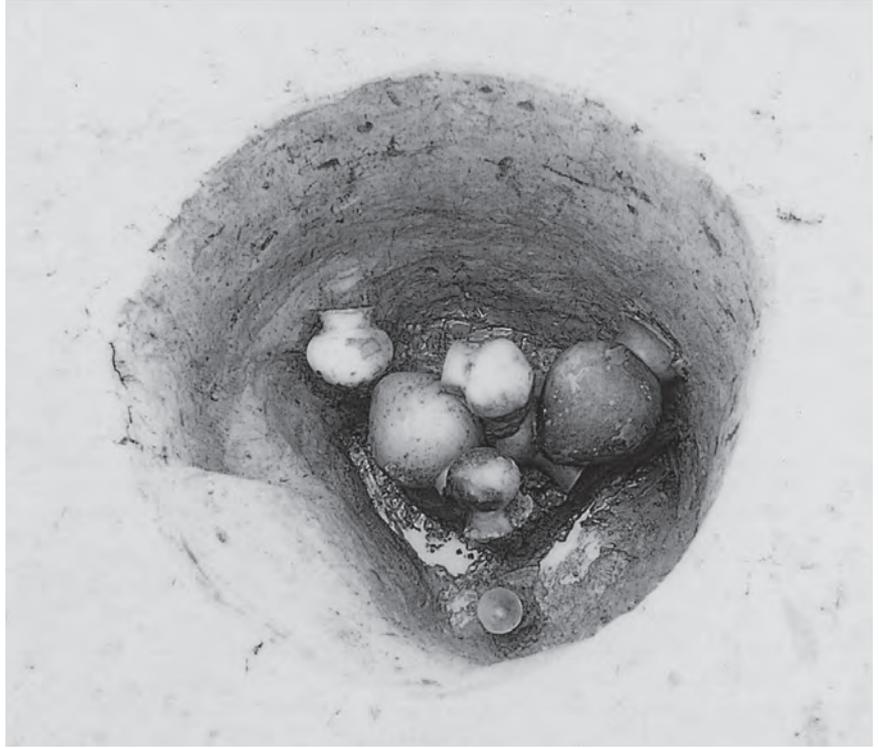


2 1号土坑土層断面
(南西から)



3 1号土坑木器出土状況
(西から)

1 2号土坑遺物出土状況
(北から)



2 2号土坑木質出土状況
(北から)



3 2号土坑土層断面
(南から)





1 3号土坑土器出土状況
(南から)



2 3号土坑完掘状況
(南から)



3 3号土坑土層断面
(南から)

1 4号土坑土器出土状況
(北から)



2 4号土坑土層断面
(東から)



3 5号土坑土器出土状況
(西から)





1 5号土坑土層断面
(南から)



2 5号土坑木質出土状況
(北から)



3 6号土坑完掘状況
(東から)

1 6号土坑土層断面
(南から)



2 7号土坑土器出土状況
(東から)



3 9・10号土坑
土器出土状況 (西から)





1 10号土坑完掘状況
(北から)



2 10号土坑臼出土状況
(西から)



3 11号土坑完掘状況
(東から)

1 12号土坑完掘状況
(西から)



2 12号土坑土層断面
(南から)



3 13号土坑完掘状況
(北から)





1 13号土坑土層断面
(南から)

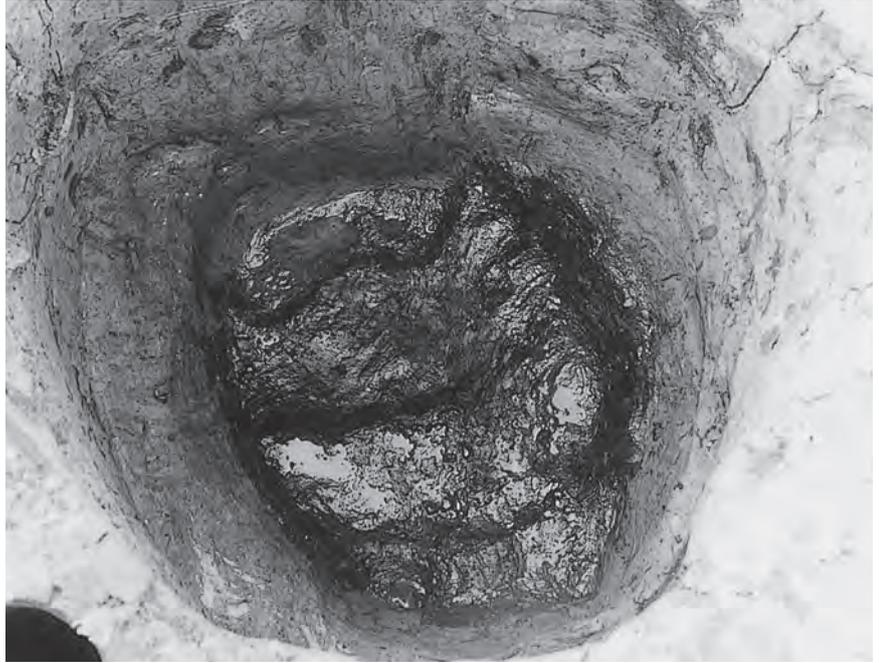


2 14号土坑土器出土状況
(北から)



3 15号土坑完掘状況
(南から)

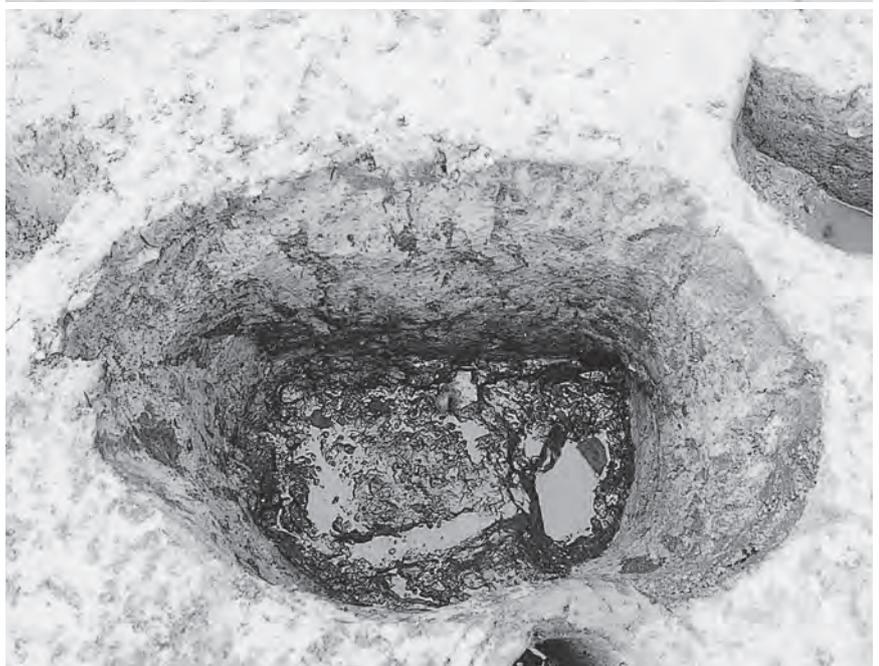
1 15号土坑
木質出土状況（西から）



2 15号土坑土層断面
（南から）



3 16号土坑木質出土状況
（東から）





1 16号土坑完掘状況
(東から)

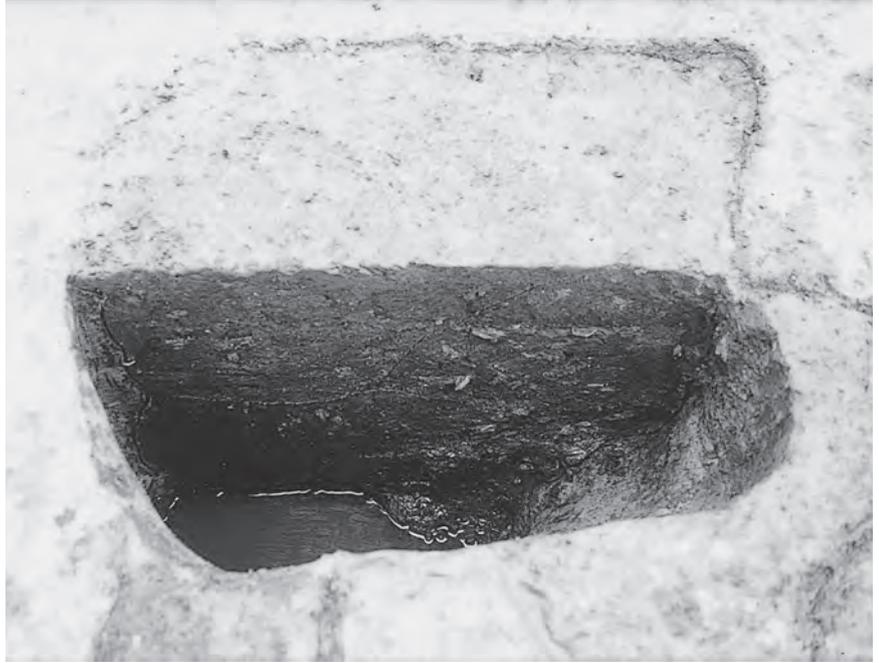


2 16号土坑土層断面
(東から)



3 17号土坑木質出土状況
(東から)

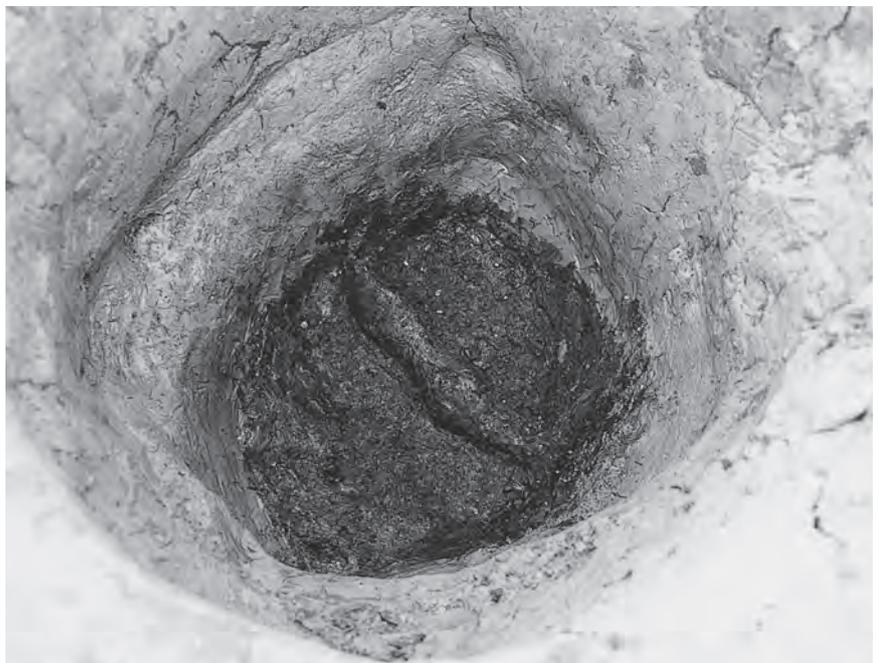
1 17号土坑土層断面
(南西から)



2 18号土坑土層断面
(北から)



3 19号土坑木質出土状況
(南から)





1 19号土坑土層断面
(南西から)



2 20号土坑完掘状況
(南から)



3 20号土坑土層断面
(南から)

1 21号土坑臼出土状況
(西から)



2 21号土坑土器出土状況
(南から)



3 21号土坑
縄付き土器出土状況





1 21号土坑完掘状況
(南から)



2 22号土坑土層断面
(北から)



3 23号土坑土層断面
(南から)

1 24号土坑完掘状況
(北から)



2 24号土坑土層断面
(南西から)

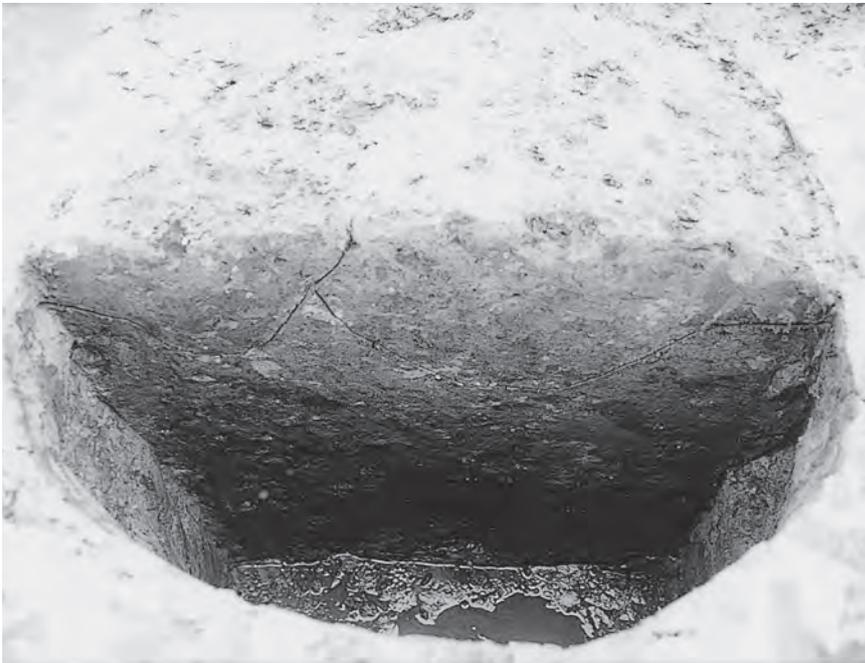


3 25号土坑土層断面
(東から)





1 26号土坑完掘状況
(南から)



2 26号土坑土層断面
(南から)



3 27号土坑土層断面
(南から)

1 28号土坑完掘状況
(南から)



2 28号土坑土層断面
(南から)



3 9・10・29号土坑
完掘状況 (南から)





1 30号土坑土器出土状況
(東から)



2 31号土坑土層断面
(西から)

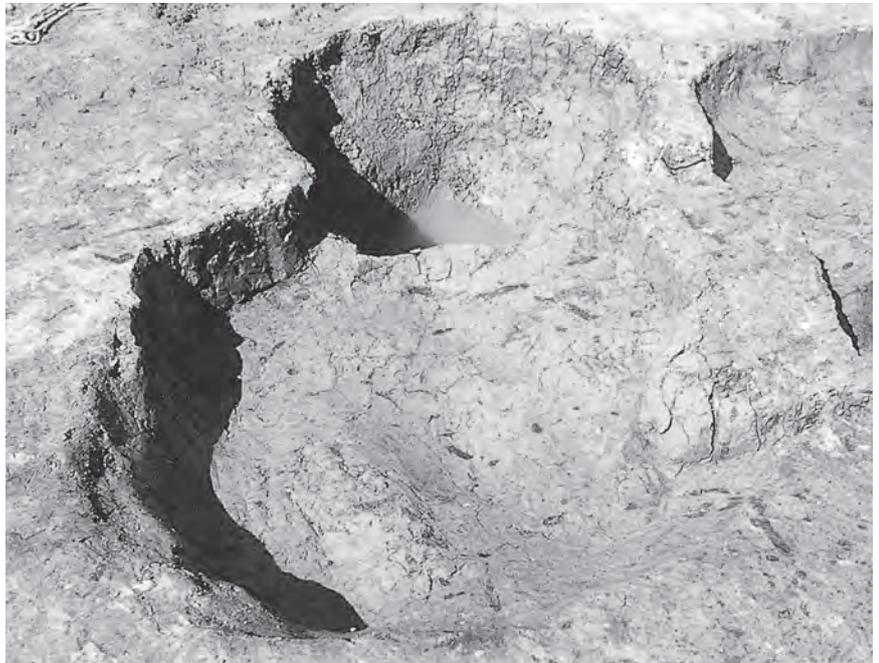


3 31号土坑完掘状況
(北東から)

1 32号土坑土器出土状況
(南から)



2 32号土坑完掘状況
(南から)



3 34号土坑土層断面
(西から)





1 35号土坑土層断面
(南から)



2 37号土坑土層断面
(東から)



3 36・38号土坑半裁状況
(西から)

1 38号土坑土層断面
(南から)



2 40号土坑土器出土状況
(北から)



3 41号土坑土層断面
(南から)





1 43号土坑完掘状況
(南から)



2 48号土坑完掘状況
(南から)



3 49号土坑土層断面
(南西から)

1 50号土坑土層断面
(東から)



2 59号土坑土器出土状況
(南から)



3 60号土坑完掘状況
(南から)





1 60号土坑土層断面
(南から)



2 61号土坑完掘状況
(北から)



3 63号土坑土層断面
(北から)

1 64号土坑土層断面
(北東から)



2 75号土坑完掘状況
(南東から)



3 75号土坑土層断面
(南から)





1 1号溝全景
(東から)



2 1号溝上層土器出土状況
(東から)



3 1号溝中層土器出土状況
(東から)

1 1号溝土層断面
(東から)



2 2号溝全景 (東から)



3 2号溝土層断面
(西から)

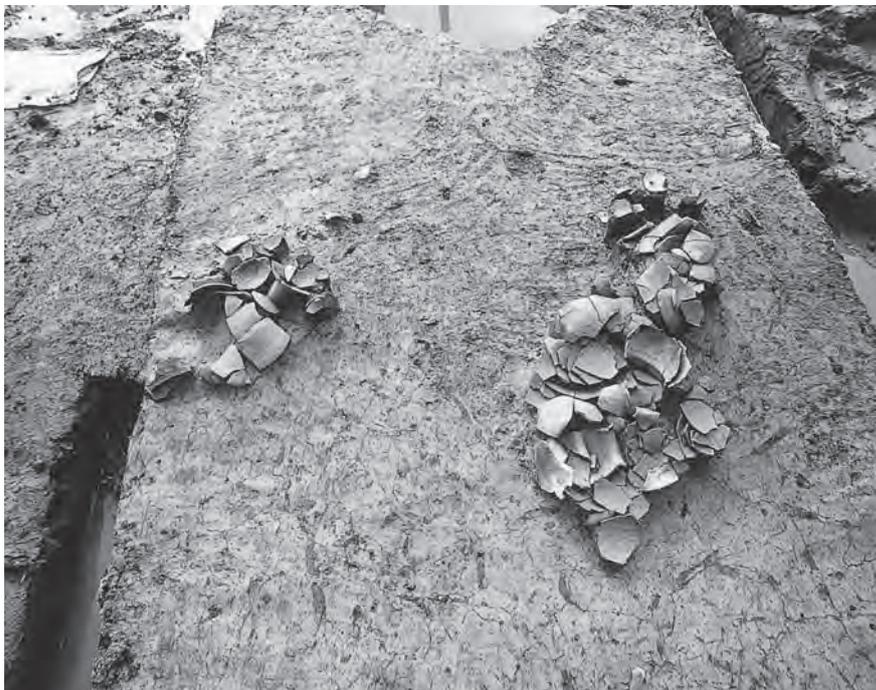




1 1号窪み状遺構
遺物出土状況（北から）



2 2号窪み状遺構
遺物出土状況（北西から）



3 土器溜まり 2・3
出土状況（北から）



1 土器溜まり1
出土状況（北から）



2 落ち込み最下層
土器出土状況（南西から）



21-16



23-8



23-5



23-9



23-6



24-13



23-7



24-16



24-18



25-21



25-19



25-22



25-20



25-24



26-25



26-31



27-1



27-2



27-3



27-4



27-5



27-7



28-14



28-17



28-19



31-18



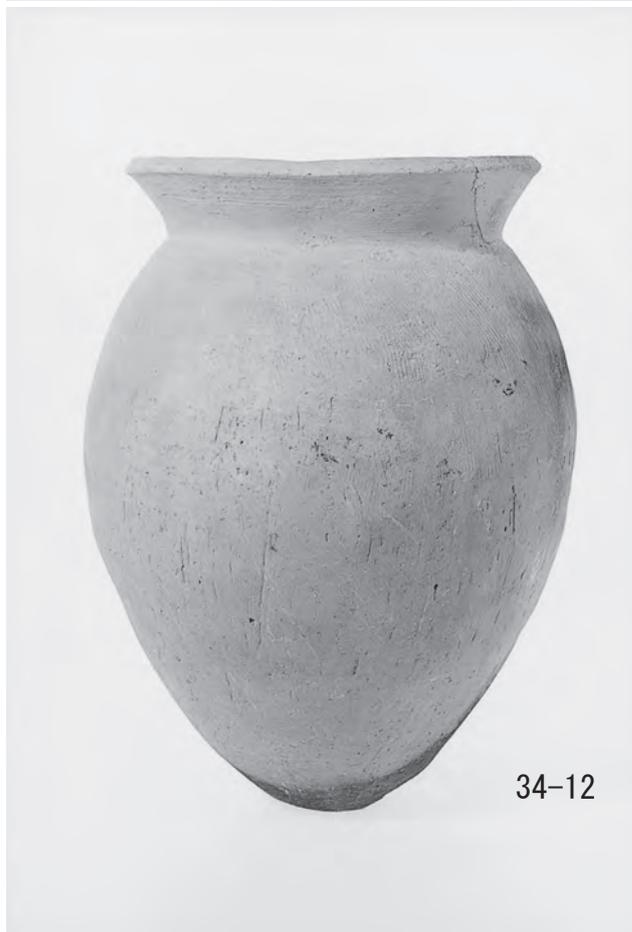
32-1

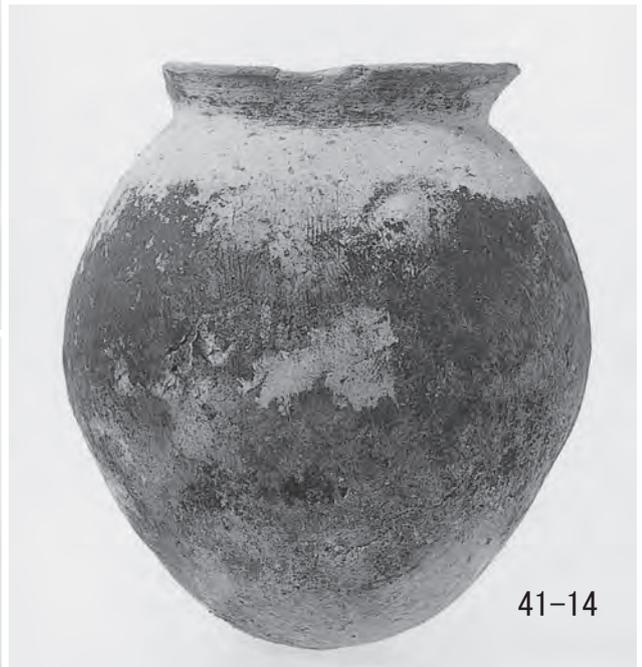


32-4



32-11









71·74 号土坑、1 号沟出土土器







|



69-103



70-11



71-24



71-25



70-1



71-26



70-3



71-27



70-5



71-41





|



74-11



77-3



77-7



76-1



79-2



76-9



76-10



79-3

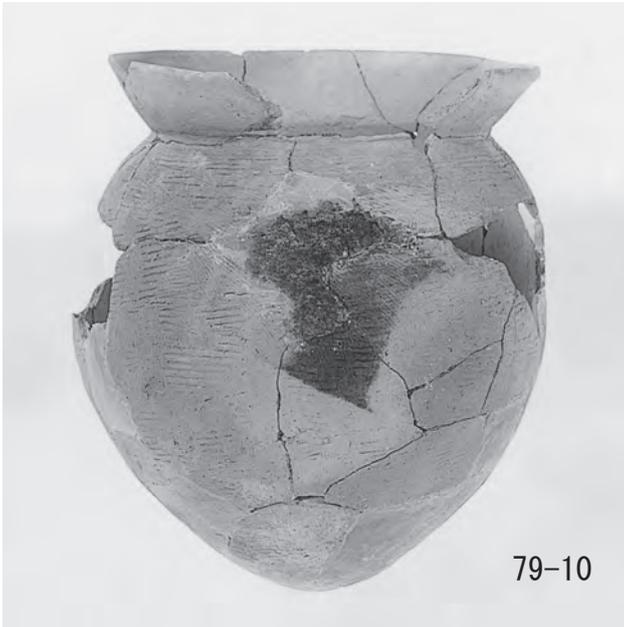
3～5号溝、窪み状遺構、土器溜まり出土土器・陶磁器



79-8



80-12



79-10



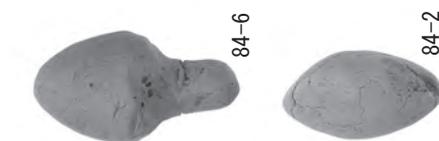
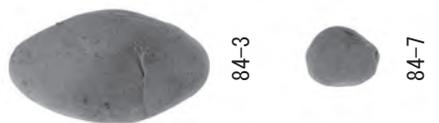
80-14



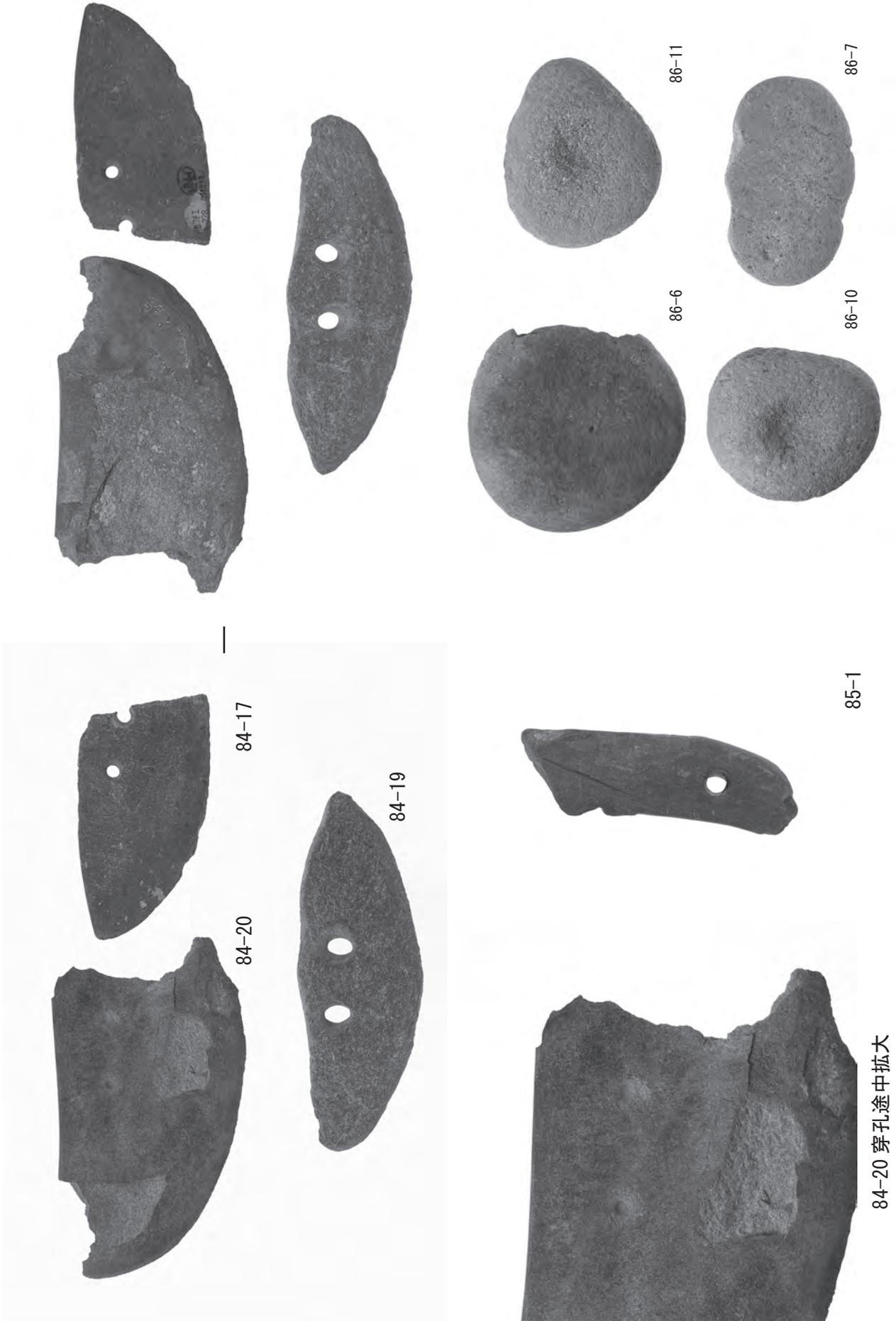
80-15



80-16



落ち込み出土土器、遺跡内出土土製品・石製品



遺跡内出土石製品



85-14



84-10



85-13



87-7



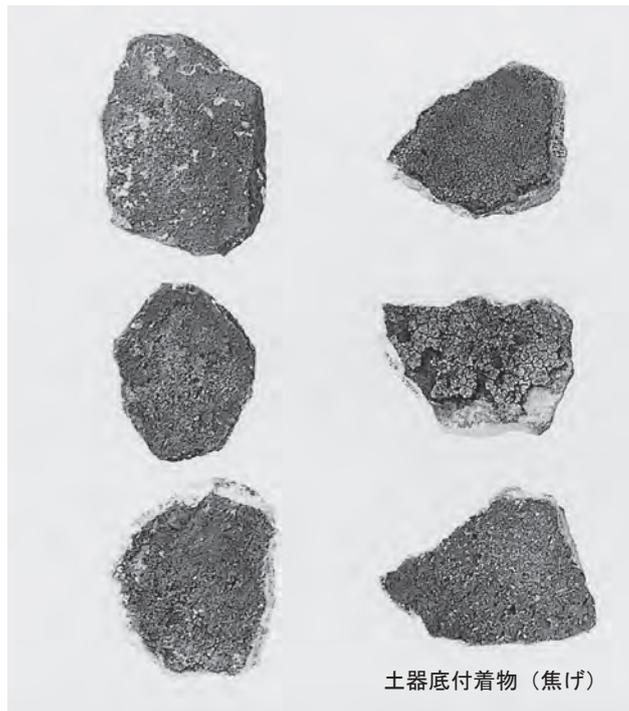
85-4



85-9



85-10



土器底付着物（焦げ）

報告書抄録

ふりがな	にしかまちいけぶちいせき I								
書名	西蒲池池淵遺跡 I								
副書名	国道385号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 第2集								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書								
シリーズ番号	第239集								
編著者名	齋部麻矢（編集） 城門義廣								
編集機関	九州歴史資料館								
所在地	〒838-0106 小郡市三沢5208-3 Tel. 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834 E-mail kyureki@pref.fukuoka.lg.jp								
発行年月日	2013年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	にしかまちいけぶちいせき 西蒲池池淵遺跡		ふくおかけんやながわしにしかまち 福岡県柳川市西蒲池 402079		33° 11' 10"	130° 24' 16"	20091104 ～ 20100329 20101012 ～ 20110315	970	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
西蒲池池淵遺跡 I 地点	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 戦国時代	掘立柱建物跡 土坑 溝 窪み状遺構 土器溜まり 落ち込み 包含層	弥生土器・土師器・須恵器・ 陶磁器・瓦質土器・土製品・ 石製品・木製品・金属製品・ 動植物遺体			・礎盤を使用した掘立柱建 物群 ・完形品を含む大量の土器		
要約	<p>本遺跡は、有明海沿岸の標高1.5～2.5m前後の低平地上に立地する遺跡である。I地点として実施した今回の調査では、弥生時代中期～戦国時代までの複数の時代の遺構を確認した。主には弥生時代後期・弥生時代終末～古墳時代初頭の集落跡の一部と、中世の区画溝を検出しており、また弥生時代中期及び中世の包含層からは大量の遺物が出土している。遺跡の特徴のひとつとしては、柱穴の沈下を防ぐために「礎盤」と呼ぶ工法を使用する掘立柱建物の柱穴が多数出土しており、有明海沿岸北部地域の軟弱地盤に形成される、特徴的な形態の集落の一部と考えられる。また、弥生時代終末～古墳時代初頭では総柱の掘立柱建物跡と土坑を検出しており、土坑からは完形品を含む多数の土器が一括資料として出土している。さらに、12～13世紀の区画溝の一部と考えられる直線的な溝や、整地と考えられる包含層を検出しており、当時この地域を拠点としていた蒲池氏に関連する遺構と考えられる。今回の調査では、本地域の各時代の集落形態や土地利用を検討するうえでの成果を得るとともに、土器編年の検討に資する一括資料が出土するという成果を得た。</p>								

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 10

国道385号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集

西蒲池池淵遺跡 I

平成25年3月31日

発行 九州歴史資料館
小郡市三沢 5208-3

印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王 1丁目 14-4